本庄市埋蔵文化財調査報告　第10集

埼玉県本庄市

東富田遺跡群発掘調査報告書

－県営ほ場整備事業児玉南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査Ⅰ－

昭和62年３月

本庄市教育委員会

埼玉県本庄市

東富田遺跡群発掘調査報告書

本庄市教育委員会

序　　文

本庄市教育委員会に文化財保護係が設置され、文化財保護行政の充実を図り早７年の歳月がすぎました。この間、大規模事業に伴う発掘調査件数は、年々増加の一途をたどり、現在ではこれらの整理や収蔵施設と言った、新たな問題を抱えています。今回の県営ほ場整備事業に伴う発掘調査も、約10ケ年をかけて実施される市内ほ場整備事業の初年度にあたるが、行政改革のさなか少ない予算で大きな成果を意識して鋭意実施いたしました。

教育長に赴任して３年になりますが、前には市立歴史民俗資料館長として文化財行政に勤しんでまいりましたが、事業ごとに各担当者より成果の報告をうけ、充実しつつある本庄の歴史を勉強し、祖先の文化遺産を礎として今日の本庄があることを今さらながら痛感する思いであります。

発掘調査、報告書発刊に際しては、酷暑、酷寒の中担当された職員をはじめ、作業員の方々あるいは、快く調査に協力していただいた各機関、各位に対しまして、厚く御礼申し上げる次第であります。また、調整、御助言をいただいた埼玉県教育局指導部文化財保護課をはじめ、文化財保護行政を理解していただいた本庄土地改良事務所の方々に感謝の意を表しまして、保存と未来への継承を命題として序文といいます。

昭和62年２月２日

本庄市教育委員会

教育長　坂　本　敬　信

例　　言

1. 本書は、本庄市教育委員会が昭和60、61両年度に実施した、県営ほ場整備事業児玉南部地区に伴う、市内遺跡群範囲確認緊急調査報告書である。
2. 調査の経費は昭和60年度文化財保存事業費として得た補助金(国庫2,000,000円、県費1,000,000、市負担1,004,280円の計4,004,280円）の内、1,600,500円（内訳国庫800,000円、県費400,000円、市負担400,550円）を文化庁側より捻出し、2,402,314円（農政負担2,400,000円、市負担2,314円）を農政側より負担し、総合計4,002,864円で行った。文化庁側の残り、2,403,730円については、従来の市内遺跡群範囲確認緊急調査費として、県営ほ場整備事業とは別に実施したが、同調査の報告は別に刊行予定である。

   昭和61年度は文化庁側より同補助金4,000,000円(国庫2,000,000円、県費1,000,000円、市負担1,003,000円）と農政側6,000,000円（農政負担6,000,000円、市負担19,000円新年度予算時）の総合計10,022,000円で試掘調査、発掘調査、整理作業を行った。
3. 発掘調査は、埼玉県本庄市教育委員会が実施し、社会教育課文化財保護係である増田一裕が担当した。調査組織は第１章第３節に記したとおりである。
4. 本報告書の編集、執筆は増田が行った。
5. 現地における遺構の実測、測量は増田、矢内が中心に行い、遺物の実測は矢内が行った。製図は増田がすべて担当した。
6. 本調査及び報告書刊行に際して次の諸機関、諸氏より御指導、御助言、御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

   機関　文化庁、埼玉県教育局指導部文化財保護課、埼玉県立博物館、埼玉県立歴史資料館児玉教育事務所、児玉郡市埋蔵文化財担当者会、児玉町教育委員会、本庄土地改良事務所、市内各小、中学校。

   氏名　岩田　明、早川智明、梅沢太久夫、水村孝行、井上　肇、増田逸郎、鈴木徳雄、恋河内昭彦、外尾常人、田村　誠、篠崎　潔、長瀧歳康、福島興厳、水島治平、柴崎起三雄、茂木秀敏、武藤達一
7. 発掘並びに、整理作業に際して下記の方々の協力を得た。記して感謝いたします。

   （昭和60年度）

   茂木秀敏　門倉正夫　久保田小四郎　境野茂男　折茂武年　町田惣吉
   木村喜平　荒井幸太郎　渡辺芳治郎　武藤治太郎　笠本源一　笠本作治
   福島芳夫　八木道良　堀田依包　武藤洋子　鈴木ウメ子　高橋秀子
   中原タミ子　荒井アイ　荒井マツ　戸谷きみ子　榊　安江

   （昭和61年度）

   笠本源一　笠本作治　八木道良　堀田依包　木村喜平　福島芳夫
   町田惣吉　門倉正夫　荒井幸太郎　武藤洋子　大野洋子　我妻きよみ
   日向みどり　荒井アイ　夏井博子　矢内　勲（調査補助員）

目　　次

序　文
例　言
目　次
挿図目次
第1章　調査の経緯と経過 ……1
　第1節　調査の経緯 ……1
　第2節　発掘調査に至る経過 ……1
　第3節　調査の組織 ……3
　第4節　調査日誌抄 ……3
第2章　地理歴史的環境 ……5
　第1節　地理的環境 ……5
　第2節　歴史的環境 ……7
第3章　東富田遺跡群の発掘調査 ……11
　第1節　東富田遺跡群の位置と調査内容……11
　第2節　下田遺跡第2次調査……12
　第3節　下田遺跡第3次調査……31
　第4節　観音塚遺跡第1次調査……69
　第5節　観音塚遺跡第2次調査……72
　第6節　元富遺跡の調査……79
　第7節　七色塚遺跡の調査……85
第4章　考　　察 ……101
　第1節　東富田遺跡群の立地の河川 ……101
　第2節　下田遺跡西溝群の復原と性格 ……104
　第3節　東富田遺跡群の性格 ……106
　第4節　鬼高期の編年 ……108
あとがき ……114
写真図版

挿 図 目 次

第 1 図　調査位置図 ……5
第 2 図　東富田遺跡群分布図……10
第 3 図　下田遺跡第55号住居址実測図……12
第 4 図　下田遺跡第55号住居址出土遺物実測図……12
第 5 図　下田遺跡全測図……13、14
第 6 図　下田遺跡第74号住居址実測図……15
第 7 図　下田遺跡第74号住居址カマド実測図……15
第 8 図　下田遺跡第74号住居址出土遺物実測図……15
第 9 図　下田遺跡第78、79号住居址実測図……16
第 10 図　下田遺跡第79号住居址周辺出土遺物実測図……17
第 11 図　下田遺跡第78、79号住居址断面図……17
第 12 図　下田遺跡第78号住居址出土遺物実測図……18
第 13 図　下田遺跡第86号住居址出土遺物実測図……19
第 14 図　下田遺跡第81、82号住居址実測図……20
第 15 図　下田遺跡第82号住居址出土遺物実測図……20
第 16 図　下田遺跡第86、87号住居址実測図……21
第 17 図　下田遺跡第86号住居址カマド実測図……21
第 18 図　下田遺跡第87号住居址出土遺物実測図……22
第 19 図　下田遺跡第93号住居址実測図……23
第 20 図　下田遺跡第93号住居址貯蔵穴実測図……23
第 21 図　下田遺跡第93号住居址出土遺物実測図……23
第 22 図　下田遺跡第108号住居址出土遺物実測図 ……23
第 23 図　下田遺跡第108号住居址実測図 ……24
第 24 図　下田遺跡第110号住居址実測図 ……25
第 25 図　下田遺跡第110号住居址カマド実測図 ……25
第 26 図　下田遺跡第110号住居址出土遺物実測図 ……26
第 27 図　下田遺跡第122、123号住居址実測図……27
第 28 図　下田遺跡第122、123号住居址断面図……28
第 29 図　下田遺跡第122号住居址カマド実測図 ……28
第 30 図　下田遺跡第123号住居址出土遺物実測図 ……28
第 31 図　下田遺跡第122号住居址出土遺物実測図 ……29
第 32 図　下田遺跡第126号住居址実測図 ……30
第 33 図　下田遺跡第130号住居址実測図 ……32
第 34 図　下田遺跡第131号住居址実測図 ……33

第 35 図　下田遺跡第131号住居址出土遺物実測図 ……34
第 36 図　下田遺跡第132号住居址実測図 ……35
第 37 図　下田遺跡第132号住居址断面図 ……36
第 38 図　下田遺跡第132号住居址カマド実測図 ……36
第 39 図　下田遺跡第132号住居址出土遺物実測図 ……37
第 40 図　下田遺跡第133、136号住居址実測図……38
第 41 図　下田遺跡第133、136号住居址断面図……39
第 42 図　下田遺跡第133号住居址カマド実測図 ……39
第 43 図　下田遺跡第133、136号住居址出土遺物実測図……39
第 44 図　下田遺跡第134号住居址実測図 ……40
第 45 図　下田遺跡第134号住居址出土遺物実測図 ……41
第 46 図　下田遺跡第135号住居址実測図 ……41
第 47 図　下田遺跡第135号住居址出土遺物実測図 ……41
第 48 図　下田遺跡第144号住居址実測図 ……42
第 49 図　下田遺跡第144号住居址カマド実測図 ……43
第 50 図　下田遺跡第144号住居址出土遺物実測図 ……43
第 51 図　下田遺跡第162号住居址実測図 ……44
第 52 図　下田遺跡第162号住居址カマド実測図 ……45
第 53 図　下田遺跡第162号住居址出土遺物実測図 ……45
第 54 図　下田遺跡第163号住居址実測図 ……46
第 55 図　下田遺跡第163号住居址出土遺物実測図 ……47
第 56 図　下田遺跡第36、164号住居址配置図 ……47
第 57 図　下田遺跡第164号住居址実測図 ……47
第 58 図　下田遺跡第164号住居址出土遺物実測図 ……47
第 59 図　下田遺跡第168、169、179号住居址実測図 ……49
第 60 図　下田遺跡第179号住居址実測図 ……50
第 61 図　下田遺跡第168、169、179号住居址断面図 ……51
第 62 図　下田遺跡第168、169、179号住居址カマド実測図 ……52
第 63 図　下田遺跡第168、169、179号住居址出土遺物実測図 ……52
第 64 図　下田遺跡第170号住居址実測図 ……53
第 65 図　下田遺跡第170号住居址出土遺物実測図 ……53
第 66 図　下田遺跡第185号住居址実測図 ……54
第 67 図　下田遺跡第185号住居址出土遺物実測図 ……54
第 68 図　下田遺跡第201号住居址実測図 ……55
第 69 図　下田遺跡第166、184号土坑実測図……56
第 70 図　下田遺跡第165号遺構群実測図……57

第 71 図　下田遺跡第165号遺構群出土遺物実測図 ……57
第 72 図　下田遺跡掘立柱建物１、２実測図……58
第 73 図　下田遺跡掘立柱建物３、４と出土遺物実測図……59
第 74 図　下田遺跡東溝群実測図……60
第 75 図　下田遺跡出土遺物実測図……61
第 76 図　下田遺跡出土遺物実測図……62
第 77 図　観音塚遺跡住居址実測図（第１次調査時）……70
第 78 図　観音塚遺跡第２号住居址出土遺物実測図……70
第 79 図　観音塚遺跡第15、17号住居址実測図……73
第 80 図　観音塚遺跡第18号住居址実測図……74
第 81 図　観音塚遺跡第18号住居址出土遺物実測図……74
第 82 図　観音塚遺跡全測図……74
第 83 図　観音塚遺跡出土遺物実測図(1)……75
第 84 図　観音塚遺跡出土遺物実測図(2)……76
第 85 図　元富遺跡全測図……79
第 86 図　元富遺跡第１号住居址実測図……80
第 87 図　元富遺跡第１号住居址出土遺物実測図……81
第 88 図　元富遺跡第２号住居址貯蔵穴実測図……81
第 89 図　元富遺跡第２号住居址実測図……82
第 90 図　元富遺跡第２号住居址出土遺物実測図(1)……83
第 91 図　七色塚遺跡全測図……85
第 92 図　七色塚遺跡第１～12号住居址実測図……87、88
第 93 図　七色塚遺跡第１号住居址カマド実測図……89
第 94 図　七色塚遺跡第２号住居址カマド実測図……89
第 95 図　七色塚遺跡第４号住居址カマド実測図……89
第 96 図　七色塚遺跡第５Ａ号住居址カマド実測図……89
第 97 図　七色塚遺跡出土遺物実測図(1)……90
第 98 図　七色塚遺跡出土遺物実測図(2)……91
第 99 図　七色塚遺跡出土遺物実測図(3)……92
第 100 図　七色塚遺跡西半分遺構配置図……95、96
第 101 図　七色塚遺跡Loc122出土遺物実測図 ……97
第 102 図　七色塚遺跡Loc122遺構配置図 ……98
第 103 図　七色塚遺跡Loc122第345号住居址実測図 ……98
第 104 図　七色塚遺跡Loc122北トレンチ内溝実測図 ……99
第 105 図　七色塚遺跡Loc122古道実測図 ……100
第 106 図　旧女堀川、蛭川河川跡と遺跡分布図 ……102

第 107 図　下田遺跡西群溝復原図 ……104
第 108 図　旧東富田地籍図金佐奈大神位置図 ……105

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調 査 の 経 緯

本庄市は埼玉県の北西部に位置する。かつては、中山道本庄宿として栄え、養蚕、農業に依存する産業体系から成り立って来た。近年では児玉郡市広域市町村圏の中核都市として、再び発展しつつある。市内の交通網には国道17号線、関越自動車道本庄・児玉インターチェンジ、国鉄高崎線、旧中山道が通過しており、さらに、首都圏と上信越地方の中間点にあたることから、産業、経済の流入が容易な地理的条件を示している。このような地理的環境を反映して昭和50年度以降は児玉工業団地、本庄住宅団地、国鉄本庄駅南の土地区画整備をはじめ、これらに関連する大規模な道路改良事業、公園整備が計画実施されている。加えて、農業振興事業も活発化しており、土地改良事業も進行している。以上の各種大規模、長期計画に対する埋蔵文化財の保護対策は、遺憾ながら苦しい現状であるが、昭和57年度より「市内遺跡群発掘調査」費用として国庫補助金をうけ、各種事業に対して鋭意保存事業を継続中である。このような状況下で、昭和60年度には市域西南の大半を対象とする県営ほ場整備事業児玉南部、同北部、同上里南部の３地区に係る事業計画が協議された。その結果、児玉南部より急拠実施される運びとなったため、これに対応する埋蔵文化財の保存問題について、緊急に対応することになり、同年度より本庄市教育委員会で発掘調査を行うこととなった。

第２節　発掘調査に至る経過

本庄市の西南部にあたる大字東富田、西富田、四方田、今井地区に係る、県営ほ場整備事業に対する埋蔵文化財の取り扱いの協議書は、昭和59年６月21日付け本土発第33号で、本庄市長織茂良平名で本庄市土地改良課から、本庄市教育委員会教育長飯島彰宛で最初の提出があった。これに対し、本庄市教育委員会では、昭和59年６月22日付け本教社発第122号で、「埋蔵文化財の所在について」の回答文書を同課へ返送した。内容については、当該事業実施予定地内の周知の遺跡18ケ所を遺跡地図と表であらわし、周辺における発掘調査例から周知の遺跡の範囲外においても、遺構、遺物が包蔵されている可能性があること、現状保存が望ましいことあるいは、文化財保護法の主旨を徹底すること、すみやかに事業実施前、中に関連各課、各位との協議、調整を実施すること等数項目を指摘記載した。本庄市教育委員会の主旨は、埼玉県教育委員会教育長及び、埼玉県教育局指導部文化財保護課から昭和59年８月18日付け教文第431号で徹底され、本庄市教育委員会並びに、農耕部耕地課宛へ通知される運びとなった。

その後、本庄市教育委員会、同土地改良課、埼玉県教育局指導部文化財保護課、同農耕部耕地課、本庄土地改良事務所との数度にわたる協議、連絡調整の結果、昭和59年度より５年後に実施予定であった工程が急拠変更され、本庄市側の内、児玉南部地区は昭和60年度から実施されることとなった。これは昭和59年12月と昭和60年１月の県庁における打合わせ会議の席上で表面化したもので、大規模事業に対する埋蔵文化財の対応について、ともすれば一方的な内容を示すものであった。また、本庄市における新年度予算は、すでに12月の時点で決定されており、予算的措置は不可能な状況であった。

このような中で、昭和60年度農業基盤整備事業に伴う発掘調査経費配分についての通知（昭和60年３月19日付け耕第2506号）が、昭和59年度中に本庄市教育委員会へ送付されて来ておらず、実際に同文書が発行されていることが判明したのは、昭和60年５月21日における打合わせ会議の席上であった。加えて、地元役員、地権者等との協議や、文化財サイドの調整のため、発掘調査は同年度の下半期に実施予定を組入れた。この間、本庄土地改良事務所から本庄市教育委員会を経由して「昭和60年度県営ほ場整備事業児玉南部地区の工事計画について」の依頼書が昭和60年６月17日付け本地第573号で提出され、埼玉県教育委員会からは昭和60年10月15日付け教文第562号で、「県営ほ場整備事業児玉南部地区の工事計画に伴う埋蔵文化財の取扱いについて」の回答文書が本庄市教育委員会並びに、本庄土地改良事務所に届いた。これにより、昭和60年度の事業面積は26haで、内調査対象面積が約6,000㎡を必要とし、調査経費は文化財側負担（文化庁、埼玉県、本庄市）1,600,000円、農政側負担2,400,000円の計4,000,000円で実施することとなった。この内、農政側の「遺跡埋蔵文化財保存委託契約」は、昭和60年10月30日付け本地第1567号で本庄市に通知が届き、昭和60年10月39日に埼玉県知事畑和と、本庄市長織茂良平との間で締結された。

発掘調査の実施に係る諸手続は、本庄市教育委員会から昭和60年９月30日付け本教社発第216号並びに、昭和60年９月27日付け本地第1338号で「埋蔵文化財発掘調査通知」を、埼玉県教育委員会を経由して文化庁長官宛に提出した。これに対し、昭和60年10月21日付け教文第12―140号で、埼玉県教育委員会より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知が本庄市教育委員会及び、本庄土地改良事務所宛に届き、発掘に関する通知書の受理は昭和60年12月18日付け60委保記第２―3634号で文化庁より埼玉県教育委員会へ通知があったことを、昭和61年１月17日付け教文第13―213号で本庄市教育委員会に通知された。これにより、試掘調査と発掘調査は昭和60年10月21日から実施し、昭和61年１月17日に完了した。

第２年目にあたる昭和61年度の調査は、事前に予算配分が打合わされ、埼玉県教育局指導部文化財保護課の指導により農政側６：文化財側４の主旨により、農政側負担6,000,000円、文化庁側4,000,000円の計10,000,000円で実施された。事務処理上の経緯については、昭和61年２月14日付け本地第2252号で本庄土地改良事務所長より本庄市教育委員会教育長宛で「埋蔵文化財の取扱いについて」の協議文書が提出され、対して昭和61年２月15日付け本教社発第44号で「埋蔵文化財の所在について」の回答文書を返送した。同年度の事業予定範囲については、南縁を流水する男堀川の改修事業と関連しており、範囲の限定は流動的であった。最終的な範囲内にかかる周知の遺跡は５ケ所を数ぞえ、事業面積28haの内、何らかの調査対象面積は9,300㎡にのぼり、実質上の発掘面積は7,440㎡を実施することとなった。「昭和61年度県営ほ場整備事業児玉南部地区の工事計画に伴う埋蔵文化財の取扱いについて」の依頼文書は昭和61年６月28日付け本地第649号で本庄市教育委員会を経由し、埼玉県教育委員会へ提出され。これに対し、埼玉県教育委員会からは昭和61年８月29日付け教文第438号で、「県営ほ場整備事業児玉南部地区の工事計画に伴う埋蔵文化財の取扱いについて」の通知文書が本庄市教育委員会及び、本庄土地改良事務所に届いた。農政側と本庄市の「遺跡埋蔵文化財保存事業委託契約」は昭和61年９月９日付け本地第1062号で通知を受け、埼玉県知事と本庄市長の間で昭和61年９月９日に契約の締結をむすんだ。前後するが、発掘手続は昭和61年３月31日付け本教社発第65号並びに、昭和61

年３月20日付け本地第2487号で本庄市教育委員会と本庄土地改良事務所より「埋蔵文化財発掘調査通知」を、埼玉県教育委員会を経由して文化庁長官宛に提出した。これに対して昭和61年５月９日付け教文第２－４号で「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知書が本庄市教育委員会並びに、本庄土地改良事務所に届き、発掘にかかる通知書の受理は昭和61年７月９日付け委保記第２－2282号で文化庁より埼玉県教育委員会に通知があったことを、昭和61年７月28日付け教文第３－５号で、本庄市教育委員会へ通知された。発掘調査は事業の円滑化、迅速化を前提に４月14日より試掘調査を行い、下田遺跡の面的発掘並びに、小排水路の発掘を実施し、昭和61年10月15日に完了した（第１図）。

第３節　調査の組織

調査主体者　埼玉県本庄市教育委員会

教育長	飯島　彰（昭和59年９月30日まで）
	坂本敬信（昭和59年10月１日より）
社会教育課	
指導主事	矢崎昭夫（昭和61年３月31日まで）
課長	戸塚克男（昭和61年３月31日まで）
〃	荒井正夫（昭和61年４月１日より）
課長補佐兼文化	長谷川道夫（昭和61年３月31日まで）
財保護係長	小林弘子（昭和61年４月１日より）
係長（庶務）	小林弘子（昭和61年３月31日まで）
主事（庶務）	斉藤みゆき（昭和61年４月１日より）
文化財保護係	長谷川　勇
〃	増田一裕
〃	中田啓一
調査担当者	増田一裕
調査作業員	地域住民延べ1,100名

第４節　調査日誌抄

昭和60年度

10月下旬　東富田字四丁原よりトレンチを設定し、ユンボによる表土剝ぎを行う。本庄68、69、72号遺跡が該当するが、まったくの無遺構、無遺物であった。

11月上旬　西富田字前田地区に移動する。本庄150号遺跡の範囲内にあたるが、条里制遺構はみられず、新たに縄文遺構を検出。調査範囲を拡大し、精査する。

11月中旬　新幹線わきの字九反田を試掘。かなり深く、無遺構と思われたが、古墳時代住居址を検出。大規模な河川跡も確認しており、旧女堀川か。

11月下旬　東富田の南に移り、字前田と字窪田堀を開掘。両者において住居址を新たに確認資料的

に興味深い。

12月中　今年度唯一の面的調査地である下田遺跡の開掘に入る。突貫作業で、グループを編成し、表土剝ぎ、遺構発掘、実測、写真撮影、取り上げの順に順次行う。高架橋の北に位置するため、霜が午前中に振り、時間と競争する。意外と遺物は少なく、反してピット群が顕著であった。

12月下旬　七色塚遺跡を開掘。最終地点であり、カット面対象地であることが判明し、急拠試掘も並行して行う。下田遺跡と異なり、遺物量が多い。

1月上旬　本庄122号墳の主体部と範囲確認試掘調査を実施。周辺では初の内部構造資料を得る。また、墳丘下に五領式期の住居址群を新たに検出した。成果多し。

昭和61年度

4月　第2年目より先行発掘を前提とするため、4月から調査を行う。同年度唯一の面的発掘対象地である下田遺跡の試掘を遺跡の南縁より実施。上越新幹線に直交する状態で、トレンチを設定。8本のトレンチ内で住居址、溝、ピット等を確認。国分式期の土器片多し。

5月上旬　トレンチは11本を開掘。微高地の南縁においても遺構の存在が明確となったため東側の小排水路予定地と以東の削平予定地の全面表土剝ぎと発掘にかかる。南半はピット群が多く、まとまりはない。

5月下旬　北半部の新幹線よりに至って、住居址、溝、ピット等が集中して検出され出す。住居址はカマドが東のみに付加される企画性が見られる。なお、新幹線ぞいに攪乱が著しい。

6月上旬　各住居址の断面を検討。同月より重機を導入し、下田遺跡の全面表土剝ぎを実施する。

6月下旬　20日より観音塚遺跡の重機による表土剝ぎを行う。同遺跡の観音堂西では、多数の住居址を確認。下田遺跡は新幹線ぞいに攪乱が著しく、住居址、溝が検出。溝は金鑽大神の区画の一部と考えられる。前後するが下田遺跡の遺構番号は前回のつづきとし第130号より付加する。

重機の表土剝ぎは同月末に四方田南辺に至り、本庄77号遺跡の範囲内において、多数の住居址を検出。同付近で初の遺構確認となる。五領式土器が見られ、勾玉1点を出土。

7月上旬　西富田九反田遺跡の表土剝ぎを行う。まったく遺構はなく、新幹線ぞいは攪乱のみであった。雨期に入り、各トレンチ等に柵と立て札をたて、安全対策をこうずる。

7月下旬　小排水路の残りの重機による表土剝ぎはほぼ終了。下田遺跡の遺構開掘を継続し各住居址を中心に実測等を行う。石器が若干出土している。7月の梅雨で休日が多く、かなり予定が変化する。

8月　下田遺跡の北半分における遺構の実測、写真撮影を行う。住居址内の土器等を取りあげる。大半は国分式に属し、第134号住のみ五領式にあたる。

9月　観音塚遺跡の小排水路予定地内で、検出した遺構、住居址の開掘を行い、多数の土器を検出。四方田遺跡も並行して発掘。極めて多くの住居址を検出。遺物も原位置が多く、五領より鬼高前半にかかる。又、古墳址1基を確認する。

第２章　地理歴史的環境

第１節　地 理 的 環 境

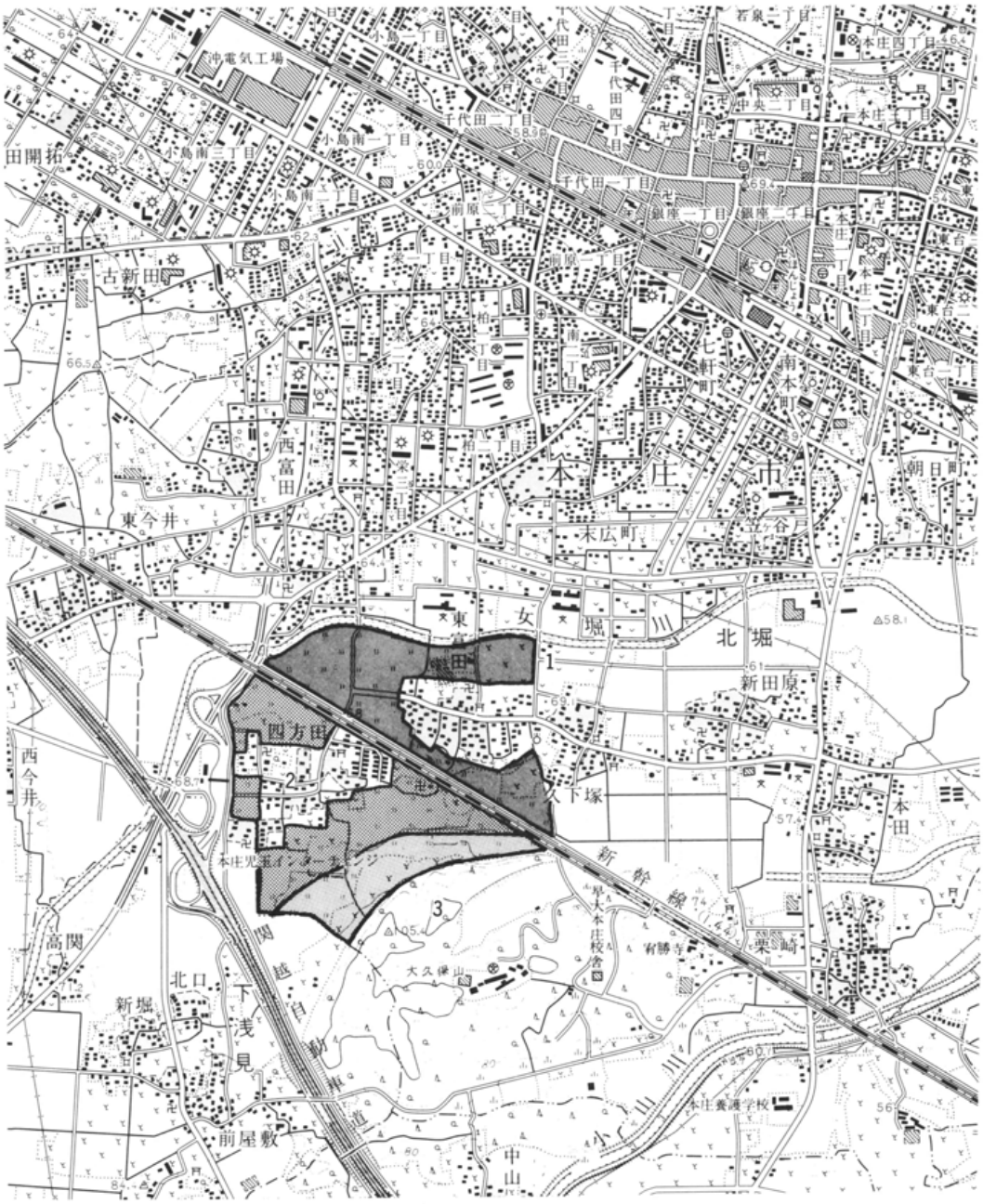
埼玉県の県庁所在地である浦和市は、南関東地方に属するが、埼玉県北西部に位置する本庄市は北関東地方に含まれる。これを反映するように、群馬県高崎市へは鉄道で約20分の距離にあたり、利根川をはさむ対岸には群馬県伊勢崎市が隣接する。周囲の山容は男体、赤城、榛名、浅間、妙義の各山々が遠望できる。したがって、地理、経済圏、文化圏、風土、環境等は、群馬県南にほぼ等しい。

本庄市をのせる埼玉県北西部の地理的条件は、南より山地、丘陵、台地、低地の順に形成されている。南方の山地は関東山地の北西部にあたり、上武山地と命名されているが、市内には位置しない。同山地で埼玉・群馬県境にあたる神流川渓谷は、三波川結晶片岩が分布しており地質学上、三波川帯の名で著名である。台地に近接する山地の標高は500～300mを測り、各谷すじは小山川、赤根川、金鑽川等の水源地となっている。山地の北東縁は西児玉丘陵、松久丘陵が立地している。同丘陵と山地の間には八王子・高崎構造線が西北から東南に走り、ほぼ150mの等高線上に反映されている。丘陵の山地近くは第三紀層より成り、ここから台地上に北東方向へ派生した生野山、大久保山（児玉丘陵）と山崎山、諏訪山（松久丘陵）は残丘性丘陵で、高位段丘礫層が堆積し、多摩面に相当するものの、これに伴うローム層はない。大久保山（浅見山）は唯一市内に所在する丘陵である。なお、各丘陵の一部には武蔵野面が見られる残丘性丘陵をのせる台地部は、上武山地に端を発する神流川の堆積作用による扇状地性台地で同河川右岸の埼玉県側に良好な発達が見られ、本庄台地と呼称される。立川面にあたる。扇頂部は群馬県鬼石町浄法寺付近で、標高300m前後を数える。扇端部は児玉郡上里町神保原から本庄市の市街地北縁を通過し、女堀川と小山川が合流する部分の、大字東五十子まで追跡することができる。北側の低地とは比高差６～７m前後の崖を形成しており、本庄段丘崖と呼称されている。崖上の標高は50～60mで、扇頂から扇端までの距離12kmに対して落差は－240mを数える。段丘崖下の北方一帯は、利根川、烏川の氾濫原で、妻沼低地の上流部にあたる。標高40～50mを測り、氾濫による河川跡や自然堤防が微低地、微高地に反映されており、後者は現集落の立地と重複する。

以上のごとく、本庄市は低地、台地、丘陵からなるが、遺跡はほぼ台地部に集中している。台地上を流水する河川については、男堀川と女堀川がそれぞれ東流しており、周辺は沖積化が著しい。また、西部の大字今井、西富田にはある条件のみ湧水する野水の流路が観察され、いわゆる久上水（グジョウミズ）と呼ばれ、近年研究が盛んである（水島　1986）。また、崖下には泉が多く、市街地北端の若泉の泉は市民の憩いの場となっている。

台地上の地質学的な形成は、神流川による扇状地性堆積物を示す砂礫層が各所で観察され、層厚は12m前後を測る。余談ではあるが、本庄市の上水道は低地面下約150mから取水している。砂礫層上にはローム層が被覆しており、下位よりハードローム、板鼻褐色パミス、ソフトロームの順に堆積している。しかし、全層厚は１m前後と未発達で、黒色帯も観察されない。本地域のローム層は大里ロームと命名されており、北関東の上部ロームに対比される。市内に堆積するテフラの起源については、近隣の児玉町倉林後遺跡の成果（河西　1981）から、浅間火山を給原とする産物である結果が報告され

ている。また、浅間、榛名両火山のテフラ降下範囲（新井　1979）からも、市内に堆積するローム層が両火山に由来する可能性が示唆される。ローム層上位を覆う黒土層は、やはりテフラを中心とするが、鍵層として天明３年の浅間Ａパミスがある。本庄市における考古学的遺物の包含層は、この黒土層とローム層であるが、後者を包含層とする旧石器の類例は極めて少ない。



第１図　調査位置図

１、昭和60年度調査地区　２、昭和61年度調査地区　３、昭和62年度調査予定地区（本図は国土地理院発行１：25000本庄を使用した）

第2節　歴史的環境

本庄市の地理・地質については先述したごとく、立川面に対比される台地面が、直接的な生活範囲として広がっている。したがって、人為遺物の上限も大里ロームの存在から、旧石器時代まで溯って紹介しなければならない。日本で最初に旧石器が発掘調査された群馬県岩宿遺跡と、本庄市の距離は直線で約40kmを測る。近年本庄市においても同時代の遺物が増えつつあり、将来有望な遺跡の確認も期待される(増田　1982)。しかしながら、現状では古墳時代等の遺構発掘中の副次的な出土、採集にとどまっている。類例として小島石神境遺跡、西富田社具路遺跡、西五十子本庄44号遺跡からナイフ形石器。古川端遺跡では細石刃、彫器。三杢山古墳から尖頭器、舟底形石器。笠ケ谷戸遺跡、将監塚遺跡においては有舌尖頭器がそれぞれ出土しており、多期にわたることを暗示している。今後の研究課題としては、本地域に広がる大里ロームとこれら文化層の把握や、石器組成、分布範囲など多くの問題点が残されている。

縄文時代に入ると、近隣の大里郡岡部町北坂遺跡より微隆起線文土器が出土している。いわゆる草創期の遺物は、本庄市においても宥勝寺北裏遺跡で絡状体圧痕文土器、爪形文土器が採集されており、同遺跡からは押形文土器も採集されている。遺構の検出例としては、共栄の将監塚遺跡の発掘調査で初めて多数の住居址が検出されており、その後、県営ほ場児玉南部に伴う西富田前田遺跡の発掘調査においても住居址と土壙が検出されている。なお、同時代に属する打製石斧は、各調査でたえず単独出土しているが、おそらく当時の採集経済を反映した分布のあり方を指示しているものと思われる。

弥生時代の遺跡は、極めて少ない。児玉郡内における弥生時代遺跡の分布状態を見ると、丘陵部分の谷に集中し、谷水田の経営を示唆するような状態であり、対して台地面が大半をしめる本庄市においては、立地の限定性があったことを物語るものかも知れない。市内からは大久保山と市立東中学校の薬師堂遺跡より弥生土器が出土しており、前者は谷が広がり、後者の場合は、段丘崖下に利根川沖積地が広がる地理的条件を示している。これらは弥生時代における各時期の立地変化について、興味ある問題点を提示している。

古墳時代の遺跡は、次の奈良・平安時代とともに最も多く分布しており、本庄市を代表する埋蔵文化財とも言えよう。発掘調査の対象時期も、ほぼこの時代以降にかかる。集落跡は昭和30年代における西富田二本松遺跡の発掘調査を契機として、以降小規模な発掘調査が実施されてきた。ちなみに同遺跡は関東地方でも一早く、住居内に造り付けのカマドが用いられた、遺構の確認がなされたことで注目されたが、その後、和泉II式期にかかるカマドの類例は、西富田遺跡群を中心に増加している。

前後するが五領式期の遺跡は、現女堀川の中流域で、関越自動車道本庄インターチェンジ周辺に集中している。児玉町後張遺跡、同川越田遺跡、同雷電下遺跡、本庄市下田遺跡、同七色塚遺跡、同久下東遺跡、同社具路遺跡等をあげることができる。これらの分布範囲は後の条里制遺構、すなわち、農耕生産地（水田経営地）に直接関連する地域に接しており、また、弥生時代遺跡の分布範囲を拡大した状態を示す点で、両時代は密接な関係を示唆しているように考えられる。ただし、五領I式期に資料的欠落があり、時間的な連続性は問題を残している。

和泉式期に入ると、注目すべき遺跡出現のあり方を示すようになる。和泉I式期に属する遺跡は夏

目遺跡、九反田遺跡、後張遺跡、古川端遺跡等が見られるが、現状で類例は少ない。ところが、和泉II式期の段階に至ると、西富田地区と段丘崖地区を中心に、急激に集落遺跡が多く出現する。同時期は住居址内にカマドが採用される時期でもある。また、土器に須恵器模倣品や大形甑の出現などの社会的変化が見られる。さらに、首長墓としての古墳葬制の採用がほぼ定着する段階でもあり、本地域における和泉II式期は、古墳時代における一つの画期を物語っている。

鬼高式期に属する遺跡は多い。同I式前半にあたる住居址は西富田新田遺跡、夏目遺跡、南大通り線内遺跡、下田遺跡、七色塚遺跡等で検出されており、夏目遺跡第51号住居址のカマド内からは、祭祀に使用された可能性がうかがわれる三連小坩が出土している。また、カマド製作時に袖へ、臼玉を埋納する儀式が行われたようで、臼玉出土の類例が多い。鬼高II式期の住居址は最も多く、一遺跡における遺構の重複も著しい。南大通り線内遺跡第24号住居址からはU字鍬先が出土している。鬼高III式期は資料的に充実していないが、古川端遺跡第10号住居址、下田遺跡第51号住居址、南大通り線内遺跡第36A号住居址等で類例が認められ、後者からは土師器、須恵器の完形品が多量に出土しており、本地域における標式遺構となりうる要素を持つ。なお、下田遺跡第51号住居址の第2次調査発掘区内では銅芯で厚みのある銀メッキをほどこした耳環が出土している。

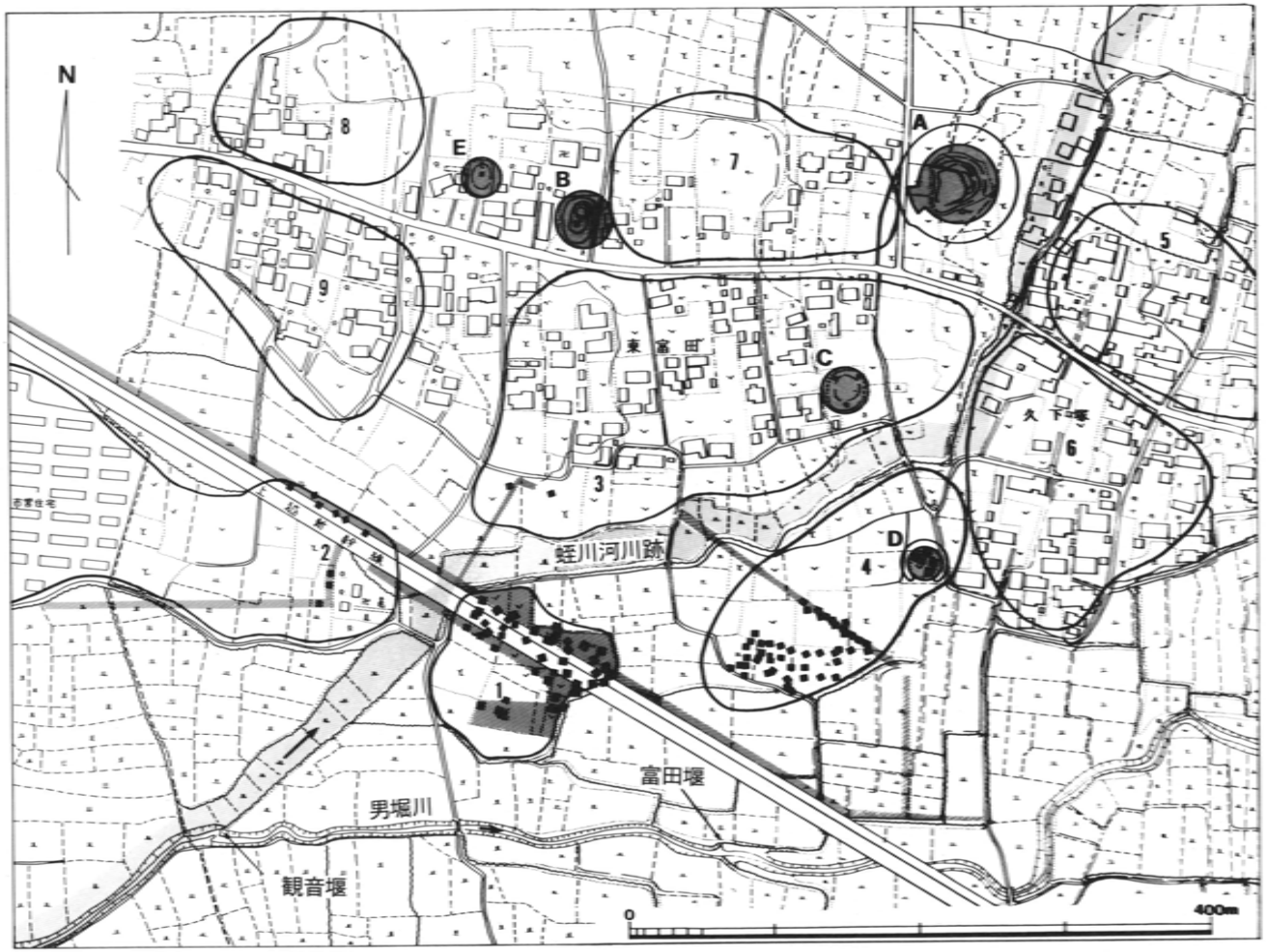
この時期を代表する葬制である古墳は、市内においてはかつて、200基以上存在したが、現在では盛土を残存するものが20数基にみたない。これらの内、八幡山古墳、本庄135、136、137号墳は市指定文化財として保存されている。近年の古式古墳研究の成果からも指摘されているように、児玉郡内には多くの古式古墳が集中している。本庄市内では前山1、2号墳、公卿塚古墳、三杢山古墳、八幡山古墳をあげることができ、何れも和泉式期に属する。公卿塚古墳からは叩き目格子のある円筒埴輪が出土しており注目される。また、三杢山古墳周辺からはB種ヨコハケ円筒埴輪も出土しており、埴輪の研究が盛んになりつつある。形象埴輪では旭・小島古墳群の御手長山古墳より人物、家埴輪。同石神境古墳からは人物、家、馬埴輪。同三杢山7号墳では馬埴輪が出土しており、市街地内の関根古墳においてはみごとな女子人物埴輪が発見されている。この内、石神境古墳の埴輪出土状態は、内部主体がまったく破壊されていたとはいえ、円筒と形象の配置状態が復原可能な資料を提供している。古墳群は旭・小島古墳群が100基ほど存在するものと推定され、三杢山古墳は直径69mを測る盟主級大形円墳で、その東に隣接する三杢山7号墳は、帆立貝式古墳である。南の支群にあたる下野堂地区には本庄市唯一の前方後円墳である二子山古墳がかつて存在した。これらを包括して同古墳群は埼玉県選定重要遺跡に指定されている。他に塚合古墳群が約80基前後。大久保山の西方に所在する塚本山古墳群は約170基で構成され、小規模なものに西五十子古墳群、鵜森古墳群、市街地の古墳群、大久保山古墳群、東富田古墳群等があげられる。以上の群集墳が盛行したのは6世紀後半から7世紀にかけてで、内部主体の大半は、当地方に特徴的ないわゆる模様積み、あるいは角閃石安山岩を使用した横穴式石室で、下野堂の山本第1号墳は最後の横穴式石室と推定される。

およそ奈良・平安時代にあたる真間・国分式期の遺跡は、分布調査によってかなり確認されている。実際に遺構や遺物のセット関係が、把握可能な資料が増加してきたのは、最近の各種発掘調査によるところが大きい。集落全体の構造が判明した将監塚遺跡をはじめ、本時期の単独遺跡は今井、共栄地区に顕著である。これは和泉、鬼高式期の遺跡が東方の西富田、東富田地区を中心に分布するのと対

称的である。国分式期にかかる遺跡は、早稲田大学本庄校地内の遺跡群の総合的な発掘調査により、集落構造を知る手がかりが得られたようであるが、早急に報告書の提示が望まれる。なお、同遺跡内からは井の字を線刻した紡錘車が出土しており、和名抄記載の児玉郡大井郷を暗示するものとも解される。一方、西富田遺跡群の南大通り線内遺跡の第51号住居址から国分式（古）の土器とともに、「武蔵国児玉郡草田郷戸主大田ア身万呂」の線刻銘文紡錘車が発見され、郡郷制に関する新資料が得られた。おそらく、草田郷の範囲は当時の郷戸の員数から想定して、西富田遺跡群、今井遺跡群、古井戸・将監塚遺跡をも包括する大規模な範囲である可能性がある。

真間、国分式期は律令国家体制の時代であるが、この時期に国家的あるいは、地域的単位集団で大規模な土木事業がなされた遺構に、古代のほ場整備とも言える条里制遺構があげられる。女堀川流域と久下塚、新田原にかかる男堀川ぞいに遺存しているが、これらは現在のほ場整備事業により、数年後にはほぼ地表面から消滅する運命にあり、誠に遺憾である。ちなみに、前記女堀・男堀両河川も条里に伴い人為的に東西に掘削された遺構である。

中・近世にかかる発掘調査例は少ない。これは個々の研究者の認識にも由来するものと思われるが、近年、考古学上注視されている遺構に城館址がある。市内においては12ケ所ほど存在しているが、大半は武蔵七党の一党である児玉党一族の館址で、四方田館址は現在でも堀等の遺存度が良好である。栗崎の東本庄館址は、その後、本庄城へと移動し中山道がわきを通過するようになる。これが今日の本庄市街地発展へとつづいて行く原点となった。このようにして再びめざましく発展しようとする、現在の本庄市の礎となった祖先の歩みを、今、ここでふりかえることは、未来の本庄をみつめることにもなろう。



1、　下田遺跡
　　（本庄75号遺跡）
2、　観音塚遺跡
　　（本庄74号遺跡）
3、　元富遺跡
　　（本庄70号遺跡）
4、　七色塚遺跡
　　（本庄71号遺跡）
5、　本庄66号遺跡
6、　本庄67号遺跡
7、　本庄69号遺跡
8、　本庄72号遺跡
9、　本庄73号遺跡
A　公卿塚古墳
B　熊野十二神社古墳
C　本庄121号古墳
D　本庄122号古墳
E　本庄124号古墳
（▨発掘地点）
（■住居址）

第２図　東富田遺跡群分布図

（本図は北泉土地改良事業用１：2500を原図とした）

第３章　東富田遺跡群の発掘調査

第１節　東富田遺跡群の位置と調査内容

本庄市の市街地は、台地の崖ぞいに発達している。ここより南方の大久保山に至る部分は、女堀川と男堀川が東流しており、農村地帯として畑、水田が広がる。前述両河川の間は東東北にのびる微高地が観察され、四方田、東富田集落が立地する。標高は68m前後を数ぞえ、国鉄本庄駅からは西南へ直線で1,500mの距離にあたる。周辺で発掘調査が実施された遺跡としては下田遺跡、久下東遺跡、後張遺跡があげられ、今回の事前資料として役だった。

昭和60年度県営ほ場整備事業児玉南部地区の本庄市側にかかる周知の埋蔵文化財は本庄68、69、70、71、72、73、74、75、122、150号の各遺跡が所在する。これらの内、150号遺跡は条里制遺構にあたり、航空測量による現況記録を実施した。他の部分については、ほぼ平地形を呈していたが、71号遺跡(七色塚遺跡」と75号遺跡（下田遺跡）は高低差が著しく、調査前からカット面の対象となっており、現状保存の困難差が指摘されていた。このため、下田遺跡については面的発掘調査を実施し、七色塚遺跡は範囲確認試掘調査をもとに、設計変更を協議し、最終的には現状保存されることになった。

一方、昭和61年度事業にかかる地域は、本庄74（観音塚遺跡）、75（下田遺跡）、77（四方田遺跡）、150、156（四方田氏館址）号遺跡が分布しており、この内、下田遺跡が前回同様に高低差の顕著な地形から、やはりカット面の対象地となっていた。しかし、同遺跡の重要性から極力カット面の対象から除外することを協議し、結果的には同部分のみ、男堀川より等間隔で区画した上で、上越新幹線よりは現状保存されることになった。本遺跡で発掘調査を実施した部分は南縁と小排水路以東及び、新幹線ぞいの農道（高低差が著しくカットされる可能性があるため）部分で、保存区は畑地となった。他の小排水路予定地の内、四方田氏館址の堀にあたる地点等は、現生活雑排水、用水等が機能しており、設計計画とも重複していることから立合い調査を実施した（第２図)。

試掘調査及び、発掘調査はほ場整備事業の工程並びに、設計上から小排水路予定地等の掘削個所を中心に行った。これらの表土剝ぎはバックホーにより幅２mで、周知の遺跡内は連続して、遺跡外は等間隔でグリット状に開掘した。また、両年度の地域内には歴史地理的に重要な、埋没河川が存在しており、小排水路にかかる部分においてバックホーによる深掘を行い、断面調査を実施した。昭和60年度の事業面積は26haで、発掘調査面積が6,000m²を対象とし、昭和61年度は事業面積28haに対して、発掘調査面積が7,440m²を数えた。

両年度にわたる調査では、本庄150号遺跡内で新たに縄文時代に所属する西富田前田遺跡と、和泉式期にかかる九反田遺跡が確認され、四方田遺跡では集落跡の存在が明確となった。これらについては、東富田遺跡群とは分離して別のグループとし、今回の報告から除外し、後日別編で報告する。また、本庄122号墳は内部主体の発掘及び範囲確認試掘調査を行ったが、条里制遺構の航空測量調査とともに、航空測量を実施したため、成果品の出来上がり時点で報告する。なお、東富田遺跡群の範囲については、第４章に定義を述べた。本事業に伴う発掘調査では予算措置上、国家座標の設定は下田遺跡のみ、土地改良事務所の御厚意により設定できた。

第２節　下田遺跡第２次調査

下田遺跡は、大字東富田字下田185―１、他に所在する。東富田集落より真南へ約200mに位置する島状微高地が遺跡のおよその範囲にあたり、地形の範囲は水田に囲まれた畑地として、地目に反映されている。蛭川河川跡と男堀川にはさまれた状態で、標高は約64mを数える。

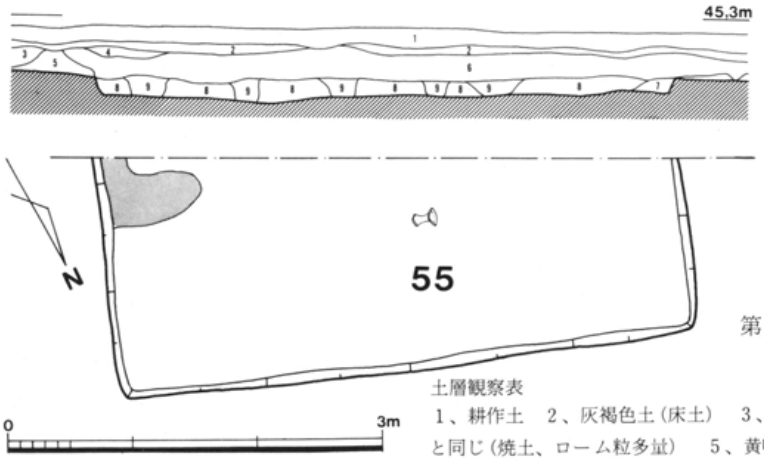
遺跡の北半部を通過する上越新幹線の建設時に、埼玉県教育委員会によって、高架部分と保守用道路部分の発掘調査が実施された。これを第１次調査とし、今回の調査を第２次調査とする。調査の経緯は、上越新幹線の側道ぞいに小排水路が建設されることと、当初より微高地であるためカット面の対象地となっていた。昭和60年９月の時点で土地改良事務所側で事前に範囲確認の試掘調査を行った。その結果、微高地北半においても、遺構・遺物が検出されたことから、現状保存が望ましいことを協議内容に含めた。しかし、前述した周辺との落差が大きく、埋土のための土量に影響することや、本遺跡の調査段階で、他の調査区における遺構・遺物の検出量が予想よりかなり半減していたため、時間及び、予算的に発掘が可能となったので、同年度唯一の面的発掘を約1,700m²の範囲で実施した。

遺構と遺物

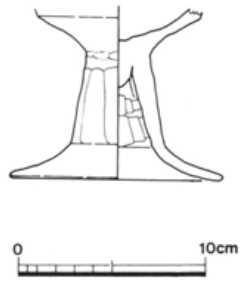
第１次調査で検出された遺構の延長部に加えて、新たに住居址12軒、溝及び、土壙多数、井戸２ケ所、新田開拓と推定される跡、近世金佐奈大神（神社）跡と、第１次調査では報告されていないおびただしい数のピット群が東半部において検出された。土壌は、ほぼ全域に黄褐色ローム層が表土下―60cmで広がっており、北辺の水田面と同レベルにあたる。全体に北へ緩傾斜する地形を見せる。

第55号住居址（第３、４図）

調査区の西端で最初に確認された。傾斜地に位置しており、遺存度は悪い。約３分の１を開掘する。東西の両コーナーが判明しており、一辺4.7m、壁高14cmを数える。現地表下65cm前後で床面となっており、土師器高坏がわずかに出土したにとどまる。東壁の調査区限界付近からカマドの痕跡が確認された。わづかに粘土が輪郭を描いているにすぎず、窯底部に土壙も検出されなかった。周辺に焼土が観察された。なお、第１次調査区では確認されていない。鬼高式期前半に属する。



第３図　下田遺跡第55号住居址実測図



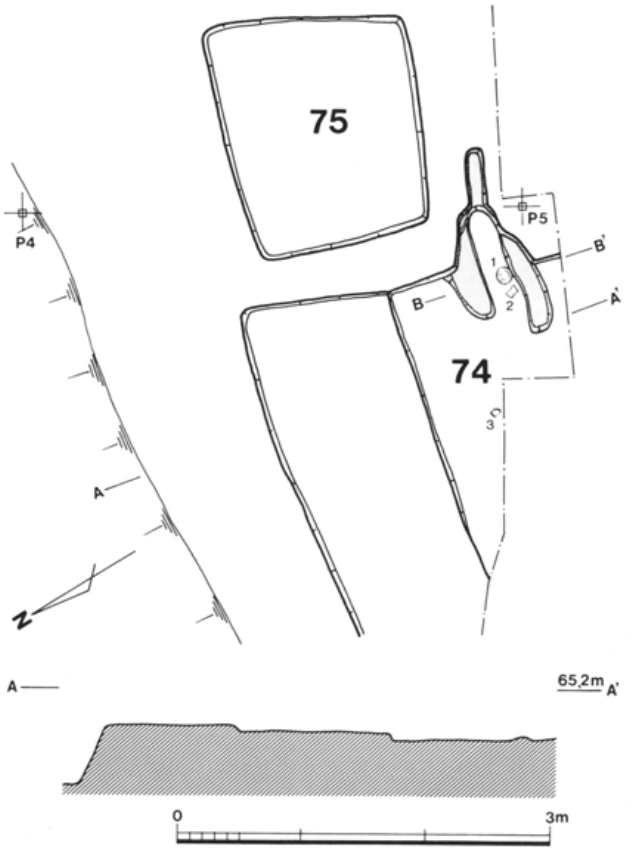
第４図　下田遺跡第55号住居址出土遺物実測図

土層観察表

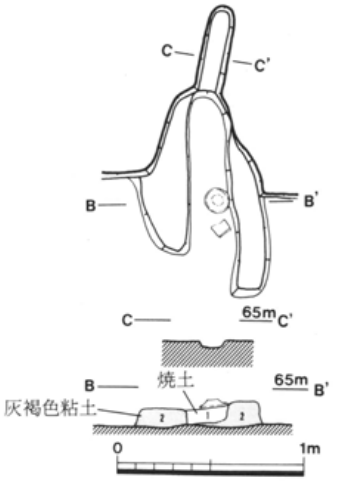
１、耕作土　２、灰褐色土（床土）　３、黄味帯びた黒褐色土　４、６と同じ（焼土、ローム粒多量）　５、黄味帯びた暗茶褐色土　６、灰味帯びた黒褐色土　７、黒土（ローム粒多量）　８、黒土（ローム・ブロック含む）　９、黒褐色土

N
24.400m
24.350m
58.900m
58.850m
SK71
SK72
SD127
SD68
SD65
SD63
SD174
SD173
SD177
SD172
SD171
SD1
SD121
SD120
SX98
SX100
PIT.1
PIT.4
SD166
SD184
0
20m

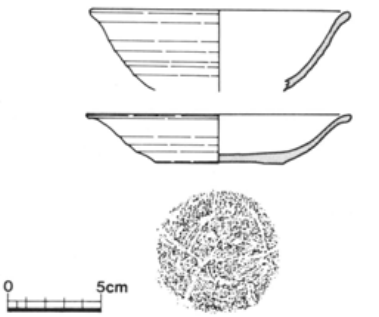
第５図　下田遺跡全体図



第６図　下田遺跡第74号住居址実測図



第７図　下田遺跡第74号住居址
カマド実測図



第８図　下田遺跡第74号住居址
出土遺物実測図

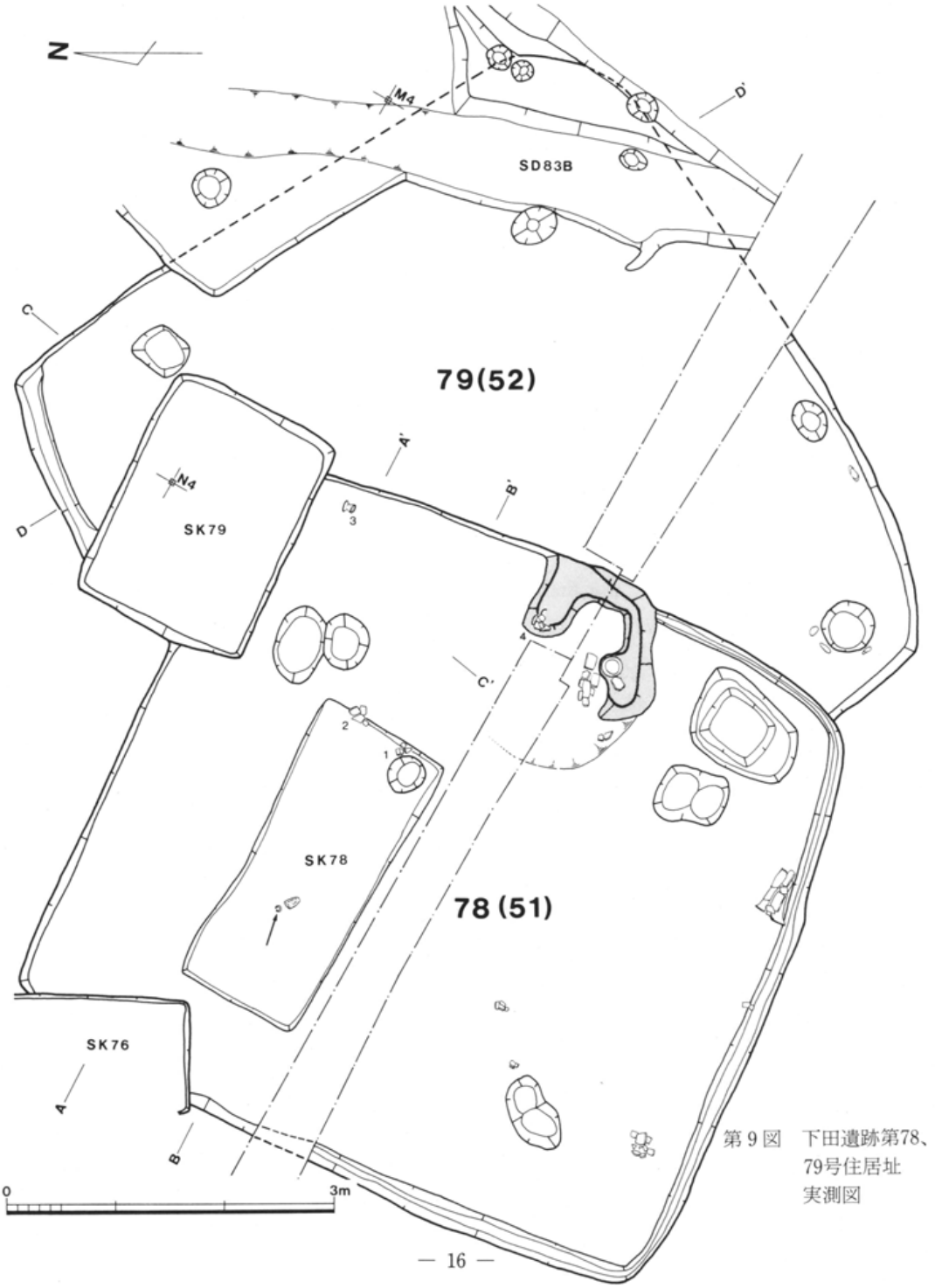
第74号住居址（第６、７、８図）

北辺微高地が南へくびれる部分で、保守用道路に接して検出された。明瞭な遺構範囲を示すものの、深度は極めて浅く３分の１を確認したにとどまる。北辺はこれまた浅い土壙により切断されているが、住居址の壁面は遺存していた。一辺は北壁部で2.4m以上を測るが、カマドの位置から小形の住居址と推定される。東壁部の一辺は2.4m以上。壁高５cm。周壁溝、柱穴は確認されていない。カマドは東壁を掘り込む状態で設置されており、煙道がつづく。袖部は灰褐色粘土を使用しており、内部には焼土が充塡されていた。全長1.55cm、巾74cm、高さ８cm、煙道長60cm、幅20cm、深さ４cmを測る。遺物はカマド内より須恵器皿が出土した他に、若干の小片を得たのみにとどまり、国分式にあたる。なお、第１次調査時には、本住居址南辺の確認はなされていない。

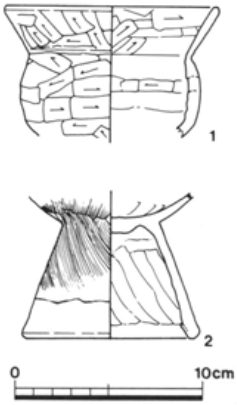
第78号住居址（第９、11、12図）

第１次調査の第51号住居址にあたり、北半部を完掘した。北及び、東コーナーを土壙により切断されており、中央部にも後世の土壙が検出された。南北の一辺は6.1mを数ぞえ、壁高20cmを測るが東壁の遺存度は悪い。周壁溝は今回の範囲内では確認されていない。柱穴は東コーナーで２ケ所接して検出され、前回の柱穴と同様の状態を示す。北コーナー付近に位置すると思われる柱穴は、確認されな

かったが、土壙内に所在し攪乱されているものと推定される。カマドは調査区限界で検出した。左袖部は右袖部ほど遺存度がよくないが甕が埋設されていた。幅120cm、長さ80cmを測り、煙道部と推定される部分は、未調査区域であるため不明である。遺物は概て少ないが、床面を掘削した土壙内より銅芯銀張りの耳環１点が出土している。鬼高II式終末期に属する。



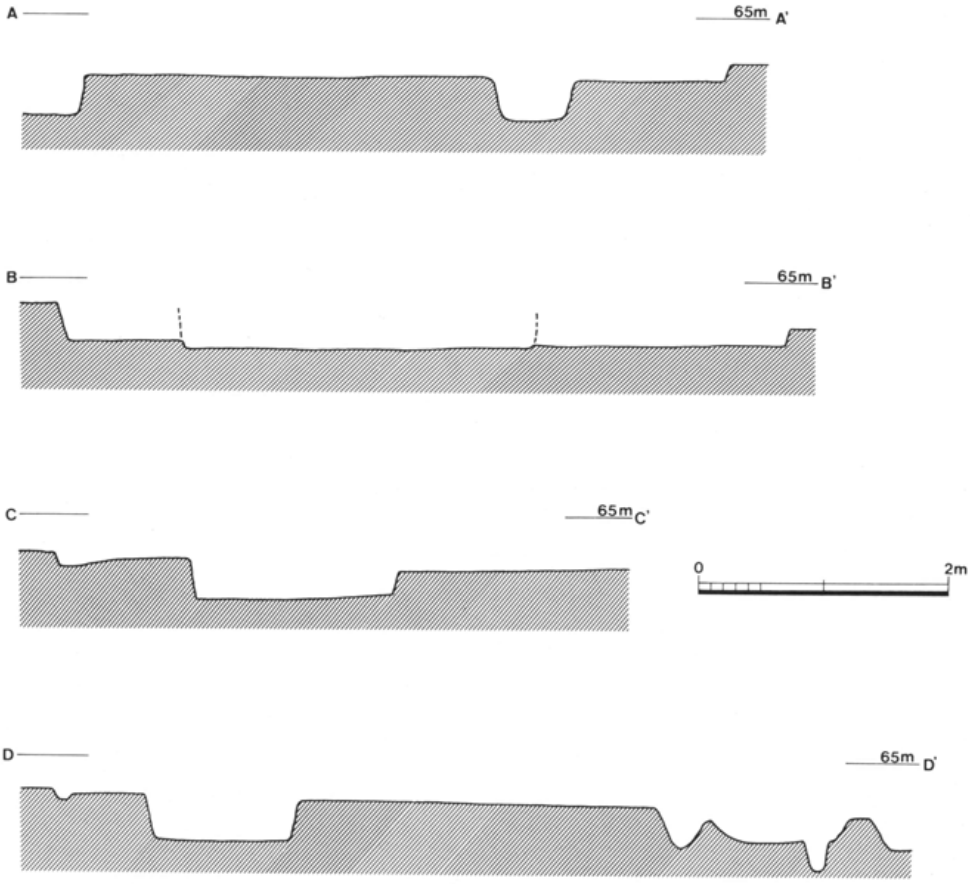
第９図　下田遺跡第78、79号住居址実測図



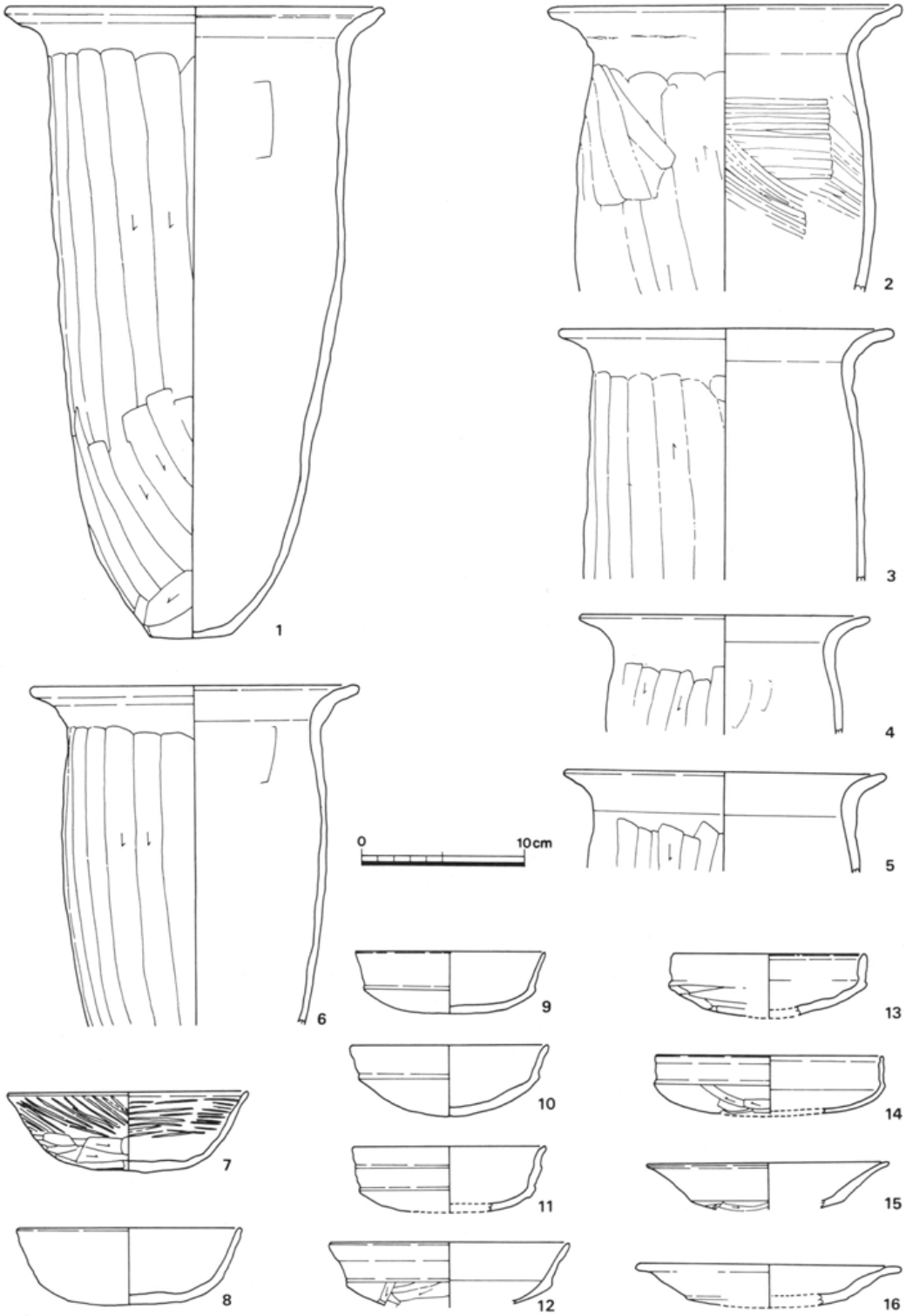
第10図　下田遺跡第79号住居址周辺出土遺物実測図

第79号住居址（第９、10、11図）

第１次調査の第52号住居址にあたり、先の第78号住居址の東壁により切断されている。北半部３分の２を完掘した。遺存度は悪く、土壙、溝、第81号住居址に切られており、壁部は北コーナー付近のみ検出されたにとどまる。ただし、東コーナーの溝が交差する付近でわずかに認められた。一辺6.8m、壁高10cmを数ぞえ、北コーナー付近では前回確認されなかった周壁溝を検出している。柱穴は東コーナー部の溝に接して１ケ所と、第78号住居址内の土壙内で１ケ所検出されており、北コーナー部にあたるものは、土壙により消滅しているものと考えられる。炉もしくは、カマドの存在については不明である。遺物は極めて微量で時期決定をするものがなく、第78号住居址との切り合い状態から、鬼高III式期以前と推定される。



第11図　下田遺跡第78、79号住居址断面図



第12図　下田遺跡第78号住居址出土遺物実測図

第81号住居址（第14図）

前住居址の北東辺を切断して位置し、第２次調査区の中央部に所在する。完掘したが溝、土壙、ピット群による攪乱が著しく、霜による平面の観察が容易でなかったのは遺憾である。全体にいびつな方形プランを呈しており、東及び、南コーナーは不明である。一辺3.8m×4.2m、壁高33cmを測り、北コーナー付近でわずかに壁溝を確認したにとどまる。４本主柱穴の遺存度はよく住居の平面に比してやや大形の柱穴が検出された。炉もしくは、カマドの痕跡は確認されなかった。貯蔵穴についても同様である。また、遺物の遺存度も不良で、時期を推定するような遺物は出土しなかった。切り合い関係から鬼高式期以降、国分式期以前と推定される。

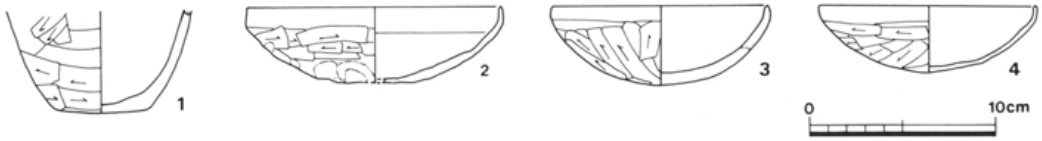
第82号住居址（第14、15図）

第81号住居址と北方の小崖部の間に位置しており、完掘している。ただし、遺構の遺存度は極めて悪い。表土剝ぎ当初、溝83Ａと同83Ｂの間を覆う浅い覆土の広がりが観察された。住居址自体の輪郭は、各遺構並びに、崖部により破壊されているため、範囲、方位は不明である。カマド等の施設についても溝により破壊されているものと考えられる。柱穴は数ケ所存在するが、本住居址に伴うものか判明しなかった。ただし、溝83Ａに接する２基のピット内より国分式期の坏が出土しており、本住居址の時期を指示している。

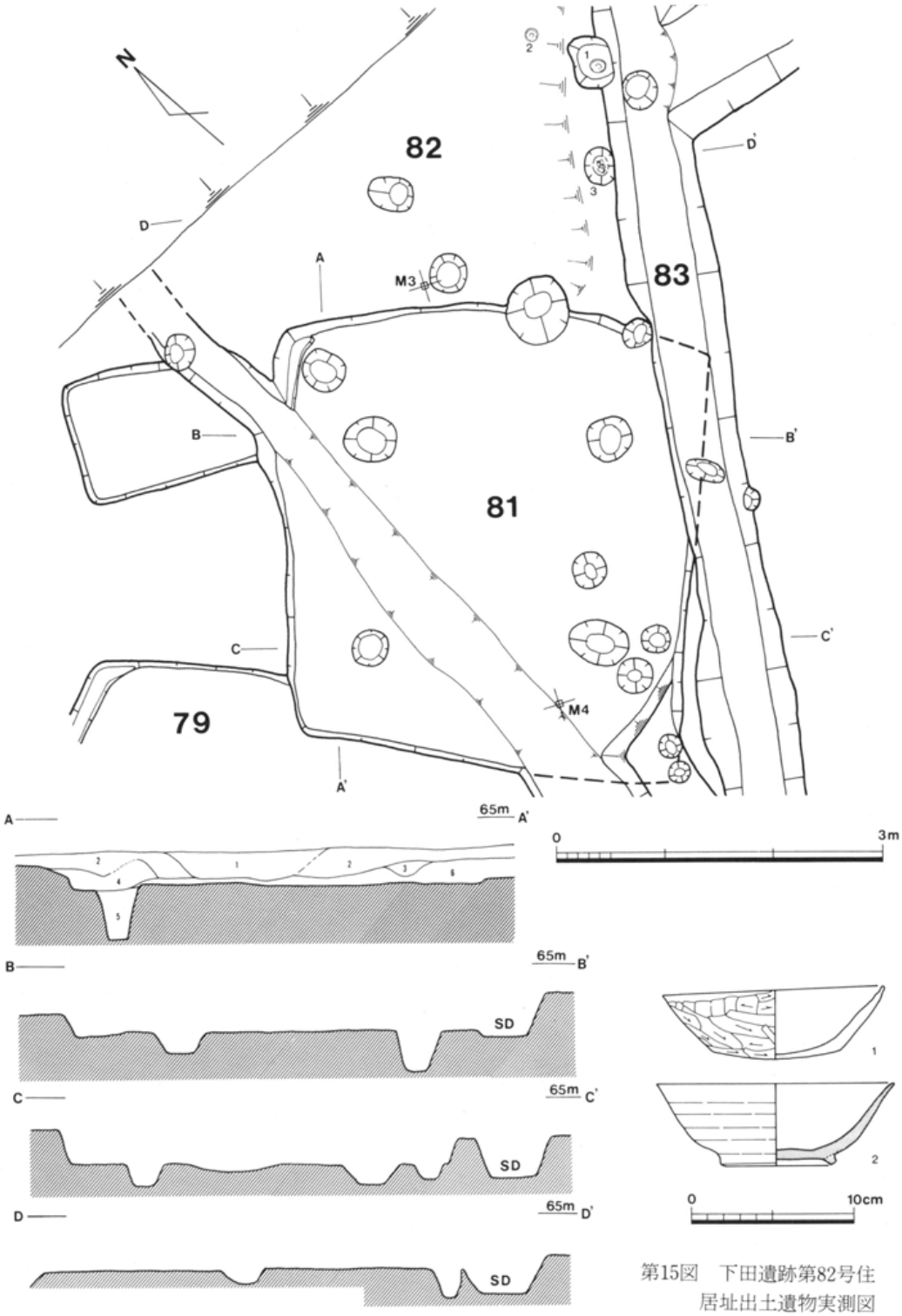
なお、本住居址を含む第126、55、74、82、93、108、122号住居址を結ぶ線上が、本集落跡の北限と推定される。

第86号住居址（第13、16、17図）

後述する第87号住居址と切り合う。本調査区内では最も小形の住居址で、完掘した。主軸は北東一南西方向に配置される。一辺2.8m×2.5m、壁高27cmを測り、プランは台形状を呈する。壁溝及び、柱穴は検出されなかった。カマドは北東壁の中央部より右側に配置されており、煙道は検出されなかったが、袖部は壁面と直角方向ではない。内部より坏１点が出土している。時期は真間式に属する。

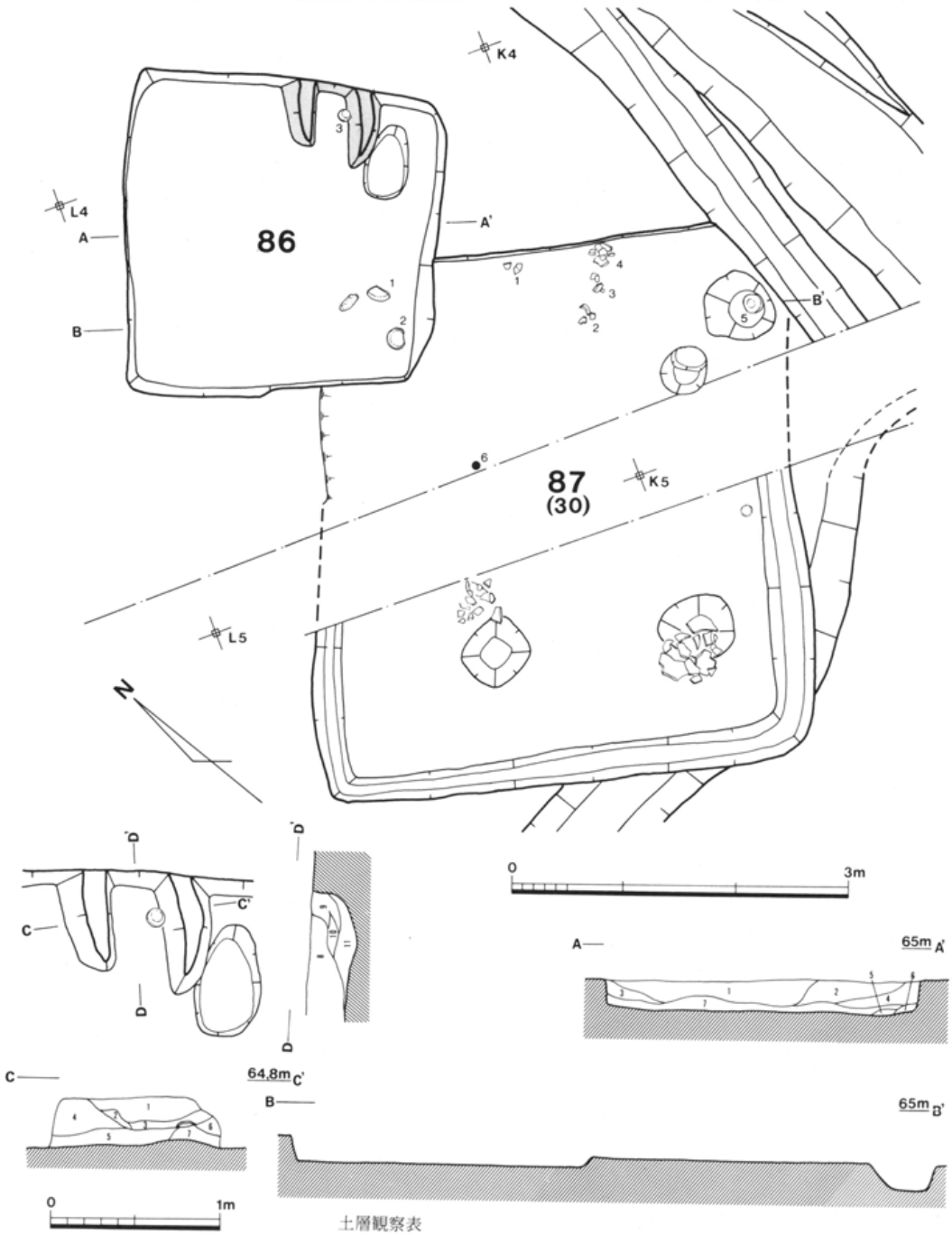


第13図　下田遺跡第86号住居址出土遺物実測図



第14図　下田遺跡第81、82号住居址実測図

第15図　下田遺跡第82号住居址出土遺物実測図



第17図　下田遺跡第86号住居址
カマド実測図

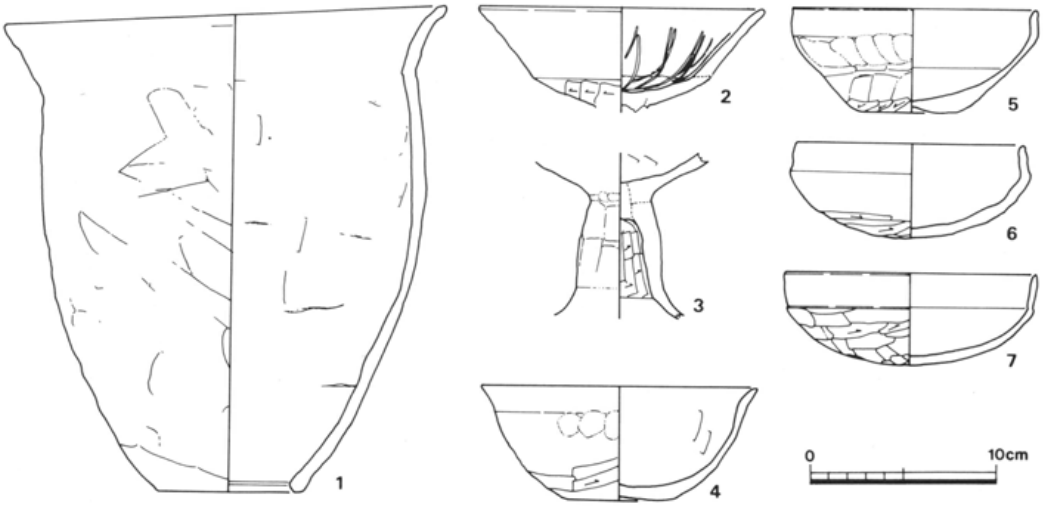
土層観察表

1、8、黒灰褐色土（ローム粒含む）　2、9、10、焼土　3、焼土（ブロック状、火床面）　4、黒灰色土　5、11、黒褐色土（黄味帯びる）　6、粘土　7、黒土

第16図　下田遺跡第86、87号住居址実測図

第87号住居址（第16、18図）

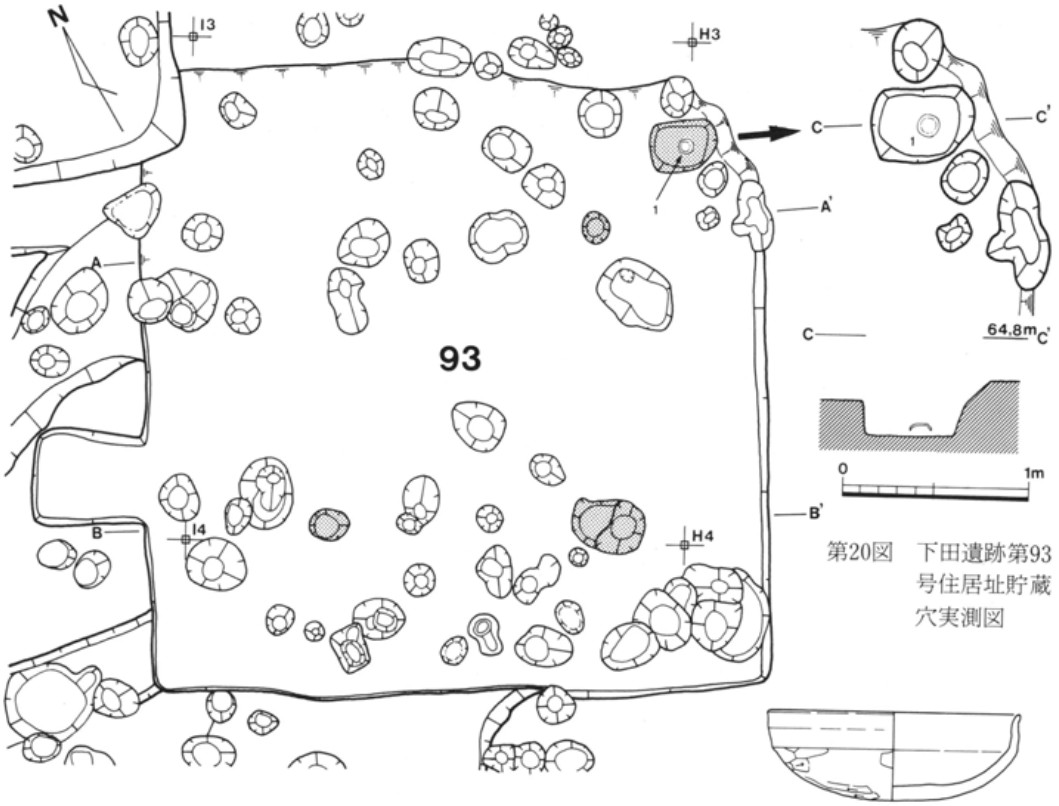
調査区のほぼ中央部保守用道路に接して検出された。第１次調査時に確認された第30号住居址の北半部にあたる。北及び、東コーナー部を第86号住居址と溝85に切断されている。前回の調査に比して遺構の遺存度は悪く、壁面も不明瞭であった。座標系をもとに復原すると、一辺4.6mを数えることになる。周壁溝は今回確認されていない。柱穴は東側で一ケ所検出された。この柱穴と溝85の間には柱穴とはさほど規模が変わらない貯蔵穴がある。内部より和泉型坏が完形で出土している。時期的には前回の結果通り、鬼高Ⅰ式前半であることを再確認したが、この時期にはほぼ存在するカマドについては、未検出である。第１次、第２次調査間の未発掘地区にあるいは存在するものと考えられる。なお、遺物は北東壁部に接して若干出土している。



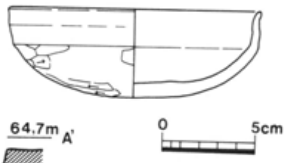
第18図　下田遺跡第87号住居址出土遺物実測図

第93号住居址（第19、20、21議図）

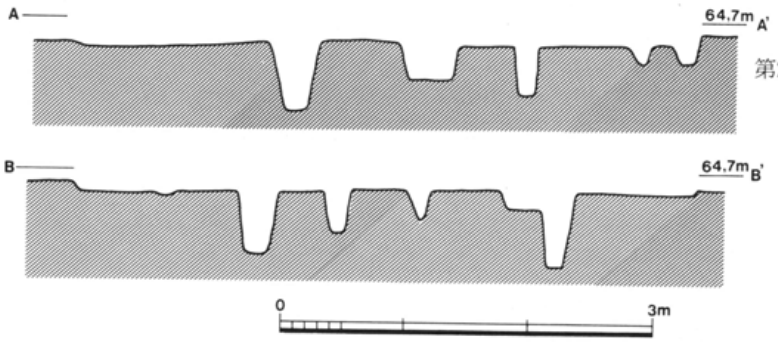
完掘をしたが、極めて遺存度の悪い住居址である。ピット群の中心に位置していることと、溝の重複により極めて浅い皿状土壙に近い掘り込みとして検出された。溝底は浅く、本住居址床面の攪乱はまぬがれていた。壁部は南、東西で比較的良好に観察された。一辺５m、壁高13.1cm（最大）を測り、カマド、炉は判明しなかった。主柱穴は、ピット群と重複しているため、住居設計企画から復原すると、南、東西の３ケ所で確認された。遺物は各遺構が重複しているため、混在している可能性が強い。ただし、東コーナーに接して54×40cm、深さ16cmのピット底より土師器坏（完形）が１点出土しており、本住居址に伴うものと推定される。鬼高Ⅰ式期古段階に属する。



第20図　下田遺跡第93号住居址貯蔵穴実測図



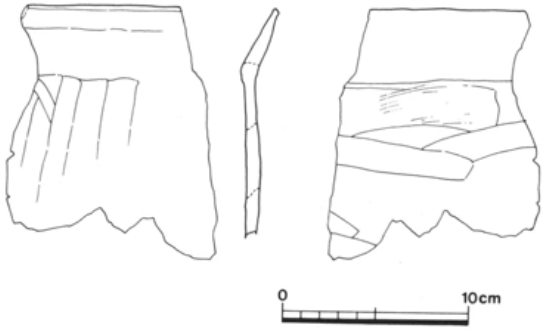
第21図　下田遺跡第93号住居址出土遺物実測図



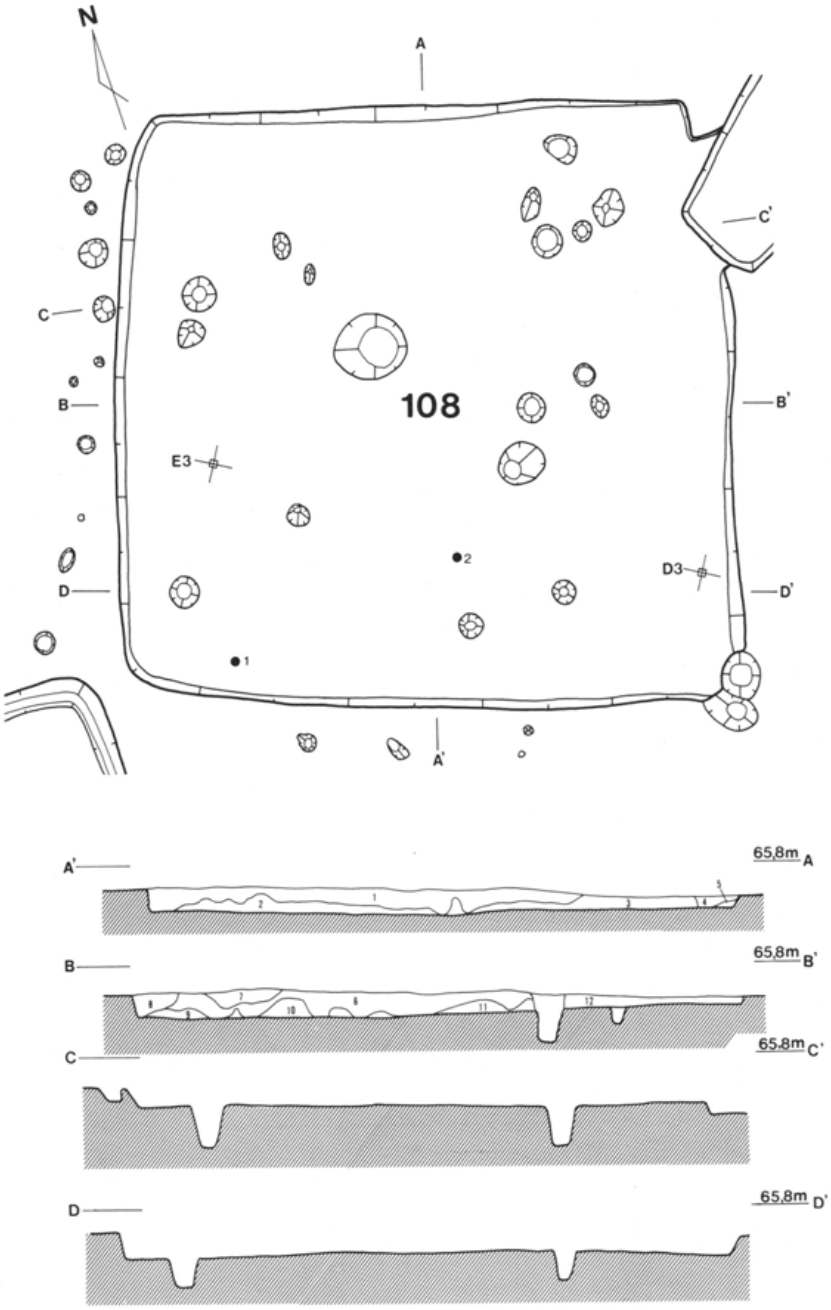
第19図　下田遺跡第93号住居址実測図

第108号住居址（第22、23図）

調査区の東辺部で検出された。極めて浅い遺構面で、東壁部の一部が土壙により切断される。一辺4.9m、壁高21cm。カマド、壁溝は認められず、遺物も若干出土したにとどまる。なお、西壁外に小ピットが並ぶ。



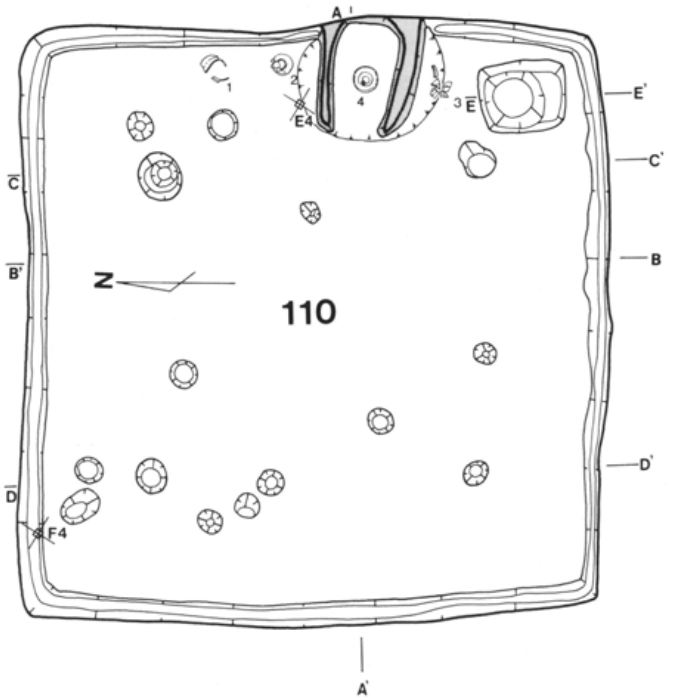
第22図　下田遺跡第108号住居址出土遺物実測図

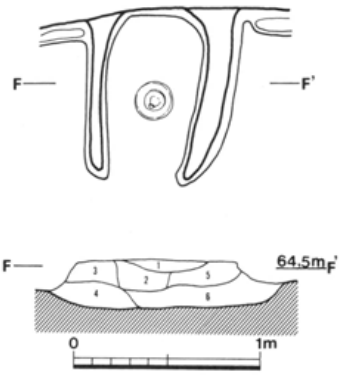


土層観察表

1、4、6、黒土（ローム・ブロック含む）　2、3、5、9、10、11、ローム・ブロック　7、8、黒灰色土　12、黒土・暗黄褐色土混土

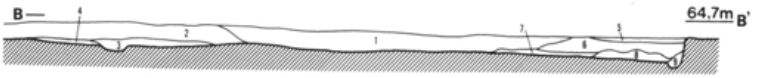
第23図　下田遺跡第108号住居址実測図

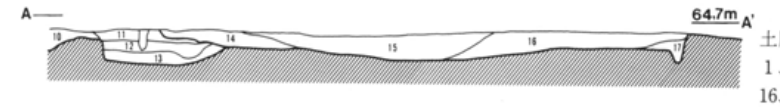


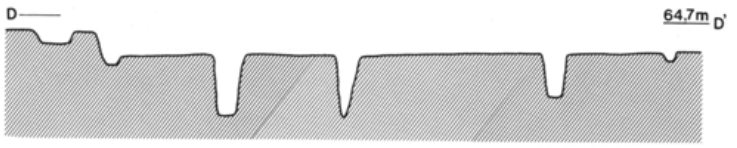


土層観察表
1、焼土　2、黒褐色土（黄味帯びる）　3、黒褐色土　4、暗黄褐色土（よごれる）　5、黒褐色土（赤味帯びる、下底火床面）　6、黒褐色土（ローム・ブロック含む）

第25図　下田遺跡第110号住居址カマド実測図





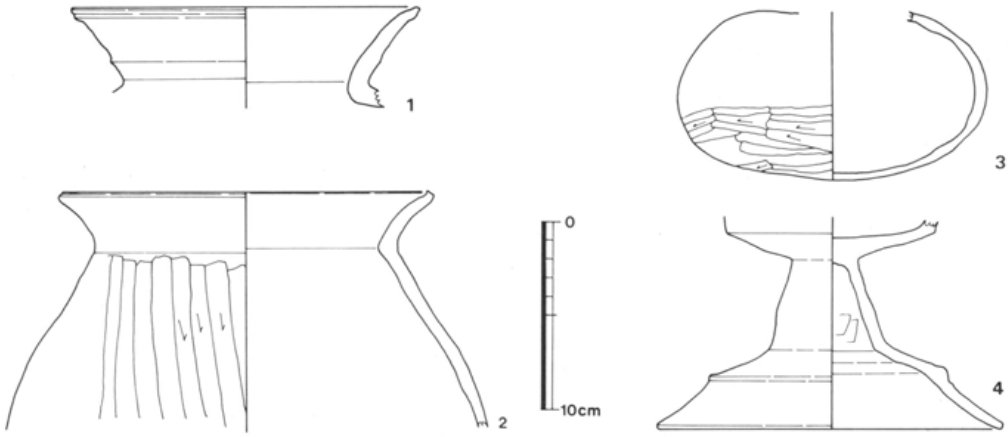


土層観察表
1、15、攪乱（コンクリート）　2、16、黒褐色土　3、黒土・黄褐色土混土　4、10、暗黄褐色土　5、黒灰色土　6、黒土（ローム粒多量）　7、暗黄灰褐色土　8、黄褐色土（ローム・ブロック含む）　9、黒灰褐色土　11、焼土ブロック　12、黒土（焼土粒多量）　13、黒褐色土（ローム・ブロック含む）　14、焼土ブロック　17、黒灰褐色土（黄味帯びる）

第24図　下田遺跡第110号住居址実測図

第110号住居址（第24、25、26図）

完掘したが、東南コーナー付近は壁面が破壊されており、周壁溝のみであった。主柱穴、貯蔵穴、カマド、周壁溝が明瞭に保存されており、ほぼ東西南北に配置されている。一辺44.83m、壁高21cm、溝幅18cm、深さ5cmを測る。主柱穴は直径20～40cm、深さ34～55cmを数える。貯蔵穴は南東コーナーに接して上面が長方形を呈し、下底は円形に近い、2段に掘削された状態で、遺物は出土しなかった。カマドは東壁中心よりやや南にかたよって配置されている。両袖は遺存度がよく幅88cm、長さ96cm、高さ15cmを数える。煙道は認められなかった。なお、床面内には住居址に関係しないピット群が検出された。遺物は少なく、カマドの両側より若干出土したにとどまる。カマド内からは支脚に転用された高坏が出土している。鬼高Ⅰ式期古段階に属する。

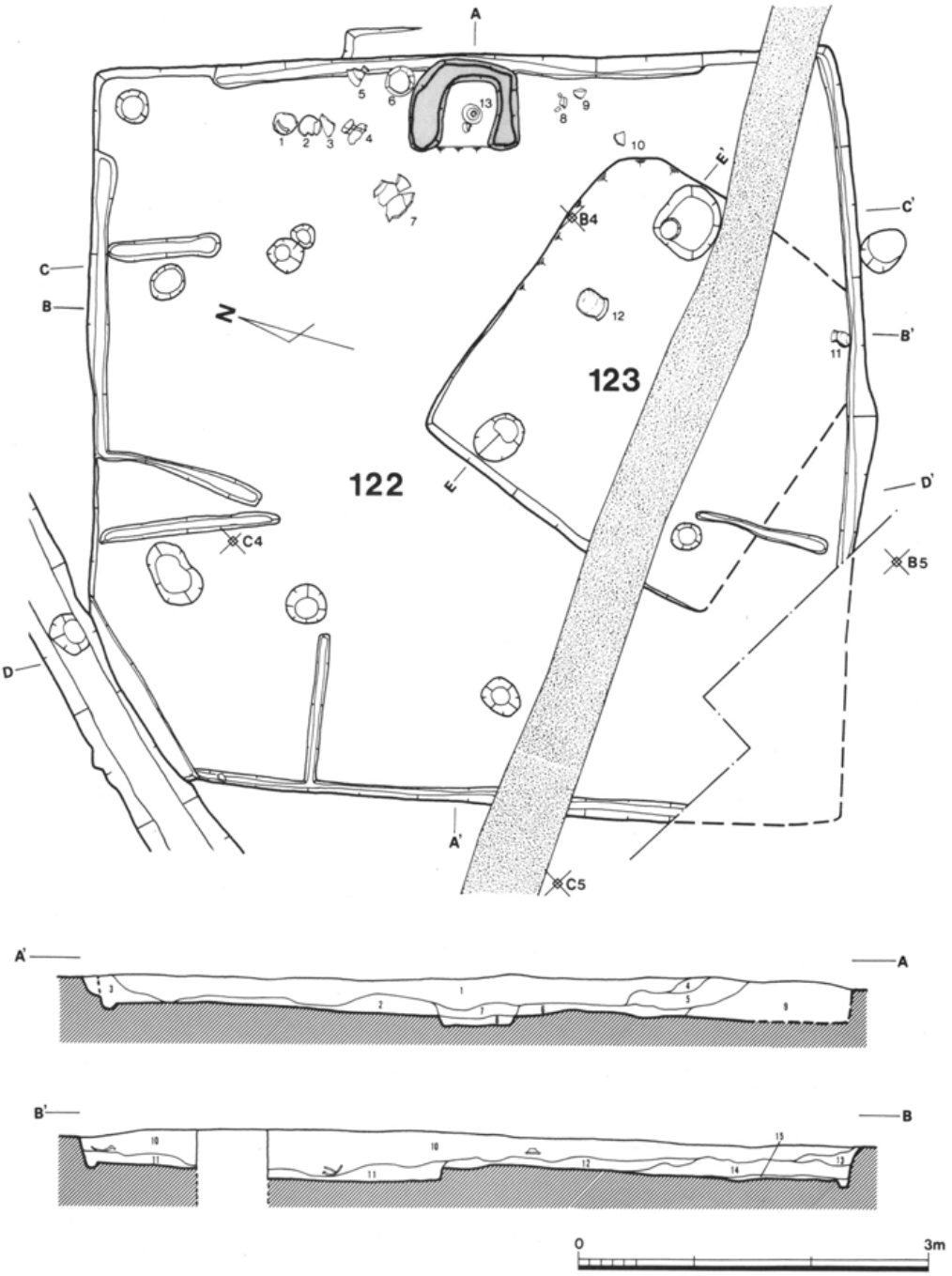


第26図　下田遺跡第110号住居址出土遺物実測図

第122・123号住居址（第27、28、29、30、31図）

調査区東端でほぼ完掘された。南半はパイプラインにより切断されている。また、同部分を第123号住居址が重複している。第122号住居址は、およそ東西南北に配置された比較的大形の住居で、一辺6.7m×6.5mを測る。北西コーナーは溝115に切断されており、南西コーナーは未発掘である。周壁溝はコーナー部を除き、各壁に接して存在する。同溝と柱穴間には短い溝が5本存在する。壁高31cm、周壁溝幅18cm、深さ5cmを測る。主柱穴は明瞭であるが、他のピットについては、本住居址に伴うものか不明である。カマドは東壁のほぼ中央部に位置しており、壁面より若干離れている。幅95cm、長さ76cmで、内部に支脚に転用された高坏が出土している。竈底は貼り床面上にあたる。遺物は覆土中、床面上にも少なく、カマド周辺に放置遺棄状態で、わずかに検出された。鬼高Ⅰ式期古段階にあたる。

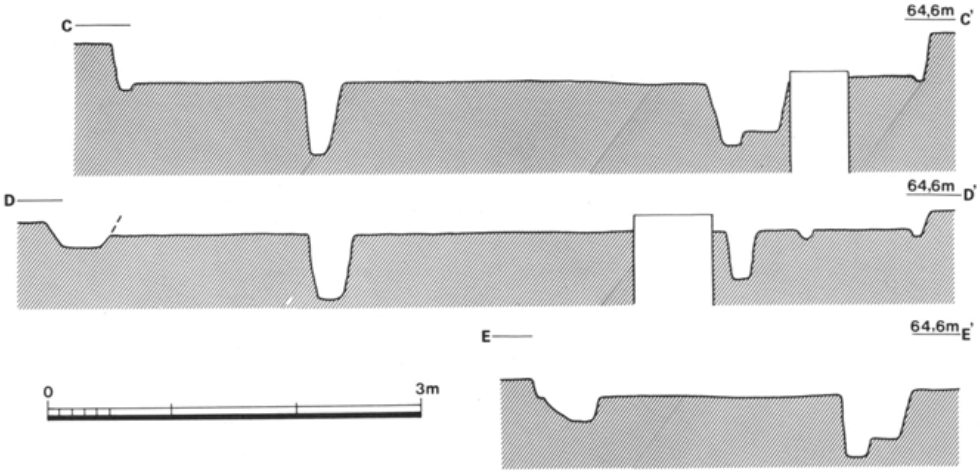
第123号住居址は第122号住居址南辺内に位置しており、中央部を天然ガスのパイプラインにより縦断されている。ほぼ正方形を呈し、一辺3m、壁高13cmを測る。柱穴、周壁溝は存在しない。カマドは本遺跡の他の住居址例から推定して、東壁のパイプライン付近に存在した可能性が大きい。壁部は南半の遺存度が悪く、覆土の範囲から南コーナーに接する部分は、第122号住居址の南壁面に接するものと復原される。遺物は床面付近より土師器甕が出土しており、真間式期に属する。



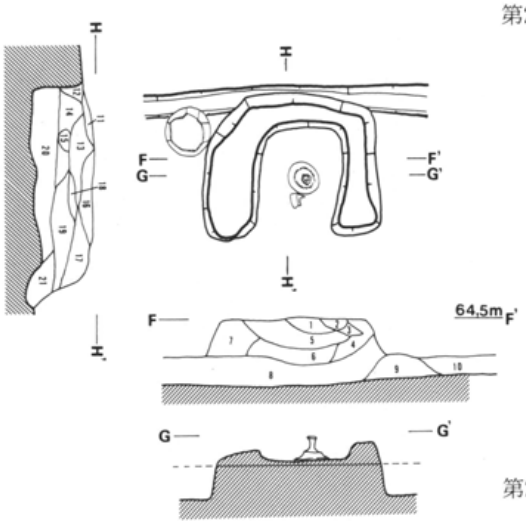
土層観察表

1、10、黒灰色土　2、12、暗黄褐色土、黒土混土　3、黒褐色土（焼土含む）　4、5、9、カマド　6、11、黒褐色土（ローム・ブロック含む）　7、暗黒灰色土（ローム粒含む）　8、暗黄褐色土　13、黒土　14、暗黄褐色土（黒土ブロック含む）　15、ローム質土

第27図　下田遺跡第122、123号住居址実測図

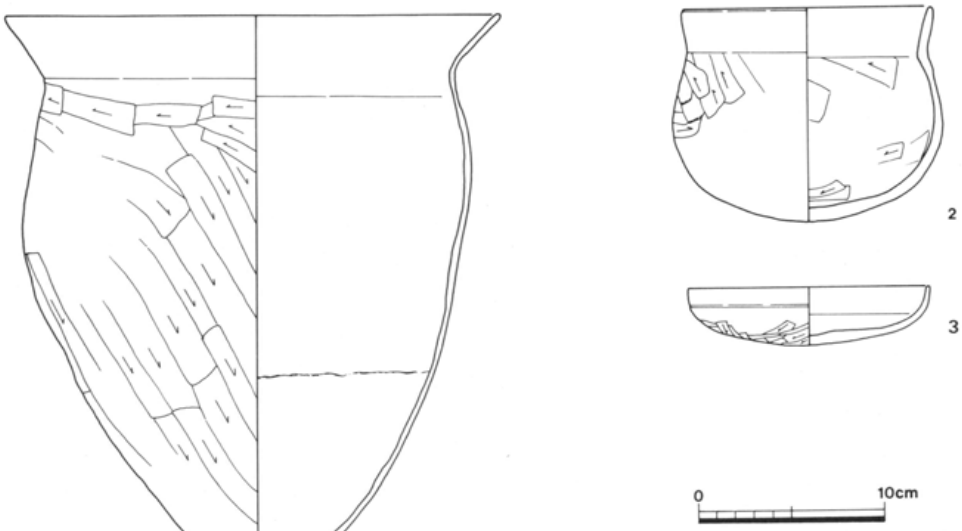


第28図　下田遺跡第122、123号住居址断面図

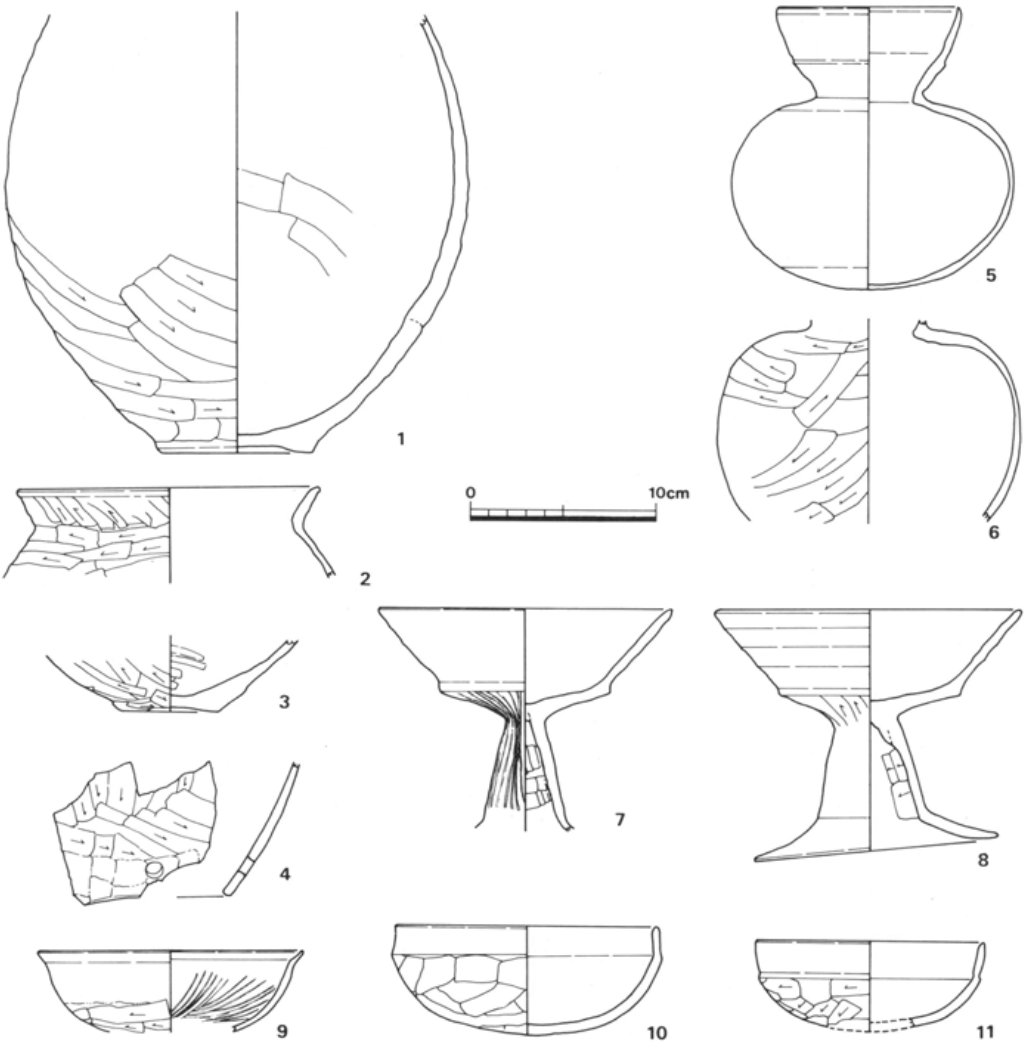


土層観察表
1、4、7、黄灰色粘土　2、5、11、13、焼土　3、攪乱　6、12、黒褐色土　8、貼り床面　9、黄褐色土　10、20、暗黄褐色土（白色パミス粒含む）　19、黒褐色土（焼土、粘土、ローム粒含む）

第29図　下田遺跡第122号住居址カマド実測図



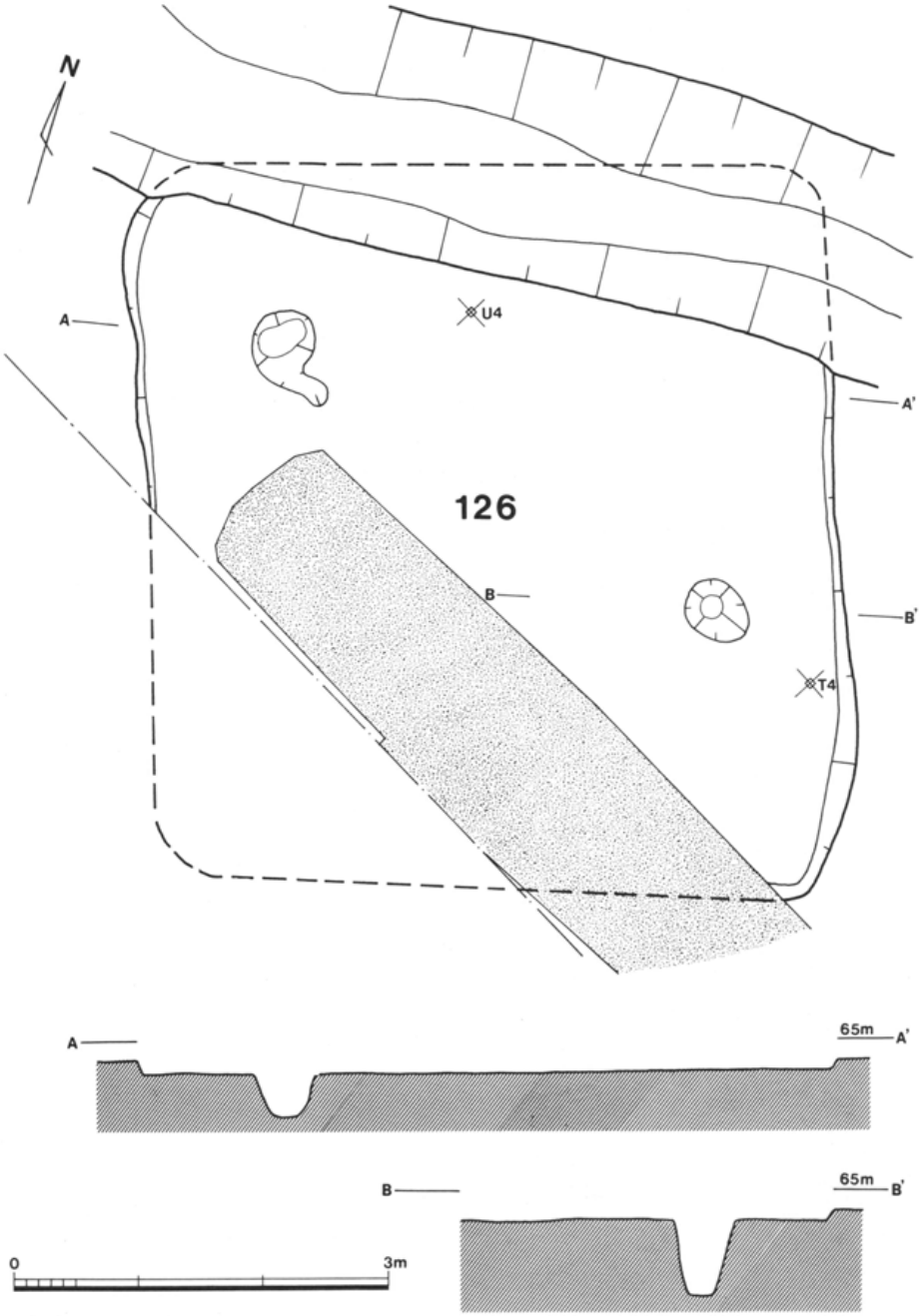
第30図　下田遺跡第123号住居址出土遺物実測図



第31図　下田遺跡第122号住居址出土遺物実測図

第126号住居址（第32図）

西半部の保守用道路に接して検出された。遺存度は悪い。北辺部は溝68に切断されており、南辺部は最近の重機による攪乱のため破壊されている。北西部及び、南東部のコーナーがわずかに残存していたので、一辺約5.5mを測り、ほぼ東西南北に設定された中規模な住居址であったことが判明する。壁高は10cm。周壁溝、カマド、炉等は検出されていない。柱穴については、西コーナー付近に一ケ所確認されたが、他は溝及び攪乱部分に存在した可能性がある。復原された南コーナーに接して、第1次調査時に検出された第49、50号住居址が隣接するが、これらと本住居址は想定される上屋構造から同時期存在は否定的である。なお、本住居址より以北には住居遺構が存在せず、地形も緩傾斜を見せている。遺物はほとんど出土していない。



第32図　下田遺跡第126号住居址実測図

第３節　下田遺跡第３次調査

昭和61年度の県営ほ場整備事業児玉南部地区にかかる、上越新幹線以南から男堀川に至る範囲においても、下田遺跡が立地する部分は高位面であり、計画策定の段階からカット面対象地とされていた。しかし、包蔵地の面積は第２次調査地点の倍以上あり、同年度における他の試掘、発掘面積を考慮すると全面発掘は不可能であり、極力発掘調査の範囲を限定する必要があった。加えて無用の発掘を規制する意味からも、設計変更をもって遺跡の最大限の保護を行うこととなった。設計変更に伴う発掘調査地点は、男堀川より等分に区画された部分で、南側に張り出す高台部と、東側を南北に通過する小排水路以東のわずかな部分、及び新幹線の南ぞいに敷設される道路部分が最も高位面で、削平される可能性が大きいため、調査対象地とし約1200㎡を発掘することとなった。したがって、今後保存されることになった部分は約1500㎡で、ほ場整備後は現況面で整地され、畑地として利用される。

遺構と遺物

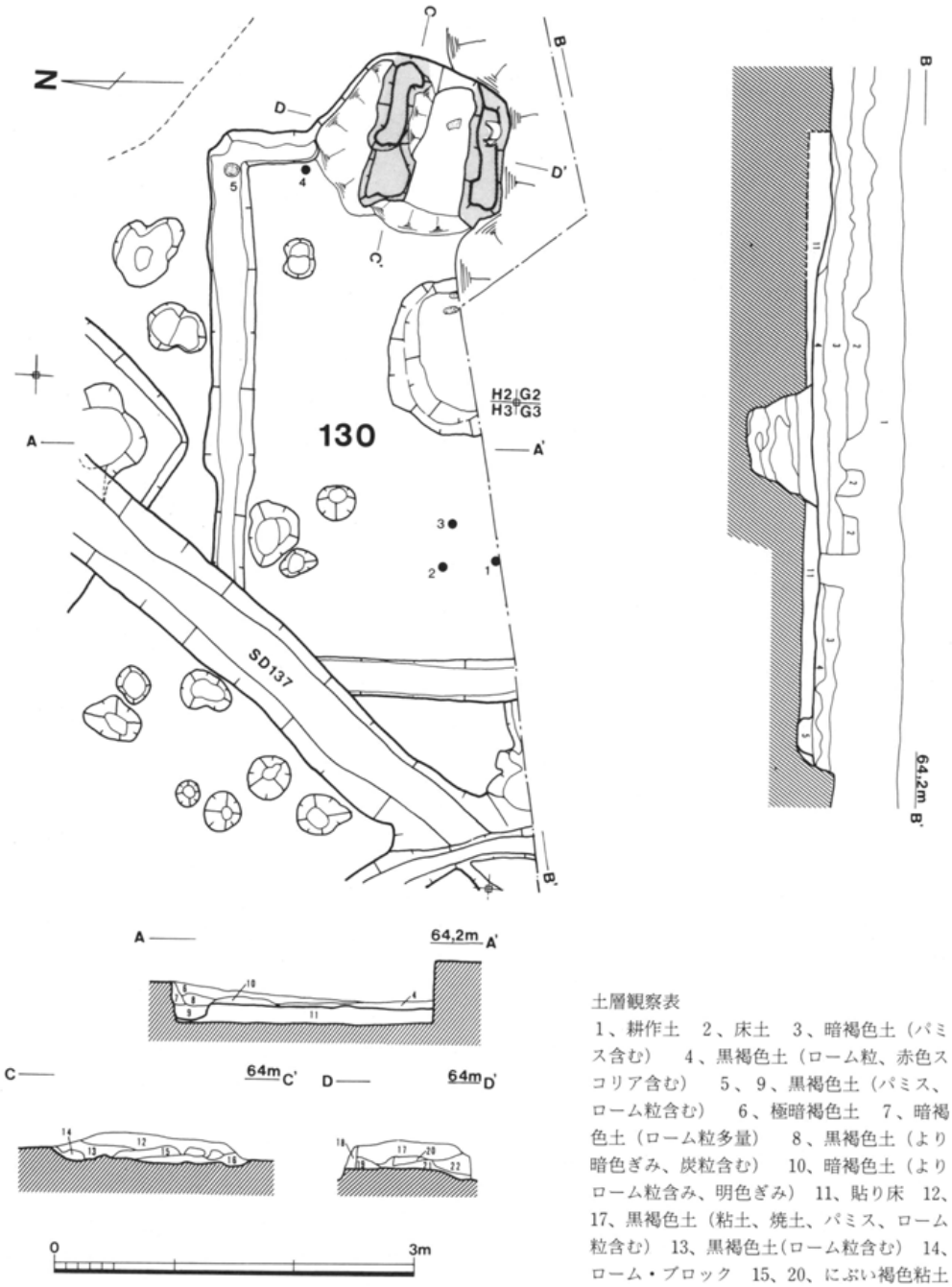
第３次調査により検出された遺構は、住居址16軒、掘立柱建物、溝、土壙、井戸、多数のピット群からなり、第２次調査時と同様である。ただし、遺構の遺存度はよく、住居址は国分式期が多く認められた。また、溝の配置状態も把握されるに至った。北側は第１次調査の南辺が追跡されるものと期待されたが、新幹線建設時によると思われる破壊が延々とつづいており、大半が追跡不可能となっていたのは遺憾である。

周辺の土質は第１、２次調査地区とは異なり、新幹線ぞいがローム面であるのに対し、東及び、南側は滞水による粘土化が著しく、夏期の雨水による浸水も同部分で見られた。また、この地点は堆積が比較的厚いため、地山面上の黒褐色土（床土下位）より検出が可能であったが、遺構内覆土と質、色調が類似するため困難を極め、一部は補助トレンチを設定した。なお、微低地にかかる部分は、遺構が常に消滅しており、微高地面のみに遺構が遺存していることが判明した。さらに、住居址の分布状態などから、遺跡の範囲は現微高地の範囲とほぼ同様であったものと推察される。

調査の方法は、南辺でどの程度遺構が遺存するか、その範囲、規模、性格を把握するためトレンチを設定した試掘調査より実施し、南辺に遺構、遺物が存在することを確認の上、重機による調査地点の表土剝ぎを行った。

第130号住居址（第33図）

調査区の東端部において検出した。南半分は微低地である水田面により削平消滅している。西北コーナーを溝137に破壊されているが、東西4.7m、壁高16cmを測る。壁溝は幅広くカマド部分以外は囲繞している模様である。幅29cm、深さ16cmを数える。床面はローム土を叩きしめており、一部光沢面をもつ。柱穴が北辺部で２ケ所確認された。カマドは東壁を掘りこんだ土壙に粘土質土で袖部を構築しており、ブロック状に残存するが、遺存度は悪く、微低地に隣接する右袖部は下底部の一部のみであった。長さ150cm、幅110cmを測る。カマドの正面にあたる床面の中央より床下土壙を検出した。遺物は少なく甕等が出土しており、国分式期に属する。



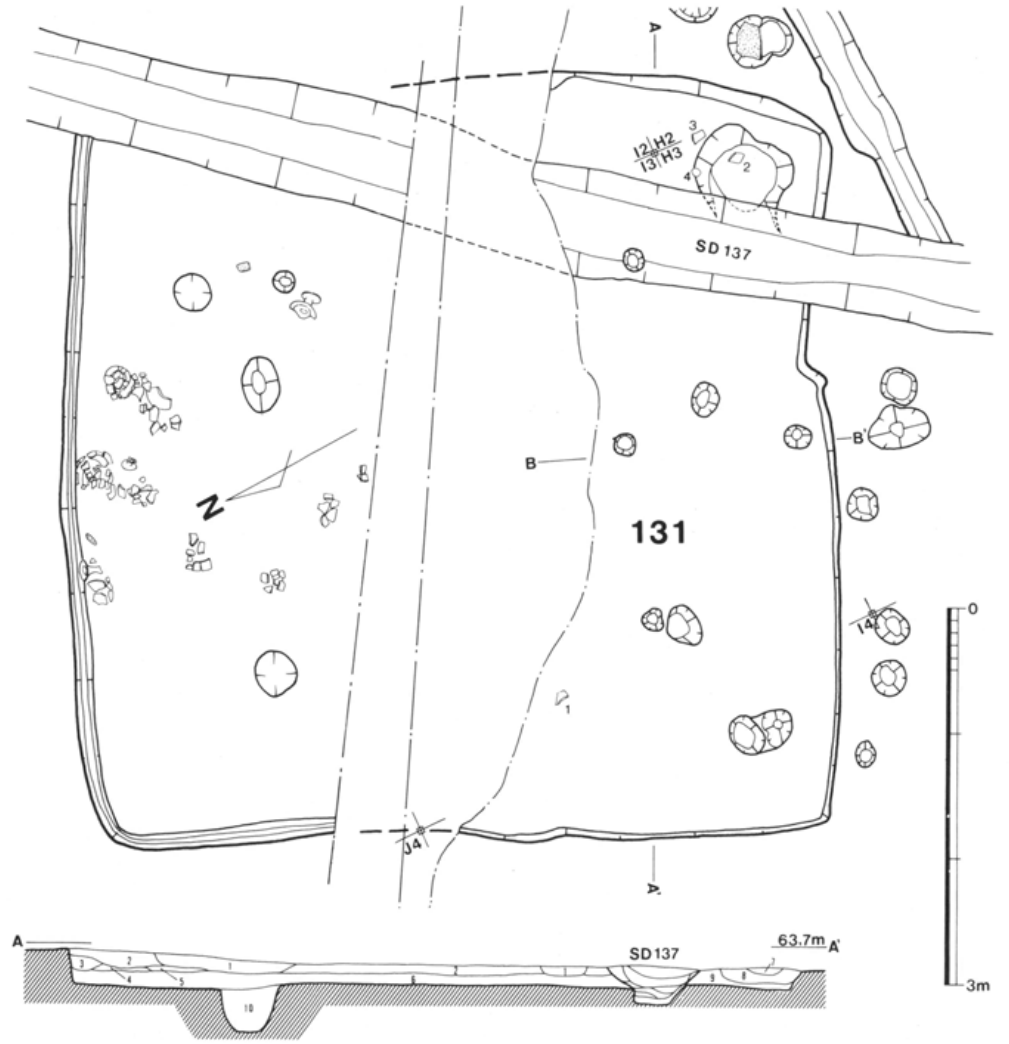
土層観察表

1、耕作土　2、床土　3、暗褐色土（パミス含む）　4、黒褐色土（ローム粒、赤色スコリア含む）　5、9、黒褐色土（パミス、ローム粒含む）　6、極暗褐色土　7、暗褐色土（ローム粒多量）　8、黒褐色土（より暗色ぎみ、炭粒含む）　10、暗褐色土（よりローム粒含み、明色ぎみ）　11、貼り床　12、17、黒褐色土（粘土、焼土、パミス、ローム粒含む）　13、黒褐色土(ローム粒含む)　14、ローム・ブロック　15、20、にぶい褐色粘土　16、21、黒褐色土（ローム粒有り）　18、(住居覆土)　19、黒褐色土(ローム粒富む)　22、黒褐色土（ローム、パミス粒若干）

第33図　下田遺跡第130号住居址実測図

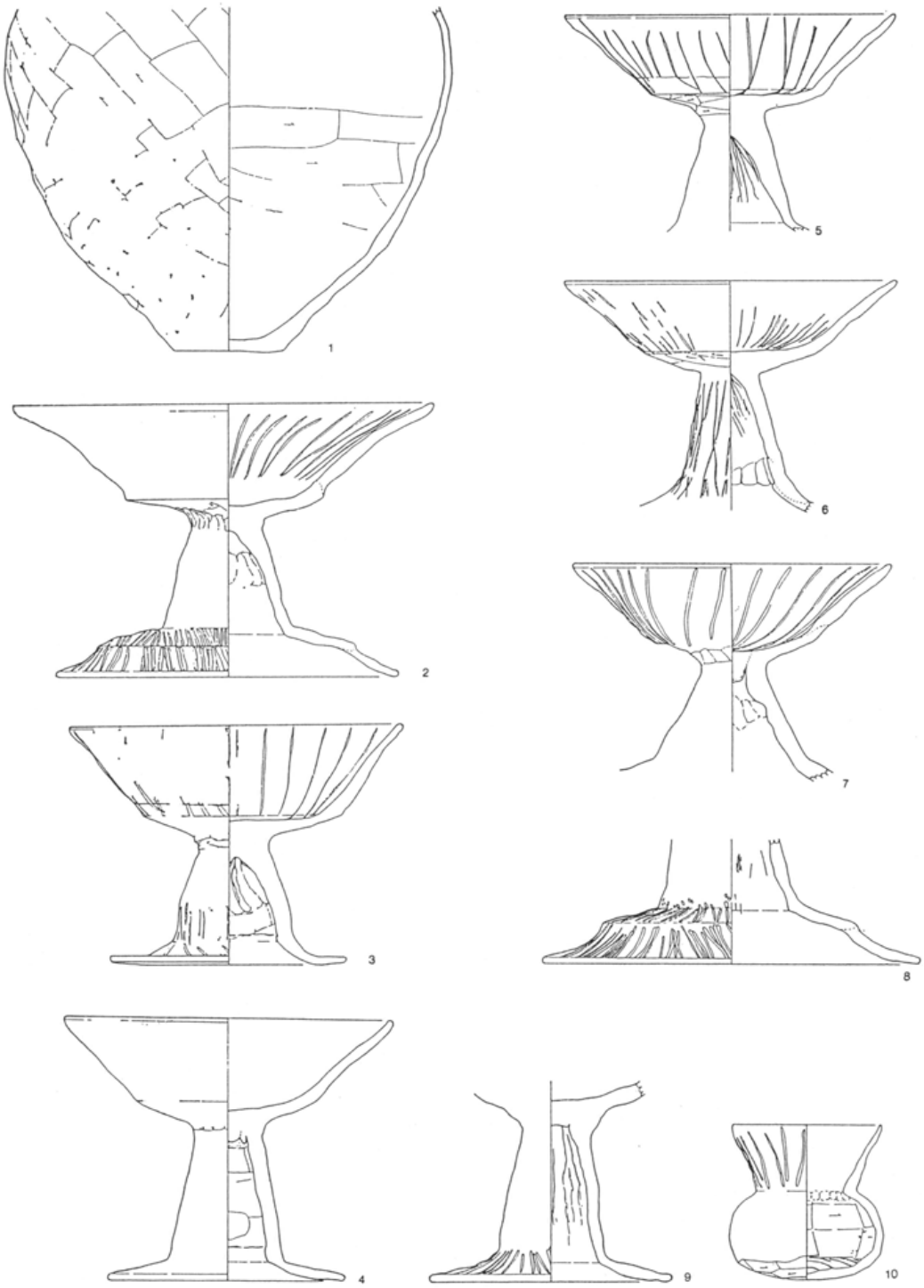
第131号住居址（第34、35図）

第130号住居址の北辺に接して検出された。第１次調査で検出された第１号住居址の南半分にあたるが、上越新幹線南縁の側溝ぞいは攪乱により破壊されていた。南コーナーに近い東半部は溝137により切断されている。一辺6.1m、壁高10cmを測り、壁溝は存在しない。南コーナーに接して小規模な土壙が検出された。貯蔵穴と推定され、カマドはこれに隣接する攪乱部分に存在していた可能性が大きい。なお、床面にピットが数ケ所検出されたが、本住居址の柱穴かは不明である。



土層観察表
1、黒褐色土（一部攪乱）　2、8、暗褐色土（ローム・ブロック極めて多い）
3、暗褐色土（ローム粒多量）　5、黒褐色土（明色）　6、9、貼り床　7、攪乱　10、床下土壙

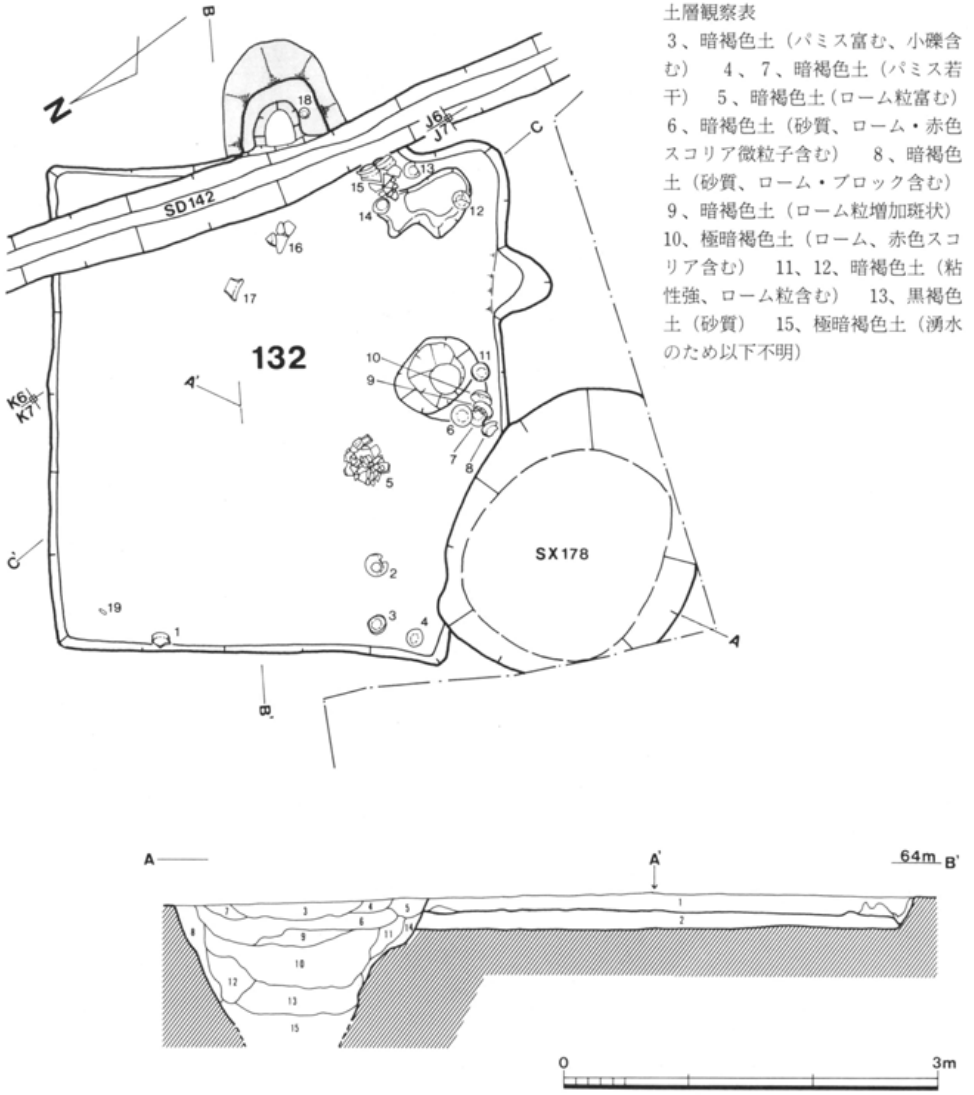
第34図　下田遺跡第131号住居址実測図



第35図　下田遺跡第131号住居址出土遺物実測図（第１次調査）

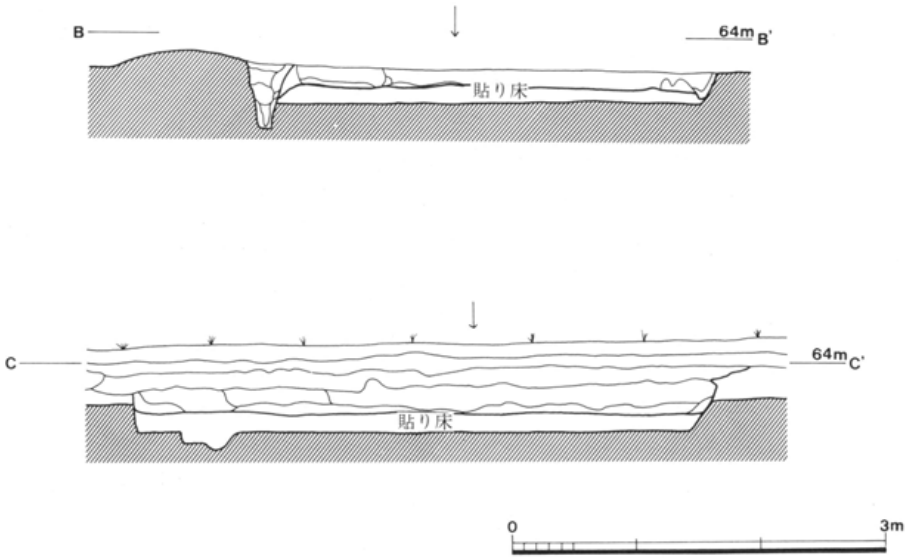
第132号住居址（第36、37、38、39図）

先の住居址より西10mに位置し、完掘した。東辺部を溝142に縦断されているが、一辺4.2m×3.7m、壁高25cmを測る。壁溝、柱穴は存在しない。カマドは東壁中央に遺存するが、袖部は溝により破壊されているため、全容は把握できない。ただし、土壙を穿った上に構築されている。遺物はカマド付近から南コーナーにかけてと、西コーナー付近を切断している井戸178近くの床面上に完形の坏、皿および、甕が出土している。国分式期に属する。なお、墨書土器が３点出土しており、１点には「前」の字が確認された。

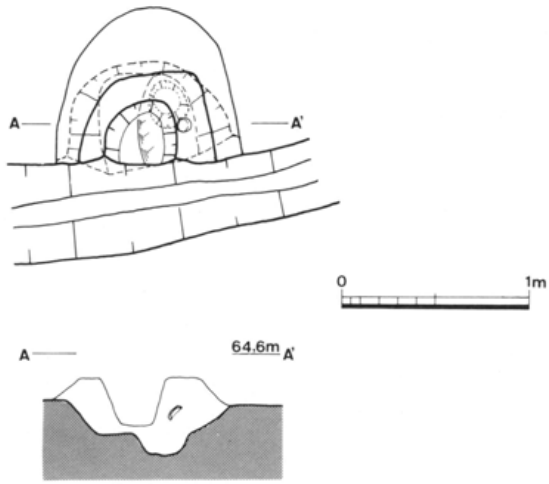


土層観察表
３、暗褐色土（パミス富む、小礫含む）　４、７、暗褐色土（パミス若干）　５、暗褐色土（ローム粒富む）　６、暗褐色土（砂質、ローム・赤色スコリア微粒子含む）　８、暗褐色土（砂質、ローム・ブロック含む）　９、暗褐色土（ローム粒増加斑状）　10、極暗褐色土（ローム、赤色スコリア含む）　11、12、暗褐色土（粘性強、ローム粒含む）　13、黒褐色土（砂質）　15、極暗褐色土（湧水のため以下不明）

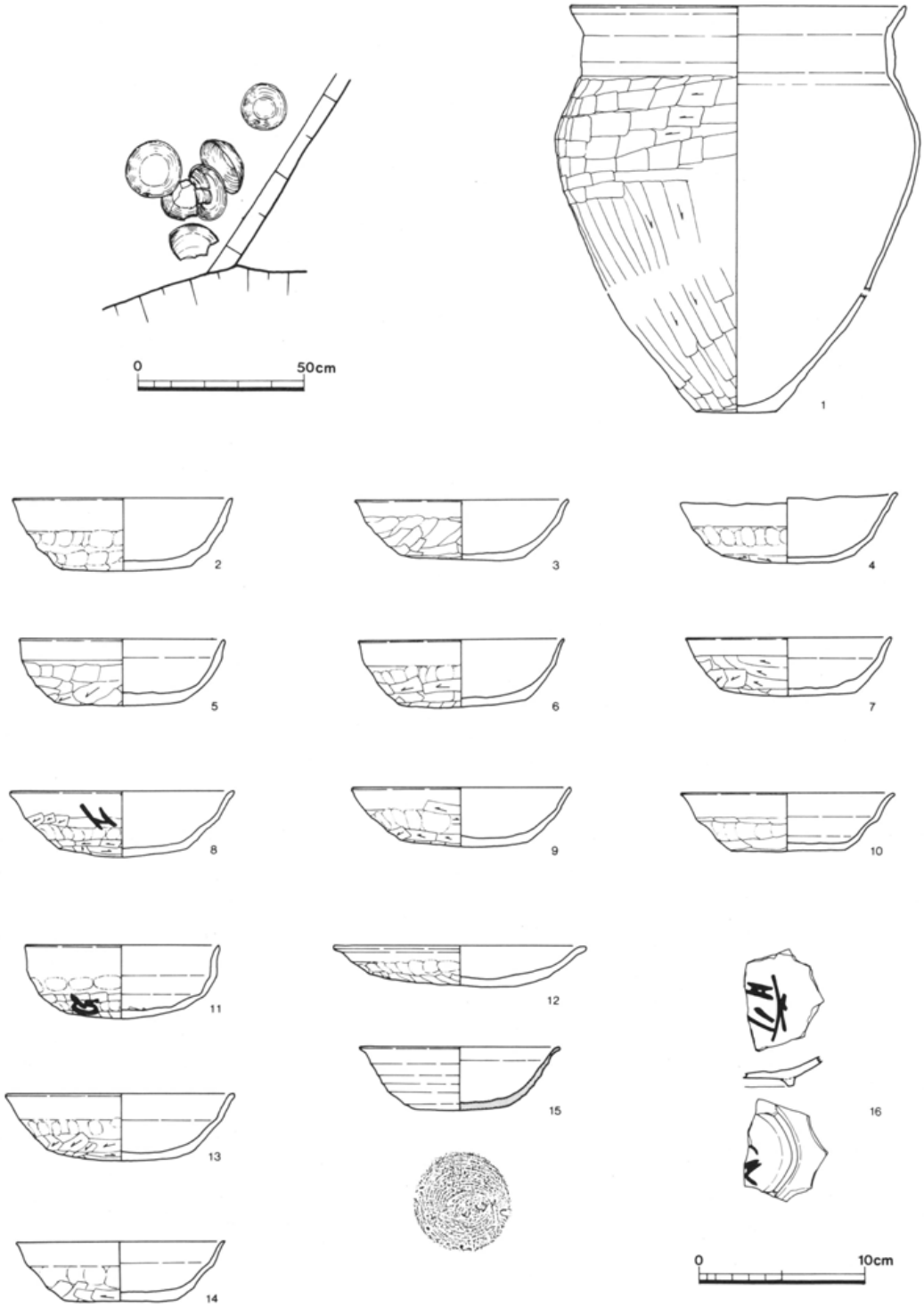
第36図　下田遺跡第132号住居址実測図



第37図　下田遺跡第132号住居址断面図



第38図　下田遺跡第132号住居址カマド実測図

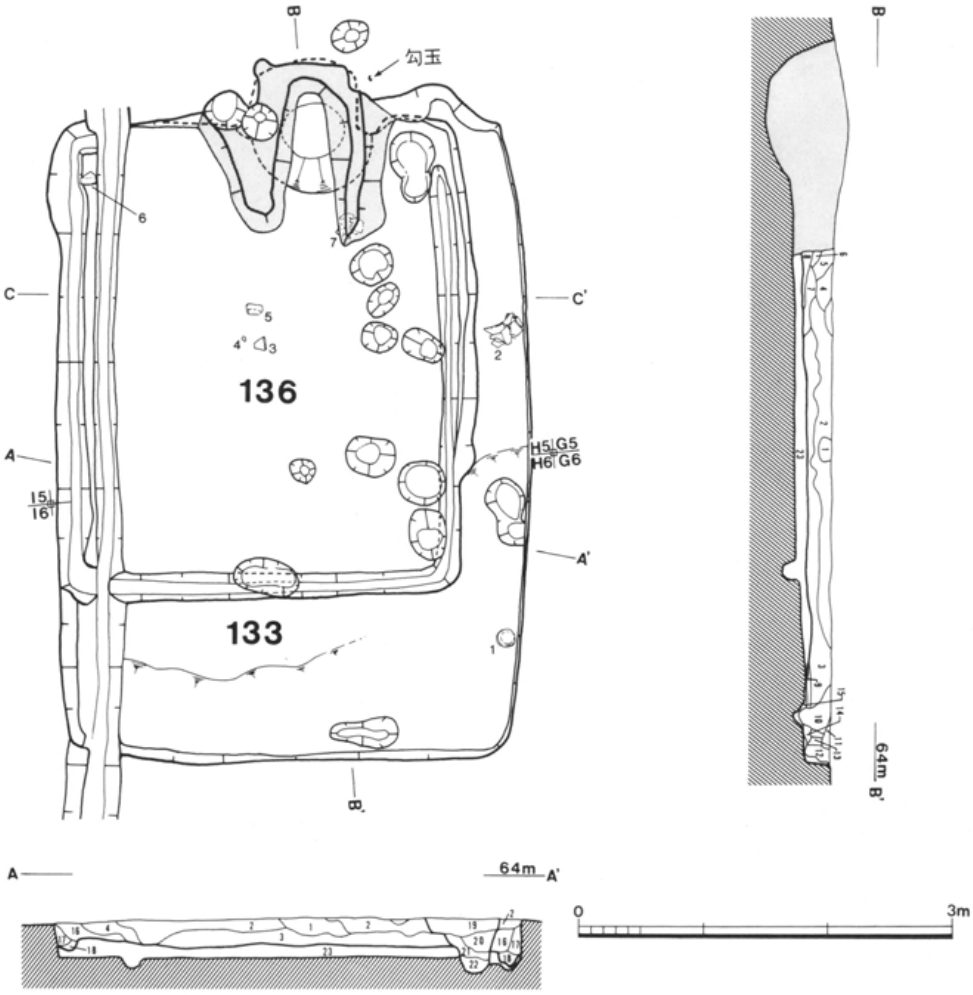


第39図　下田遺跡第132号住居址出土遺物実測図

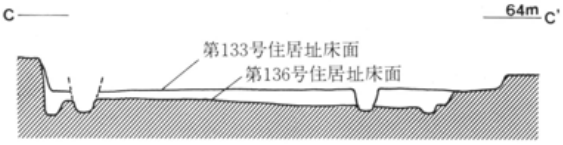
第133・136号住居址（第40、41、42、43図）

調査区の東北側に位置し、完掘した。2軒が重複しており、外側の第133号住居址は東西に長い長方形プランを呈し、一辺5.8m×3.8m、壁高19cmを数える。本住居址に伴うと考えられる柱穴は検出されなかった。床面は西側において浅く掘られた上に貼り床をほどこしている。カマドは東壁のやや南よりに構築されており、後部が壁外までのびる。長さ140cm、幅160cm。右袖奥部より勾玉が出土している。

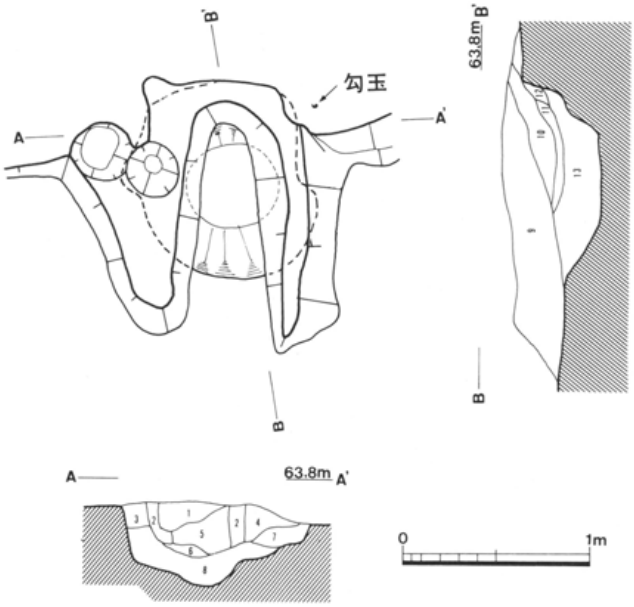
第136号住居址は第133号住居址の北東壁と重複しており、西および、南壁部は壁溝によりプランが把握された。やや東西に長い一辺3.8m×3.2mを測り、柱穴は検出されなかったカマドは第133号住居址建設時に破壊されており、カマド下土壙が東壁の南よりで検出された。ともに真間式期に属する。



第40図　下田遺跡第133、136号住居址実測図

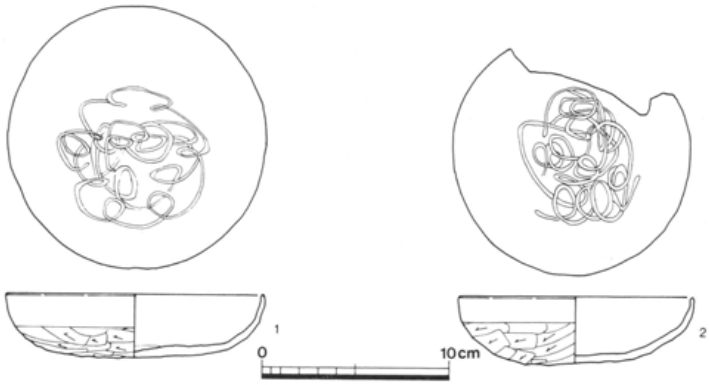


第41図　下田遺跡第133号住居址断面図



土層観察表
1、9、茶味帯びた暗褐色土（ローム、焼土粒含む）　2、焼土ブロック　3、焼土、ローム、褐色土（斑状）　4、黄味帯びた暗褐色土　5、10、焼土　6、11、青灰色土（灰層）　7、黄味帯びた黒褐色土　8、13、暗黄褐色土（やや粘質）　12、暗黄色土

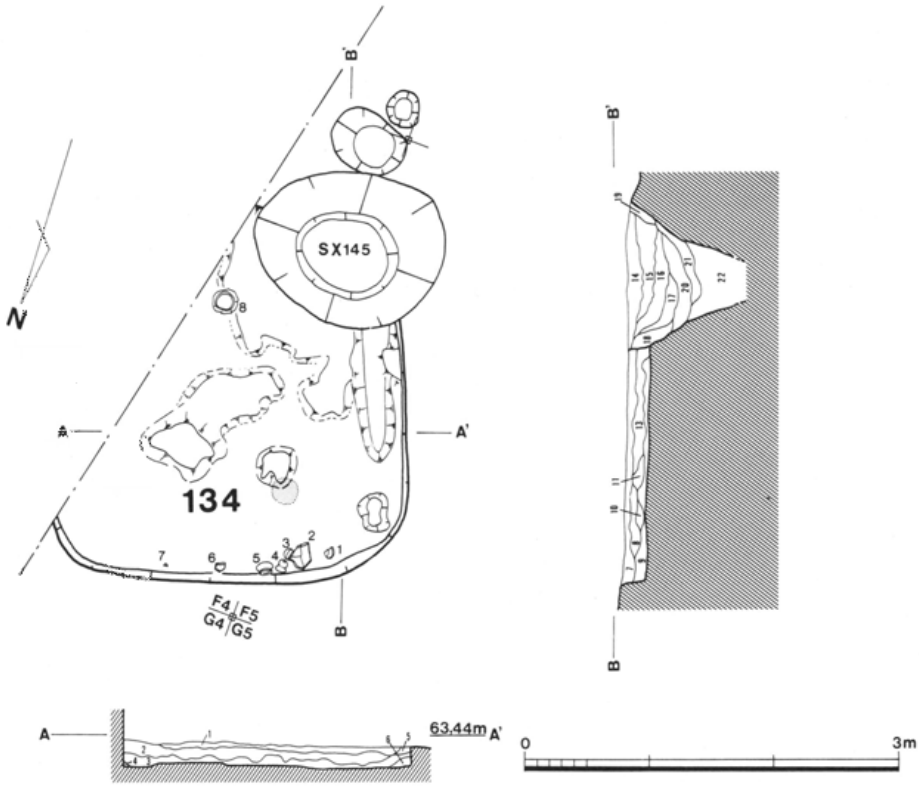
第42図　下田遺跡第133号住居址カマド実測図



第43図　下田遺跡第133、136号住居址出土遺物実測図

第134号住居址（第44、45図）

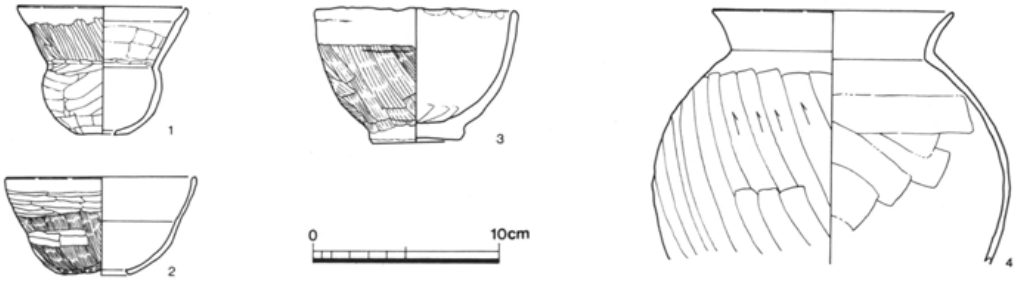
調査区東端で検出され、東部は微低地により消滅している。また、南コーナーは井戸145により破壊されていた。隅丸方形プランを呈し、一辺2.9m、壁高21cmを測る。壁溝、柱穴は検出されていない。西北付近の床面上で炉跡が検出されたが、径30cmで小さい。遺物は北壁下に並んだ状態で出土しており、一部は風化が著しく土に帰していた。五領式期に所属する。なお、小坩等は意図的に底部が穿孔されていた。



土層観察表

1、7、黒褐色土（ローム、砂粒、乾燥クラック）　2、8、13、黒褐色土（ローム、炭粒含む）　3、9、黒褐色土（炭、焼土粒含む）　4、6、黒褐色土（ローム多量）　5、10、11、黒褐色土（赤色スコリア含む）　14、黒褐色土（砂、パミス粒大きくなる）　15、黒褐色土（明色、粘質、砂、ローム粒多量）　16、黒褐色土（湧水線付近でベトベトする）　17、（以下井戸内堆積）

第44図　下田遺跡第134号住居址実測図

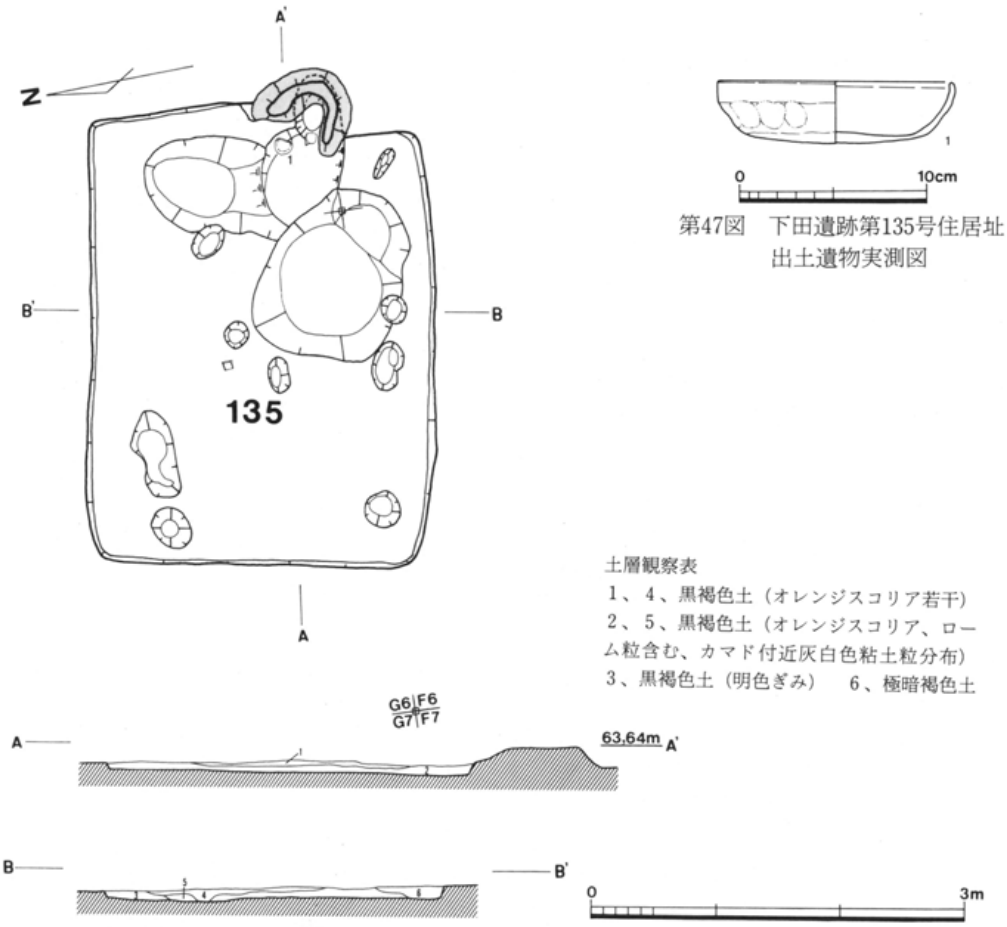


第45図　下田遺跡第134号住居址出土遺物実測図

第135号住居址（第46、47図）

調査区東半分で検出。完掘した。比較的小形の住居址で、東西に長く一辺3.6m×2.8m、壁高7㎝と深度は浅い。壁溝、柱穴はない。カマドは東壁の南よりで検出されたが、遺存度は悪く、明瞭な輪郭は発掘されなかった。カマド下とその正面で南東コーナー付近の床下から土壙が検出されている。遺物は少なく坏等が若干出土したにとどまる。

第47図　下田遺跡第135号住居址出土遺物実測図

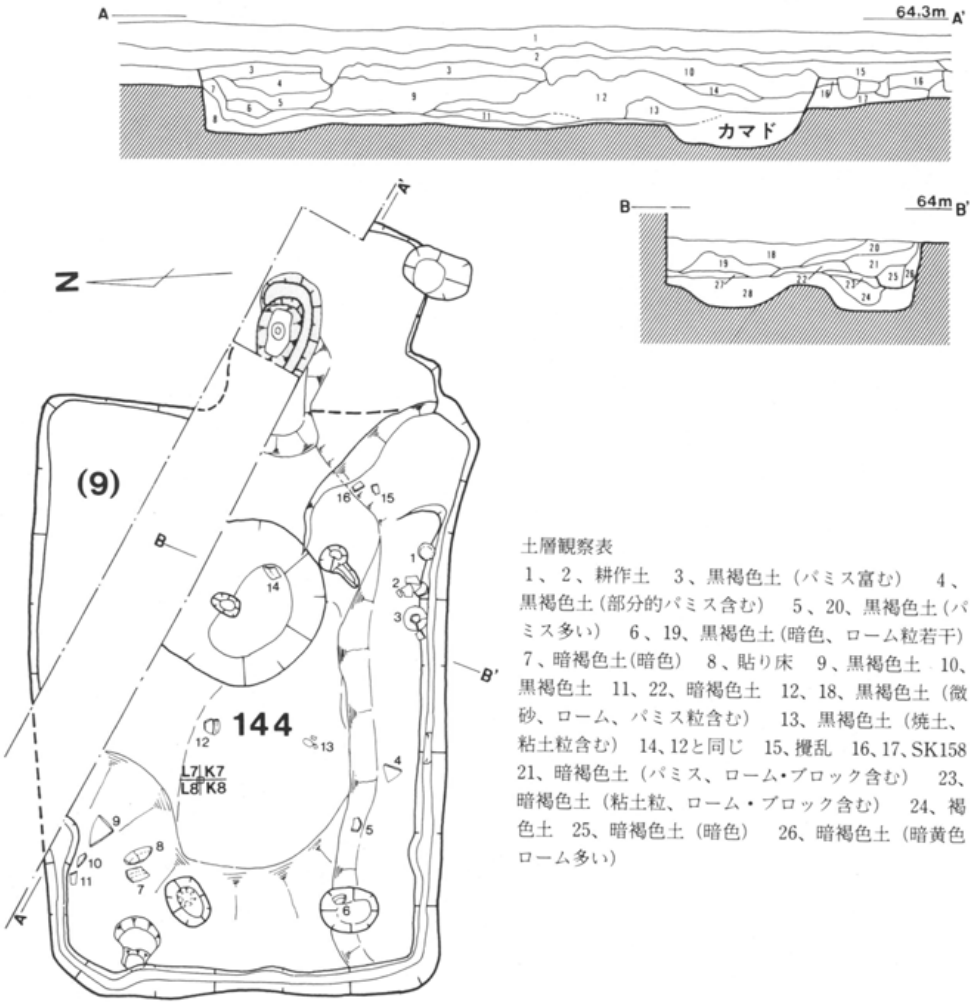


土層観察表
1、4、黒褐色土（オレンジスコリア若干）
2、5、黒褐色土（オレンジスコリア、ローム粒含む、カマド付近灰白色粘土粒分布）
3、黒褐色土（明色ぎみ）　6、極暗褐色土

第46図　下田遺跡第135号住居址実測図

第144号住居址（第48、49、50図）

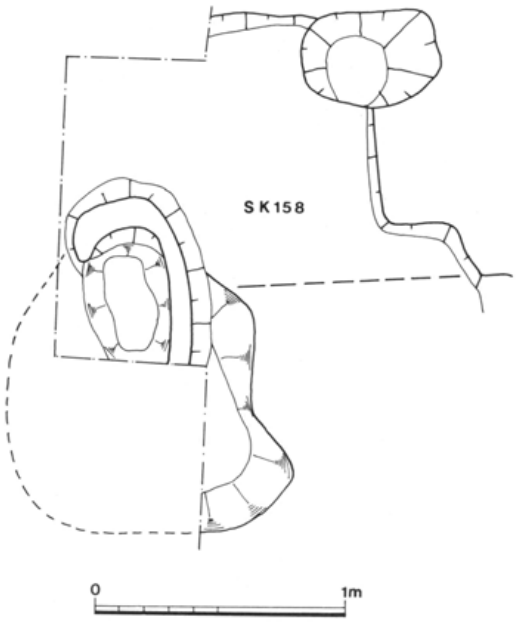
新幹線側溝ぞいで検出され、第１次調査時の第９号住居址の大半にあたる。東西に細長く、一辺4.8m×3.2m、壁高29cm、西半分において壁溝を検出しており、幅13cm、深さ10cmを測る。４本主柱穴を検出した。カマドは東壁の調査区限界付近でわずかに残存していた。壁外に張り出しており、壁部とカマドの接点は鉄建公団コンクリート杭のため確認できなかった。床面は西半分の中央部がローム面を叩きしめており、周辺は浅く掘り下げ貼り床を形成していた。遺物は壁面付近に添う状態で甕、坏、須恵器等が出土している。国分式期に属する。



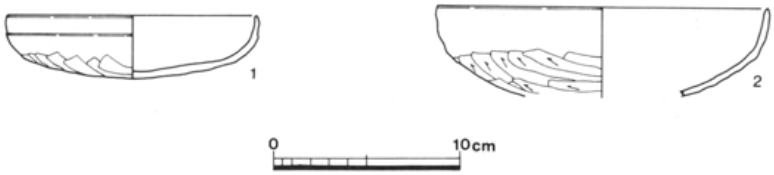
土層観察表

1、2、耕作土　3、黒褐色土（パミス富む）　4、黒褐色土（部分的パミス含む）　5、20、黒褐色土（パミス多い）　6、19、黒褐色土（暗色、ローム粒若干）　7、暗褐色土（暗色）　8、貼り床　9、黒褐色土　10、黒褐色土　11、22、暗褐色土　12、18、黒褐色土（微砂、ローム、パミス粒含む）　13、黒褐色土（焼土、粘土粒含む）　14、12と同じ　15、攪乱　16、17、SK158　21、暗褐色土（パミス、ローム・ブロック含む）　23、暗褐色土（粘土粒、ローム・ブロック含む）　24、褐色土　25、暗褐色土（暗色）　26、暗褐色土（暗黄色ローム多い）

第48図　下田遺跡第144号住居址実測図



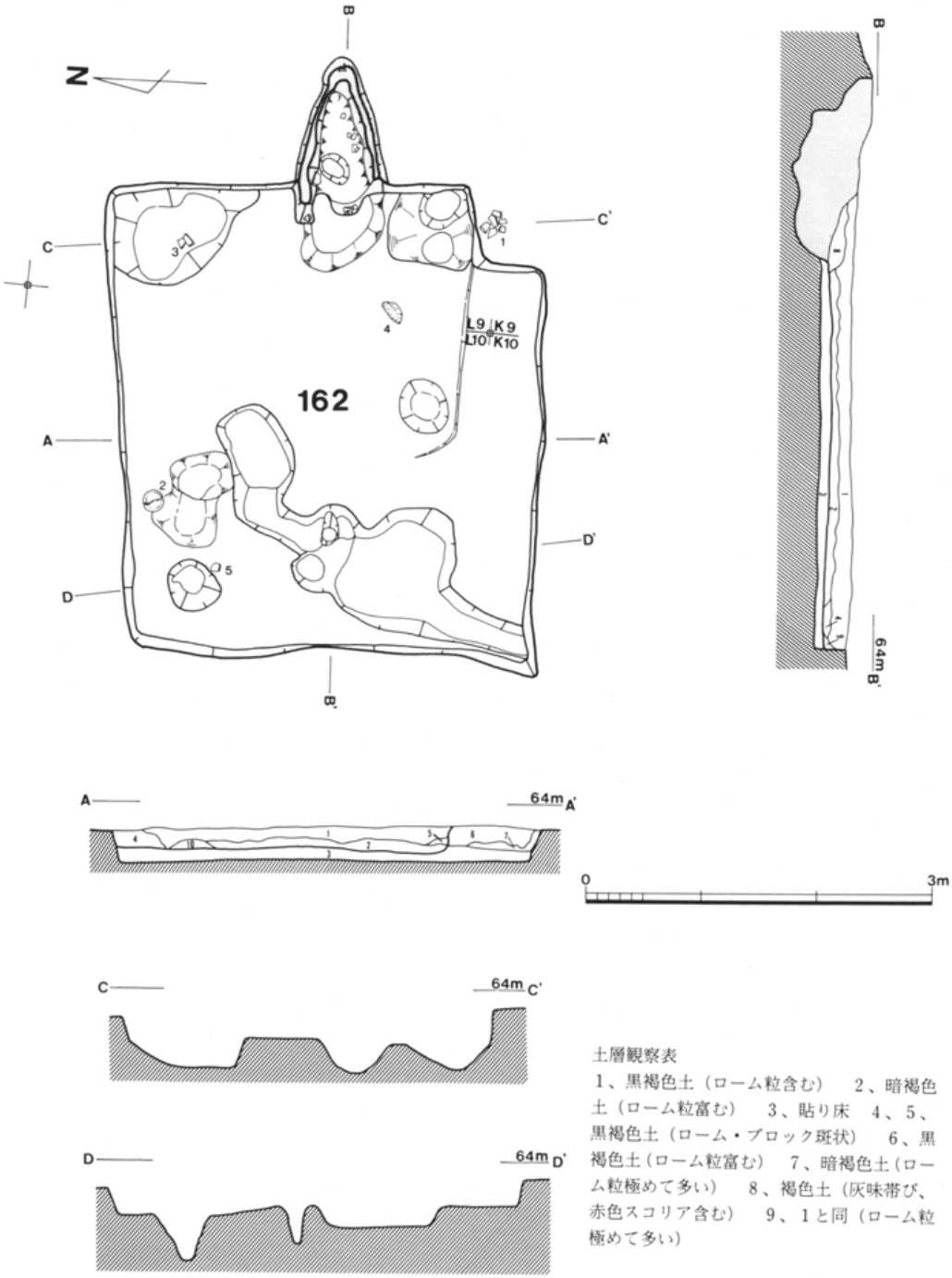
第49図　下田遺跡第144号住居址カマド実測図



第50図　下田遺跡第144号住居址出土遺物実測図

第162号住居址（第51、52、53図）

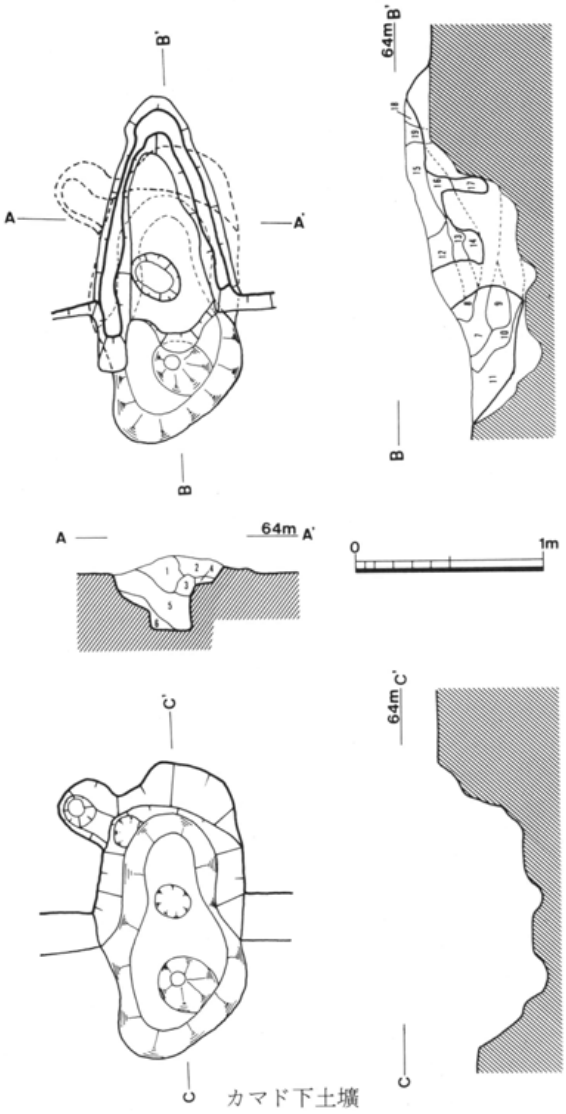
前住居址の西に位置しており、完掘した。やはり長方形を呈する。一辺4.1m×3.7m、壁高20cmで、壁溝、柱穴は検出されなかった。東南コーナーは鍵状にまがっており、２軒が重複する可能性もあるが、床面で確認することはできなかった。床面は不定形な土壙、ピットが認められ、その上にローム土と黒褐色土のまだら模様の土が叩きしめられている。カマドは東壁に位置しており、袖部がわずかに壁内に遺存する。しかし、大半は壁外にあたり長さ150cm、幅80cmを測る。国分式期に属する。



土層観察表

1、黒褐色土（ローム粒含む）　2、暗褐色土（ローム粒富む）　3、貼り床　4、5、黒褐色土（ローム・ブロック斑状）　6、黒褐色土（ローム粒富む）　7、暗褐色土（ローム粒極めて多い）　8、褐色土（灰味帯び、赤色スコリア含む）　9、1と同（ローム粒極めて多い）

第51図　下田遺跡第162号住居址実測図



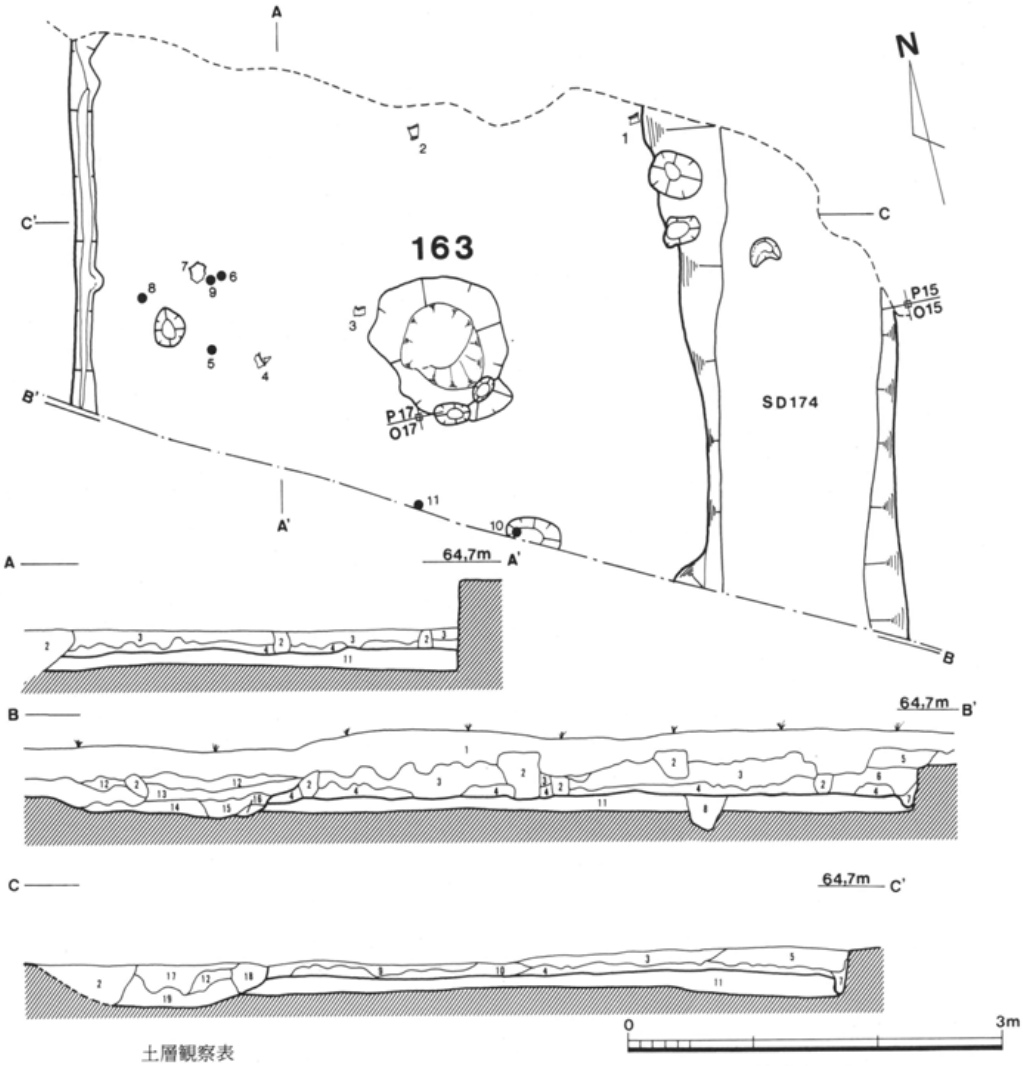
土層観察表
1、暗赤褐色土（パミス多量）　2、15、18、暗褐色土（粘土粒含む）　3、4、16、暗赤褐色土（粘土、焼土粒含む）　5、17、黒褐色土（ローム粒含む）　6、褐色土（ローム粒極めて多い）　7、黒褐色土（粘土、ローム粒含む）　8、焼土　9、灰褐色土（粘土、焼土粒含む）　10、灰褐色土（ローム粒増加）　11、暗褐色土（ローム粒、ブロック富む）　12、暗赤褐色土（粘土、焼土粒富む）　13、暗赤褐色土（粘土、焼土極めて多い）　14、暗赤褐色土（粘土、灰粒含む）　19、攪乱

第52図　下田遺跡第162号住居址カマド実測図

第53図　下田遺跡第162号住居址出土遺物実測図

第163号住居址（第54、55図）

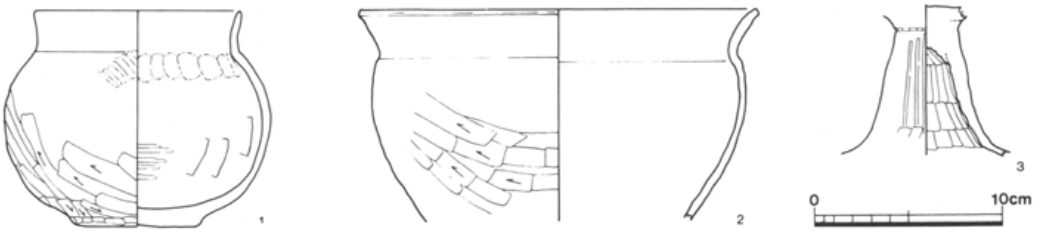
新幹線ぞいの西方で検出した。東側は溝174に、北側が新幹線建設時の攪乱により破壊されていた。また、南側は調査区域外のため不明である。したがって、規模等不明瞭な点が多いが、東西5.5m前後を測るものと推定される。壁高は25cm、壁溝の幅８cm、深さ13cmを数ぞえ、柱穴が存在する。遺物は少なく鬼高式期に属する。なお、カマドは溝174により破壊された可能性が強い。



土層観察表

1、黒褐色土（耕作土）　2、攪乱　3、黒褐色土（住居覆土上位）　4、黒褐色土（ローム・ブロック含む）　5、黒褐色土（パミス含む）　6、黒褐色土（４と同じ）　7、暗褐色土（ローム微粒子、ローム・ブロック富む）　8、４と同じ（黒褐色土著）　9、暗褐色土（ローム微粒子に富む）　10、褐色土（黄味強い）　11、貼り床　12、暗褐色土（粒子やや細かい）　13、12と同じ（ピミス減じる）　14、暗褐色土（砂粒に富む）　15、暗褐色土（パミス若干、砂粒に富む）　16、15にローム粒子含む　17、暗褐色土（パミス、砂粒極めて多い）　18、黒褐色土（ローム・ブロック含む）　19、褐色土（ローム微粒子極めて多い）

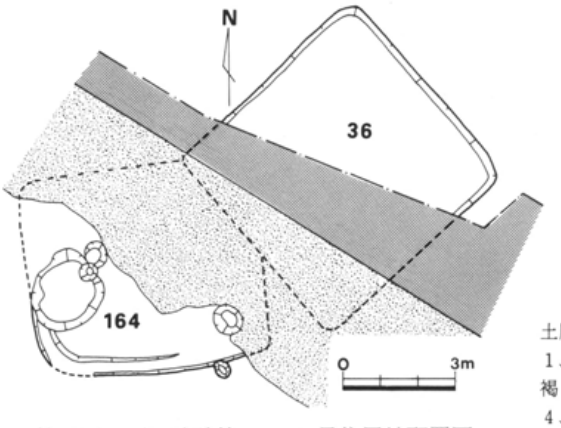
第54図　下田遺跡第163号住居址実測図



第55図　下田遺跡第163号住居址出土遺物実測図

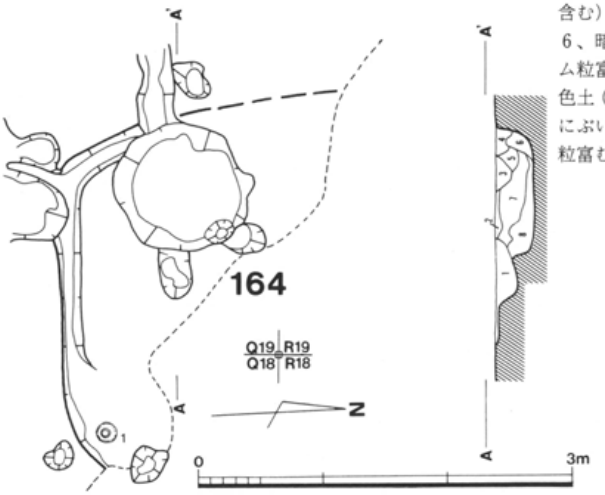
第164号住居址（第56、57、58図）

第１次調査時の第36号住居址南半が本開掘範囲内に位置するため、精査したが、常に攪乱されていた。しかし、さらに南辺において新たな住居址を確認した。トレンチヤー、後世の土壙、ピットにより攪乱が著しく、全容は知り得なかった。壁溝により輪郭が判明するのみで、西南コーナーが確認された。一辺2.5m以上を測る。柱穴、カマド等の存在は不明である。須恵器坏が１点出土しており、国分式期に属する。

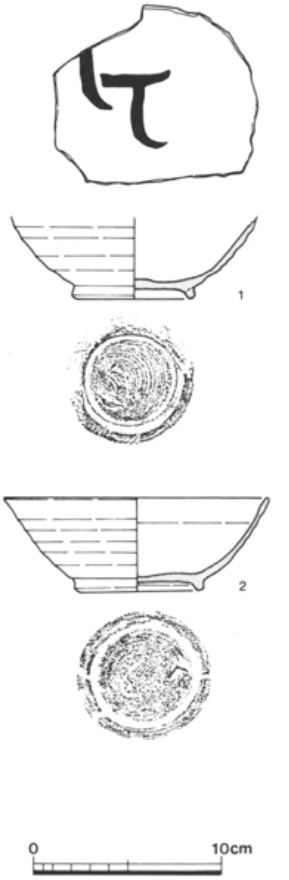


第56図　下田遺跡第36、164号住居址配置図

土層観察表
1、3、攪乱　2、黒褐色土（微砂含む）　4、黒褐色土（黄味帯び、ローム・ブロック含む）　5、黒褐色土　6、暗黄褐色土（ローム粒富む）　7、黒褐色土（微砂富む）　8、にぶい黄褐色（ローム粒富む）



第57図　下田遺跡第164号住居址実測図



第58図　下田遺跡第164号住居址出土遺物実測図

第168、169、179号住居址（第59、60、61、62、63図）

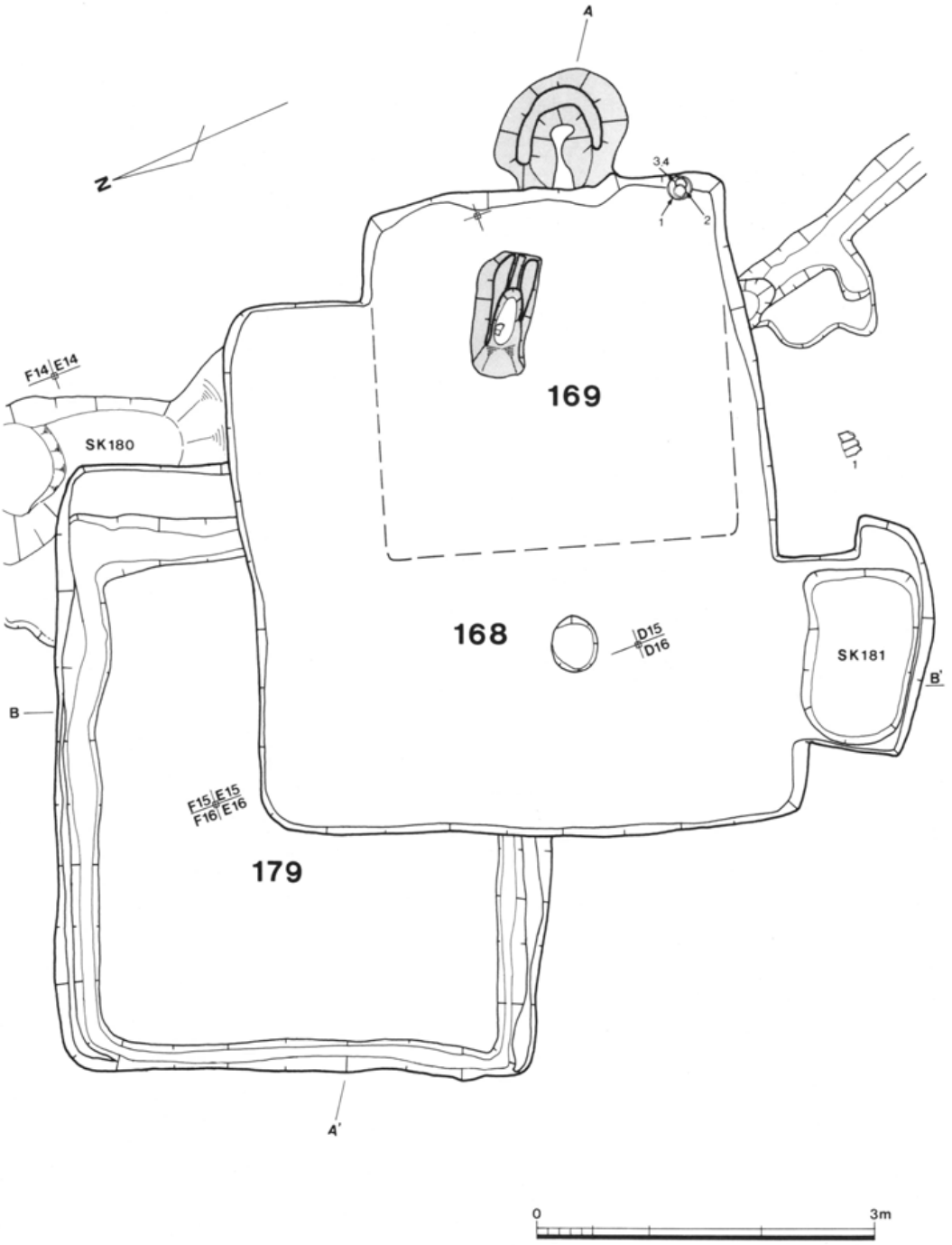
南辺部の調査区域で、西よりにあたる部分より３軒が重複して検出された。ともに完掘している。当初の範囲、有無確認の試掘調査時から遺構の存在が判明していたが、全面発掘により複雑に切り合うことが判明した。また、周囲に土壙、溝が切り合う。

第168号住居址は中央部に位置し、一辺4.8m、壁高34cm(最も下位まで)を測る。壁溝は明瞭でなく、貼り床が数枚検出された。この内、黒褐色土面は平面的に第169、179号住居址との差が明確であった。柱穴は検出されていない。カマドは東壁に相当する部分で、焼土と粘土の分布範囲から左袖部と煙道の一部が確認された。しかし、上面部は第169号住居址の床面により破壊されていた。復原によれば、本カマドは東壁の中央部にあたり、壁外に位置することになる。南西コーナーよりの南壁には土壙181により切断されている。遺物は概して少ない。国分式期に属する。

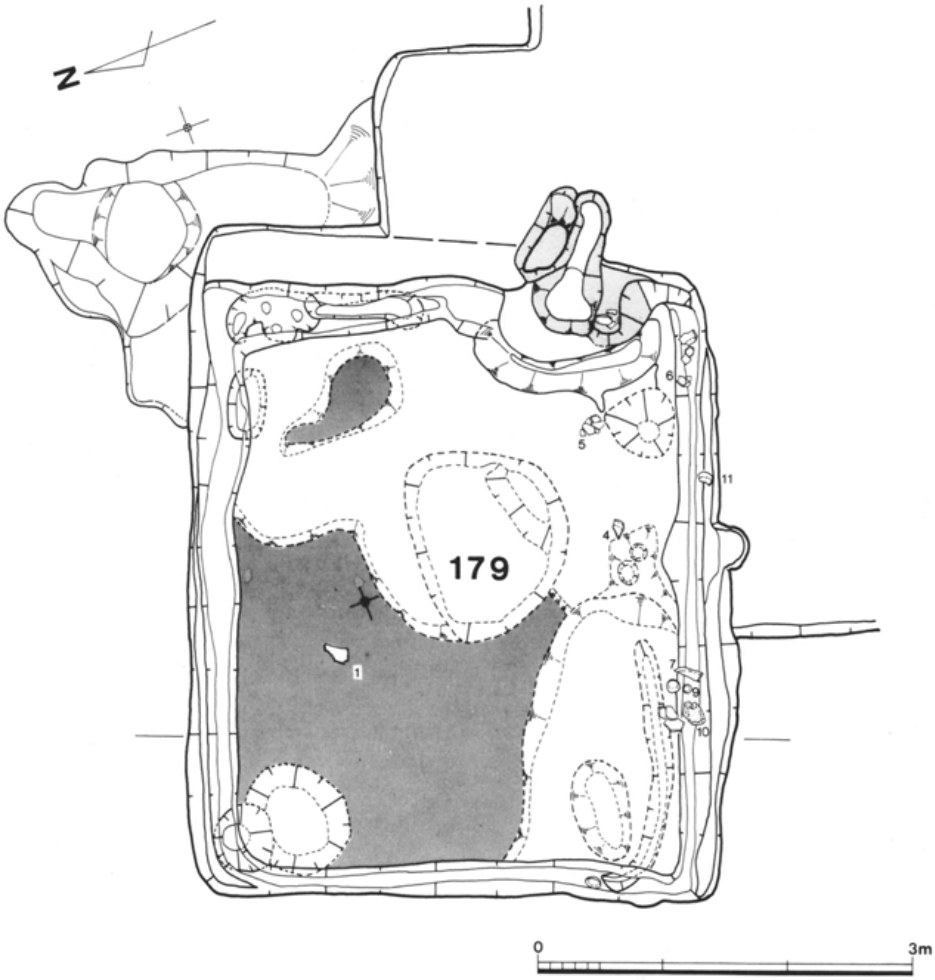
第169号住居址は東辺に位置し、平面的には西半分が不明である。東北及び、東南コーナーを検出しており、一辺3.3m、壁高42cmを測る。壁溝、柱穴は検出されなかった。重複する住居址中では最も小形である。カマドは東壁中央部より若干右よりに位置しており、壁外に存在する。長さ1.2cm、幅1.2cmを数ぞえ、袖、煙道等は不明である。本住居址の床面は、カマド底部のレベルで、同面まで貼り床がほどこされている。カマドの右側で東南コーナーに接して甕１点が直立状態で出土した。内部には完形の坏２点が納められていた。遺物は土師器、須恵器細片が多い。国分式期に属する。なお、南壁に接して溝が走る。

第179号住居址は西辺に位置する。明瞭な輪郭を示しており、東西にやや長いプランを呈する。一辺5.8m×4.7m、壁高50cmを測る。東北コーナーは土壙180によりやや不明瞭である。第168号住居址の貼り床面下は、本住居址が第168号住居址より深く掘削されていたため、東南コーナーも遺存していた。壁溝はほぼ全周するが、北壁とは段がつく。また、北壁と壁溝の間も幅広く、南壁も同様であることから、西壁を基本とする改築に伴う壁面と溝の不整合と推定し、ほぼ全周する溝を第179Ａ号住居址、外壁面を第179Ｂ号住居址と分離した。さらに、西南コーナーよりで、南側の壁溝より内側に壁溝がわずかに残存しており、本住居址は３回改築された可能性がある。床面は貼り床施設がほどこされており、床下土壙が観察されるが、南及び、東半は全体に浅い掘り込み状を呈しており、残る西北の床面¼を台状に残している。カマドは東壁のかなり右よりに位置しており、第179Ａ号住居址に伴うものと考えられる地山面を削り出しており、袖と煙道の一部が残存する。遺物は調査中に各住居址ごとに分離して取り上げられなかった。全体として、南壁ぞいに須恵器、土師器片が多く出土しており、甕、坏、鉄製品が見られた。

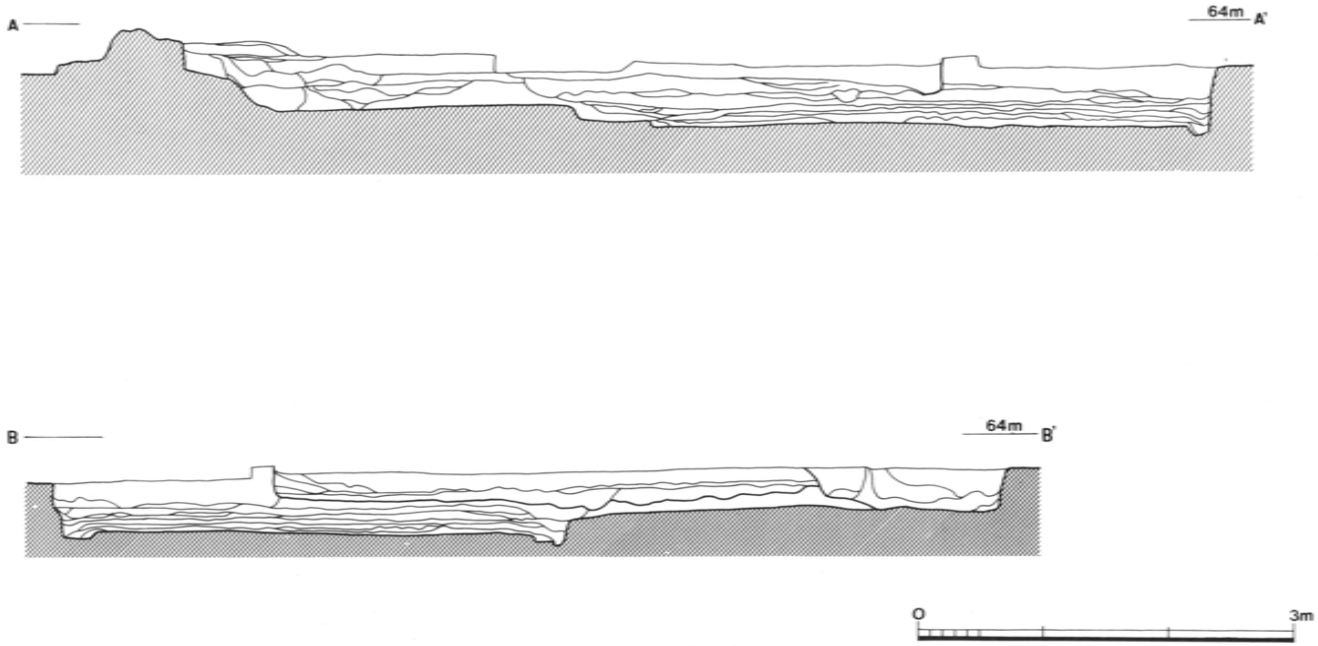
本住居址群は試掘トレンチ３～５にあたり、表土層より土器片が多量に出土していた。本住居址が下田遺跡の集落跡の南限と推定される。



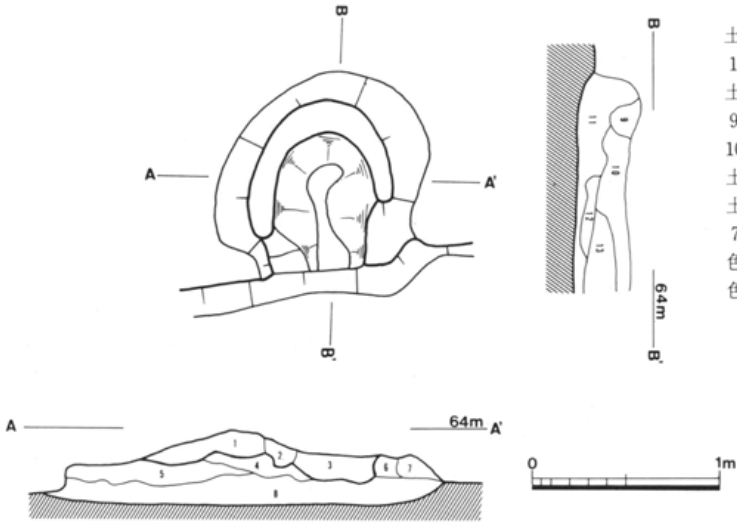
第59図　下田遺跡第168、169、179号住居址実測図



第60図　下田遺跡第179号住居址実測図

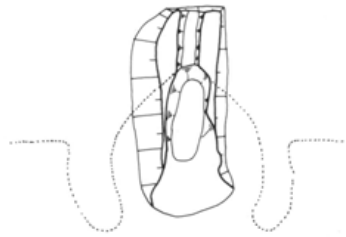


第61図　下田遺跡第168、169、179号住居址断面図

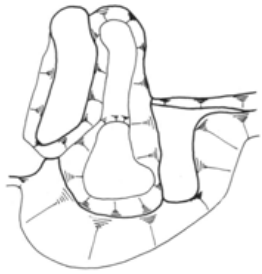


土層観察表
1、暗褐色土（ローム、粘土、焼土粒含む）　2、6、9、褐色土(焼土富む)　3、10、暗褐色土（ローム、粘土粒子混土）　4、黒褐色土（粘土化ローム）　5、7、褐色土　8、11、黒褐色土　12、焼土　13、暗褐色土（粘土粒増加）

第169号カマド

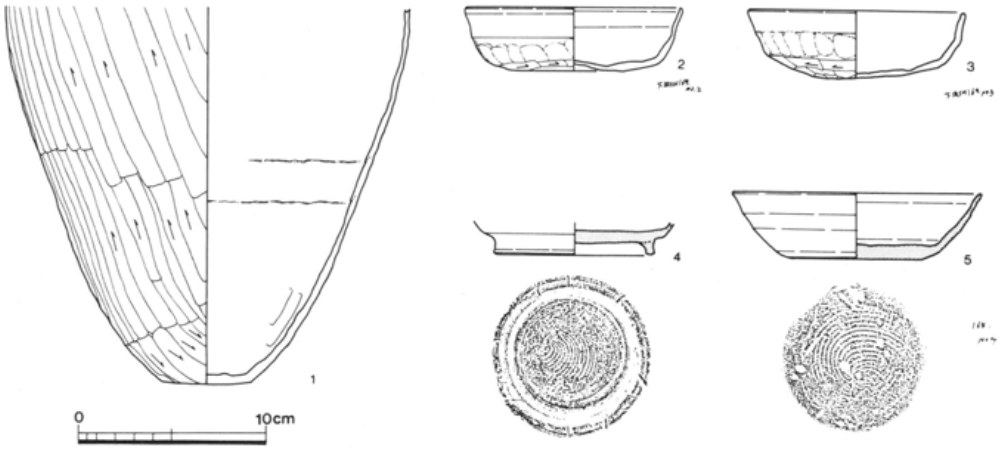


第168号カマド



第179号カマド

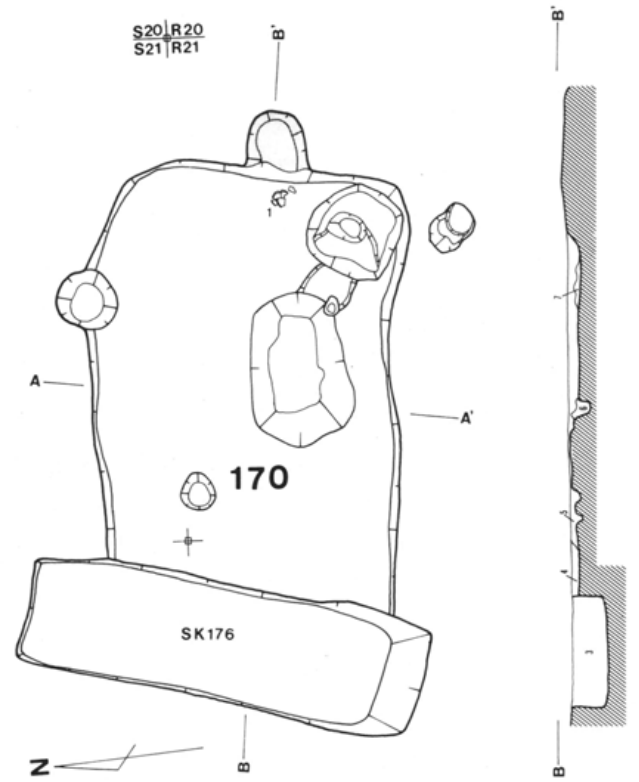
第62図　下田遺跡第168、169、179号住居址カマド実測図

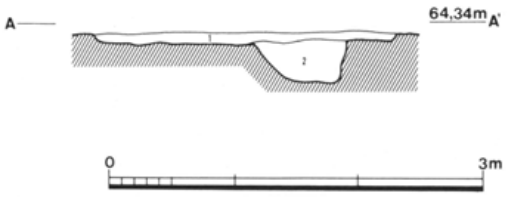


第63図　下田遺跡第168、169、179号住居址出土遺物実測図

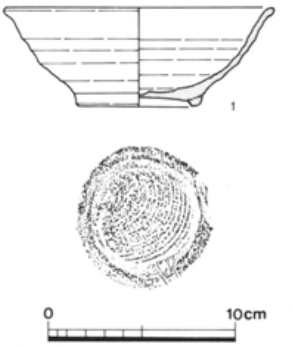
第170号住居址（第64、65図）

新幹線ぞいの西端部で検出された。完掘している。西半は土壙176により破壊されている。東西に長く隅丸方形プランで、東西3.5m以上、南北2.6m、壁高10cmを測る。遺存度が悪く、後世のピット等により攪乱が著しい。柱穴、壁溝は検出されなかった。カマドは東壁の中央よりやや右に位置しているが、袖等の構造物は攪乱されており、下部の土壙が確認されたにとどまる。同部分正面の床面上より須恵器坏が１点出土している。国分式期に属する。





第64図　下田遺跡第170号住居址実測図

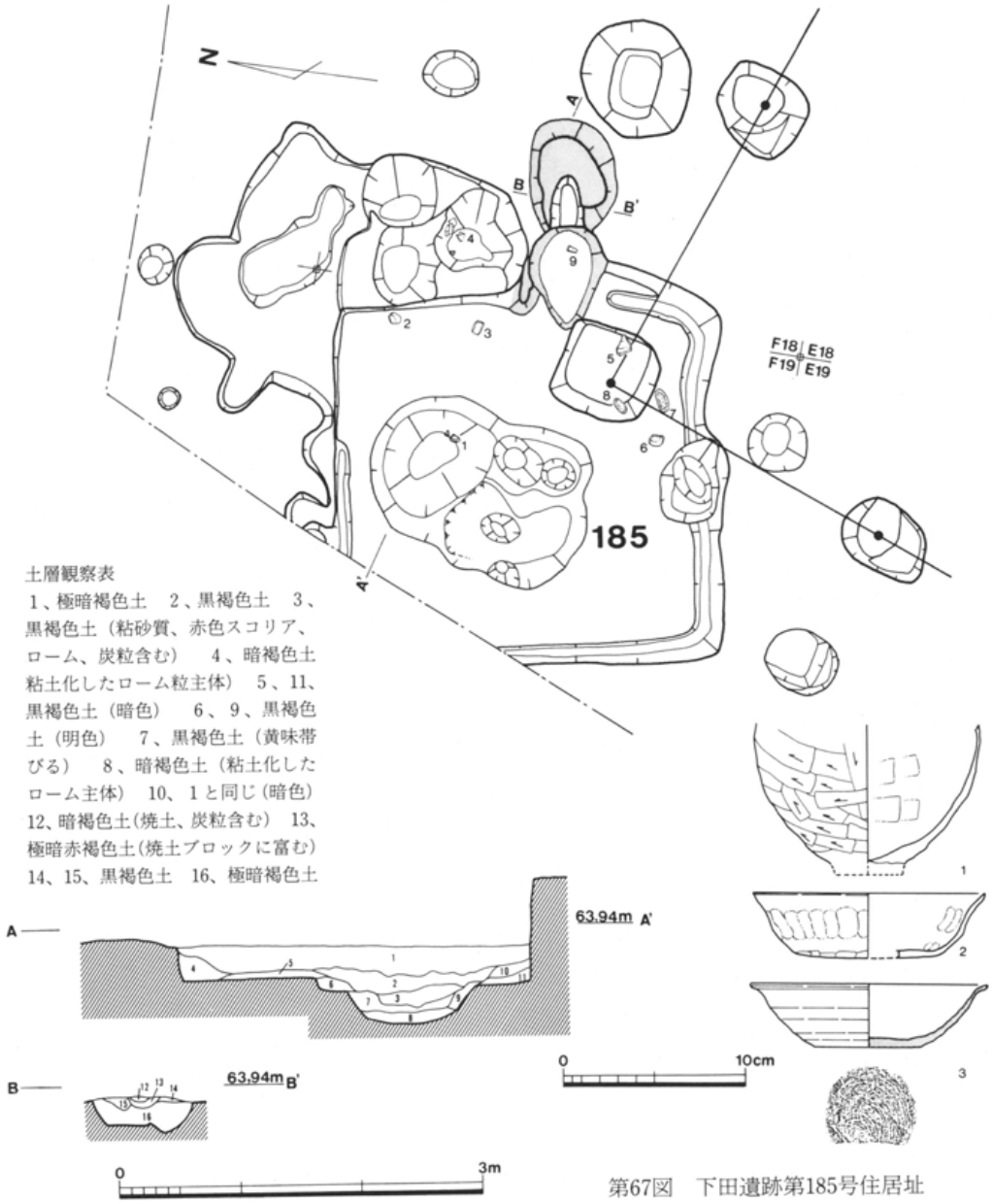


第65図　下田遺跡第170号住居址出土遺物実測図

土層観察表
1、5、暗褐色土（ローム、赤色スコリア、パミス粒含む）　2、6、暗褐色土（ローム粒含む）　3、極暗褐色土　4、黒褐色土　7、ローム・ブロック

第185号住居址（第66、67図）

調査区の西端において検出したが、西北コーナーは微低地により消滅している。掘立柱建物１、２、土壙、ピット群が重複しており、遺存度はさほどよくない。やや隅丸方形のプランを呈し、正方形に近い。一辺3.2m、壁高31cmを測り、壁溝は北東コーナー周辺以外は存在する。幅８cm、深さ４cm数える。カマドは東壁のやや南よりに位置しており、大半は壁外に構築され、煙道が遺存する。床面の中央部に土壙が存在する。国分式期に属する。なお、掘立柱建物１が新しく、本住居址が古い。

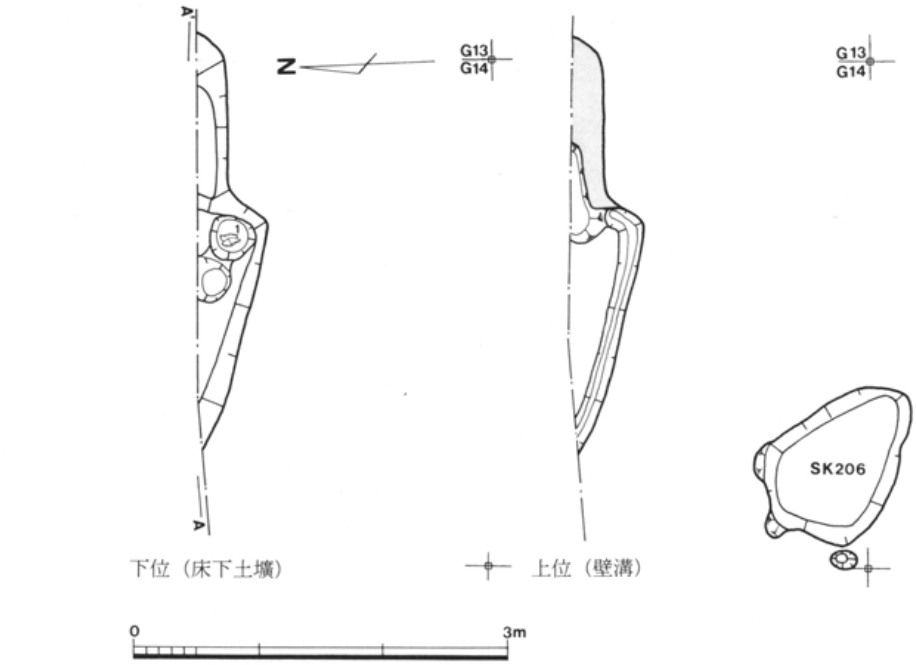


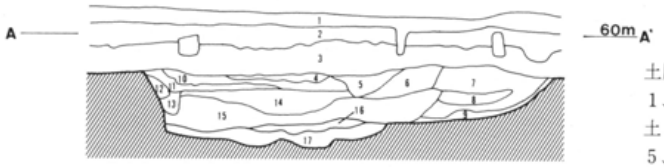
第66図　下田遺跡第185号住居址実測図

第67図　下田遺跡第185号住居址出土遺物実測図

第201号住居址（第68図）

広範囲に開掘した地域の北辺部でわずかに検出された。南東コーナーと、これに接する東壁にカマドの一部が検出されたにとどまり、全容を知るまでに至っていない。遺存度はよく、壁高55cmを測る。壁溝も明瞭である。コーナー付近の床面に小規模な土壙があり、坏が１点出土している。国分式期に属する。





第68図　下田遺跡第201号住居址実測図

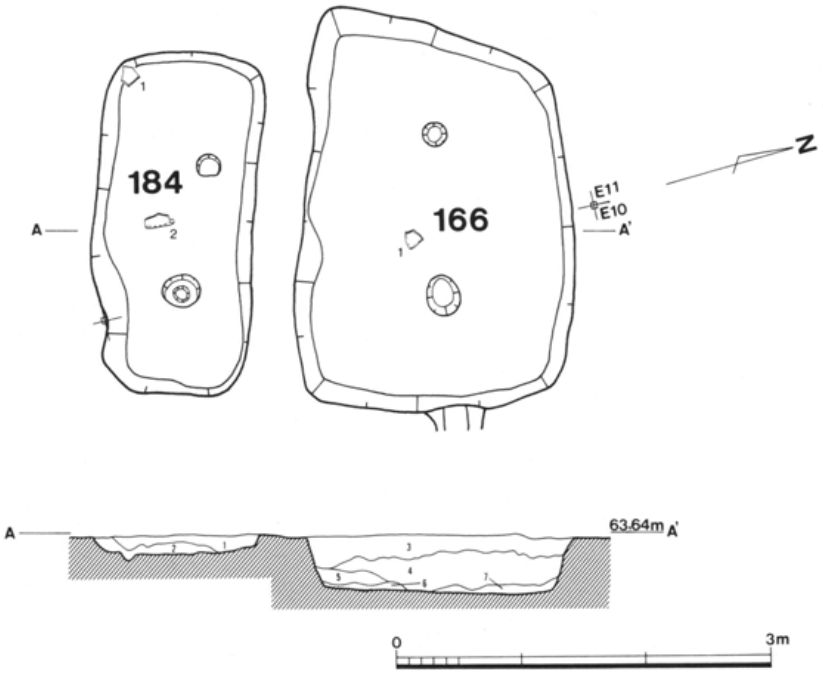
土層観察表

1、灰白色耕作土　2、褐色床土　3、褐色土（焼土、パミス粒含む）　4、極暗褐色土　5、極暗褐色土（ローム、焼土ブロックに富む）　7、暗赤褐色土（褐色土、焼土ブロック混土）　8、暗褐色土(焼土ブロック)　9、暗灰色土（灰、焼土粒含む）　10、極暗褐色土　11、極暗褐色土(ローム、ローム・ブロック、焼土粒含む)　12、黒褐色土（粘土化）　13、黒褐色土（ローム微粒含む）　14、暗黄褐色土（褐色土、ローム・ブロック混土、パミス多量）　15、暗褐色土（ローム粒含む）　16、暗灰褐色土（灰粒子主体）　17、暗黄褐色土（貼り床面）

第166、184号土壙（第69図）

南辺部調査区の東よりで検出した。東西に主軸を置き、両者は南北に平行する。第166号土壙は亜長方形プランを呈しており、長さ3.2m、幅2.2m、深さ42cmを測る。小形の住居址と推定し発掘を行ったが、内部に壁溝、カマド、炉等の施設は見られなかった。ただし、主軸に平行して中心に２ケ所柱穴が検出された。須恵器の大形甕と思われる破片が出土している。

第184号土壙は先の土壙と30cmの距離を置き、南側に所在する。コーナーは丸みを帯び、前例に比べ小形である。長さ2.8m、幅1.3m、深さ12cmを測り、やはり主軸にそって柱穴２ケ所が存在する。両土壙は同様な構造を示しており、建物遺構の一種と推定される。時期的には国分式期に属し、主軸は西方に分布する掘立柱建物１、３、第168号住居址と平行するため、これらは一連の遺構と考えられる。

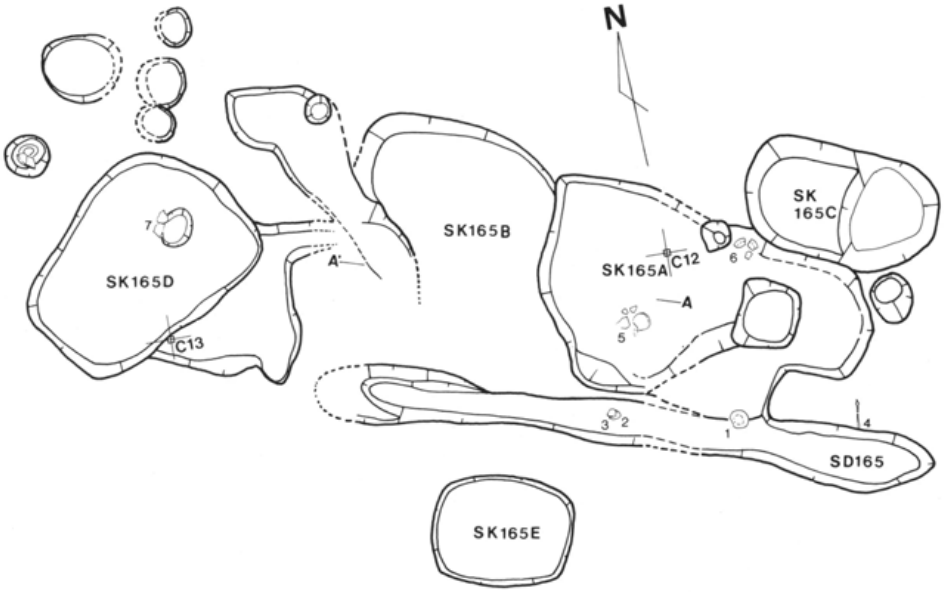


土層観察表
１、３、黒褐色土（炭、ローム粒含む）　２、４、暗褐色土（ローム、ローム・ブロック斑状）　５、黒褐色土　６、７、暗褐色土（ローム粒、暗褐色土混土）

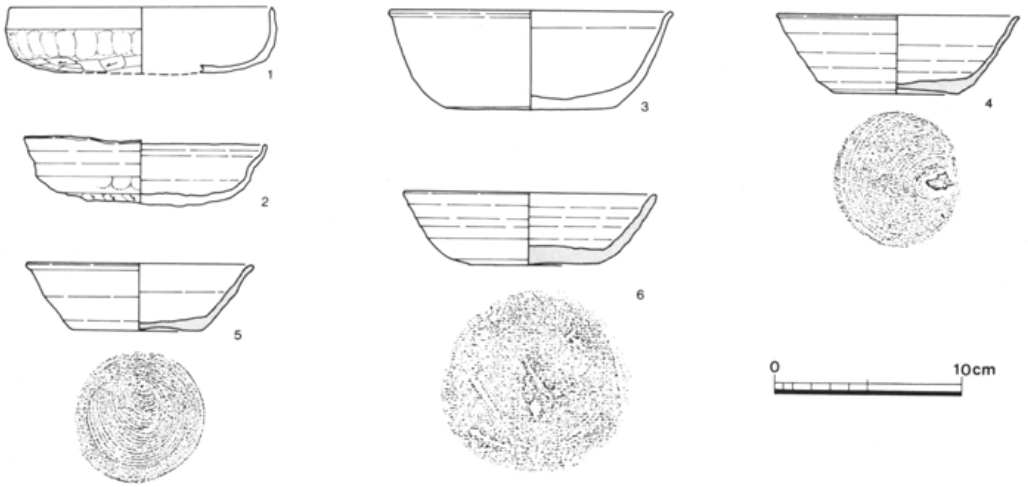
第69図　下田遺跡第166、184号土坑実測図

第165号遺構群（第70、71図）

掘立柱建物３、４の南に接して比較的浅い土壙や溝が重複して検出された。試掘当初は１軒の住居址と思われたが、全面表土剝ぎ後、サブトレンチを設定して精査したところ、複数の遺構群であることが判明した。土壙165はＡからＥまで細分しており、Ｅをのぞく各土壙は連接する。本遺構群の他に掘立柱建物３を取り囲むように土壙、溝が分布するが、これらの遺構に共通することは、覆土に焼土、炭、土器の微細片が密集していたことで、何れも国分式期の坏が出土している。



第70図　下田遺跡第165号遺構群実測図

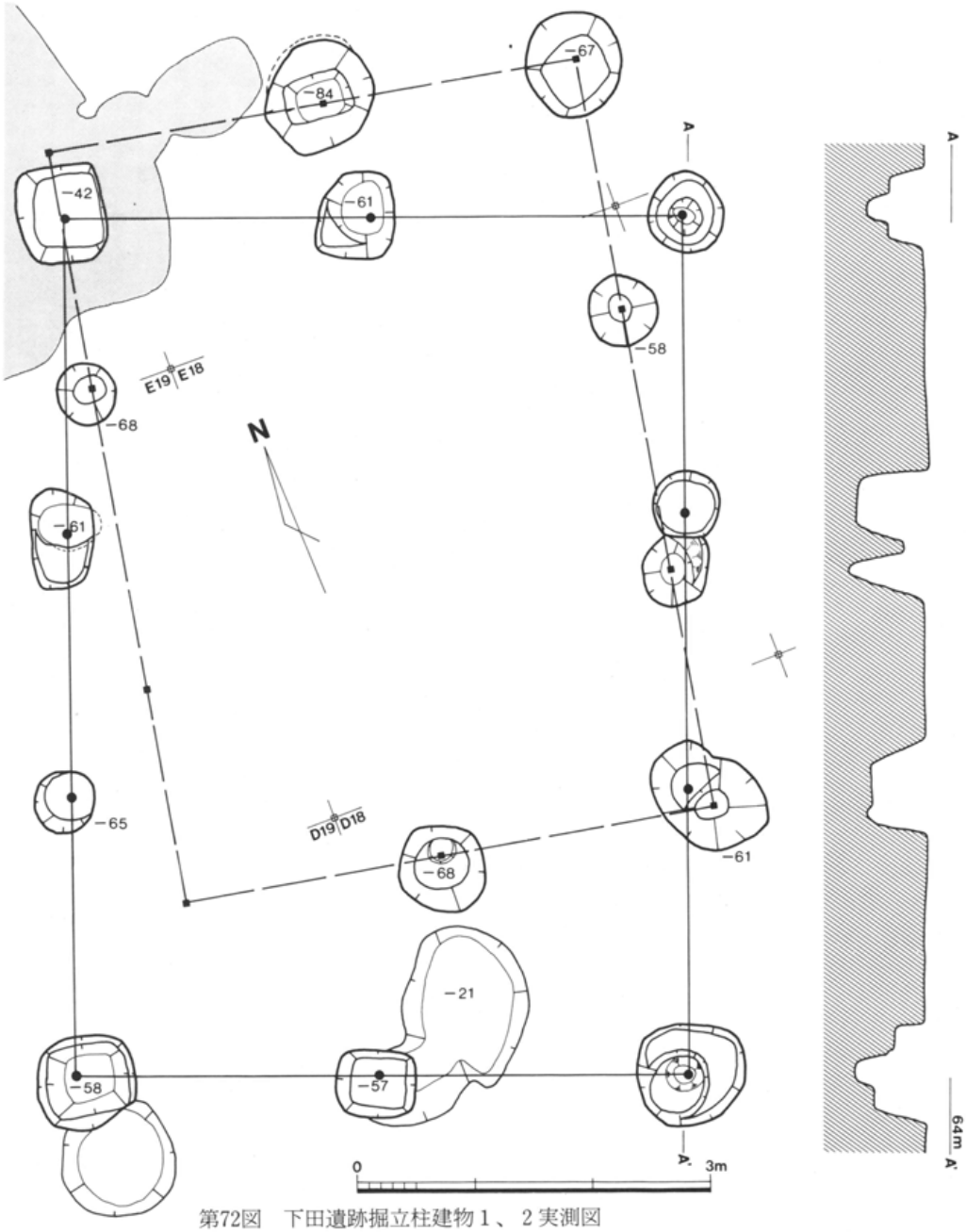


第71図　下田遺跡第165号遺構群出土遺物実測図

掘立柱建物１、２（第72図）

調査区域の南西側において検出された。１は南北３間、東西２間の長方形プランを呈し、柱穴は径80cm前後、深さ60cm内外を測る。一部は方形に掘削されており、２段掘りを見せるものもみられる。北西端の柱穴は第185号住居址と重複するが、本建物が新しい。

２は１より約10ずれて位置するが、すべての柱穴は検出されなかった。規模は１と同様と推定される。柱穴内より国分式期の土師器細片が出土している。

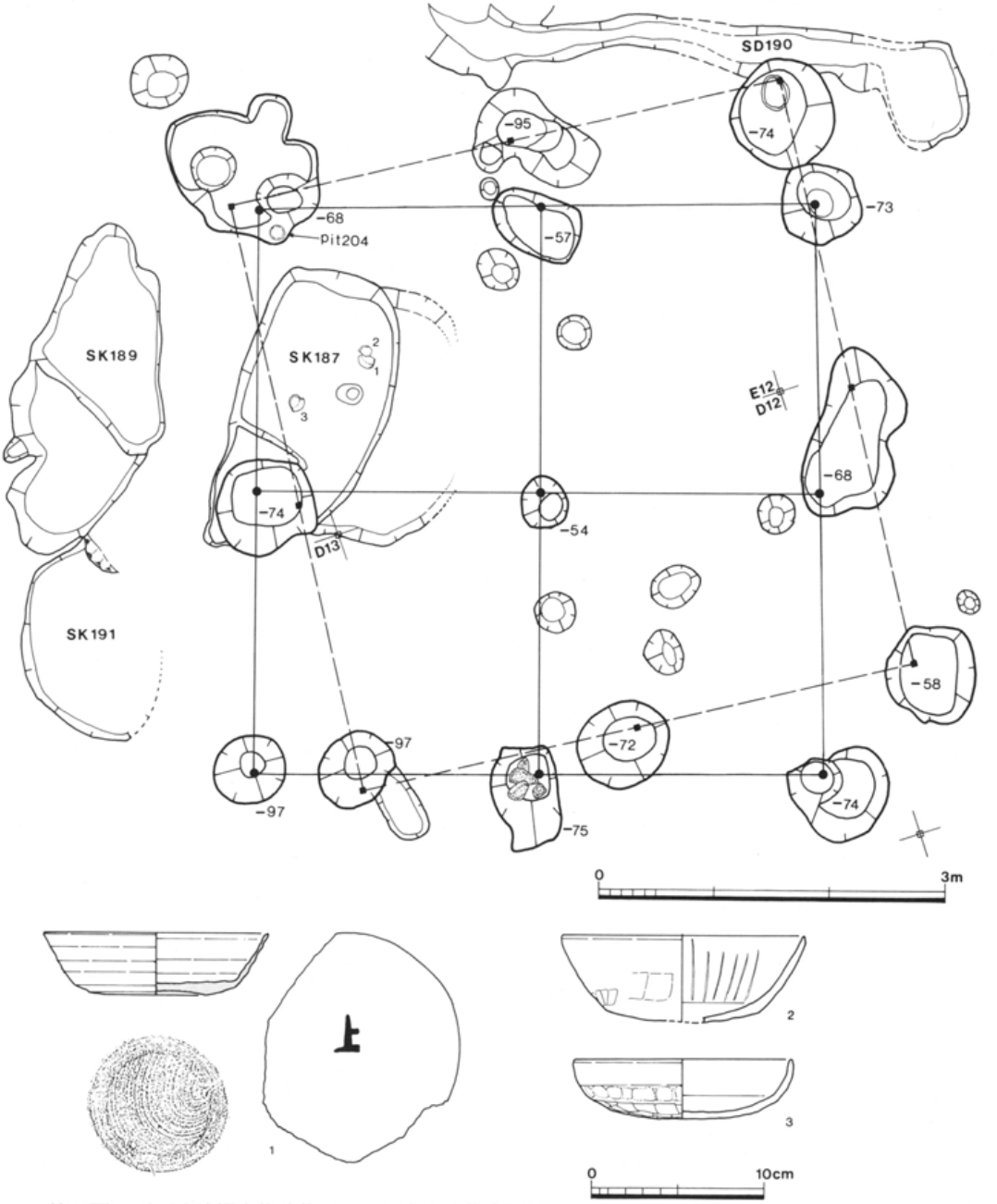


第72図　下田遺跡掘立柱建物１、２実測図

掘立柱建物３、４（第73図）

第169号住居址と土壙16の間で検出された。前例に比べてやや小形で、２間×２間の正方形プランを呈する。一辺５m、柱穴の径880cm前後、深さ660cm内外を測り、一部に礫を入れている。

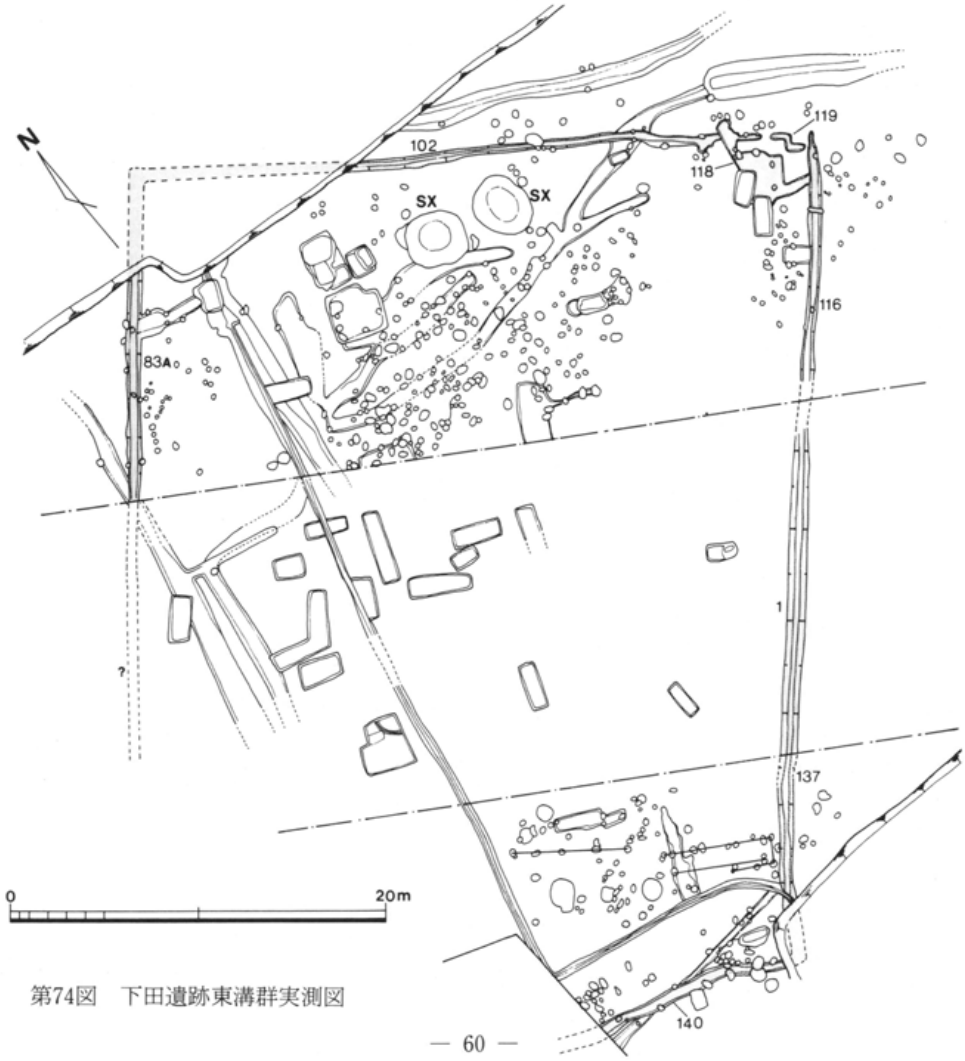
４は３より約15傾いており、すべての柱穴が検出されていないが、３とほぼ同内容と推定される。周辺には他のピットや、土壙、溝が複雑に密集する



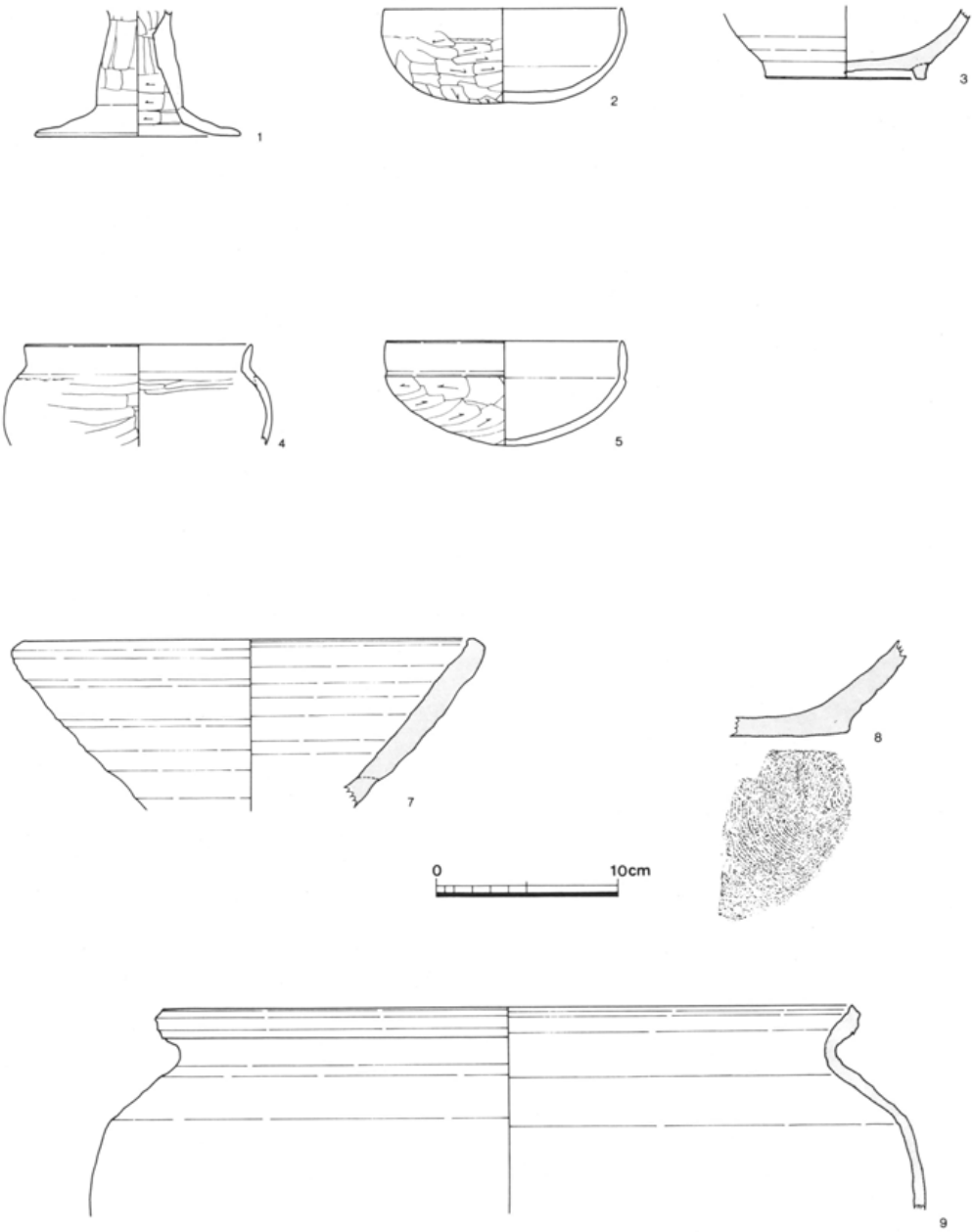
第73図　下田遺跡掘立柱建物３、４と出土遺物実測図

東溝群（第74図）

第１～３次調査において、多数の溝が検出された。これらは東西２群に大別され、他におよそ東西に走る浅い溝がある。西溝群については、第４章でふれるとして、東溝群は遺跡面積の約⅕の範囲をしめる。各調査で個別に検出された溝を復原すると、約40°東に主軸を置くいびつな長方形プランの輪郭が現れる。溝１、83、102、118、119、116、137、140より構成され、118、119の内側輪郭は鍵手状を呈しており、極めて浅く建築物に関連するような遺構であることを示唆する。復原された規模は東西36m、南北48mを測る。ところで、第２、３次調査で多数検出されたピット群はほぼ本溝群の範囲内に集中しており、一部は柵列の可能性がある。また、井戸、大形長方形の土坑の分布も同様であり、これらは東溝群に伴う一連の遺構と推定される。帰属すべき時期については不明瞭であるが、井戸100より刀片、溝102から瓦質土器が出土しており、中世まで坂上る可能性がある。また、北コーナーは東西に掘り凹められた水田面に切断されており、同方向を示す土坑74や西溝群の推定される時期、すなわち、近世より古いものと考えられる。なお、本溝群の規模から、これを館跡とするには範囲、規模等からむつかしい。建築物と想定すれば、屋敷程度の遺構と推定される。

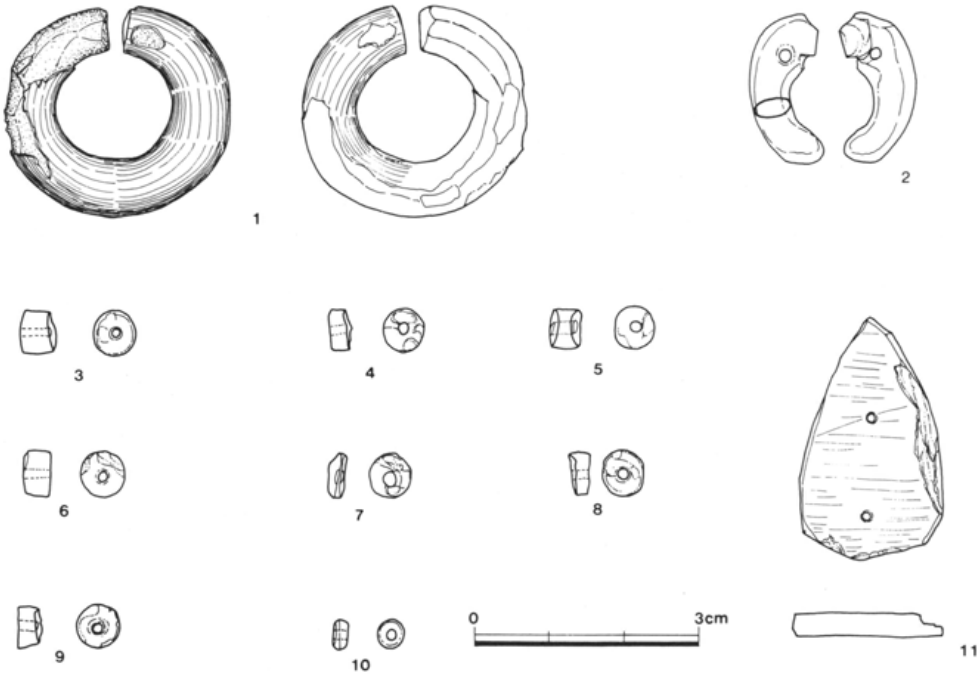


第74図　下田遺跡東溝群実測図



第75図

第75図　下田遺跡出土遺物実測図



1　耳環　　幅３cm、高2.8cm、厚さ0.8cm、銅地銀張り。下田遺跡第78号住居址。
2　勾玉　　幅0.8cm、長２cm、厚さ0.3cm、滑石。下田遺跡第133号住居址カマド。
3　臼玉　　径0.5cm、厚さ0.4cm、滑石。下田遺跡第110号住居址カマド。
4　臼玉　　径0.5cm、厚さ0.3cm、滑石。下田遺跡第122号住居址カマド。
5　臼玉　　径0.5cm、厚さ0.4cm、滑石。下田遺跡第122号住居址カマド。
6　臼玉　　径0.6cm、厚さ0.4cm、滑石。下田遺跡第122号住居址カマド。
7　臼玉　　径0.5cm、厚さ0.2cm、滑石。下田遺跡第122号住居址カマド。
8　臼玉　　径0.5cm、厚さ0.3cm、滑石。下田遺跡第122号住居址カマド。
9　臼玉　　径0.6cm、厚さ0.3cm、滑石。下田遺跡第122号住居址カマド。

第76図　下田遺跡出土遺物実測図

下田遺跡第55号住居址出土遺物観察表（第４図）　　（※以下の表で単位cm、末尾№取り上げ時）

1	裾径11.4　高9.2以上　胎土微砂。焼成良。色調明赤褐色。裾内外横ナデ、脚外面縦ヘラ削り後ナデ、内面横ヘラ削り。

下田遺跡第74号住居址出土遺物観察表（第８図）

1	口径14　高4.3　胎土微砂、小礫若干。焼成良。色調灰黄色。ロクロ痕。№３。
2	口径14.2　高2.6　胎土微砂、鉄斑。焼成甘い。色調灰色、底内外にぶい橙色。ロクロ痕底回転糸切り、磨滅著。№１＋覆土。

下田遺跡第79号住居址周辺出土遺物観察表（第10図）

1	口径11.4　高9.6以上　胎土細砂。焼成良。色調（内）にぶい褐色、（外）褐色。口縁内外ヘラ削り、体部外ヘラ削り、内ヘラ削りでクシ目状圧痕。ＳＫ79出土。79住帰属か。
2	底径9.4　高7.8以上　胎土細砂。焼成良。色調（内）赤褐色、（外）にぶい褐色。胴内面ヘラ痕、胴から脚部ハケ、下位はナデ。78住№３、79住に帰属か。

下田遺跡第78号住居址出土遺物観察表（第12図）

4	口径17.9　高7.1以上　胎土細砂、角閃石。焼成普通。色調（内）橙色、（外）にぶい橙色。口縁内外横ナデ、胴外縦ヘラ削り。№２。
5	口径19.8　高６以上　胎土微砂、角閃石。焼成普通。色調橙色。口縁内外横ナデ、胴外面ヘラ削り、内面ナデ。№１。
9	口径11.8　高3.8　胎土微砂、鉄斑。焼成普通。色調橙色。口縁ナデ、体部、底ヘラ削り全体に磨滅極めて著。
12	口径14.8　高3.7以上　胎土微砂。焼成良。色調黒褐色。口縁内外横ナデ、体部外ヘラ削り。
14	口径14　高3.5　胎土微砂。焼成良。色調（内）赤黒色、（外）黒褐色。口縁内外横ナデ体部外ヘラ削り。
15	口径15　高2.7以上　胎土角閃石。焼成良。色調（内）灰褐色、（外）にぶい橙色。口縁内外横ナデ、体部外ヘラ削り。皿。

下田遺跡第86号住居址出土遺物観察表（第13図）

1	底径4.6　高5.5以上　胎土細砂。焼成不良。色調（内）にぶい赤褐色、（外）黒褐色。胴外ヘラ削り、内面ヘラナデ、磨滅著。№３カマド内。
2	口径13.6　高４　胎土微砂。焼成良。色調（内）橙色、（外）にぶい赤褐色。口縁内外横ナデ、体部ヘラ削り、底周辺指頭顕著。№１。
3	口径11.6　高4.2　胎土細砂。焼成良。色調（内）にぶい橙色、（外）褐色。口縁内外横ナデ、体部外ヘラ削り。№２。
4	口径11.6　高3.6　胎土微砂、鉄斑。焼成普通。色調にぶい赤褐色。口縁内外横ナデ、内面ナデ、体部外ヘラ削り。№３。

下田遺跡第82号住居址出土遺物観察表（第15図）

1	口径13.8　高５　胎土細砂。焼成良。色調（内）橙色、（外）明赤褐色。口縁横ナデ、体部外ヘラ削り。№１。
2	口径14.6　高5.1　胎土微砂、礫、鉄斑。焼成普通。色調（内）灰黄色、（外）灰黄褐色ロクロナデ、底回転糸切り（右回り）後、高台貼り付けロクロナデ。№２。

下田遺跡第87号住居址出土遺物観察表（第18図）

2	口径15.4　高5.6以上　胎土微砂。焼成良。色調明赤褐色。口縁内外横ナデ、下位ヘラ削りとナデ、坏内面ヘラ状放射状暗文。№４。
3	高8.8以上　胎土微砂。焼成良。色調（内）明赤褐色、（外）暗赤褐色。坏内面ヘラ痕、脚部外ナデ、内横ヘラ削り。№２＋３＋４。
4	口径14.8　高６　胎土砂粒含。焼成普通。色調（内）にぶい橙色、（外）赤褐色。口縁内外横ナデ、体部外ヘラ削り、一部指頭、内ヘラナデ。№６。
5	口径13.2　高5.5　胎土石英粒含。焼成普通。色調（内）にぶい赤褐色、（外）橙色。口縁内外横ナデ、体部ヘラ削り後ナデ、底ヘラ削り、内外面亀裂多い。№１。
7	口径13　高５　胎土微砂。焼成良。色調暗赤褐色。口縁内外横ナデ、体部外ヘラ削り。№４。

下田遺跡第93号住居址出土遺物観察表（第21図）

1	口径13.6　高4.7　胎土微砂、石英、長石。焼成良。色調（内）にぶい褐色、（外）橙色口縁内外横ナデ、体部外ヘラ削り、内ヘラナデ。

下田遺跡第108号住居址出土遺物観察表（第22図）

1	高12以上　胎土細砂。焼成普通。色調（内）赤褐色、（外）黒色。口縁横ナデ、胴外面縦ヘラ削り、内面ヘラナデ。№１。

下田遺跡第110号住居址出土遺物観察表（第26図）

1	口径18.6　高5.3以上　胎土微砂、鉄斑。焼成良。色調（内）明赤褐色、（外）橙色。口縁内外横ナデ。№３＋カマド。
2	口径20.1　高12.5以上　胎土砂粒多い。焼成普通。色調（内）暗赤褐色、（外）にぶい橙色。口縁横ナデ、胴外面縦ヘラ削り、内面ヘラナデ。№１。
3	胴径16.6　高8.9以上　胎土微砂。焼成普通。色調（内）にぶい褐色、（外）暗赤褐色。胴外上位削り後ナデ、下位横ヘラ削り、内面磨滅著。№２。
4	脚裾径18.4　高11.3以上　胎土微砂。焼成良。色調暗赤褐色。裾内外横ナデ、磨滅著。№４。

下田遺跡第123号住居址出土遺物観察表（第30図）

1	口径26.5　高29.9　胴径23.5　胎土微砂、小礫、鉄斑。焼成普通。色調明赤褐色。口縁内外横ナデ、胴外ヘラ削り、内ヘラナデ、底ヘラ削り。№12。
2	口径12.2　高11.3　胴径14.5　胎土微砂、石斑。焼成良。色調明赤褐色。口縁内外横ナデ、胴外ヘラ削り、内ヘラナデ、外磨滅著。№11。

3	口径13　高3.1　胎土細砂、鉄斑。焼成良。色調（内）にぶい橙色。（外）橙色。口縁内外横ナデ、体部、底手持ち回転ヘラ削り。№12。

下田遺跡第122号住居址出土遺物観察表（第31図）

1	胴径24.8　高23.4　胎土砂粒、鉄斑。焼成普通。色調（内）にぶい橙色、（外）にぶい褐色。胴下位ヘラ削り、内ナデ。№6。
2	口径16.2　高4.8以上　胎土細砂（片岩）。焼成普通。色調（内）明赤褐色、（外）橙色口縁外横ナデ後ヘラ削り、胴外ヘラ削り。№1。
3	底径5　高3.9以上　胎土細砂。焼成普通。色調黒褐色。外ヘラ削り、内ナデ。カマド右覆土。
4	高7.2以上　胎土微砂。焼成良。色調（内）黒褐色、（外）にぶい赤褐色。内面ナデ、外面小孔周囲ナデ、他横ヘラ削り、小孔は焼成前穿孔。
5	口径9.6　高15　胴径15.6　胎土微砂、鉄斑。焼成良。色調（内）赤褐色・にぶい橙色、（外）暗赤褐色。口縁内外横ナデ、胴外ヘラ削り後ナデ、内ナデ。№1＋4。
6	胴径16.2　高10.7以上　胎土微砂、石英。焼成良。色調橙色。外ヘラ削り、内ナデ。
7	口径15.8　高11.9以上　胎土微砂。焼成良。色調（内）明赤褐色、（外）橙色。外細かいヘラ調整、内横ヘラ削り。№5。
8	口径16.3　高12.8　裾径13.1　胎土微砂、鉄斑、石英。焼成良。色調明赤褐色。坏部巻き上げ痕、脚外ヘラナデ、内ヘラナデ痕。部分的に磨滅著。№8＋カマド右覆土。
9	口径14.2　高4.3以上　胎土微砂、角閃石若干。焼成良。色調（内）にぶい橙色、（外）にぶい赤褐色。口縁内外から体部外中位に横ナデ、体部下位ヘラ削り、内面放射暗文状ヘラ痕。カマド内。
10	口径14.1　高5.7　胎土微砂、石英。焼成良。色調（内）極暗赤褐色、（外）暗赤褐色、口縁内外横ナデ、体部外不定方向ヘラ削り。№2。
11	口径12.2　高4.6以上　胎土微砂。焼成良。色調暗赤褐色。口縁内外横ナデ、体部外ヘラ削り、内面磨滅著。№8。

下田遺跡第132号住居址出土遺物観察表（第39図）

1	口径20.2　高24.3　胎土微砂、鉄斑、石英。焼成良。色調にぶい橙色。口縁内外横ナデ、胴外ヘラ削り。№5。
2	口径13.2　高4.3　胎土微砂。焼成良。色調明赤褐色。底周辺ヘラ削り後ナデ、体部指頭№3。
3	口径12.8　高3　胎土微砂。焼成良。色調橙色。底右方向回転ヘラ削り、内ナデ。№2。
4	口径13.1　高3.9　胎土微砂。焼成良。色調明赤褐色。底ヘラ削り、体部指頭、焼成時歪み。№12。
5	口径12.3　高4　胎土微砂。焼成良。色調（内）暗赤褐色。（外）赤黒色。口縁内外横ナデ、体部外と底ヘラ削り。№4。
6	口径12.4　高4　胎土微砂。焼成良。色調橙色。体部、底ヘラ削り、体部中位指頭、口縁内外ナデ。№1。
7	口径12.3　高3.5　胎土微砂。焼成良。色調（内）暗赤褐色、（外）にぶい赤褐色。口縁内外横ナデ、体部中、底ヘラ削り。№14。

8	口径13.4　高3.9　胎土微砂。焼成良。色調（内）明赤褐色、（外）橙色。口縁内外ナデ体部中位底ヘラ削り、体部外中位指頭、墨書一文字有り。№1。
9	口径13.2　高3.6　胎土微砂。焼成良。色調明赤褐色。口縁内外横ナデ、体部中位、底ヘラ削り。№13。
10	口径12.8　高3.4　胎土微砂。焼成良。色調赤褐色。口縁内外ナデ、体部外横ヘラ削り、底ヘラ削り、中位に指頭ナデ。№7。
11	口径11.6　高4.4　胎土微砂。焼成良。色調にぶい橙色。口縁内外ナデ、体部中位指頭、下位、底ヘラ削り。体部外下位に墨書一文字有り。№6。
12	口径15.2　高2.4　胎土微砂。焼成良。色調明赤褐色。口縁内外ナデ、体部中位指頭、底ヘラ削り。№9。
13	口径13.6　高4　胎土微砂、石英。焼成良。色調明赤褐色。口縁内外横ナデ、体部外中位指頭、下位、底ヘラ削り。№10。
14	口径12.4　高3.6　胎土微砂、鉄斑。焼成良。色調(内)にぶい橙色、(外)橙色。口縁内外ナデ、体部中位指頭？、下位、底ヘラ削り。№8。
15	口径12.1　高3.8　胎土小石、細砂。焼成緻密。色調灰色。ロクロ整形、底回転糸切り、№11。
16	高18以上　胎土微砂、石英。焼成良。色調にぶい黄橙色。底回転糸切り、高台付けに伴うロクロナデ。底内外に墨書、内は「前」。132住を通過するＳＤ142より出土、132住帰属。

下田遺跡第133・136号住居址出土遺物観察表（第43図）

1	口径13.6　高3.3　胎土微砂、鉄斑。焼成良。色調（内）明赤褐色、（外）橙色。口縁内外ナデ、体部外中位、底ヘラ削り、内螺施状暗文。№1。
2	口径12.6　高3.5　胎土微砂、鉄斑。焼成良。色調橙色。口縁内外ナデ、体部中、底ヘラ削り、内螺施状暗文。

下田遺跡第134号住居址出土遺物観察表（第45図）

1	口径10　高6.8　胎土微砂、鉄斑、石英。焼成良。色調（内）淡赤橙色、（外）にぶい橙色。口唇部横ナデ、口縁外ヘラ磨き、内ヘラナデ、体部ヘラ削り、底部焼成後意図的穿孔№4。
2	口径10.2　高5.2　胎土微砂、鉄斑、石英。焼成良。色調橙色。口縁内外と体部内面ナデ体部外上横ヘラナデ、中・下位ハケ目。底部焼成後意図的穿孔。№3。
3	口径10.9　高5　胎土微砂、鉄斑、角閃石。焼成良。色調橙色。口縁横ナデと指頭、体部外ハケ目、内ヘラナデ、底に種子圧痕。№1。
4	口径13　高13.4以上　胴径19　胎土微砂、鉄斑、石英。焼成良。色調（内）にぶい赤褐色、（外）明赤褐色、胴部黒ずむ。口縁内外横ナデ、体部外ヘラ削り、内ヘラナデ。№8。

下田遺跡第135号住居址出土遺物観察表（第47図）

1	口径12.6　高3.3　胎土微砂、鉄斑、石英。焼成普通。色調（内）明赤褐色、（外）橙色。口縁内外ナデ、体部中位指頭。全体磨滅著。カマド№1。

下田遺跡第144号住居址出土遺物観察表（第50図）

1	口径13.2　高3.4　胎土微砂、鉄斑。焼成普通。色調橙色。口縁内外ナデ、底ヘラ削り№1。

2	口径17.6　高4.8以上　胎土微砂、石英、鉄斑。焼成良。色調明赤褐色。口縁内外ナデ、体部外中位、底ヘラ削り。No.8。

下田遺跡第162号住居址出土遺物観察表（第53図）

1	口径14　高3.6　胎土微砂、鉄斑、石英。焼成良。色調（内）明赤褐色、（外）にぶい橙色。口縁内ナデ、体部外ヘラ削り。No.2。

下田遺跡第163号住居址出土遺物観察表（第55図）

1	口径10.8　高11.4　胴径14　胎土細砂、石英。焼成良。色調暗灰色。口縁内外横ナデ体部外上より中位ヘラ削り後ナデ、下位目荒いヘラ削り、底ヘラ削り、内面頸部指頭、体部ヘラナデと一部ヘラ磨き。No.3＋8＋覆土。
2	口径21.4　高11.2以上　胴径20　胎土微砂、石英。焼成良。色調（内）にぶい橙色、（外）橙色。口縁内外横ナデ、体部上位ヘラ削り後ナデ、中・下位ヘラ削り。No.4。
3	高8以上　胎土微砂。焼成良。色調（内）にぶい赤褐色、（外）にぶい橙色。坏・脚の境横ヘラ磨き、脚外縦ヘラ削り、内ヘラ削り。No.2。

下田遺跡第164号住居址出土遺物観察表（第58図）

1	高台径6.6　高4.2以上　胎土微砂、鉄斑。焼成良。色調灰白色。ロクロ整形、底回転糸切り。内底墨書有り。
2	口径14.2　高5.1　胎土微砂、鉄斑、長石。焼成普通。色調（内）灰黄褐色、（外）黒褐色。ロクロ痕、底回転糸切り、高台周辺ロクロナデ。No.1。

下田遺跡第168・169号住居址出土遺物観察表（第63図）

1	胴径21.6　高20以上　胎土細砂、石英、鉄斑。焼成良。色調（内）にぶい橙色、（外）橙色。胴外斜めヘラ削り、底不定方向ヘラ削り、内輪積み痕。169号No.1。
2	口径11.6　高3.4　胎土微砂、鉄斑、石英。焼成良。色調にぶい橙色。口縁内外ナデ、体部外中位指頭、底ヘラ削り。No.2。
3	口径11.6　高3.6　胎土微砂、鉄斑、石英。焼成良。色調橙色。口縁内外横ナデ、体部外中位横ナデ、下、底ヘラ削り。No.3。
4	高台径8.6　高1.7以上　胎土微砂、石英、小石。焼成普通。色調（内）灰白色、（外）灰色。底回転糸切り、高台部貼り付け時ロクロナデ。168号No.4。
5	口径13.2　高3.5　胎土細砂、小石。焼成普通。色調浅黄色。ロクロ整形、底回転糸切り168号No.4。

下田遺跡第170号住居址出土遺物観察表（第65図）

1	口径14.4　高5.2　胎土微砂、石英。焼成良。色調灰色。内外ロクロ痕、底回転糸切り、高台周辺ロクロナデ。No.1。

下田遺跡第185号住居址出土遺物観察表（第67図）

1	胴径12.5　高7.6以上　胎土微砂。焼成良。色調(内)褐灰色、(外)にぶい赤褐色。胴外ヘラ削り、内ナデ。No.2。
2	口径12.8　高3.5　胎土微砂。焼成良。色調橙色。口縁内外ナデ、体部外中位指頭、底ヘラ削り。No.1。
3	口径13.2　高3.5　胎土微砂、小石鉄斑。焼成堅緻。色調灰色。ロクロ整形、底回転糸切り。No.6。

下田遺跡第165号遺構群出土遺物観察表（第71図）

1	口径13.8　高3.5　胎土微砂、ザラザラ。焼成良。色調橙色。口縁内外横ナデ、体部外中位指頭、下、底ヘラ削り。165ANo.6。
2	口径12.9　高3.5　胎土微砂、鉄斑、石英、角閃石。焼成良。色調橙色。口縁内外横ナデ、体部外中位指頭か、底ヘラ削り。全体歪み著。トレンチ6。
3	口径15.　高9　胎土微砂、鉄斑。焼成普通。色調（内）明赤褐色、（外）橙色。口縁・体部外横ナデ、内ナデ、底ヘラ削り。
4	口径13　高4.2　胎土細砂、小石、ザラザラ。焼成普通。色調（内）灰白色、（外）灰色。ロクロ整形、底部周辺回転糸切り後ナデ。165ANo.5。
5	口径12　高3.6　胎土細砂、小石。焼成堅緻。色調暗青灰色。ロクロ整形、底部周辺回転糸切り後ナデ。165ANo.1。
6	口径13.4　高3.9　胎土小石含。焼成堅緻。色調灰黄色。ロクロ整形、底部周辺回転糸切り後ナデ。トレンチ5。

下田遺跡土壙187、ピット204出土遺物観察表（第73図）

1	口径13　高3.6　胎土微砂、小石。焼成堅緻。色調灰色。ロクロ整形、底部周辺回転糸切り後、ナデ調整。底外墨書有り。No.3。
2	口径14　高5　胎土微砂、鉄斑、石英。焼成良。色調橙色。全体磨滅著、体部外ヘラ削り内ナデ後放射状ヘラ磨き。No.1。
3	口径12.6　高3.5　胎土細砂、鉄斑、石英。焼成良。色調橙色。口縁内外横ナデ、体部外中位指頭、下、底ヘラ削り、磨滅著。ピット204No.1。

下田遺跡出土その他の遺物観察表（第75図）

1	底径11.2　高6.8　胎土細砂。焼成良。色調（内）明赤褐色、（外）橙色。裾内外横ナデ脚部外ヘラ削り。SK72、No.3。
2	口径13　高5　胎土微砂。焼成良。色調暗赤褐色。口縁内外横ナデ、体部外、底ヘラ削り。SK72、No.4。
3	高台径8.8　高3.9以上　胎土細砂。焼成堅緻。色調（内）浅黄色、（外）体部浅黄色、高台灰白色。ロクロ整形、底回転糸切り。SK72、No.2。
4	口径12.2　胴径14.6　高5.5以上　胎土微砂、石英。焼成良。色調（内）赤褐色、（外）にぶい赤褐色。口縁内外横ナデ、胴外ヘラ削り後ナデ、内ナデ。Pit 1。
5	口径13　高5.6　胎土細砂。焼成良。色調赤褐色。口縁内外横ナデ、体部外、底ヘラ削り。Pit 1。
6	口径12.4　高3.3　胎土細砂、石英、角閃石。焼成良。色調（内）にぶい橙色、（外）灰黄褐色。口縁内外横ナデ、体部外中位指頭、下、底ヘラ削り、磨滅著。第201号住No.1。
7	口径25.8　高9.2以上　胎土細砂、小礫。焼成堅緻。色調（内）にぶい橙色から黒褐色、（外）にぶい褐色。ロクロ痕。Pit 4。
8	高4.9以上　胎土微砂。焼成良。色調灰白色。ナデ調整、底回転糸切り。SD121下底。
9	口径37.8　高11.2以上　胎土微砂、小石、白色粒。焼成堅緻。色調灰色。ロクロ整形、口縁横ナデ。SK184、No.2。

第４節　観音塚遺跡第１次調査

本遺跡は、埼玉県遺跡地図によれば、四方田と東富田集落の間に位置し、市営住宅の北半部より上越新幹線周辺にかけて分布する、奈良・平安時代の集落跡と推定されていた。地形は上越新幹線と東富田集落の間が、東南方向に下る微低地となっており、本遺跡の北辺は上越新幹線側道付近と推定される。調査は昭和60年度に新幹線側道の北端に平行して走る小排水路予定地で、これを第１次調査とした。第２次調査は昭和61年度にあたり、新幹線の南側で東富田観音堂以西を通過する小排水路にあたる。第１次調査では市道234号線より東南へ下田遺跡を貫通するトレンチを設定開掘したが、本来本庄74号遺跡の範囲として登録されていた地域からは、遺構、遺物は検出されなかった。しかし、下田遺跡よりで、数軒の住居址等を確認した。一方、第２次調査では観音堂西側において住居址がやはり検出されており、市営住宅から東東南へ観音堂までのびる微高地が本来の遺跡の範囲を示しているものと推定される。微細な地形は水田と畑地の別でも反映されており、標高は64mを数える。

調査は幅２mのトレンチ掘りであるため、遺構特に住居址の完掘はなかったが、第１次調査小排水路東部の住居址確認地点より北側で実施された、天地返しの立合い調査地点ではまったく遺構遺物は検出されず、また、第２次調査の東西に走る小排水路内で遺構が検出されたのは観音堂付近のみであったことから、遺跡の範囲はかなり限定されるものと考えられる。なお、遺跡の所在地は東富田字前田にあたるが、字前田の地名より付加した遺跡名が、本事業地区内に存在しており、混同をさけるため字名は使用しなかった。本遺跡の範囲内に位置する観音堂及び、市指定文化財「東富田観音塚の松」の名称が親しまれており、同名を遺跡名とした。

遺構と遺物

第１次調査では住居址６軒、溝７本、土壙１基を検出した。同地点は粘土化が著しく、新幹線下をかつて蛇行していた鍛冶屋堀の影響をうけているためであろうか。第２次調査では住居址３軒、土壙４軒、溝１本、ピット若干を検出している。本地点ではローム層を基盤としており、浅い部分で一40cmで遺構面に達する。(第77、78、82図)

第１号溝

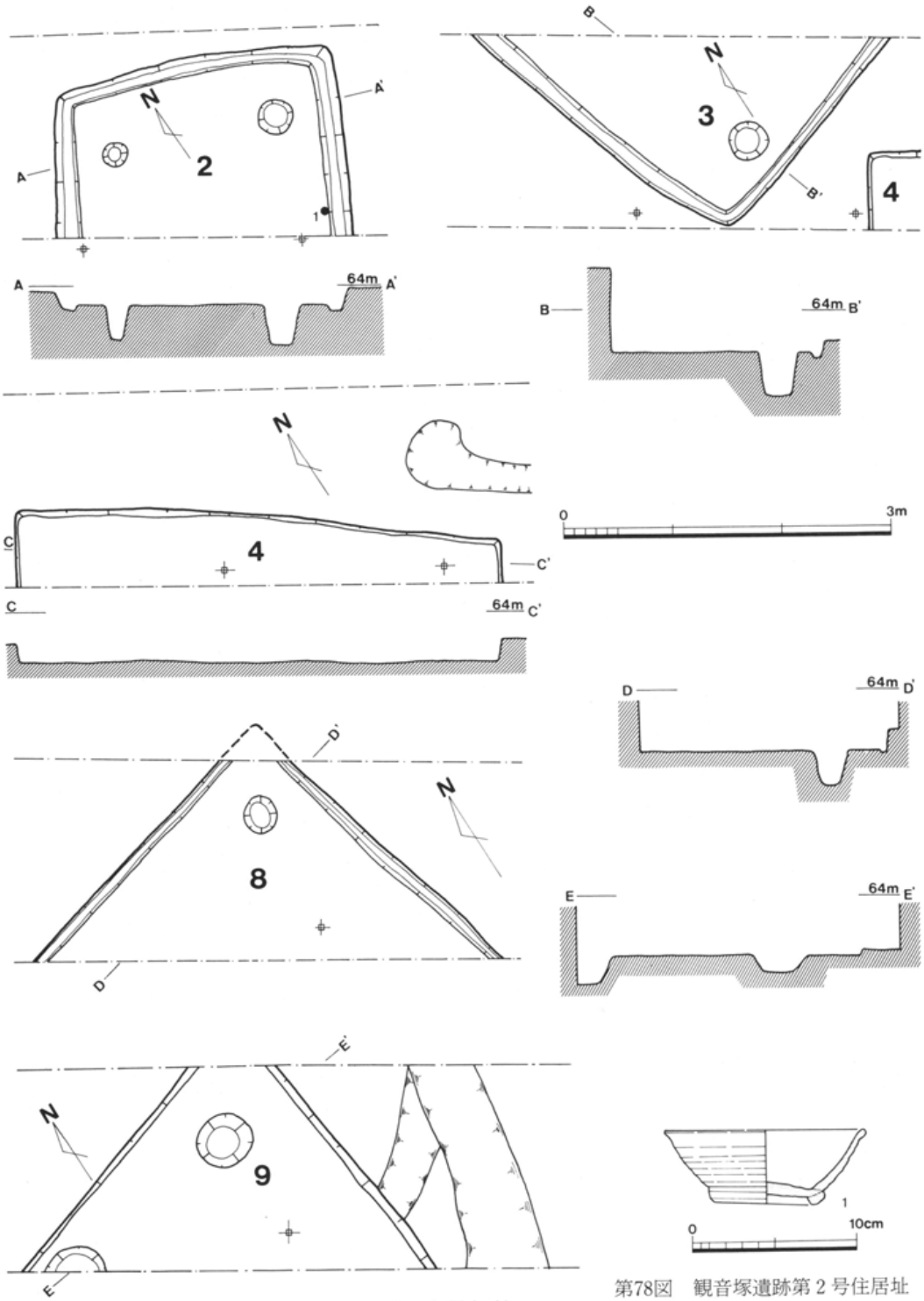
東西に走る。長さ５、１m以上、幅0.5m、深さ0.22mで皿状の浅い断面を示す。粘土層を掘りこむ。

第２号住居址

いびつなプランを呈する。北半部を検出した。東西2.7m、南北1.8m以上、壁高16.5cmを測る。壁溝が囲繞しており幅15cm、深さ4.7cm。柱穴は２ケ所で確認されており、直径22～31cm、深さ31.7～36cmを数える。地表下60cmで検出した。

第３号住居址

南コーナーを検出した。一辺３m以上、壁高12.6cm、壁溝を確認しており、幅12cm、深さ4.4cmを測る。コーナー近くに柱穴１ケ所が見られ、直径33cm、深さ39cmを数える。



第77図　観音塚遺跡住居址実測図（第１次調査時）

第78図　観音塚遺跡第２号住居址出土遺物実測図

溝5、6、7

3本の溝は切り合い関係にあるが、前後関係については不明。溝5は浅く北西部がとぎれる。幅29cm、深さ9cm、溝6は長さ9.8m、幅1.1m以上を測り、深さ18.1cm、46.6cm。土壙である可能性もある。溝7は南北に近い状態で、幅60cm、深さ47cm。

第8号住居址

北コーナー付近を発掘。一辺3m以上、壁高17.9cm、24.1cm。周壁溝が囲繞しており、幅12cm、深さ3.1cm。コーナー付近に柱穴1ケ所を確認。

第9号住居址

やはり北半コーナーを検出。両壁は直角ではなく、いびつである。一辺3m以上、壁溝8.7cm、周壁溝は見られない。柱穴が2ケ所で確認されており、コーナー付近のものは直径50cm、深さ18cm。地表下70cmで検出。

溝10

第9号住居址の東に接して検出。ほぼ南北に走り、浅い。幅65cm、深さ19cm。2又に別れている。

土壙11

当初住居址と思われたが、北西部が円弧を描き、他の住居址と異なり、立上がりが急で、土壙に分類した。一辺2.2m、深さ64.4cm、イモ穴の可能性がある。

溝12

土壙11に西半を切断されている。南半は広がっており、深さ16cmを測る。

第13号住居址

北西半部を検出した。一辺5.1m以上、壁高6cm、北西コーナー付近の床面は一段低く、この部分の壁高は29.6cmを測る。周壁溝、柱穴は検出されなかった。

溝14

本調査地区では最も規模が大きく、長さ22m以上、幅1.3mを数ぞえ、深さ25～28cm、断面は浅いU字状を呈する。東西方向で、鍛冶屋堀から窪田堀へ向かう旧水路の一部である可能性がある。

遺　物

遺物は極めて少なく、ポリ袋分にとどまった。土師器、須恵器、陶器片を表土、覆土より若干出土した。唯一、第2号住居址から国分式の高台付椀1点が出土した。

本遺跡は、新たに確認された遺跡であるが、上越新幹線高架の南側一帯にのびる部分が遺跡の範囲と推定され、地目が畑地として記入されている付近にあたる。西方には本庄74号遺跡が立地しており、同遺跡の東方延長上にあたるものと考えられる。なお、上越新幹線建設時には住居址の有無は確認されていない。

第5節　観音塚遺跡第2次調査

第1次調査地点の南側で、東富田観音堂の裏側にあたる西側に小排水路の掘削が予定された。第1次調査においては、遺構が確認されたものの、遺物がほとんどなく時期的な解明がなされていなかった。今回の調査では、多数の遺物が出土しており、国分式期の集落跡であることが判明した。また、範囲も観音堂を東限とし、南限は東西に入れたトレンチ付近で、西限については市営住宅の東ぞいに試掘溝を入れたところ、住居址を検出しており、およその範囲が把握されるに至った。

遺構と遺物

第2次調査において検出された住居址は3軒、土壙3基、溝、ピット若干で、観音堂の西縁に集中していた。なお、市営住宅東縁の試掘溝内の遺構については、有無のみが判明したにとどまり、遺構数は不明である。ローム層を基盤としており、遺構面は浅い。

第15号住居址（第79、83図）

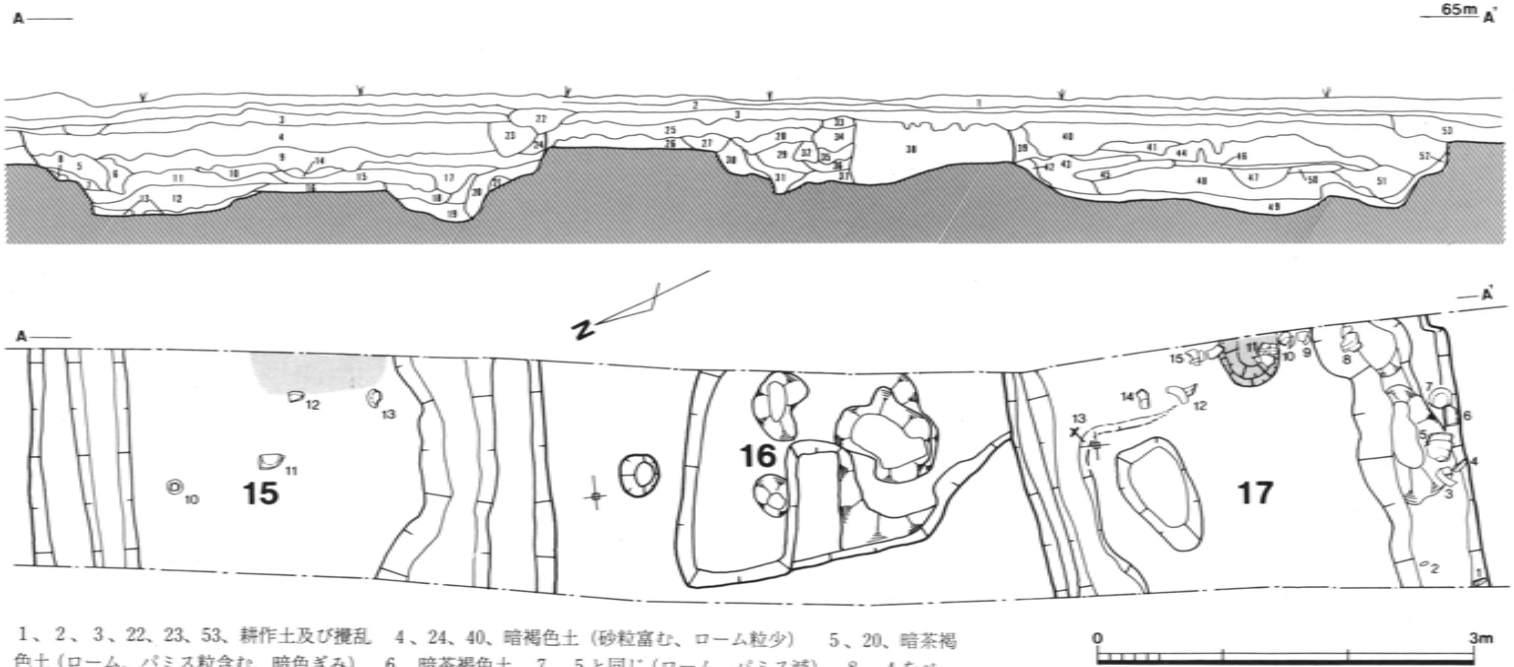
トレンチ内において南北の壁部が検出された。東西の範囲については不明である。一辺4.1m、壁高27cmを測り、調査範囲内において柱穴、カマドは確認されなかった。壁溝は幅広く幅25cm、深さ11cmを測る。ただし、壁部より離れて掘削されている。張り床は3枚検出されており、東側に焼土、粘土ブロックが多量に出土していることから、この付近にカマドが存在するものと推定される。遺物は甕、台付甕、坏、須恵器高台が出土している。国分式期に属する。

第17号住居址（第79、83、84図）

第15号住居址の南に平行する状態で検出された。やはり南北の壁部のみ検出され、一辺3.5m、壁高14cmを測る。壁溝の状態も第15号住居址例と類似しており、壁部より内側に位置し幅14cm、深さ11cmを測る。小規模な床下土壙があり、床面はローム面を叩きしめている。調査範囲内での柱穴、カマドは確認されなかった。遺物は豊富で甕、坏、土錘、砥石、鉄製紡錘車が出土しており、南壁ぞいに集中する傾向がある。国分式期に属する。

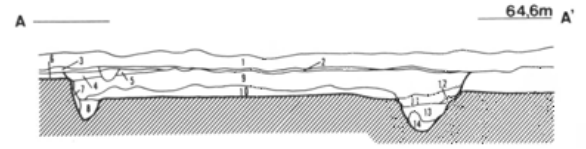
第18号住居址（第80、81図）

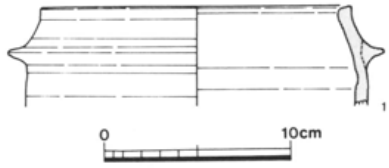
南端の東西に設定されたトレンチ内で検出した。遺構面は浅く表土下20cmで床面に達する。東西壁面及び、南西コーナー部を確認した。東西3.2m、南北4.1m以上、壁高15cmを測り長方形プランを呈する。壁溝は西壁ぞいに幅6cm、深さ7cmの細いものが検出されており、東壁部は幅広くなだらかな凹み状となっている。貯蔵穴は西南コーナーと、東壁の調査区限界付近において検出された。後者は2段で方形プランを呈し、東北コーナーが隣接する可能性が大きい。柱穴、カマドは検出されなかった。床面はローム面を叩きしめている。遺物は極めて少なく、須恵器羽釜形土器の鍔部分が出土したにすぎない。なお、本住居址の西に大規模な土壙状の掘削穴が検出された。覆土に砂等が観察されたが、下位より近年の瓦が多量に出土しており、東富田の人々の談によると戦前の観音堂火災時の瓦礫を埋めた穴であることが判明した。



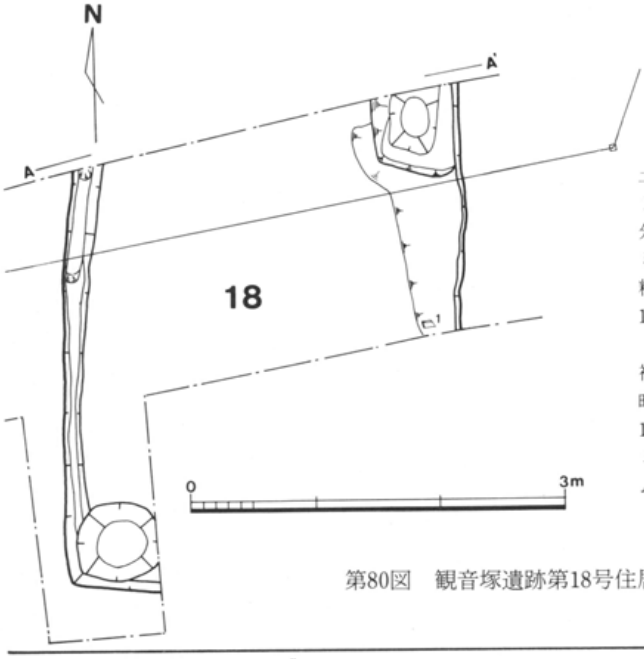
1、2、3、22、23、53、耕作土及び攪乱　4、24、40、暗褐色土（砂粒富む、ローム粒少）　5、20、暗茶褐色土（ローム、パミス粒含む、暗色ぎみ）　6、暗茶褐色土　7、5と同じ（ローム、パミス減）　8、4をベース（ローム極めて多い）　9、51、暗褐色土（パミス、ローム、砂粒含む）　10、14、17、暗褐色土（9と同じ、パミス減）　11、暗茶褐色土（ローム、パミス含む）　12、18、48、52、暗褐色土（褐色土・ローム・ブロック混土、鉄分、焼土粒含む、貼り床）　13、19、49、暗黄褐色土（粘土化したローム、貼り床）　15、暗茶褐色土（粘土粒子富む）　16、暗黄色土（ローム粒主体）　21、20と同じ（ローム増す）　25、暗褐色土（地山）　26、暗黄褐色土（地山）　27、攪乱　28、暗褐色土（パミス富む）　29、35、暗褐色土（粘土粒含む）　30、38、褐色土（ローム粒富み黄味帯びる）　31、36、黒褐色土（ローム粒含む）　32、33、攪乱　34、暗褐色土（ローム・ブロック含む）　37、暗褐色土（ローム粒増す）　39、黒褐色土（やや攪乱ぎみ）　41、暗褐色土（ローム粒含む）　42、黒褐色土（ローム粒含む）　43、黒褐色土（ローム微粒、砂粒含む）　44、40を基本（粘土極めて多く、焼土粒含む、カマド付近）　45、黒褐色土（砂粒増す）　46、灰褐色土（焼土粒、微細砂、炭粒に富む）　47、48と同じ　50、暗黄褐色土（褐色土・ローム粒混土、貼り床）

第79図　観音塚遺跡第15、17号住居址実測図





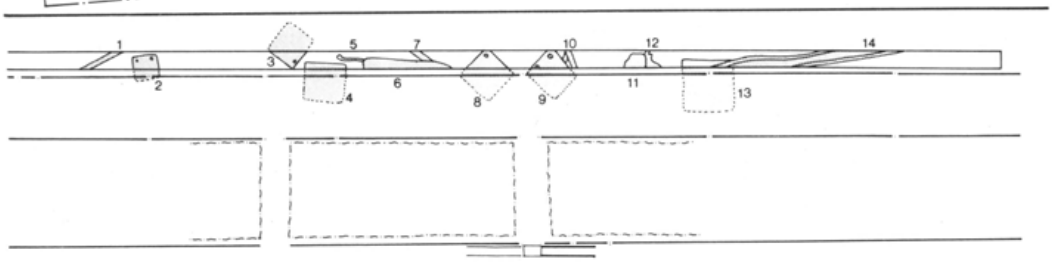
第81図　観音塚遺跡第18号住居址出土遺物実測図

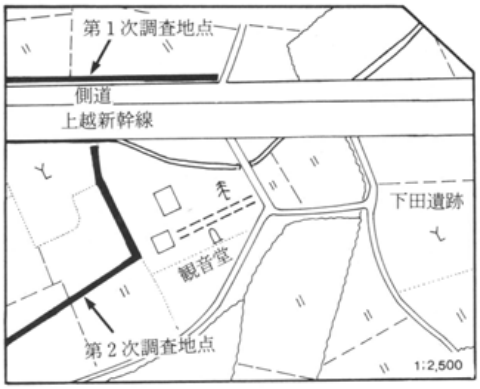


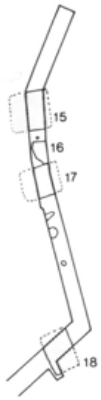
土層観察表

1、青灰褐色耕作土　2、3、暗赤褐色土(鉄分、パミス富む)　4、5、暗茶褐色土（パミス富む）　6、暗褐色土（ローム、パミス粒含む）　7、黄褐色土（ローム多量）　8、10にローム・ブロック混入　9、暗茶褐色土（ローム、パミス、焼土粒含む）　10、暗茶褐色土（9と同じ、ローム粒子増加）　11、暗茶褐色土（9と同、パミス少ない）　12、11にローム・ブロック含む　13、暗褐色土(パミス極めて多い)　14、暗黄褐色粘質土(ローム質)

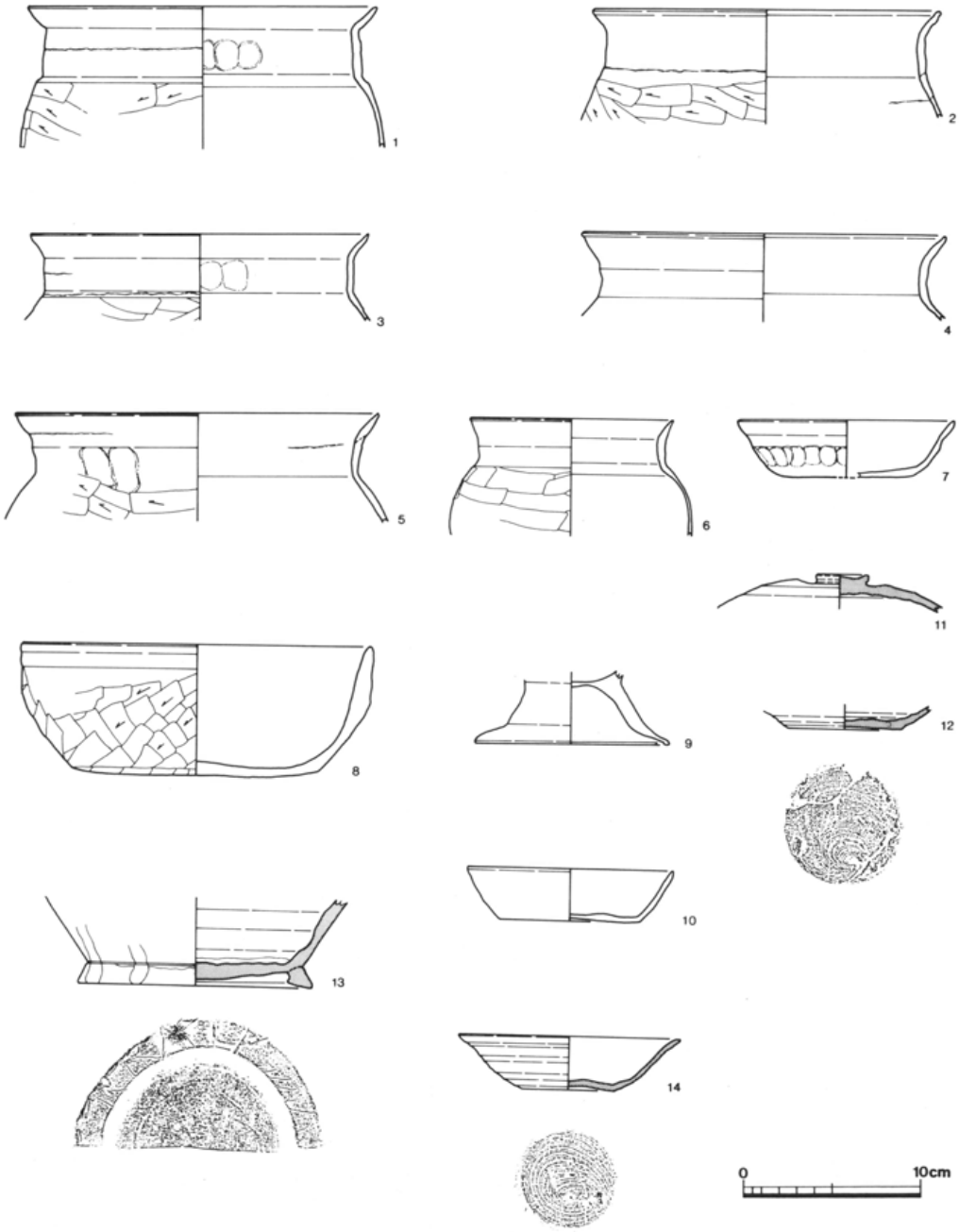
第80図　観音塚遺跡第18号住居址実測図



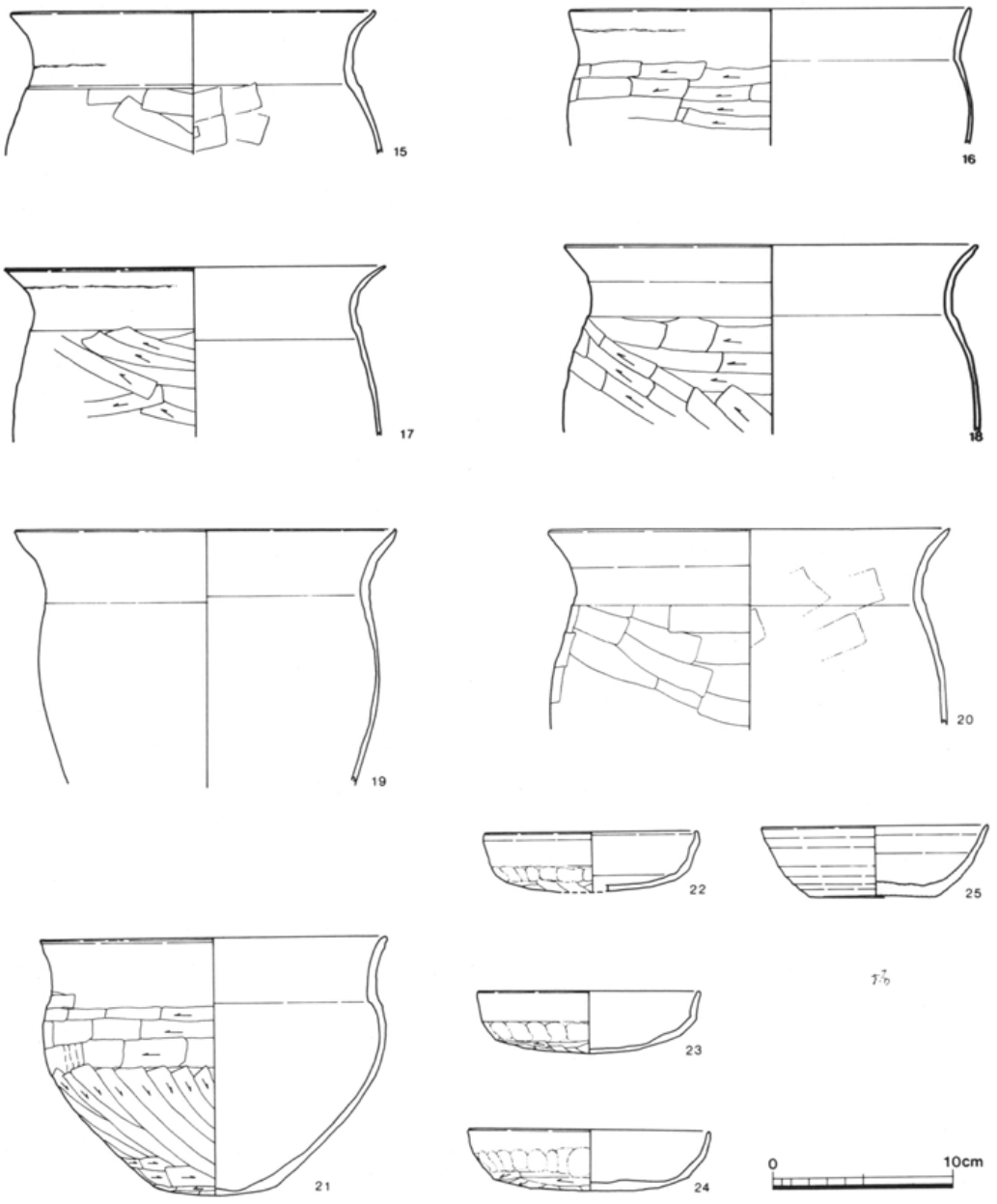




第82図　観音塚遺跡全測図



第83図　観音塚遺跡出土遺物実測図(1)



第84図　観音塚遺跡出土遺物実測図(2)

観音塚遺跡第２号住居址出土遺物観察表（第78図）

1	口径12.3　高4.7　胎土微砂、鉄斑、小礫。焼成普通。色調（内）灰褐色、（外）にぶい褐色。ロクロ整形、底回転糸切り、高台いびつ。№１。

観音塚遺跡第15号住居址出土遺物観察表（第83図）

1	口径19.8　高８以上　胎土微砂、鉄斑、石英。焼成良。色調にぶい橙色。口縁内外横ナデ、頸部内指頭、胴外ヘラ削り。
2	口径19.8　高6.3　胎土微砂、鉄斑。焼成良。色調（内）にぶい橙色、（外）明赤褐色。口縁内外横ナデ、胴外ヘラ削り。
3	口径19.2　高4.9　胎土微砂。焼成良。色調橙色。口縁内外横ナデ、頸部内指頭、胴ヘラ削り。
4	口径20.8　高５以上　胎土微砂。焼成良。色調（内）明赤褐色、（外）にぶい橙色。口縁内外横ナデ、胴外ヘラ削り、内ナデ。
5	口径20.6　高６以上　胎土微砂、角閃石。焼成良。色調（内）明赤褐色、（外）にぶい橙色。口縁内外横ナデ、頸部外指頭、胴外ヘラ削り、内ナデ。
6	口径11.6　高6.6以上　胴径13.8　胎土微砂、ザラザラ。焼成良。色調（内）明赤褐色、（外）にぶい赤褐色。口縁内外横ナデ、胴外ヘラ削り、内ナデ。
7	口径12.4　高3.2　胎土微砂、石英、鉄斑。焼成良。色調橙色。内ナデ、口縁ナデ、体部中位外指頭、下位ヘラ削りか。
8	口径20　高7.4　胎土鉄斑。焼成不良。色調（内）にぶい橙色、（外）にぶい赤褐色。口縁横ナデ、体部外ヘラ削り、内ナデ、摩滅著。
9	底径11　高4.2以上　胎土微粒富む、角閃石。焼成良。色調にぶい色。入念なナデ。№10
10	口径11.8　高３　胎土微砂、鉄斑。焼成良。色調（内）にぶい橙色、（外）にぶい赤褐色。口縁と体部内ナデ、体部外指頭か、底ヘラ削り。
11	高2.1以上　径12以上　つまみ径３　胎土細砂、長石。焼成堅緻。色調灰色。肩部回転ヘラ削り、天井部つまみ付け時ロクロナデ。
12	底径6.4　胎土微砂、小石。焼成堅緻。色調（内）暗灰色、（外）灰色。底回転糸切り、ロクロ整形。
13	高台径13.2　高５以上　胎土白色粒子（長石か）。焼成堅緻。色調（内）褐灰色にオリーブ灰色の縁口、（外）胴灰褐色、底褐灰色に縁口。ロクロ整形、底回転糸切り後ナデ
14	口径12.6　高３　胎土白色微砂、小礫、鉄斑。焼成堅緻。色調内外とも体部灰色、底暗赤褐色。ロクロ整形、底回転糸切り。№13。
15	口径20.2　高7.9以上　胎土微砂、石英、角閃石。焼成普通。色調（内）灰褐色、（外）暗赤褐色。口縁内外横ナデ、胴外ヘラ削り、内ナデ。№11。
16	口径22.4　高7.5以上　胎土微砂、石英、鉄斑。焼成良。色調明赤褐色。口縁内外横ナデ、胴外ヘラ削り、内ヘラナデ。№３。

17	口径21　高9.4以上　胎土微砂、石英、鉄斑。焼成良。色調にぶい赤褐色。口縁内外横ナデ、胴外ヘラ削り、内ヘラナデ。
18	口径23　高10.4以上　胎土細砂、角閃石、ザラザラ。焼成普通。色調橙色。口縁内外横ナデ、胴外ヘラ削り、内ヘラナデ。№11＋覆土＋第15住覆土。
19	21.8　高14.2以上　胎土微砂。焼成普通。色調（内）赤褐色、（外）赤橙色。口縁内外ナデ、胴内ヘラナデ、外摩滅著不明。№8。
20	口径22.4　高11以上　胎土細砂、角閃石、ザラザラ。焼成普通。色調橙色。口縁内外横ナデ、胴外ヘラ削り、内ヘラナデ。№9＋12。
21	口径19.2　高14.2　胴径19　胎土微砂、石英、角閃石。焼成良。色調（内）にぶい橙色、一部灰褐色、（外）暗赤褐色、一部明赤褐色。口縁内外横ナデ、胴外、底ヘラ削り、内ナデ。№5。
22	口径11.8　高3.3　胎土微砂。焼成良。色調にぶい橙色。口縁内外横ナデ、体部外中位指頭、底ヘラ削り。
23	口径12.4　高3.4　胎土細砂、石英、角閃石。焼成良。色調にぶい橙色。口縁内外横ナデ、体部外中位指頭、底ヘラ削り、内ナデ。№4。
24	口径13.3　高3.4　胎土微砂富む、鉄斑。焼成良。色調（内）にぶい橙色、（外）橙色。口縁内外横ナデ、体部外中位指頭、底ヘラ削り、内ナデ。№10。
25	口径12.6　高3.4　胎土微砂、石英、鉄斑。焼成良。色調にぶい橙色。ロクロ整形、底回転糸切り。№7。

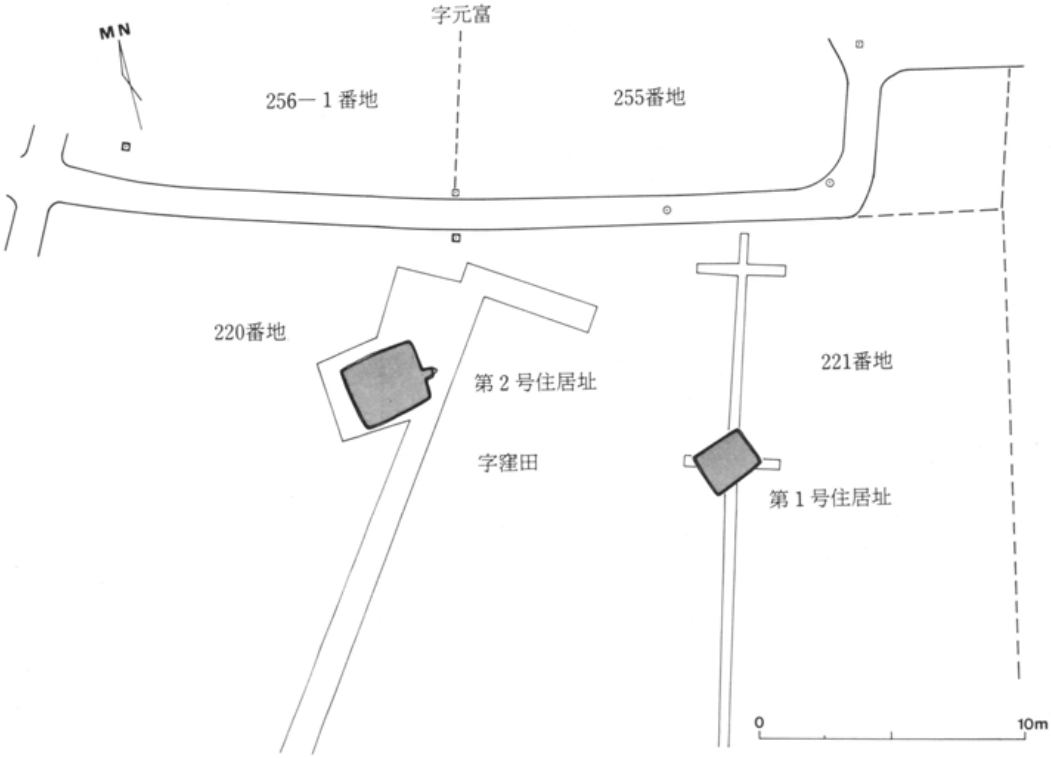
観音塚遺跡第18号住居址出土遺物観察表（第81図）

1	口径16.6　高5.3以上　胎土微砂、石英、白色微粒子。焼成良。色調灰白色。ロクロ整形

第6節　元富遺跡の調査

観音塚遺跡の東東北方200mに所在する。東富田集落の南東部を範囲とする本庄70号遺跡にあたる。調査は集落の最も南端に張り出した微高地上部分で、標高は64mを測る。本部分は南辺より一段高くなっており、設計上カット面の対象地となっていた。このため、本地区の調査は、事前にグリット、トレンチを設定した試掘調査を土地改良側で実施している。この時に検出された住居址を第1号住居址とした。しかし、本調査及び、ほ場整備工事中に急拠設計変更が実施され、南北に1本の小排水路が掘削されることとなった。本遺跡で唯一本発掘調査を行うこととなり、北側において第2号住居址を確認したが、小排水路の正確な位置決定がなされていないため、住居址部分を拡張し完掘した。

試掘、発掘調査地区の地番は東富田字窪田220、221、222、224番地にあたる。遺跡の字名については、字窪田が以南の窪田堀から由来するのに対し、本遺跡の中心部が以北の字元富にあたるため、中心部の字名を遺跡名とした。下田遺跡とは蛭川河川跡をはさみ対峙する位置にあり、観音塚遺跡と七色塚遺跡ともども、国分式期には有機的な関係下にあるものと推察される。なお、今回の発掘調査地区は本遺跡の最南端にあたることが判明した。(第85図)



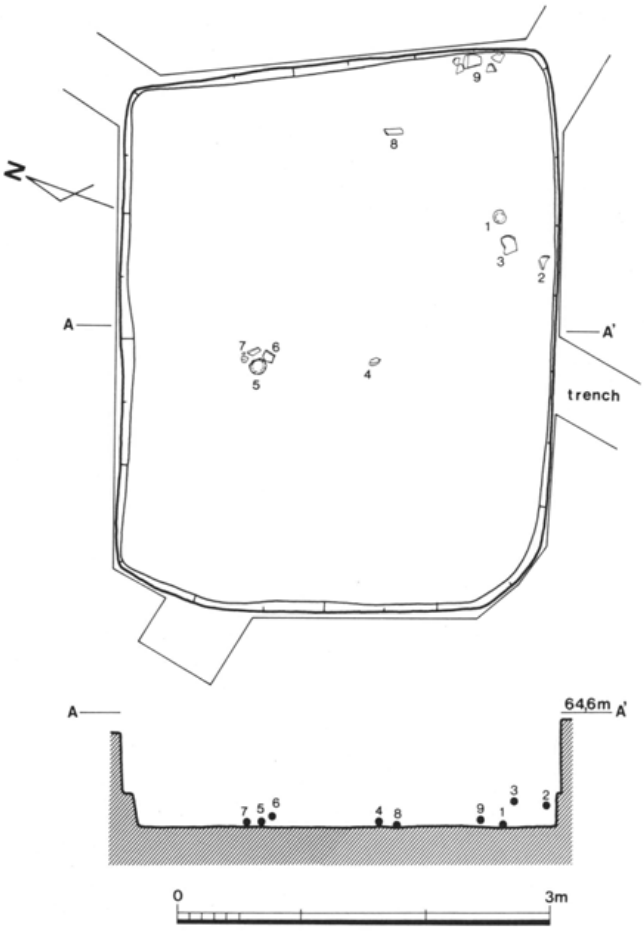
第85図　元富遺跡全測図

遺構と遺物

東西に各2軒の住居址を検出した。ともに、暗褐色粘土層を基盤としており、夏期は床面直上で湧水し、冬期には渇くとかなり硬質で、滞水層と考えられる。地表面上にはほとんど遺物が散布していない。

第1号住居址（第86、87図）

範囲及び、遺構有無等確認のための試掘調査で検出したため、カマド等は未確認である。－60cmで湧水し、トレンチ内はプール状となった。周辺の基本層序は上位から耕作土層、黒灰褐色土(黒褐色土)層、黄褐色粘土（黄褐色ローム）層の順に堆積している。地表下－85cmで床面を検出し、ローム面までは－64cmを測る。一辺4.4m×3.5mの隅丸方形プランを呈し南辺が幅広い、全体にいびつな状態である。壁高は浅く25cm前後で、柱穴、土壙等は検出されなかった。カマドについてはトレンチ外の東壁外に存在する可能性がある。遺物は少なく、床面付近より土師器、須恵器が出土している。坏を主体とし、「川島」と判読できる墨書土器と「川太」の可能性がある墨書土器片が出土しており、自然発生的な地名と推定される。国分式期にあたる



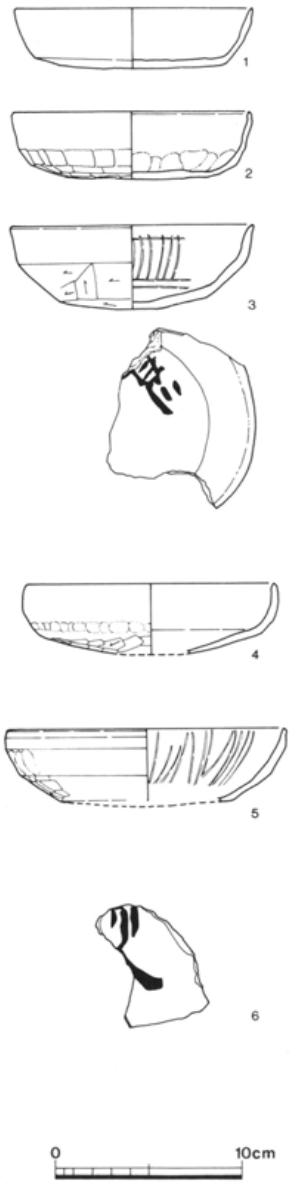
第86図　元富遺跡第1号住居址実測図

第2号住居址（第88、89、90、91図）

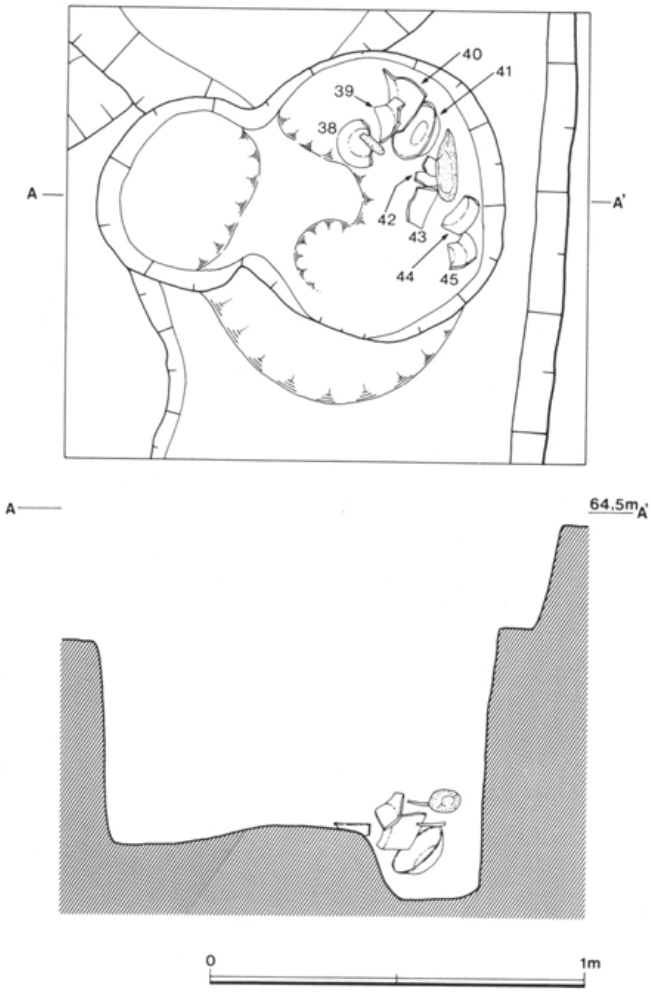
下田遺跡から北へ直行する小排水路予定地内で検出した。南東コーナーを最初に確認し、住居址の輪郭ぞいに拡張して完掘した。第1号住居址と同様に東西に長い方形プランを呈し、東西5.8m、南北4.8mを測り、北壁が長いいびつな状態である。壁高は28cmで床面は南西側が最も高く、周辺は不定形なドーナツ状に掘り窪められており、貼り床をほどこしている。北西コーナーよりに2基の土壙と南東コーナーを中心に多数の重複する土壙群が検出され、土壙10からは土器が転落遺棄状態で出土している。柱穴、壁溝は存在しない。カマドは東壁中央部のやや南よりで、壁外に掘り込まれていた。ただし、内部の遺存度は悪く、壁部の焼土化が確認されたにとどまる。遺物は多量に出土しており、大半が床面より出土している。

土師器、須恵器、土錘、鉄器等が見られ、特に土錘の量が多い。全体的に南、西に散乱していた。国分式期に属する。

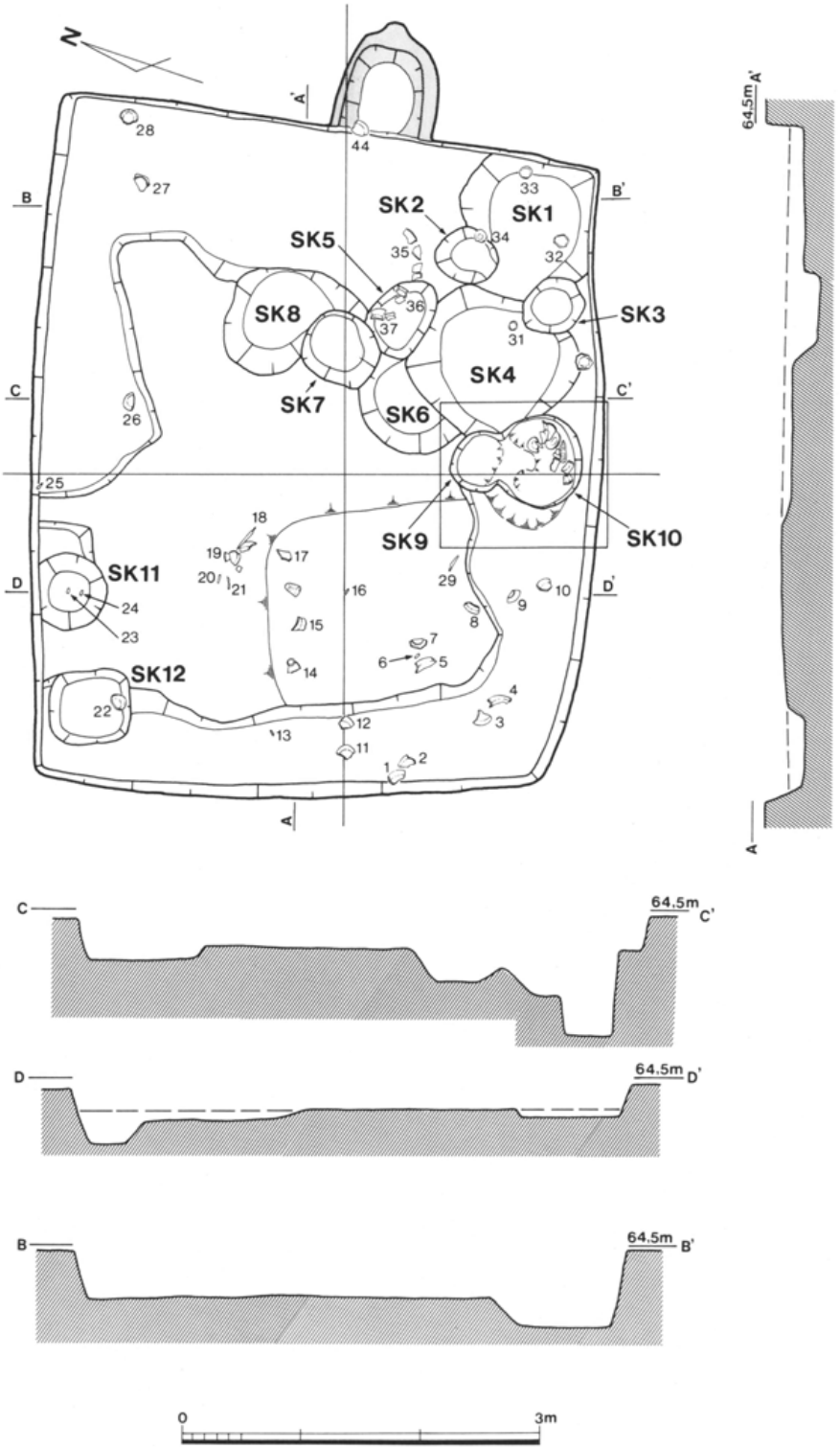
本遺跡は、その後下田遺跡の排土による周辺の同一レベル盛土により、小排水路以外は現状保存されることとなった。なお、試掘調査時に北端で黄褐色ロームが広がりが観察されており、現東富田集落東半下にローム層を基盤とする住居址群が分布するものと推定される。



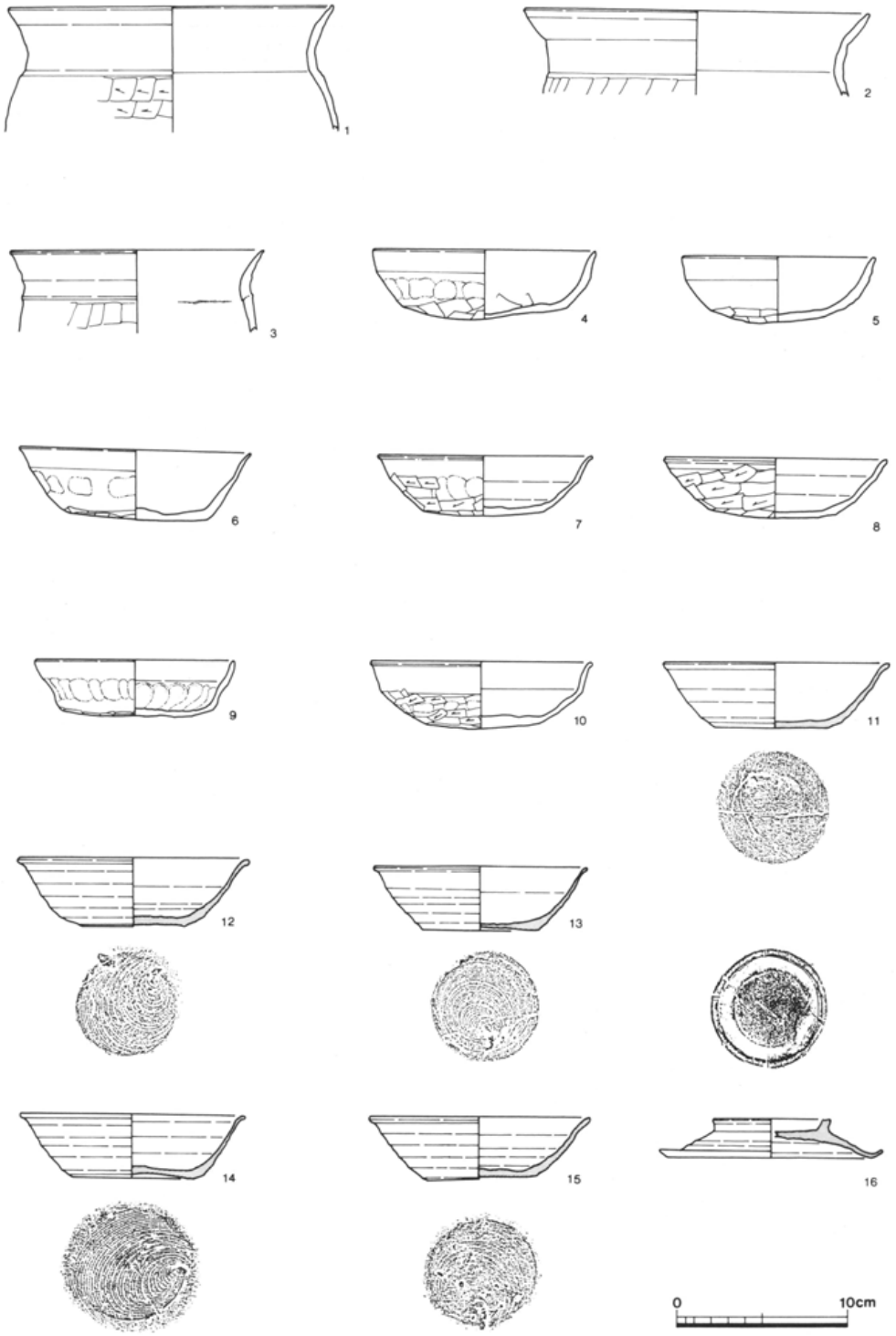
第87図　元富遺跡第１号住居址出土遺物実測図



第88図　元富遺跡第２号住居址貯蔵穴実測図



第89図　元富遺跡第２号住居址実測図



第90図　元富遺跡第２号住居址出土遺物実測図(1)

元富遺跡第1号住居址出土遺物観察表（第87図）

1	口径12.7　高3.2　胎土微砂。焼成良。色調橙色。口縁内外横ナデ、体部外中位下指頭、底ヘラ削り。№1。
2	口径12.6　高3.5　胎土微砂、鉄斑、石英。焼成良。色調明赤褐色。口縁内外横ナデ、体部指頭後横ヘラ削り、底ヘラ削り、内下指頭。№5。
3	口径13　高4.4　胎土微砂。焼成良。色調橙色。口縁内外ナデ、体部外、底ヘラ削り。内ナデ後、体部放射状暗文、底螺施状暗文。底外に川島墨書有り。
4	口径13　高3.7以上　胎土微砂、鉄斑。焼成良。色調にぶい橙色。口縁内外横ナデ、体部外中位指頭、底ヘラ削り。№4。
5	口径14.8　高3.9以上　胎土微砂、石英。焼成良。色調（内）にぶい橙色、（外）にぶい赤褐色。口縁内外横ナデ、体部外中位指頭、下底ヘラ削り、内放射状暗文。№9。
6	底部破片。

元富遺跡第2号住居址出土遺物観察表（第90図）

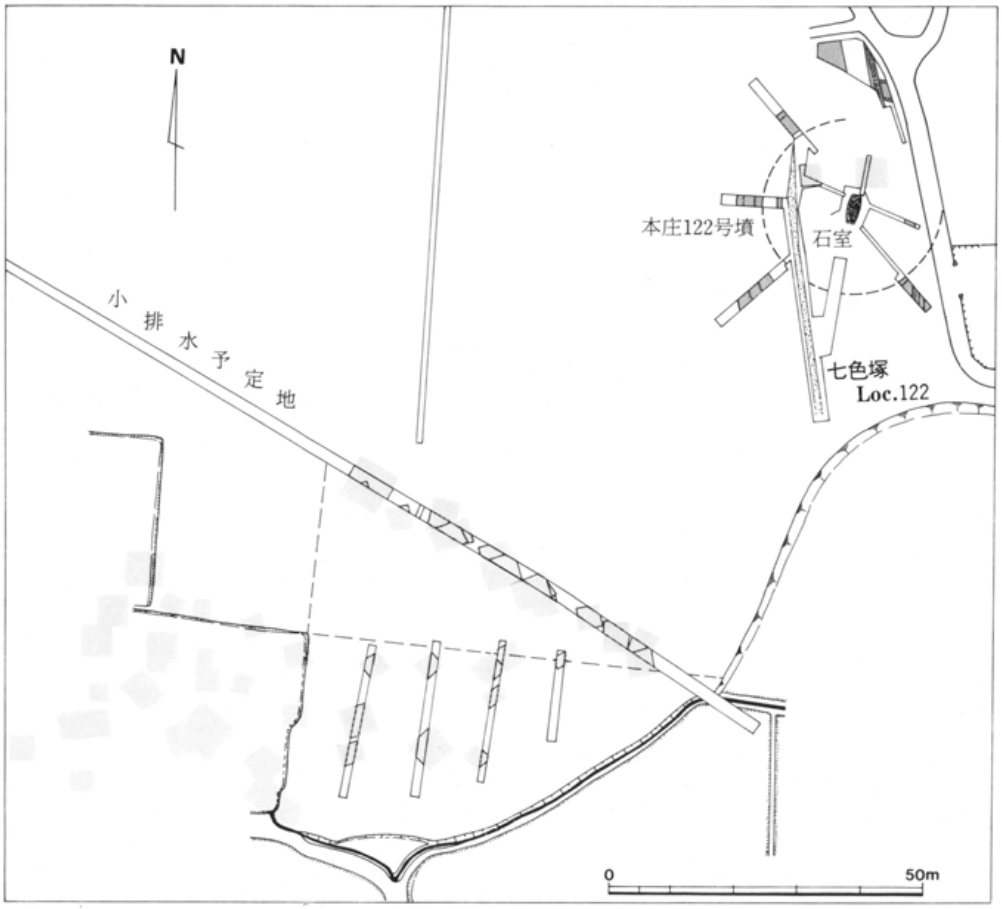
1	口径17.2　高7.4以上　胎土微砂、石英、鉄斑、角閃石。焼成良。色調（内）明赤褐色、（外）橙色。口縁横ナデ、体部ヘラ削り。
2	口径20.4　高4.9以上　胎土微砂、石英、鉄斑、角閃石。焼成良。色調淡赤橙色。口縁横ナデ、体部ヘラ削り。№4。
3	口径14.4　高4.8以上　胎土微砂、石英。焼成良。色調にぶい橙色。口縁横ナデ、体部ヘラ削り、内面ナデ。
4	口径13.1　高4　胎土微砂、石英ザラザラ。焼成普通。色調橙色。口縁横ナデ、体部中位指頭、下位より底ヘラ削り。全体摩滅著。№22＋覆土。
5	口径11.2　高3.8　胎土微砂、石英、長石。焼成普通。色調にぶい橙色。底ヘラ削り。全体摩滅著、器肉厚し。№33。
6	口径13.5　高4.1　胎土微砂、石英、角閃石ザラザラ。焼成普通。色調（内）橙色、（外）明赤褐色。体部中位指頭、底ヘラ削り。摩滅著。№7＋8＋覆土。
7	口径12.6　高3.5　胎土微砂、鉄斑。焼成良。色調橙色。口縁横ナデ、体部、底ヘラ削り部分的に指頭。№8。
8	口径13　高3.4　胎土微砂、石英、鉄斑。焼成良。色調（内）暗赤褐色、（外）赤褐色、口縁ナデ、体部、底ヘラ削り。№38。
9	口径11.6　高3.2　胎土微砂、石英、鉄斑。焼成良。色調にぶい橙色。口縁横ナデ、体部内外指頭、底ヘラ削り。カマド内出土。
10	口径13　高3.9　胎土微砂、石英、鉄斑。焼成良。色調（内）赤色、（外）赤褐色。口縁横ナデ、体部、底ヘラ削り、一部指頭。№11。
11	口径13.1　高3.8　胎土微砂極めて多い、小礫、鉄斑ザラザラ。焼成普通。色調にぶい褐色、底内外灰黄褐色。ロクロ整形、底回転糸切り。№39＋45＋覆土。
12	口径13.5　高4.1　胎土細砂、小石、鉄斑。焼成堅緻良。色調灰色。ロクロ整形、底回転糸切り。№41。
13	口径12.6　高3.7　胎土細砂、小石、白色粒有り。焼成良。色調灰色。ロクロ整形、底回転糸切り。№9＋42＋覆土。
14	口径13.2　高3.9　胎土微砂、小石、鉄斑。焼成堅緻。色調（内）褐灰色、（外）灰色、ロクロ整形、底回転糸切り、底部周辺ナデ。№1＋2＋32。
15	口径13　高3.7　胎土細砂、小石鉄斑、石英。焼成良。色調（内）灰黄色、（外）黄灰色、ロクロ整形、底回転糸切り。№28。
16	口径13　高2.3　つまみ部径6.8　胎土細砂、小石、鉄斑ザラザラ。焼成堅緻。色調灰色。ロクロ整形、上辺回転糸切り後つまみ貼り付けロクロナデ。皿か。カマド＋覆土。

第７節　七色塚遺跡の調査

事業地内の東南端にあたる。久下塚集落が位置する微高地から西西南へ張り出した舌状微高地で、標高64mを測る。北側は蛭川河川跡が東東北流しており、元富遺跡と対峙する位置にある。南側は比高差約１mの小規模な崖を呈しており、同崖地形は久下塚、新田原集落の南縁部に連続的に観察される。遺跡が立地する微高地は、北及び南へわずかに傾斜しており、中央稜線（みかけ上はない）より南側にあたる、男堀川が流水する微低地を見おろす側に分布している。調査は小排水路建設部分で実施したが、本遺跡の範囲は最も高所にあたるため、設計上カット面の対象地となっていた。このため、調査中に土地改良事務所側で周辺の試掘調査も並行して行われた。その結果、微高地南半に遺構が密集していることが判明し、さらに、微高地西西南下の低地においても住居址が多数分布していることが判明した。したがって、本付近は設計変更により現状保存される運びとなった。なお、遺跡名については、本庄71号遺跡として周知であるが、東富田字下田196番地にあたり、字名を取ると前記下田遺跡と混同するおそれのあるため、地元で呼称されている七色塚を遺跡名称とした。（第92図）

遺構と遺物

遺構は住居址を主体とし、試掘、発掘、ボーリング等諸調査により50数軒以上存在することが判明



第91図　七色塚遺跡全測図

した。ただし、後述するように五領式期の住居址は遺跡の東端に所在する本庄122号墳下に集中し、それ以降の住居址は南西部を中心として分布していた。

第1号住居址（第93、94、98図）

小排水路東南部で、当時ビニールハウスが位置した部分の東側にあたる。以下は幅2m内外のトレンチ掘りのため、住居址の全容は把握できなかった。第1号住居址は南北にやや長く北西及び、東南コーナーが確認された。柱穴、周壁溝はない。一辺4×3.2m、壁高33cmを測る。カマドは東壁の南よりに設置されており、壁外に張り出しているが、末端は調査区外にあたる。全長150cm以上、幅110cmを測り、窯底に皿状の土壙を有する。両側の袖部先端には甕が埋設されており、右側は完形であった。また、左側埋甕の正面には坏1点が出土している。なお、カマドの右側に接して貯蔵穴と思われる土壙が検出された。遺物は覆土中に多数見られたが床面資料は少なく、カマド内より若干出土したにとどまる。真間式期に属する。

第2号住居址（第93、95、98、99図）

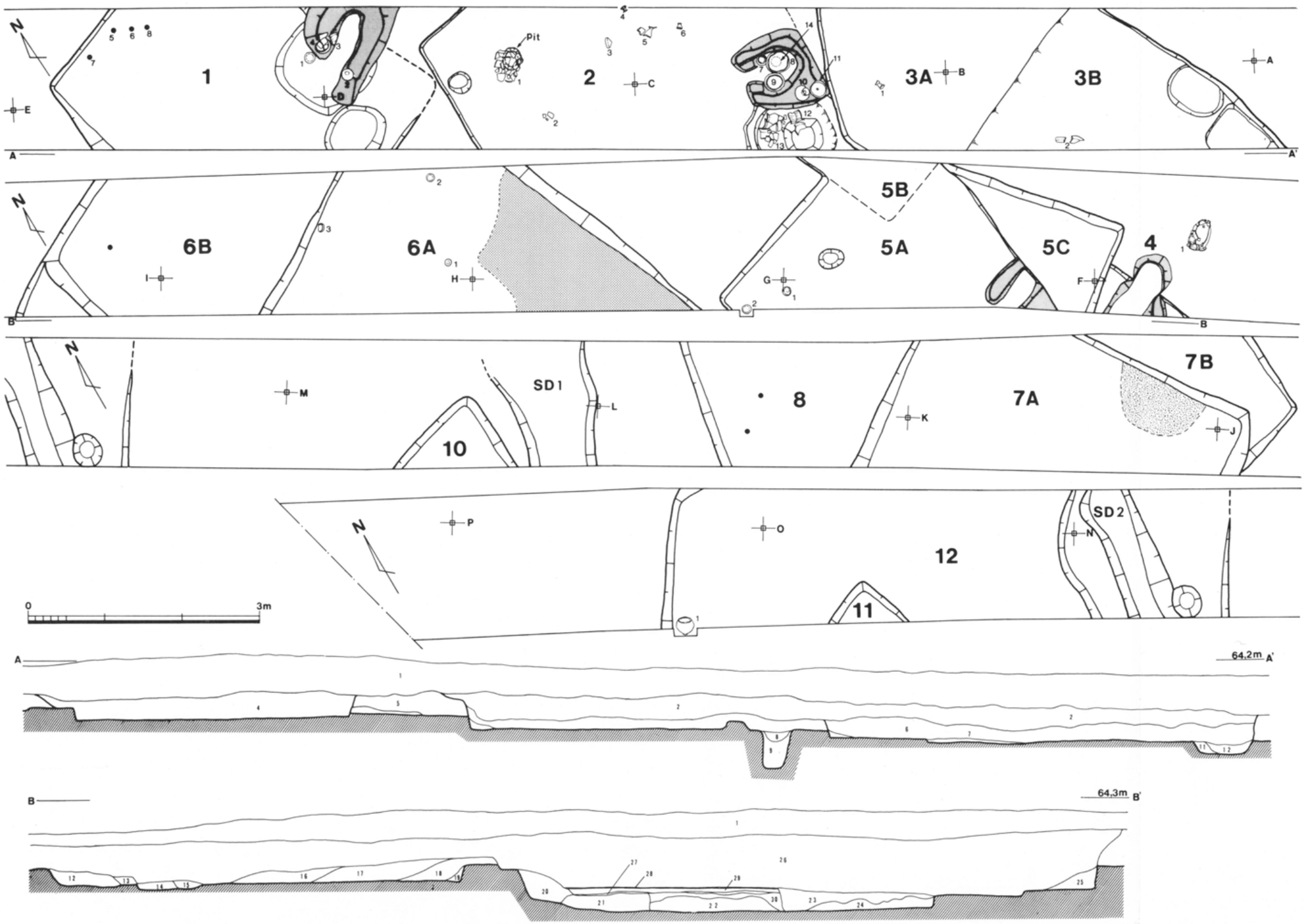
第1号住居址の東南コーナーに接して西北コーナーと東壁付近が検出された。ほぼ東西に主軸を置き、西北コーナーに接して柱穴を検出している。東西の一辺は4.4m、壁高20cmを測る。周壁溝は検出されなかった。カマドはやはり東壁の南よりに設置されている。壁外に出ておらず、灰褐色粘土を使用しており、遺存度がよい。全長95cm、幅100cmを数ぞえ、焚口部上部が崩落したような状態が観察された。カマドの右側とコーナーの間には明瞭な貯蔵穴が検出された。2段になっており隅丸方形で、外側に帯状に土手が築かれている。幅120cm、深さ55cm遺物は柱穴上で甕が見られ、カマド内から高坏を支脚に転用したものの上に甕がすえつけられ、横に甕2点がそなえつけられていた。右袖の奥の内部には扁球胴坩、鉢形甑の完形品が埋設されていた。貯蔵穴内のカマドよりの上面斜面には甑及び、甕がひしゃげた状態で出土している。

第3A・B号住居址（第93図）

第3A号住居址は、西南コーナー付近が第2号住居址のカマドの縁から貯蔵穴の一部を切っており、相対する部分は第3B号住居址に切断され、規模は不明である。一辺の最大長20m以上、壁高18cm、柱穴、周壁溝、炉、カマドは検出されていない。高坏等が若干出土したにとどまる。第3B号住居址は本小排水路内トレンチの東端に位置する。およそ東西に配置されており、北コーナーが推定されるにすぎず、規模は不明である。東壁の一辺は3.3m以上、壁高19cmを測る。第3A号住居址との切り合いは不明瞭で、わずかな段差が観察される。東壁中央部に焼土が見られたが、調査の結果、カマドではなく床面に浅い土壙が検出されたにとどまる。これがカマド下の土壙にあたるものかは不明である。さらに、右側には方形を呈する土壙が認められ、貯蔵穴の可能性が示唆される。規模は60cm×80cm。遺物は少なく床面資料はない。鬼高式期にあたる。

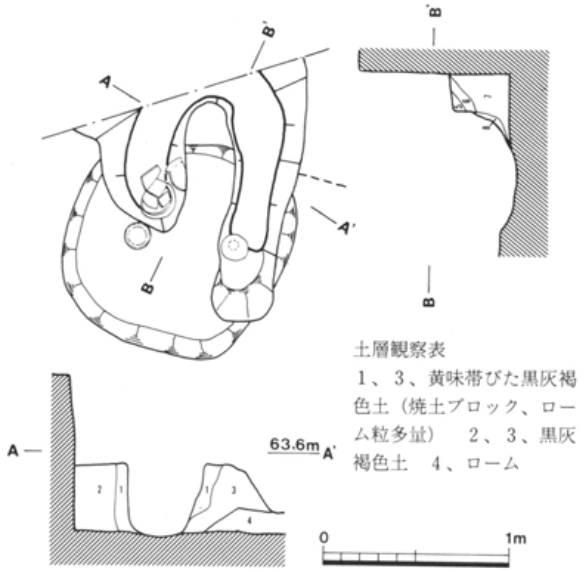
第4号住居址（第93、96、99図）

以降は第1号住居址より北西方にあたる。本住居址はカマドのみが検出された。東壁面に掘り込まれており、左袖は一部を第5C号住居址に切断され、内面は焼土化が著しい。推定される煙道付近より甕1点が出土している。国分式期に属する。



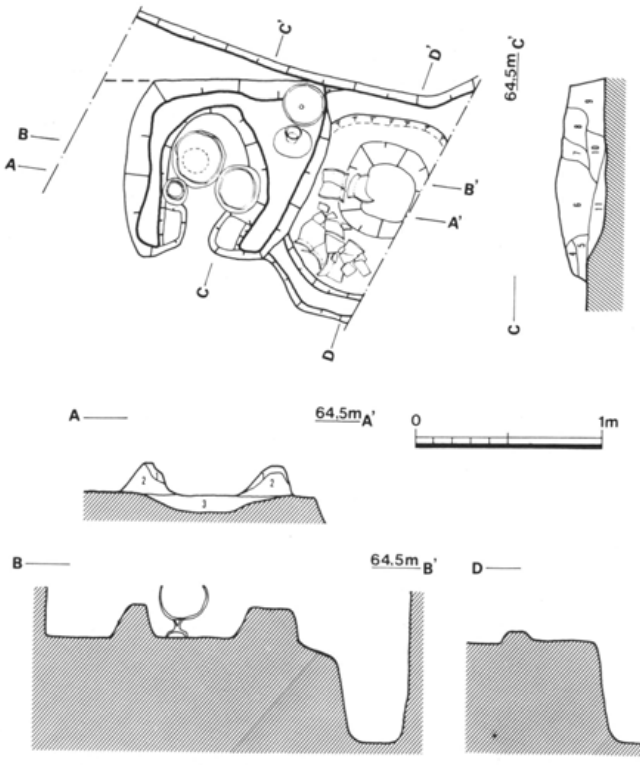
1、黒灰色土（白色パミス多量）　2、黒褐色土（ローム粒含む）　3、黒褐色土　4、黒灰褐色土（焼土粒含む）　5、黒灰褐色土　6、黒褐色土（ローム、白色パミス粒含む）　7、6と同じ（礫含む）　8、黒褐色土（ローム・ブロック含む）　9、ローム、黒褐色土混土　10、黒土　11、暗褐色粘土ブロック　12、カマド　13、黒褐色土（焼土多量）　14、灰褐色粘土　15、焼土・粘土　16、黒褐色土（黄味帯びる）　17、黒褐色土（ローム・ブロック含む）　18、黒灰褐色土　19、ローム・ブロック　20、黒褐色土　21、褐灰色粘土・ローム・ブロック混土（斑状、焼土多量）　22、粘土・焼土混土　23、黒灰褐色土（黄味帯びる）　24、暗黄褐色土　25、ローム・ブロック　26、黒褐色土（パミス含む）　27、暗灰色粘土　28、ローム叩き貼り床　29、黒灰色土・黄褐色ローム粒混土　30、黒土・ローム・ブロック混土

第92図　七色塚遺跡第1～12号住居址実測図



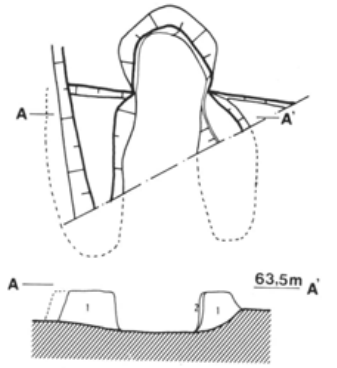
土層観察表
1、3、黄味帯びた黒灰褐色土（焼土ブロック、ローム粒多量）　2、3、黒灰褐色土　4、ローム

第93図　七色塚遺跡第1号住居址カマド実測図



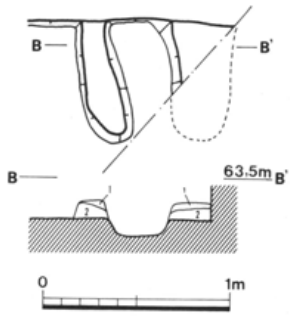
土層観察表
1、4、5、7、焼土　2、黒灰褐色粘土質土　3、11、黒灰色土（灰層）　4、灰褐色粘土ブロック　6、黒褐色土（焼土粒多量）　8、焼土ブロック　9、黄灰褐色粘土質土　10、黒土ブロック

第94図　七色塚遺跡第2号住居址カマド実測図



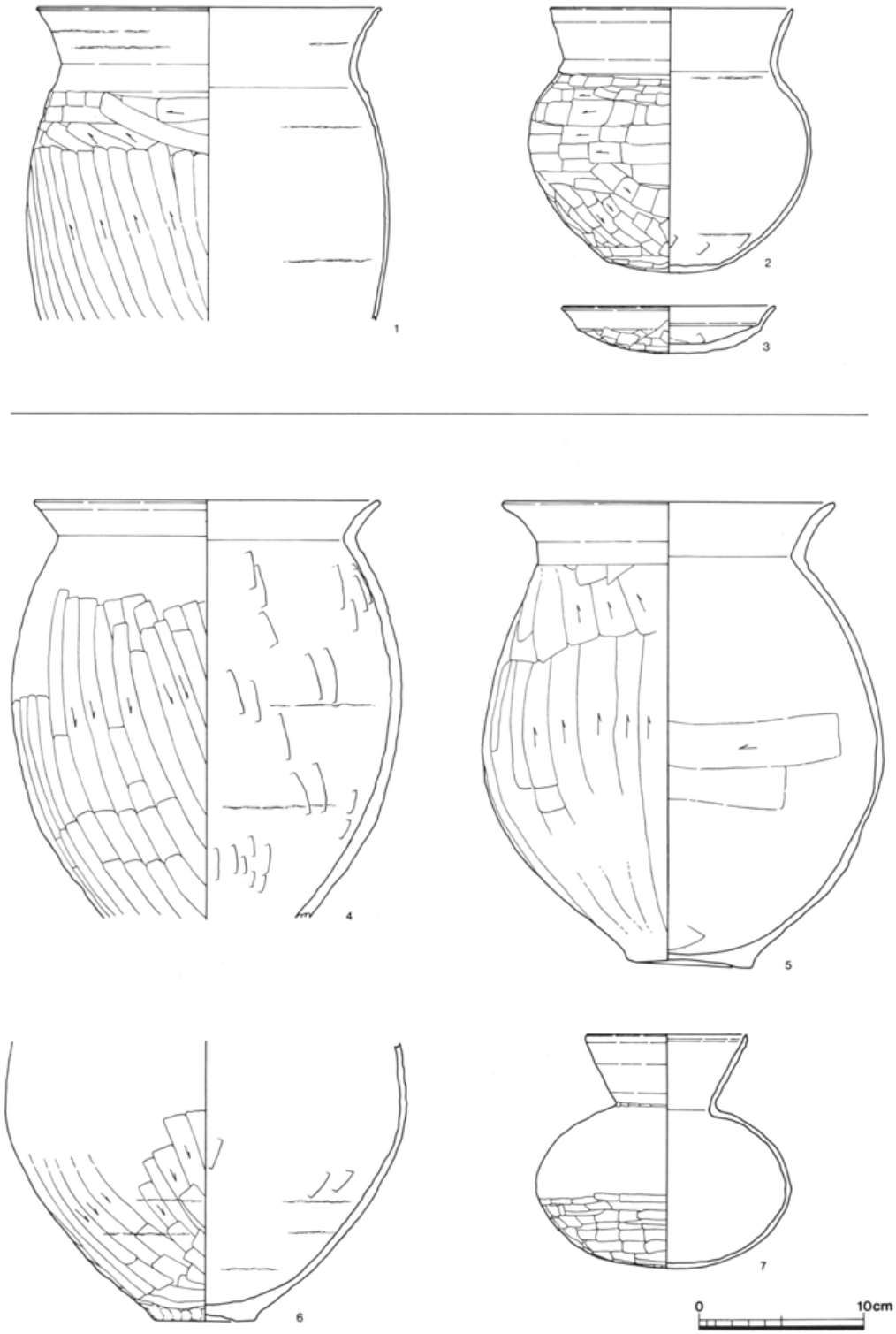
土層観察表
1、灰褐色粘土　2、焼土ブロック

第95図　七色塚遺跡第4号住居址カマド実測図

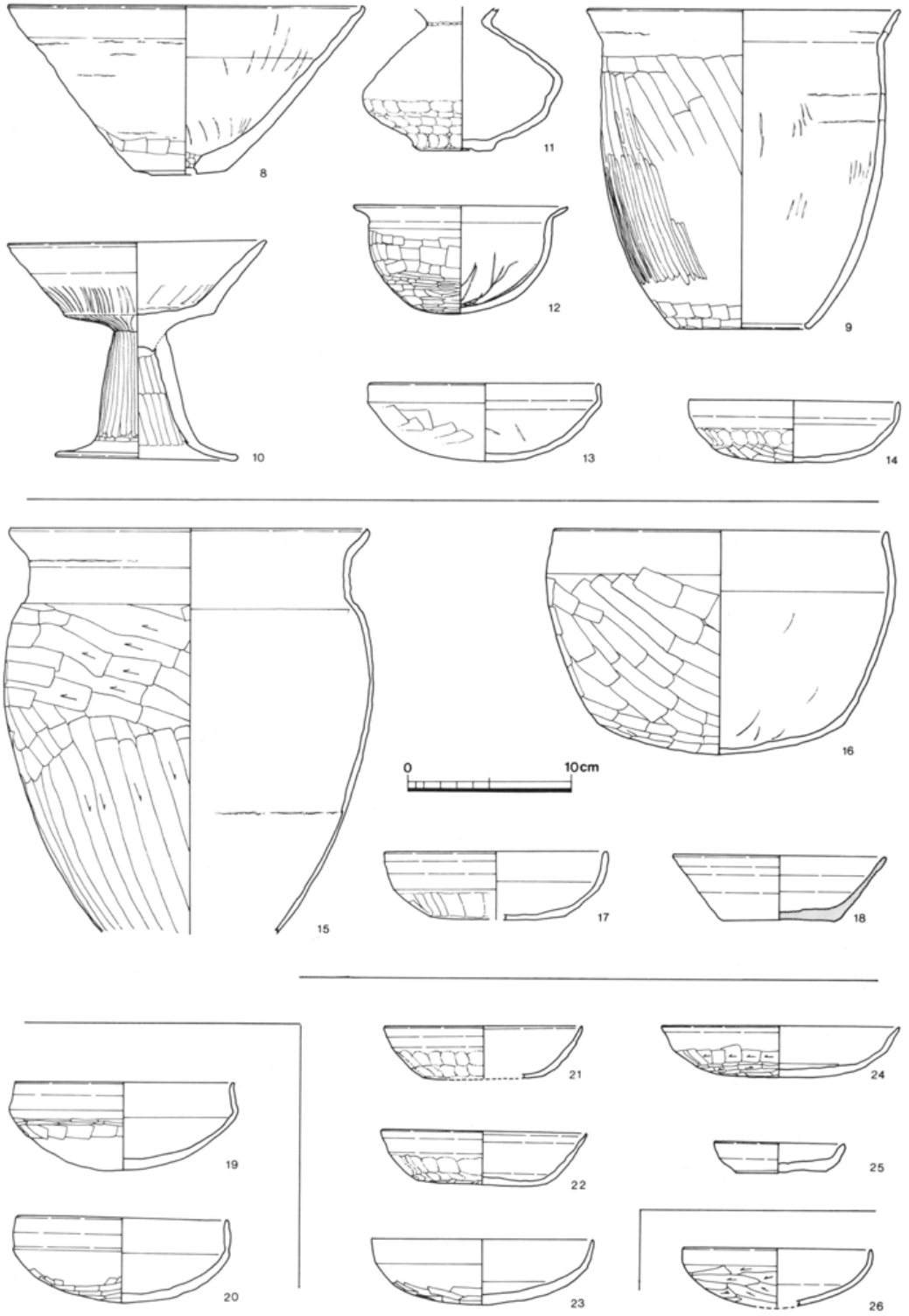


土層観察表
1、焼土　2、灰褐色粘土

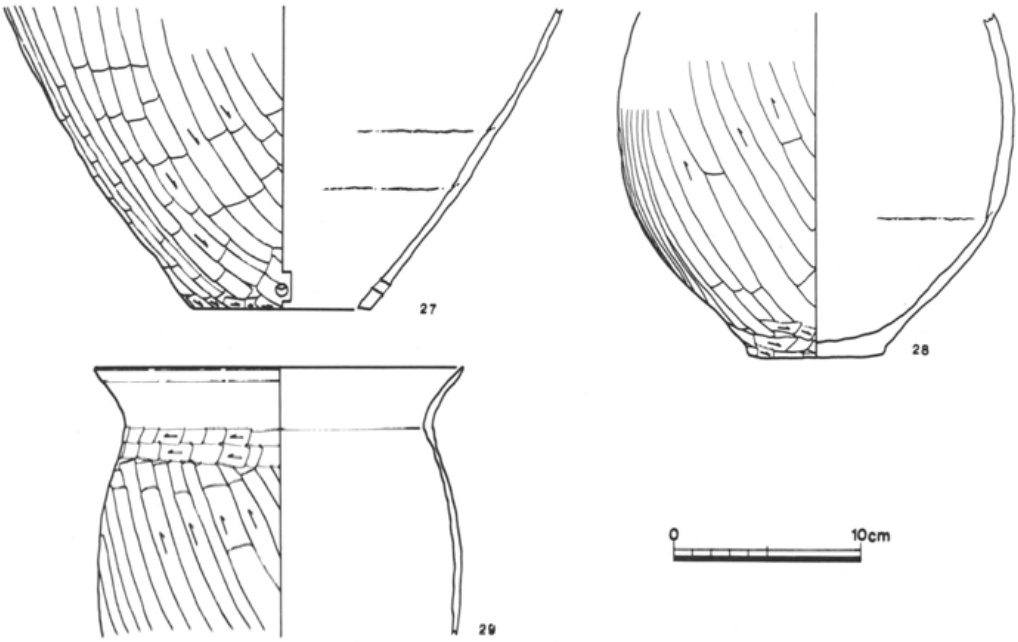
第96図　七色塚遺跡第5A号住居址カマド実測図



第97図　七色塚遺跡出土遺物実測図(1)



第98図　七色塚遺跡出土遺物実測図(2)



第99図　七色塚遺跡出土遺物実測図(3)

七色塚遺跡出土遺物観察表（第97、98図）

1	口径20.8　高19　胴径22　胎土微砂、石英、角閃石、鉄斑。焼成良。色調にぶい橙色。口縁内外横ナデ、肩部横、斜めヘラ削り。胴部縦ヘラ削り。ＮＥＷ№４
2	口径14.8　高16　胴径17.2　胎土微砂、石英、角閃石。焼成良。色調（内）橙色、（外）にぶい黄橙色。口縁内外横ナデ、胴中位横ヘラ削り、下位斜めヘラ削り、底不定方向ヘラ削り。ＮＥＷ№２。カマド袖内出土。
3	口径12.8　高2.9　胎土微砂、鉄斑、石英。焼成良。色調灰赤色。口縁内外横ナデ、体部底ヘラ削り、内面底ヘラ痕。ＮＥＷ№１。
4	口径21　高25.1以上　胎土微砂、細砂、石英、鉄斑。焼成良、色調にぶい橙色。口縁内外横ナデ、胴部ヘラ削り。№２＋ＮＥＷ№９＋カマド内＋覆土。
5	口径20.2　高28　胴径24.3　胎土砂、小石、角閃石、鉄斑、石英。焼成普通。色調（内）橙色、（外）暗褐色。口縁内外横ナデ、胴部ヘラ削り（摩滅著）、内面ヘラナデ、底部ナデ。ＮＥＷ№１＋№10。
6	口径24.2　高16.8以上　胴径６　胎土微砂、細砂、鉄斑、石英。焼成良。色調（内）にぶい赤褐色、（外）暗赤褐色。胴部斜めヘラ削り、下位横ヘラ削り、底部ナデ、内外に輪積み痕。№８。
7	口径9.8　高14.1　胴径15.4　胎土微砂、鉄斑、焼成良。色調（内）にぶい橙色、（外）明赤褐色。口縁内外横ナデ、体部ヘラ削り後、ヘラ磨き、下位は横ヘラ削り明瞭。№10。
8	口径21.8　高16.8　単孔径2.9　胎土微砂、石英、鉄斑。焼成良。色調にぶい橙色。口縁内外横ナデ、体部ヘラ削り後ナデか、孔部周辺ヘラ削り。№11。
9	口径19.2　高14.5　単孔径7.6　胴径17.6　胎土微砂、鉄斑、ザラザラ。焼成普通。色調橙色。口縁横ナデ、体部ヘラ削り後下位をヘラ磨き、単孔部横ヘラ削り、ナデ、内面ヘラ痕、ナデ、輪積み痕。№12。
10	口径15.8　高　13.4　胎土微砂、石英。焼成良。色調（内）赤色、（外）にぶい橙色。口縁横ナデ、体部より受部細かい線状ヘラ磨き、脚部内面横ヘラ削り。№14。
11	胴径12.2　高8.7以上　胎土微砂、石英。焼成良。色調（内）赤色、（外）にぶい赤褐色、全体ヘラ削り、胴下半指頭著。第１号住側より出土。混入品。第２号住に帰属。
12	口径13.1　高6.5　胎土微砂、鉄斑、石英。焼成良。色調（内）暗赤褐色、（外）明赤褐色、口延横ナデ、体部ヘラ削り後ヘラ磨き、内面ナデ、底放射状ヘラ磨き。№７。

13	口径14　高4.7　胎土微砂、鉄斑、石英。焼成良。色調橙色。口縁横ナデ、体部ヘラ削り内面ヘラナデ、摩滅著。№10。
14	口径12.8　高3.8　胎土微砂、鉄斑、石英。焼成良。色調（内）にぶい赤褐色、（外）にぶい橙色。口縁横ナデ、体部指頭、底ヘラ削り。混入か。№15。
15	口径22　高　24.6以上　胴径22.6　胎土微砂、石英、鉄斑。焼成良。色調（内）橙色、（外）にぶい橙色。口縁横ナデ、胴中位横ヘラ削り、下半斜め縦ヘラ削り、内外に輪積み痕。№1。
16	口径10.8　高13.6　胎土微砂、鉄斑、気泡多い。焼成普通。色調にぶい橙色。口縁横ナデ体部斜めヘラ削り、底不定方向ヘラ削り、内面ナデ。№2。
17	口径13.6　高4.1　胎土微砂、石英。焼成良。色調（内）橙色、（外）にぶい橙色。口縁横ナデ、体部横ヘラ削り、底不定形ヘラ削り、内面ナデ。№2。
18	口径13　高4　胎土細砂、小礫、ザラつく。焼成良。色調（内）灰褐色、（外）灰色。底回転糸切り（時計回り）。
19	口径13.2　高5.3　胎土微砂、石英。焼成良。色調（内）赤褐色、（外）明赤褐色。口縁内外ナデ、体部横ヘラ削り、上半はヘラ磨き。№1
20	口径12.9　高5.1　胎土微砂、石英。焼成良。色調明赤褐色。口縁横ナデ、体部ヘラ削り後ナデ、底ヘラ削り。№2。
21	口径12.2　高3.2　胎土微砂、鉄斑、石英。焼成良。色調（内）灰赤色、（外）にぶい赤褐色。口縁横ナデ、体部指頭、底ヘラ削り。№8。
22	口径12.6　高3.2　胎土微砂、鉄斑、石英。焼成良。色調（内）橙色、（外）明赤褐色、口縁横ナデ、体部指頭、底ヘラ削り。№2。
23	口径13.4　高4　胎土微砂、鉄斑、石英。焼成良。色調（内）明赤褐色、（外）にぶい赤褐色。口縁横ナデ、体部ナデ、底ヘラ削り。
24	口径7.3　高3.1　胎土緻密、鉄斑、石英。焼成良。色調（内）赤褐色、（外）明赤褐色、口縁横ナデ、体部、底ヘラ削り。№10。
25	口径8.1　高1.9　胎土微砂、石英。焼成良。色調にぶい橙色。口縁横ナデ、底ヘラ削り。№1。
26	口径11.6　高3.5以上　胎土細砂、鉄斑。焼成良。色調にぶい橙色。口縁横ナデ、体部ヘラ削り。№2。
27	底径9.4　高16以上　胎土細砂、小石、石英、鉄斑。焼成良。色調（内）暗赤褐色、（外）明赤褐色。胴部斜めヘラ削り、底周辺横ヘラ削り、小穿孔は焼成前に穿つ。№6。

七色塚遺跡第12号住居址出土遺物観察表（第101図）

28	胴径21　高18.5　胎土細砂、石英。焼成普通。色調（内）にぶい赤褐色、（外）橙色。胴外斜めヘラ削り、底周辺横ヘラ削り、底不定方向ヘラ削り。№1。
29	口径19.8　高14.4以上　胎土微砂、石英、角閃石。焼成良。色調橙色。口縁内外横ナデ、肩付近横ヘラ削り、胴外斜めヘラ削り。№3。

七色塚遺跡 Lcc 122地点出土遺物観察表（第101図）

1	高9以上　胎土微砂、石英、鉄斑。焼成良。色調（内）明赤褐色。（外）赤褐色。脚外面ヘラ磨き、裾ヘラ削り、内面ヘラ削り。
2	裾径14.8　高8.6以上　胎土微砂。焼成良。色調（内）赤褐色、（外）にぶい赤褐色。外面ヘラ磨き、内面ヘラ削り粗雑。
3	口径10.8　高6.7　胴径11.1　胎土微砂、石英、鉄斑、角閃石。焼成良。色調（内）明赤褐色、（外）橙色。口縁横ナデ、体部ヘラ削り後ナデ、底ヘラ削り。№1。
4	口径10.1　高8.8以上、胴径10.2　胎土微砂、石英、角閃石。焼成良。色調明黄褐色。口縁内外横ナデ、体部ヘラ削り。
5	口径8.3　高7.8　胴径7.2　胎土微砂、石英、鉄斑。焼成良。色調にぶい橙色。口縁横ナデ、体部中位までヘラ削り後ナデ、下半ヘラ削り、内面ヘラナデ。№2
6	口径14.8　高10.5以上　胴径14　胎土微砂、石英。焼成良。色調（内）赤色、（外）赤褐色。口縁横ナデ、体部ヘラ削り後上位ナデ、内面輪積み痕。
7	口径8　高3.6以上　胎土微砂、石英。焼成良。色調（内）暗赤色、（外）暗赤褐色。口縁外横ナデ、内ヘラ磨き、体部外免削り、脚部外面ヘラ磨き。№1。

第５Ａ、Ｂ、Ｃ号住居址（第93、97、99図）

切り合い関係が著しく、遺存度のよい第５Ａ号住居址は北壁と東壁がいびつで方形を呈さない。一辺は3.4mと推定される。壁高26cm。周壁溝は検出されなかった。カマドは東壁に設置されている。比較的良好な灰褐色粘土を使用しており、全長66cm、幅82cmを測る。覆土中の土器は鬼高、真間、国分式が混在しており、これらは本住居址ＡＢＣの時期を暗示しているものと推察されるが、Ａ号住居址の西コーナー付近の床面より２点の坏が出土しており、鬼高Ｉ式期古段階に所属する。第５Ｂ号住居址はトレンチ北東端にあたり、平面的にはほとんど調査範囲外であった。したがって、規模、性格、時期等は不明である。第５Ｃ号住居址もまた、第５Ａ号住居址の東に東コーナーを検出したにとどまる。一辺は2.5m以上、壁高10cmを数える。

第６Ａ、Ｂ号住居址（第93、99図）

第５Ａ号住居址の西コーナーに近接して、第６Ａ号住居址の東壁が走る。北壁が検出されており、トレンチ北側外付近に北コーナーが存在する。一辺５m以上、壁高62cmを測り、周壁溝、柱穴、カマド等は検出されていない。東壁よりの床面は一部が貼り床を呈しており、粘土質土、ローム土が極めて薄く敷きつめられ、叩き締められている。第６Ｂ号住居址は、前住居址に平行して西北側に位置する。西コーナーが検出されている他は、遺構、遺物ともに明瞭差に欠ける。なお、コーナーの南西に壁状の立ち上がりが認められるが、住居址にあたるものかは不明である。

第７Ａ、Ｂ、８号住居址（第93、99図）

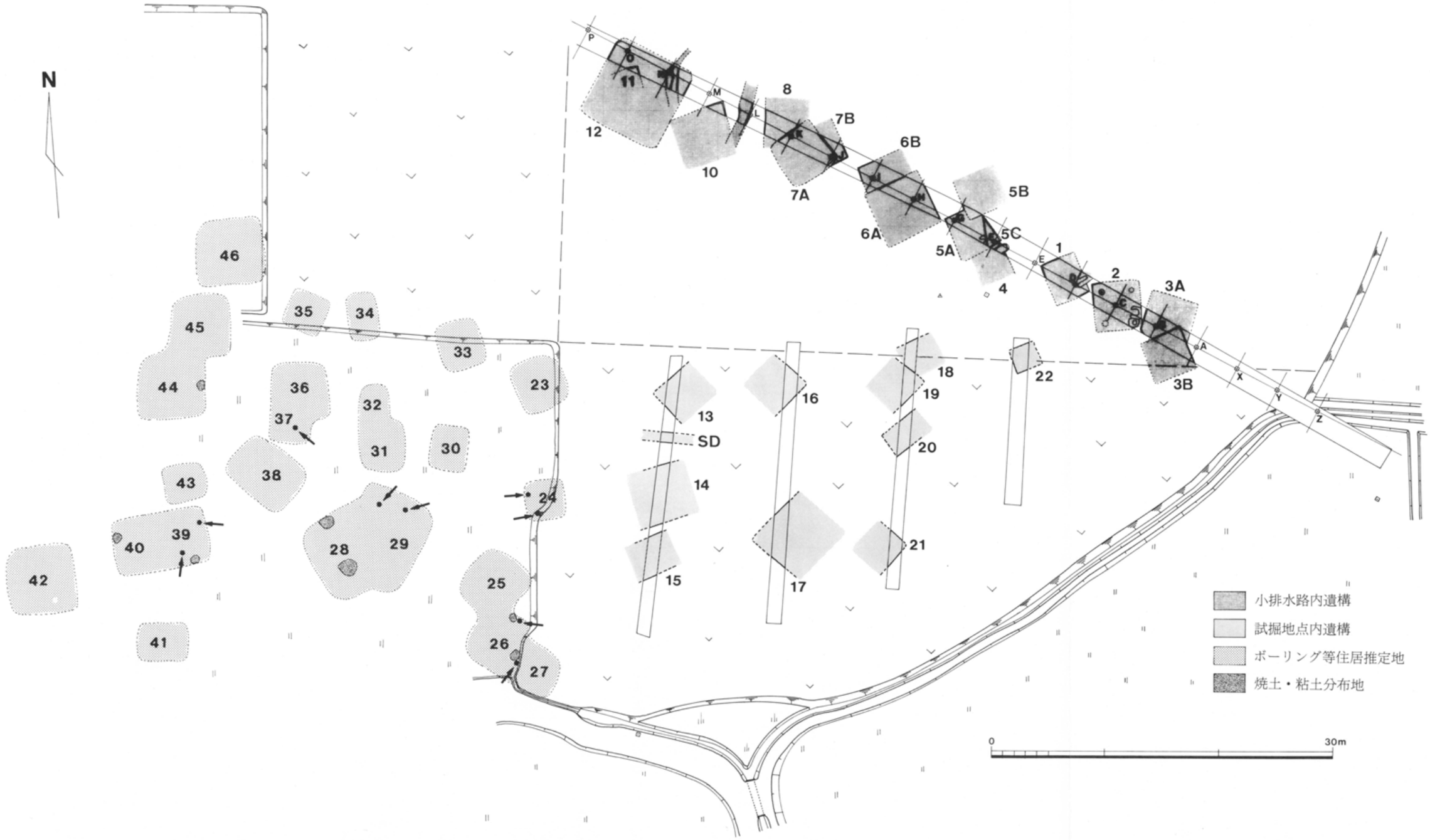
３軒が重複する。最も遺存度のよい第７Ａ号住居址は、西北壁及び、東コーナーが確認された。一辺4.5m、壁高27cmを測る。カマドと推定される痕跡は、東壁の南よりで床面上に焼土の分布が観察され、この部分に存在した可能性が強い。第７Ｂ号住居址は前住居址の東に位置し、北東コーナーが確認されたのみで、内容は不明である。壁高５cm。第８号住居址は反対側にあたり、西壁が一直線に走る。壁高20cm。なお、第７Ｂ、第８号住居址の両者は規模、床面レベルから同一の住居址である可能性も考慮される。

第10・11号住居址（第93図）

何れも北東コーナーが検出されたにとどまる。第10号住居址は壁高38cm。第11号住居址が壁高16cmを測る。時期、規模等については不明。

第12号住居址（第93、100図）

小排水路内トレンチの西北で検出された最後の住居址で、これより西北方で窪田堀に至る。トレンチ内には住居址が存在しない。トレンチ両側に壁が確認され、内部に第11号住居址と溝２が切り合う。一辺7.2m、壁高11cmを測り、内部の諸施設は判明していない。西北壁の南よりで、トレンチ限界付近から甕１点が出土している。



第100図　七色塚遺跡西半分遺構配置図

以上は小排水路内トレンチの住居址範囲を示すものであるが、本集落跡の東西限界が判明した。本調査地の南及び、西方においては、範囲確認の試掘調査とボーリング等を実施したが、遺構内の発掘調査は行わず、埋めもどし保存を行った。

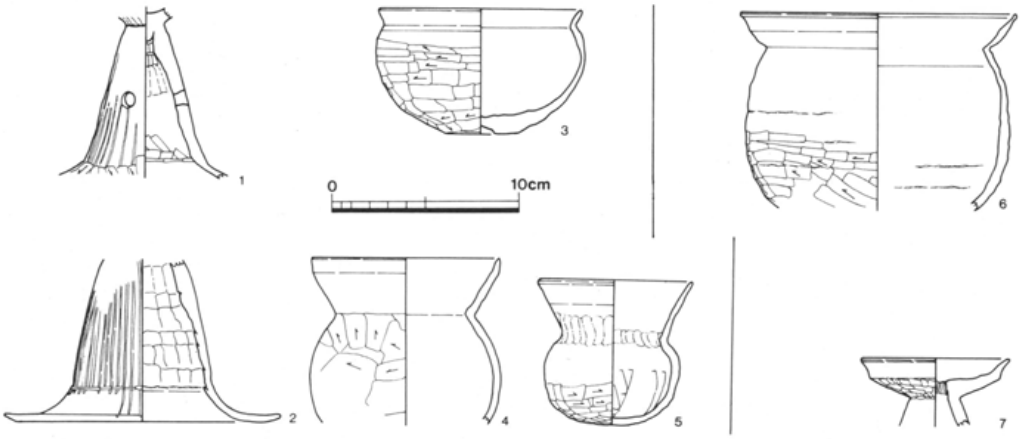
七色塚遺跡本庄122号墳下の住居址（第102、103、104図）

七色塚遺跡の範囲は、久下塚集落に接する付近まで記入されている。今回の調査では主に南半部の発掘、試掘調査を実施したが、遺跡の北東辺部にあたる本庄122号墳が、わずかに残丘を見せるため、同部分の調査並びに、主体部の有無確認を行った。結果は横穴式石室の基底部が検出され、同時に各トレンチ内より住居址も検出された。しかし、周辺のほ場整備は古墳残土の削平のみにとどまり、畑地上の地下遺構に影響を及ぼさないため、住居址の調査は範囲確認調査のみにとどめ、全掘は実施していない。このため、トレンチの配置も古墳の遺構範囲確認を意図した状態で設定している。

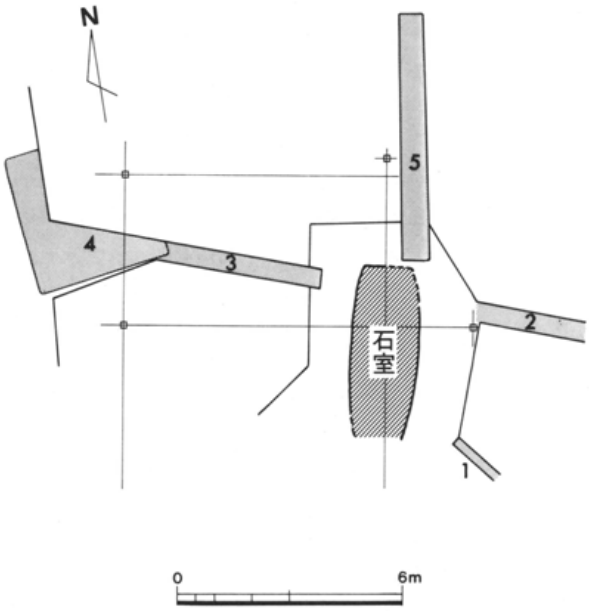
なお、本地点の住居址群と小排水路を含む南半部の一群とは、古墳西方のトレンチ内より住居址が検出されていないことと、本地点の住居址が五領式に属することから範囲が異なる可能性があるため、七色塚遺跡本庄122号墳地点（以下、七色塚 Loc 122）と命名し分離した。

第１、２、３号住居址は横穴式石室の周囲に設定した小規模なトレンチ内で検出したもので、遺構の規模等は不明である。何れも柱穴、炉、貯蔵穴が判明していない。第５号住居址は北側にあたるが、床面上より坩等が出土している。南端より貯蔵穴が検出しており、幅90cm以上、深さ50cmを測る。

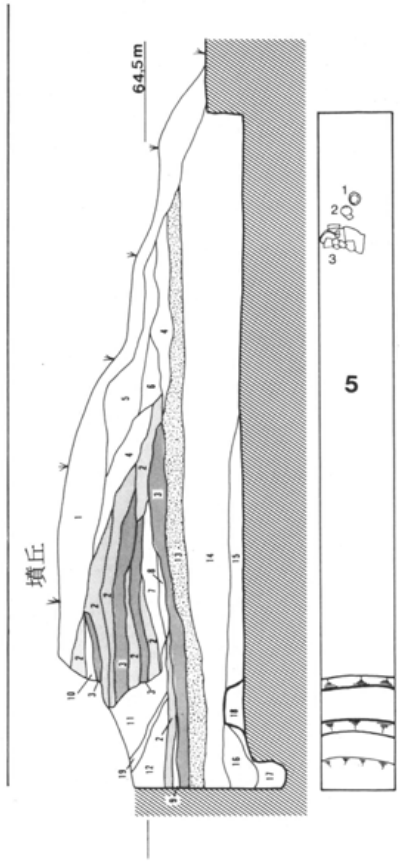
第４号住居址は西辺で検出され、一部を拡大して発掘した。ほぼ東西南北に配置され、西及び、南に周壁溝がめぐる。一辺3.8m、壁高31cm、周壁溝幅７cmを測り、地表下99cmで床面に達する。中央よりにピットが１ケ所認められるが、柱穴ではない。炉跡は調査区外に存在するものと推定される。南東コーナーに接して貯蔵穴が検出された。楕円形に近く、２段になっており、完掘していないが、長径70cm、深さ80cmを測る。内部及び、近隣より小甕等が出土している。なお、貯蔵穴の東は壁が張り出しており、第３号住居址との間にもう１軒住居址が存在する可能性がある。これらの住居址の時期は何れも五領式期に所属するもので、古墳址の北側においてもかなり五領式土器、和泉式土器を採集しており、周辺が同時期の集落跡の中心であったことを指示している。

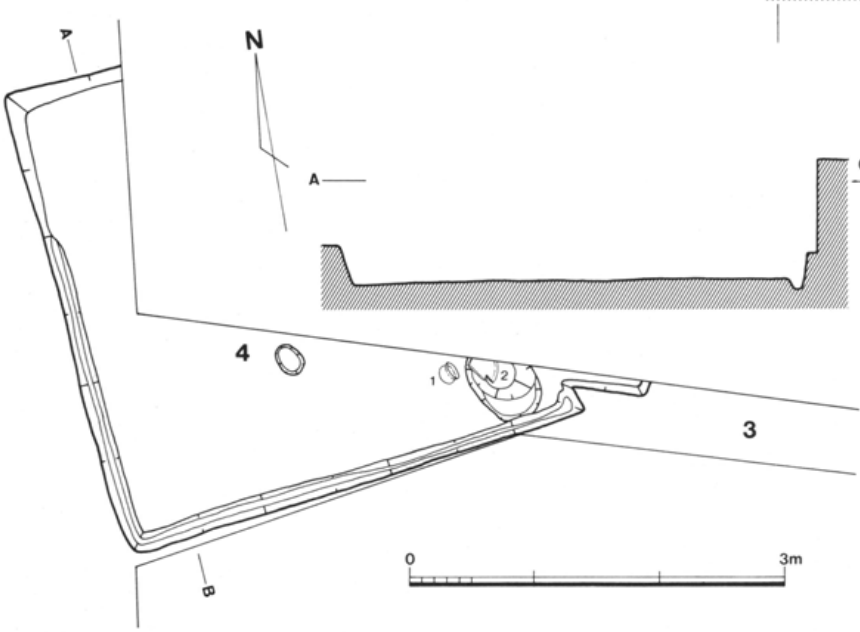


第101図　七色塚遺跡Loc122出土遺物実測図



第102図　七色塚遺跡Loc122遺構配置図





第5号住居址土層観察表

1、耕作土

2～12、19、墳丘盛土

13、旧表土

14、茶褐色土（黒味帯びる）

15、16、灰褐色土

17、16と同じ（ローム粒多址）

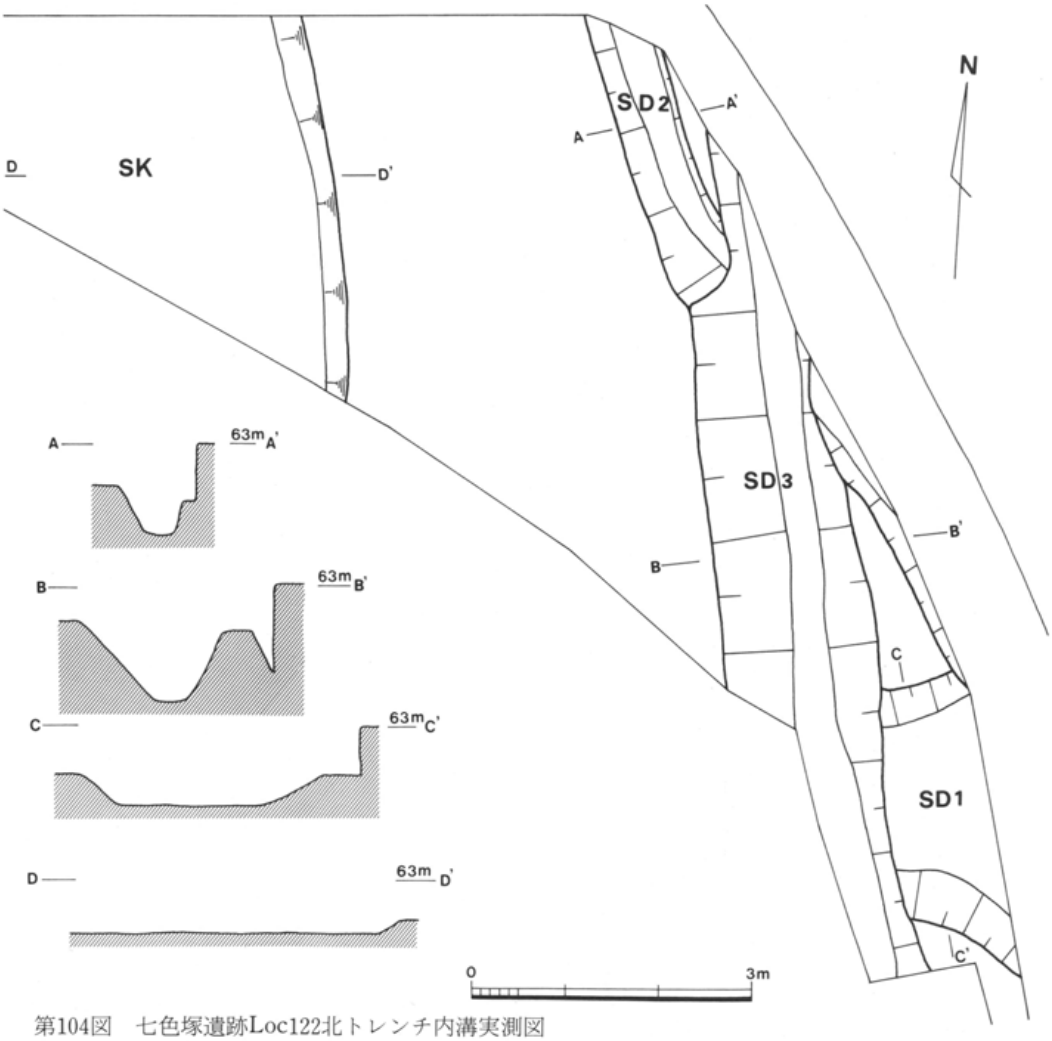
18、灰褐色粘土

第103図　七色塚遺跡Loc122第3、4、5号住居址実測図

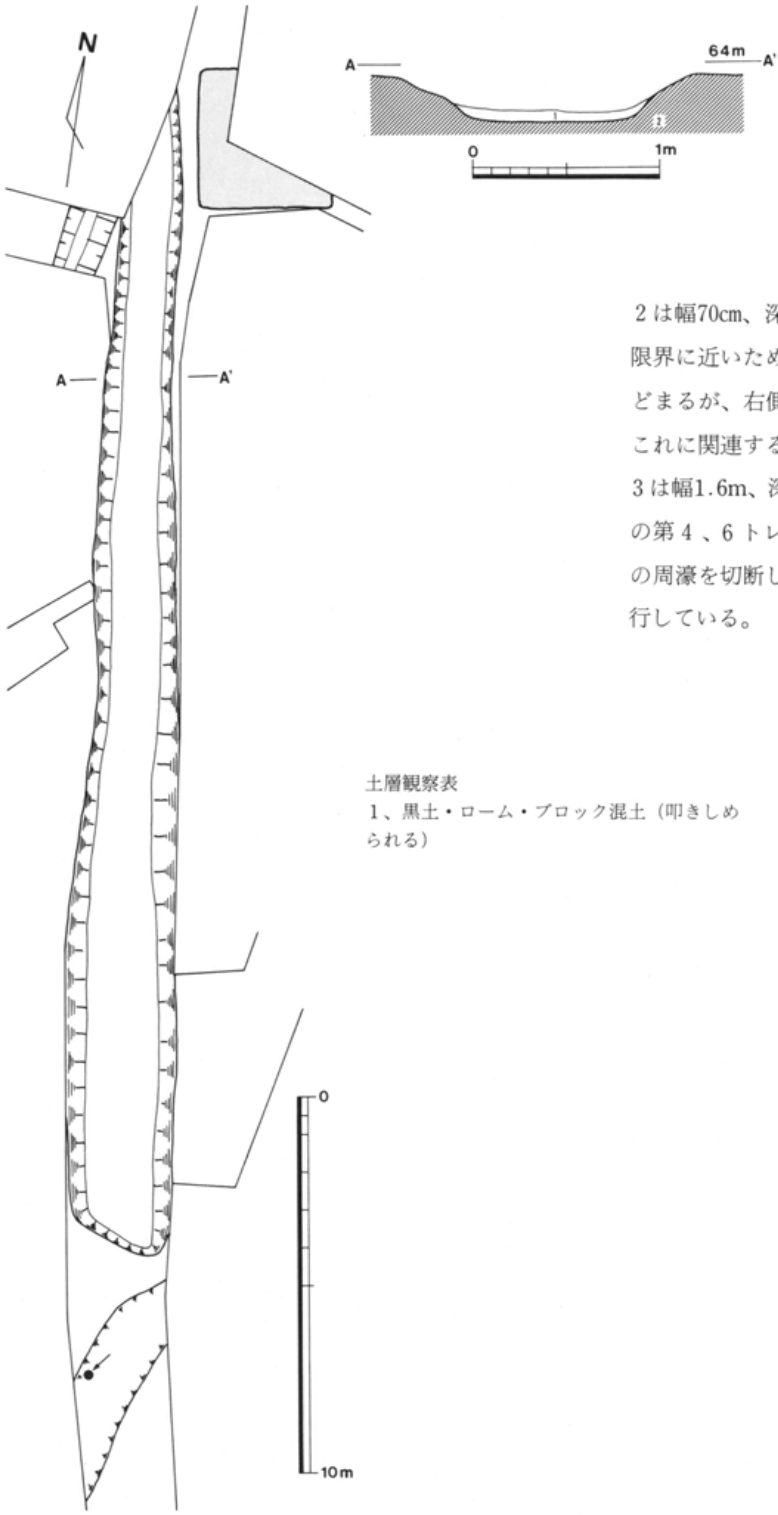
古道跡と第８トレンチ内遺構（第105、106図）

本庄122号墳の範囲確認試掘調査により、周辺に数本のトレンチを設定した。第９トレンチを開掘した際に、東側においてローム層を掘り込み、叩き締めた遺構を検出したため、南北へ追跡したところ、全長43m以上を測る道路跡であることが判明した。ほぼ南北に主軸を置き、ローム面を25cmほど掘り、黒褐色土が厚さ10cm堆積した上、表面はかなり硬く叩き締めている。幅約110cmを測り、堆積土中に遺物は認められなかったが、南端より古銭「大観通宝」が出土しており、近世の所産と推定される。なお、後述する第７、８、13トレンチより検出された溝１、３と平行している。また、その東に位置する現公道で、大字東富田と久下塚の字界である道路と平行している点も、これらの遺構の性格を示唆しているものと考えられる。

本庄122号墳の北縁範囲を確認するため設定したトレンチより溝、土壙等を検出した。溝１は幅３m、深さ30cmを測り、比較的幅が広く東西方向に向くことから、本庄122号墳の北側周濠にあたるものと推定される。ただし、他のトレンチ内より確認された周濠内縁からずれた位置にあり検討を要する。溝



第104図　七色塚遺跡Loc122北トレンチ内溝実測図



2は幅70cm、深さ50cmを測り、調査区限界に近いためわずかに判明したにとどまるが、右側の公道と平行しており、これに関連するものと考えられる。溝3は幅1.6m、深さ90cmを数ぞえ、南方の第4、6トレンチへとつづく。古墳の周濠を切断しており、右側公道と平行している。

土層観察表
1、黒土・ローム・ブロック混土（叩きしめられる）

第105図　七色塚遺跡Loc122古道実測図

第4章　考　　察

第1節　東富田遺跡群の立地と河川

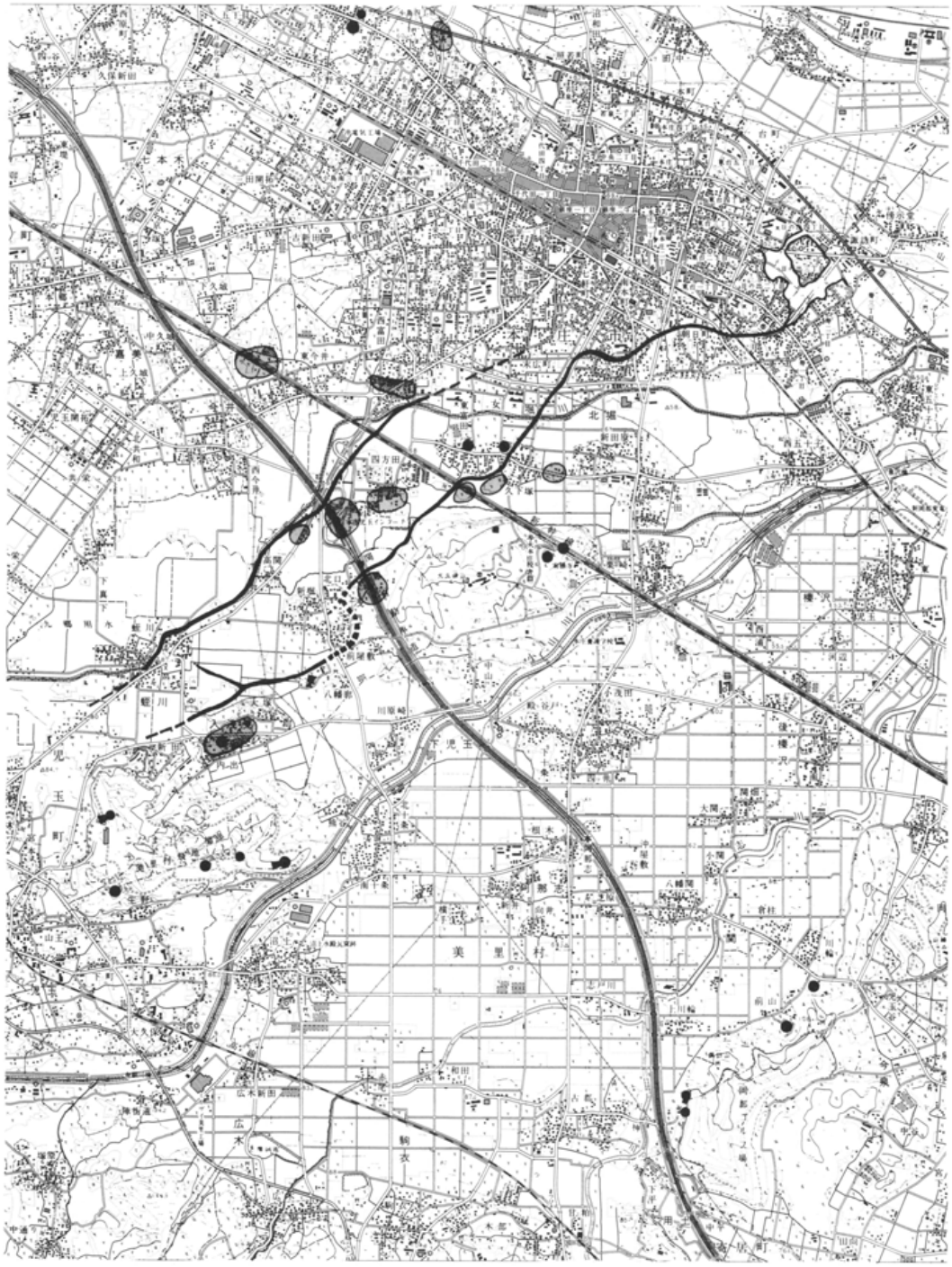
本遺跡群の名称は、すでに用いられている。たとえば、過去の発掘調査例から、下田遺跡を中心として後張遺跡、東谷遺跡を含む大久保山北縁の男堀川と女堀川中流域の農耕生産地周辺に分布する遺跡を包括し、東富田遺跡群として把握する考えが見られる(利根川　1982)。しかし、後述するように、本報告では歴史地理的な観点と遺跡の集中度から、さらに範囲を限定して東富田集落と久下塚集落内外に分布する一群を「東富田遺跡群」として把握した。

東富田遺跡群が立地する地形は、著しい起伏が見られない。ただし、微高地、微低地の差は認められ、本庄市調製1：2500白図に示された水田は微低地を。宅地、畑地がほぼ微高地を反映している。遺跡はおよそ微高地の範囲と重複している。微高地は西より東富田、久下塚、新田原、本田方向へ東にのびるように見え、南北両側をそれぞれ東流する女堀川と男堀川にはさまれている。しかしながら、両河川はほぼ東西の方向を示す人為的な河川であるため、同河川と自然発生的な地形を結びつけて考えることはできない。本地域周辺に広がる微高地は、巨視的に見て四方田、市営住宅、東富田集落にのびる一群と、大久保山北麓の雷電下遺跡から下田遺跡、七色塚遺跡、久下塚集落方向を示す2者が観察され、これらは微低地、河川等で分断されている。また、その方向性は後述する河川の流下方向や、児玉丘陵の方向とも一致し、扇状台地の等高線と矛盾しない。

先にあげた微高地を2つに分離する要因は埋没河川跡により明瞭である。遺跡を語る上で重要な要素を含む水系については、現女堀川、男堀川が人為的に改修されているため、本来の河川の復原が必要である。今回の調査では、集落跡等の他に河川跡ないし、大溝が確認された（第107図)。

旧女堀川

今回報告を行っていないが、西富田九反田遺跡において、幅約15m前後の大溝を検出した。幅2mのトレンチ掘りであるため、詳細な方向は不明瞭であるが、北東方に所在する西富田前田遺跡の間には、試掘調査の結果、認められなかった。もっとも同遺跡の西側は一段低い地形を見せており、北北東方向へ流水するものと推定される。ここより現女堀川にかかる中の橋から東橋へぬけ、さらに北東方向へ追跡すると、昭和42年調製本庄1：3,000白図に谷津状の等高線が観察される。市立南中学校周辺の発掘調査時においても同地形が検出されており、地形図から見て市街地へ向かうものと推定される。九反田遺跡の上流部は、後張遺跡B地点で検出された大溝に連続するものと考えられ、四方田集落と上越新幹線の間には、東東北に彎曲する自然堤防と思われる微高地が観察される。後張遺跡B地点の上流にあたる川越田遺跡においては、現女堀川右岸に接して、河川氾濫の跡と推定されるものが報告されており、以降は現女堀川の方向、位置と重複するようである。現女堀川は、児玉町上真下から蛭川に至る部分と、本庄市西富田本郷以東の部分以外は、自然地形に添った流路を示しており、条里制施行にあたっても、流れを征服することが困難であったのであろうか。本地域で検出、復原された旧女堀川の流末は、機械的に直線状にのばせば、本庄城跡東側の本庄段丘崖浸食地へたどることが可能



第106図　旧女堀川、蛭川河川跡と遺跡分布図　（■は方形周溝墓）

であるが、笠ケ谷戸方面へ流水し、後述する蛭川河川跡へ合流する可能性も考慮される。ところで、後張遺跡B地点では、大溝（旧女堀川）右岸より取水する溝が検出されている。トレンチ掘りであるが復原すると、猿尾状に枝分かれしており、本地域における条里制遺構に見られる取水方法に類似している点で興味深い。同様なものとして、古井戸・将監塚遺跡内の大溝と右岸上の溝群があげられる。九反田遺跡の大溝右岸においても溝が検出されており、大溝から取水するためこのようなパターンが一時期に企画されたのであろうか、今後の検討課題といえよう。和泉II式期に並行すると考えられる須恵器が出土しており、九反田遺跡は和泉Ⅰ期の住居址を検出していることから、少なくとも古墳時代には本流路が存在したものと推定される。ただし、本流路ぞいには五領式期に属する社具路遺跡、後張遺跡、川越田遺跡が立地することから、古墳時代前期まで坂上る可能性もある。このような観点に立脚すれば、同河川右岸に位置する縄文時代の西富田前田遺跡の存在は、さらに本河川の上限をたどる間接的資料として興味をひく。

蛭川河川跡

第3章において、下田遺跡、観音塚遺跡、元富遺跡、七色塚遺跡の間を流水する河川跡の存在を指摘したが、これは水島治平氏により研究報告されている（水島　1985）。ちなみに、本河川跡の名称は上流部と流末周辺に「蛭川」「蛭川端」の地名、遺称地を残す点から、今回固有名詞として用いた。蛭川の名称は江戸時代の古文書[(1)]に見られるが、現在、本庄在住の人々の記憶からは消滅している。本河川による本庄段丘崖の浸食は最も顕著で、本庄自動車学校西辺から本庄東高等学校東方にかけて観察される。ここより朝日町大林をへて、笠ケ谷戸集落北縁から西側へゆるく蛇行し、女堀川の公家塚橋付近を縦断する。さらに、上流部は久下塚、東富田両集落の間を通過し、東富田観音塚の東わきを大久保山山麓方向へたどることができる。山麓ぞいに、児玉町下浅見に至って、やや不明瞭な痕跡となるが、前屋敷から鷲山古墳が立地する小丘の北縁をかすめて、入浅見の大塚まで追跡することも可能である。ここでは、丘陵ぞいに流水する痕跡と、蛭川集落方面から条里制遺構内を通過し、合流する2すじが観察される。これより上流部はさきほどふれた条里制遺構により、痕跡はほとんど見られない。ただし、3km西南方の水系から、本河川跡が赤根川水系に端を発することは、ほぼまちがいあるまい。なお、上記流路の方位は、扇状地形と摘合している。

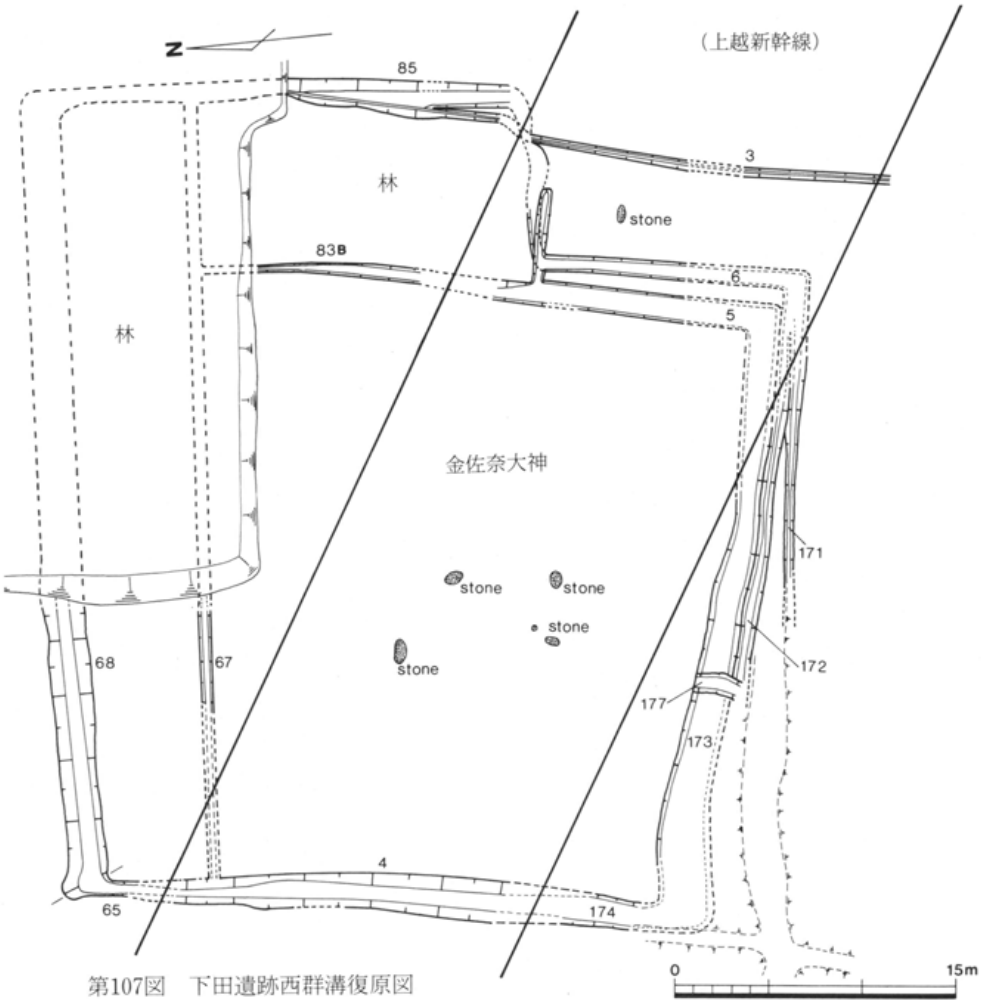
今回の調査では、下田遺跡及び、元富遺跡と七色塚遺跡間で遺構の有無確認を実施した。本付近では周辺より一段低い地形が明瞭に観察され、本河川跡流域では最も遺存度のよい地域であった。同地点は字窪田堀と命名されており、河川跡の右岸ぞいに男堀川の観音堰より取水して、久下塚、新田原、本田集落の北方を流水する窪田堀が農業用水として機能していた。

発掘調査では、時期を決定する資料を得られなかったが、遺跡の立地関係と対比すると興味深い点が指摘できる。すなわち、入浅見大塚、雷電下遺跡、下田遺跡、七色塚遺跡等五領式期の遺跡が岸ぞいに立地する点で注目される。ただ、本河川跡を単なる中世河川とし、笠ケ谷戸遺跡内では和泉期の住居址を本河川が切断していることから、古墳時代以降に位置づける見解があるが、発掘範囲は、河川距離から見ればごく一部であり、住居廃絶後の流路変更（氾濫等）による破壊を暗示するものと解される。本河川跡流域に特徴的な遺跡に古式古墳の分布があげられる。金鑽神社古墳、鷲山古墳、公

卿塚古墳、熊野十二社古墳が岸辺にそって所在している。巨視的には前山１、２号墳、生野山古墳群の北群なども、本河川跡流域に形成された初期首長墓群であり、少なくとも、旧女堀川とともに古墳時代の児玉地方における主要河川であった可能性が極めて大きい。

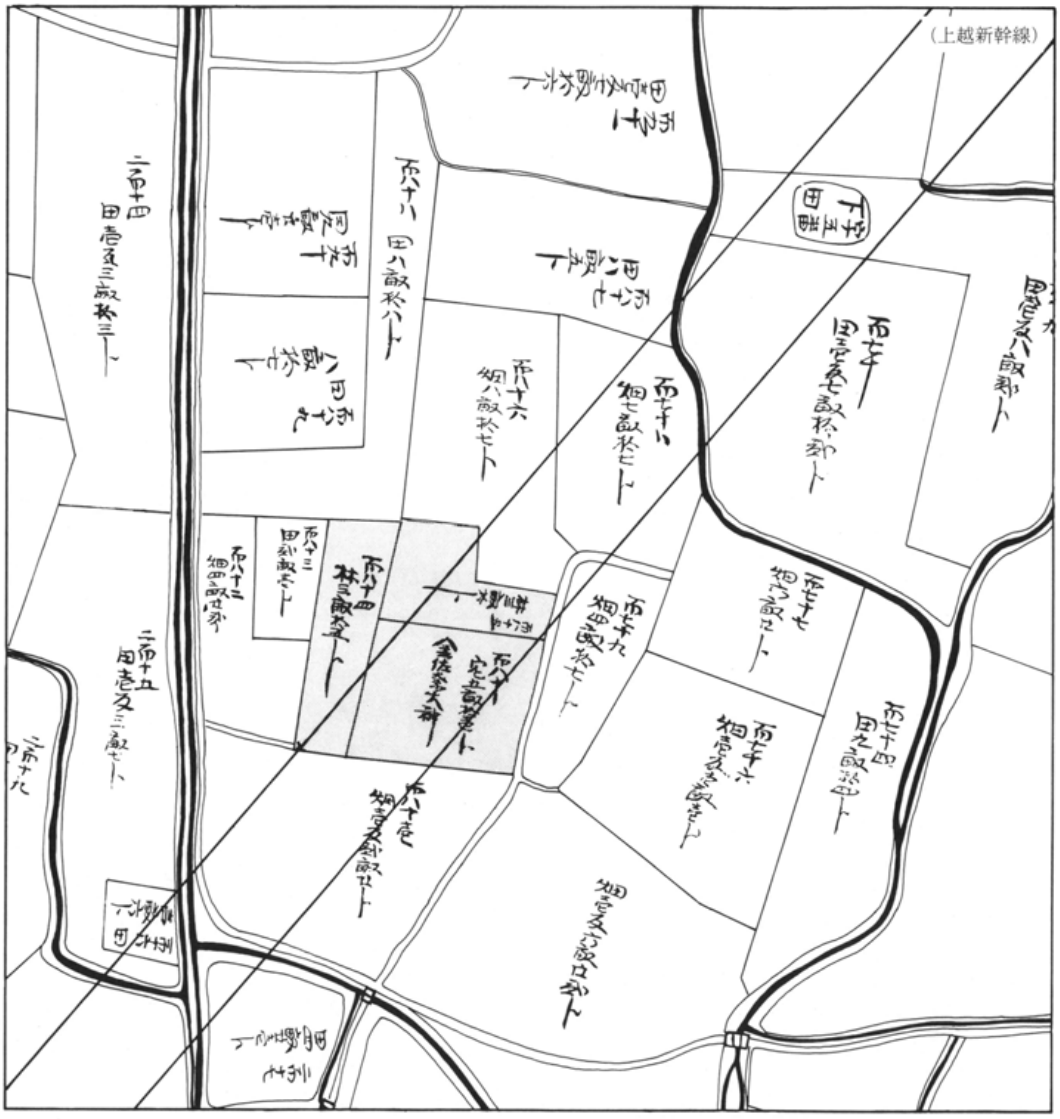
第３節　下田遺跡西群溝の復原と性格

第１、２次調査で検出された多数の溝は、方位から西群と東群の２者に大別される。後者については前項で述べたごとく、屋敷等建築遺構の可能性を示唆した。西群は第２次調査によりやはり区画性のある配置を示していることが判明した。これらはほぼ東西南北に配されていることから、条里との関連性が指摘されている。ところで、今回の調査期間中、東富田地区の方より同遺構付近にかつて、金佐奈大神が鎮座していたことを御教示いただいた。また、東富田在住の武藤達一氏所蔵明治初年の地籍絵図（第109図）に、同神社の位置が明記されており、これは現在の地籍図と位置関係がほぼ対応可能であるため、上越新幹線の位置を付加したところ、第１、２次調査地区内にともに該当することが判明した（第108図）。同図によると、金佐奈大神の北及び、東には林が存在し、南は道路により区



第107図　下田遺跡西群溝復原図

画されている。これを遺構である溝にもとめると、溝４、５、67、83及び、新幹線南の道路を囲む範囲が金佐奈大神の旧位置を示すものと考えられ、溝65、67、88と３、６、５、83、85で囲まれた部分が地籍絵図に見る林にあたるものと推定される。溝83については、先にふれたように天明３年の浅間火山砂が被覆しており、本神社跡が少なくとも、江戸時代には存在し、明治時代に廃絶され東富田集落内の熊野十二社へ合社されたものである。なお、第１次調査では金佐奈大神の位置で礫群が数ケ所検出されたが、おそらく神社廃絶に伴う遺構であるものと推定される。



第108図　旧東富田地籍図金佐奈大神位置図

第2節　東富田遺跡群の性格

本遺跡群から出土する最古の遺物は、七色塚遺跡、下田遺跡より出土した縄文式土器である。また、調査前より公卿塚古墳周辺で、縄文式土器の出土が報告されており(本庄市　1971)、東富田集落をのせる微高地上に縄文時代集落が存在する可能性は大きい。特に七色塚遺跡内では多量に土器片が出土しており、今後有望な地点である。

本庄市の埋蔵文化財を代表する古墳、奈良・平安時代の遺跡は、本調査地区においても大部分をしめている。東富田遺跡群は古墳、奈良・平安時代を主体とし、群としては、東富田集落の範囲とほぼ重複する。これは微高地の範囲ともおよそ一致している。狭義の東富田遺跡群内で、最初に発掘調査が実施された下田遺跡は、五領III式から鬼高Ⅰ式をへて国分式に至る、長期的な集落跡であることが判明した。しかし、住居址の分布状態は、散漫的で一時期にかぎれば数軒程度であることが、今回の発掘調査においても再確認された。本遺跡の周辺に同様な遺跡が存在するかについては不明瞭であった。この点については、本遺跡の東東北に隣接する七色塚遺跡の試掘調査及び、発掘調査において、ほぼ同時期に並行して存在した集落跡であることが判明しており、規模的にも七色塚遺跡が集落の主体をなし、下田遺跡は同遺跡の西端の範囲に属することが位置づけられた。七色塚遺跡は第3章でふれたごとく、五領式の住居址が本庄122号墳下に集中しており、時期が下るにしたがって、集落全体が南西へ移動する傾向がある。さらに、鬼高期に入ると古墳の墓域として旧集落の一部が利用されており、七色塚遺跡(集落)と古墳の有機的関係を暗示している。本庄122号墳を含む周辺の古墳は、東富田古墳群として把握されている。しかし、今回の本庄122号墳の発掘調査により、同古墳が7世紀前半期であることが判明したことと、北側に分布する公卿塚古墳、熊野十二社古墳の推定される年代とへだたりがあることから、本庄122号墳を含む南側の一群は、久下塚古墳群として独立した後期ないし、終末期のグループが存在したようである。同古墳群と東富田古墳群は、蛭川河川跡により分離される可能性が大きい。古墳葬制導入以前の葬制については、本遺跡内からは確認されていない。本遺跡群の西南方1,200mに所在する雷電下遺跡では、五領式の集落跡が検出され、北縁の蛭川河川跡をはさみ、対峙する位置にあたる飯玉東遺跡において、同時期の方形周溝墓が検出されていることから、下田・七色塚遺跡の五領式期集落に伴う方形周溝墓が近隣に所在する蓋然性は強い。これについては近年早稲田大学本庄校地で検出された、方形周溝墓が該当するものと考えられる。下田遺跡において和泉期の欠如は、未発掘の南半地域に存在しないと仮定すれば、七色塚遺跡へ集落全体が移動した可能性を示唆するものであろう。市内の古墳時代における史的画期の動向については、和泉II式に出現する遺跡が多い。本遺跡群内では笠ケ谷戸遺跡や、二本松遺跡のごとく和泉式期のみの単独遺跡は現状で認められず、遺跡群内での時期的移動を考慮すれば、息の長いいわゆる母村的性格の強い集落跡群と考えられる。今回の調査で、面的発掘を実施し、集落の約⅔を把握した下田遺跡の変遷は、従来の消長とは若干の修正が必要なようである。五領式期は5、134号住居址と39号住居址及び79号住居址の3グループに大別される。土器の編年観からは実質的に1実族単位集団の住居地と推定され、本遺跡の範囲のみで集落とするには明らかに小規模すぎる。同時期にかかる七色塚遺跡とともに集落を最初に形成したものと考えられる。

確実な和泉式期の資料には乏しいが、次の鬼高Ⅰ式期までは空白期間が存在するようである。鬼高Ⅰ式期古段階に属するものは、東西2グループに分別され、特に東の1、2、6、24、87、93、110、122号住居址は円形に廻り、中央に空間を残すプランを見せる。この時点で、本遺跡の住居址の規模が拡大する。しかし、鬼高Ⅱ、Ⅲ式期においては再び規模の縮少化が見られ、唯一鬼高Ⅲ式期として把握された78（51）号住居址は北辺中央部に所在する。真間式期に至っても小規模のまま継続しており、32、86、123号住居址の分布が示すように、3ないし、4グループで構成され、およそ五領式期の範囲と重複する。住居址自体の規模も通例のごとく小形化する。

国分式期に入ると、範囲が最も拡大し、現微高地の全域に分布する。ただし、同型式の時間的消長も加味されるものと思われるが、第3次調査においても、ほぼ本時期を主体とすることが判明した。各住居址の規模は、小さいが、南端の一群は特異な遺構で構成されている。すなわち、168、179号住居址が最も規模が大きく、構造的に貼り床施設なども丁寧な造りを見せるなど、他の住居址を圧倒している。さらに、本住居址の東西両側に隣接して、同主軸を取る掘立柱建物2棟（建て変えあり）が検出されており興味深い。また、掘立柱建物3、4の周辺には同時期の土坑群が分布しており、東に接して小屋のような施設（ＳＫ166）も見られることから、本遺構群は国分式期における特別な位置づけを行うことが指摘できる。

近隣において遺跡群として把握されるものには、西富田遺跡群、今井遺跡群、大久保山遺跡群があげられる。これら各遺跡群の中でも時期を真間・国分式期にかぎると、律令国家体制下における郡郷制の問題にも波及する。郷里の範囲と遺跡の範囲については常に研究、論議されているが本庄市を含む旧児玉郡内における郷里の研究については、さほど進展していないのが現状である。

本遺跡群を含む旧児玉郡内には、和名抄により4郷の存在が記録されている。この内、草田郷については南大通り線内遺跡より、同名を線刻した紡錘車が発見されており、遺跡分布と地形から西富田遺跡群、今井遺跡群、将監塚・古井戸遺跡を含む規模が草田郷の一部ではないかと推察される。西富田遺跡群の南辺を流水する女堀川をはさみ対峙する位置にあるのが東富田遺跡群である。本遺跡群は中央を通過する蛭川河川跡を水系としており、同水系上には雷電下遺跡があり、南方の大久保山遺跡群も含めた地域を一つの郷として把握される可能性がある。大久保山等の地形から大井郷にあたる可能性が示唆されよう。残りの岡太郷は地形を意図した地名であるとすれば、岡すなわち、丘陵部が広がる地帯は、神川村周辺の遺跡群が該当し、振太郷は読み方によりフルタともシノタとも解されるため、山間部ではなく水田経営に関連した地理的な位置を想定できるが、児玉町周辺に存在するものと思われる。児玉郡衙については、定説がない。古井戸・将監塚遺跡において郡衙厨房に関連した墨書土器や多くの掘立柱建物遺構が検出されており、その可能性が指摘されているが、遺構は通例確認されている各地の郡衙とは異なる。これに対して、児玉町金屋に三角（ミカド）の遺称地が見られ、東方には古来より古式古墳が造営されていること、児玉郡内の主要河川である女堀川の中流域に位置することなどから、金屋から八幡山周辺が郡衙所在地である蓋然性が強い。なお、同地の西西南で、女堀川水系の一つにあたる金鑽川の上流部には、児玉郡の西端にあたる位置で、神奈備型祭祀である御獄山が位置する。

第4節　本庄児玉地方の鬼高式編年について

北武蔵、特に児玉地方における土師器の編年は、大規模発掘の件数と比例するように、細分化作業が進行している。現在のところ、五領式から国分式に至る個々の編年試案は、20数例にも達しており、一遺跡の資料のみで発表される場合も多い。こうした中で、処理上の問題点も多く見い出される。列挙すれば重複する遺構をもとにした基本資料の欠如、須恵器編年との対比、及び、古墳との対比、個々の器種の変化と組成、あるいは外来系土器の把握などで、これらは資料の充実をもって解決されるものと考えられる。何にせよ現状において、本地方で暗黙の内に使用される編年観は、いわゆる鬼高Ⅰ、Ⅱ式の新古と終末と言った概念的な名称で呼称される傾向にある。このことは、各研究において独自の固有名詞（たとえば1期、2期、段階、類等）が用いられても、本質的には南関東を中心とする編年観に、何らかの共通因子の存在を暗示していることを示唆するものと解される。したがって、当初杉原荘介氏が提唱された鬼高式を基準に再検討を試みることは、あながちまちがった方向ではあるまい。

本小考では鬼高式の基準として、土師式土器集成で定義づけられたⅠ、Ⅱ式を基本に、その範囲を拡大して細分を試みた。なお、紙面の都合上、今回は類例の列挙にとどめ、詳細は控えるが、本考を県営ほ場整備事業関係報告書の今後の基本資料を前提として、順次詳報を行う予定である（付図1～3参照）。

鬼高Ⅰ式併行期古段階1（鬼高Ⅰ古1）

本地方における鬼高式の上限については、2者の見解がある。大略すれば、前段階の和泉式的な色彩がほぼ消滅し、鬼高型坏の形態が完全に確立された段階と、坏にバリエーションが現れ、原初坏の出現をもってはじまりとする案で、本段階は後者をもとに行う。本庄今井諏訪遺跡第49号住居址（以下遺跡、住居を略筆する）、西富田新田7住、東五十子城跡8住、二本松1、6住があげられる。坏は平底ないし、丸底に近いもので、口縁が短く直立するものと、平底もしくは凹み底で、底部が深く、口縁は直立するか内傾する2者に大別される。ともに口縁部と体部の稜線が不明瞭な状態を示す。共伴する器種に球胴甕、甕形の大形短孔甑、和泉型高坏、和泉型椀、小坩があり、原初坏をのぞけば、依然として和泉的色彩が濃い。しかし、和泉式に特徴的な小坩の減少と、対する坏の多様化傾向がみられる。本段階を和泉式最終末として把握される理由は、この点にあるが、近年同様な原初坏を組成に持つ千葉県大篠塚遺跡42号住の位置づけについて、従来の和泉式に含まれない可能性も指摘されており、汎関東的な位置づけが必要である。県営ほ場整備事業にかかる調査では、七色塚2住、四方田18住に類例が見られ、ともに初期カマドを保有する。後者においては、TK208の可能性がある須恵器坏が出土しており、諏訪49号住からもTK208の無蓋高坏が検出されていることから、TK208併行期（中村Ⅰ－3）と推定される。なお、諏訪49住より出土した土師器つまみ付き蓋は、他に類例を見ないため、特殊な器種と考えられるが、祖形は朝鮮半島の陶質土器ないし、TK76の有蓋高坏の蓋を模倣した可能性がある。また、夏目51住では土師器三連小坩が見られ、これは隠的な機能が考慮される。須恵器では加古川工業用水ダム2号墳出土の二連小線にもとめることができ、やはりTK76にあたる。

以上の点から本段階は５世紀後半に位置づけられる。

鬼高Ⅰ式併行期古段階２（鬼高Ⅰ古２）

坏が明確な模倣を行う段階で、下田６、122住、諏訪46、48住を代表とする。球胴甕は若干長胴ぎみなものが現れ、大形甑は甕形の旧式に加えて鉢形の形態が出現する。坏の形態は丸底となり、口縁は直立かやや内傾する。原初坏も若干残存している。和泉型の高坏、椀が継続しており、小坩は極めて少ない。本段階に前後して、扁球胴坩が存続する。共伴する須恵器には諏訪46住よりＴＫ208ないし、ＴＫ23の甕片が出土しており、後張遺跡において類例が多いようである。遺構による新旧関係は、夏目32住（鬼高Ⅰ古１）と同33住（鬼高Ⅰ古２）をあげうる。なお、須恵器共伴例では後張50住、若宮台40住があげられる。本段階の推定年代は５世紀末前後と考えられる。

鬼高Ⅰ式併行期新段階１（鬼高Ⅰ新１）

鬼高Ⅰ古段階に見られなかったラグビーボール状に長胴化した甕を主体とし、坏は口縁が大きく直立し、体部が深くなるものを基本とする。高坏は和泉型が残存しており、加えて後張92住では鬼高型高坏が出現する。しかし、類例は極めて少ない。甑は大形鉢形が基本となる。坏の模倣はＴＫ47坏蓋を意識したものと考えられ、同様な見解は坂本により指摘されている(坂本　1986)。一方、南大通り線内28住からはＴＫ47と推定される瓿が出土しており、後張21住の須恵器も指示的である。したがって、本段階はＴＫ47併行期にあたるものと推定され、６世紀初頭に位置づけた。なお、埼玉稲荷山古墳出土土器の内、坏は本段階にあたり、瓿は田辺によりＴＫ47に位置づけられている（田辺　1975)。住居址の切り合い状態からは、地神祇Ａ17住（鬼高Ⅰ古２）と同Ａ18住（鬼高Ⅰ新１）の類例があげられる。

鬼高Ⅰ式併行期新段階２（鬼高Ⅰ新２）

甕は前段階例を基本とし、坏はやや体部が浅く、口縁が外傾ぎみになる。高坏ははわずかに和泉型が残存しているが、本段階で新たに、中形で脚部が短くラッパ状に開く形態が出現する。後張29住に好例が見られる。技法上は、坏部と脚部の接合が和泉型のソケット状ではなく、円筒を張り付けている。大きさや、プロポーションがＴＫ47の無蓋高坏に似る点で、模倣を意図したものとすれば指示的である。一方、鬼高型高坏は後張20、29、87住に見るごとく、本段階の坏を基本とし盛行しだす。和泉型小坩はなおも残存する。共伴する須恵器には後張20住よりＴＫ47の瓿があり、同１住にはＭＴ15の坏が出土していることから、両型式併行期と推定され、６世紀前半の年代観をあたえる。住居址の切り合い状態からの新旧は後張遺跡に類例が多い。

鬼高Ⅱ式併行期古段階１（鬼高Ⅱ古１）

甕は依然として胴中央部に最大径を持つが、この形態では最も長胴化する。坏は口縁が内彎しつつ直立ないし、外反する。高坏は前段階に盛行した中形高坏と鬼高型高坏が継続しており、前者は脚部底が短く折りかえす傾向のものが出現、後者は本段階の坏を基本とする。川越田１住に一括資料の好

例を見、共伴した須恵器坏はＴＫ10と考えられる。後張32住においてはＭＴ15と推定される須恵器が出土していることから、本段階は両型式に併行するものと思われ、６世紀前半から中葉に位置づけられる。なお、後張43住に見られるごとく、和泉型小坩、椀など和泉式の残映は本段階で消滅する。

鬼高Ⅱ式併行期古段階２（鬼高Ⅱ古２）

甕は前段階の胴部に最大径を持つものに加えて、新たに口縁に最大径を有し、直胴ぎみになるものが出現する。これは、その後主流をなす形態である。坏は、体部が深く、口縁は外傾するものを基本とし、前段階例も若干継続する。中道８住において須恵器坏身の模倣品が出土しているが、本段階における類例は極めて少ない。高坏は前段階と同様であるが、いわゆる長脚高坏（中村　1978）が出現する。中道27住からは須恵器の一段透かし長脚高坏が出土しており、これを模倣したものは、南大道り線内25住に見られ、ＴＫ10にあたることから本段階を６世紀中葉に位置づけられる。ところで、本段階の基準資料は中道３、18、27住、精進場Ａ３住を用いた。両遺跡は児玉地方の西縁に属し、将来地域差として把握される可能性もある。なお、原５住と精進場Ａ３は同時期として把握される見解もあるが、原５住では球胴甕に近い形態が遺存すること、口縁に最大径を持つものが未だ出現していないことなどから、精進場Ａ３住より古く位置づけ、両者を分離した。遺構の切り合い関係は、夏目28住（鬼高Ⅱ古１）と同30住（鬼高Ⅱ古２）にもとめられる。

鬼高Ⅱ式併行期古段階３（鬼高Ⅱ古３）

Ⅱ古１に出現した胴部に最大径を持つ長胴甕が主体をなし、口縁が広口になる傾向がある。甑は長胴化が最大となる。坏は前段階の内彎しつつ外反するものに加えて、やはり前段階以前から出現している外傾する口縁の坏と、須恵器坏身模倣品が増加する。これらは扁平化する傾向にある。高坏は鬼高型高坏と長脚高坏が見られるものの、量的に主体をなすものではない。後者例として社具路91住をあげうるが、底部の折りかえしは短くなる傾向にある。本段階における遺構の切り合い関係で、明瞭な類例が小ない。須恵器の編年観ではＴＫ43と併行する可能性がある。６世紀後半ごろと推定される。

鬼高Ⅱ式併行期新段階１（鬼高Ⅱ新１）

甕に特徴的な変化が現れる。すなわち、最大径が口縁部にあり、頸部よりも下へ直線的に胴部が長胴化するものが主体となる。また、球胴丸底甕と推定されるものも出現する。坏は外傾する口縁部と体部が一体をなすような新形態が出現し、下田43住、宇佐久保５住例に見るごとく須恵器においては、ＴＫ43ないし、209を模倣した可能性がある。また、浅い体部の上に著しく外反する口縁部をもつ一群も若干見られる。古墳出土資料を整理すれば、詳細が判明するものと思われるが、後日検討したい。現状では６世紀末葉から７世紀前後と推定される。

鬼高Ⅱ式併行期新段階２（鬼高Ⅱ新２）

前段階の甕が直胴化する傾向にあるものの、胴部中央にわずかにふくらみを見せたのに対して、本

段階では完全な直線状を呈するものが出現し、口縁部はより折りかえしが強くなる。若宮台26住、下田51住が該当する。坏は小形化の傾向にあり、口縁が外傾、外反するものを基本とする。若宮台26住、下田51住、夏目70住では著しく外反する口縁部に極めて浅い体部をもつものが出土しており、皿と分類されるもので、鬼高型皿と仮称する。他に小形、大形の球胴丸底甕が見られ、これは後の真間式へと継続していく。南大通り線内36A住においては、カマド、床面上より甕、甑、小形丸底甕、坏に加えて、TK209と推定される須恵器坏が2点出土している。南大通り線内36A住の類例からTK209併行期と考えられ、7世紀初頭に位置づけられよう。夏目39住（II新1）と同40住（II新2）に切り合いの前後関係がもとめられる。

鬼高II式併行期新段階3（鬼高II新3）

本段階にあたるものとして、古川端10、35住が他の研究でもよく取り上げられる。これらの研究、報告においては鬼高III式の名称が用いられているが、型式設定の根拠は曖昧である。したがって、本考では鬼高II式の範ちゅうに含め、同型式最終末に位置づけた。甕は最長胴化しており、頸部より斜めにのび、小ぶりの底部を形成するものと、胴部が短くなる2者に大別される。後者は後の真間式へと継承されていく。球胴丸底甕も存在し、真間式的色彩が強くなっていく。甑は存続している。坏は小形化しており、口縁部は前例に比べ直立ぎみになるが、より短くなる。次段階の真間式期前半にあたる今井G6住において、TK217の宝殊つまみ付き蓋が出土していることから、本段階は7世紀前半にかかるものと推定される。

以上の点をもとに、県営ほ場整備事業にかかる調査で得られた鬼高式期の変遷は、鬼高I古1には七色塚遺跡、四方田遺跡や後張遺跡がみられ、鬼高I古2へと継続して行く。しかし、下田遺跡においては、鬼高II新1まで断絶が見られ、七色塚遺跡においても鬼高II式期に該当するものがほとんど見られない。東富田遺跡群が再び活気だつのは真間式期以降で、国分式期をもって最大の集落群を形成することになる。鬼高II式期における住居址の激減は、集落全体の大規模な移動と周辺における遺跡群の推移を考慮する必要があろう。

あ と が き

昭和30年に、酉富田（当時）二本松遺跡の発掘調査が実施され、32年の歳月が経過した。昭和30・40年代は小規模な調査が有志の手により、地道につづけられた年代である。しかし、昭和50・60年代に入ると、本庄市においても、大規模な開発の波がおしよせ、これに伴う大規模な発掘調査が、行政による組織のもと、保護対策の一環として順次実施されることとなった。

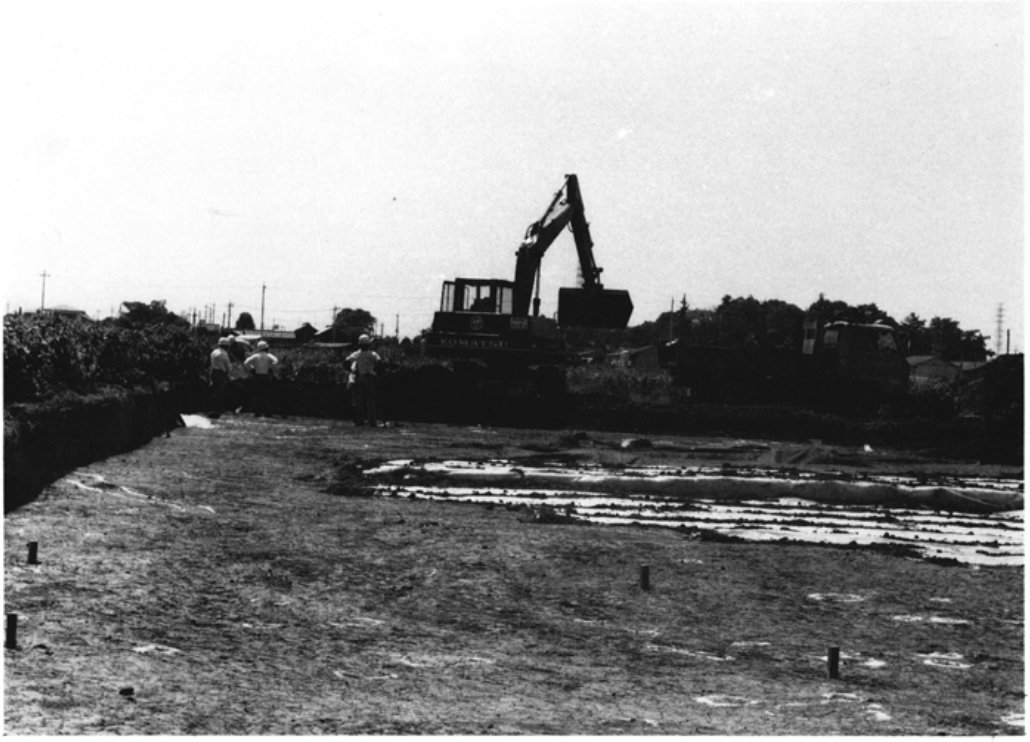
前半期の成果は、本庄市史資料編として公表されるに至っている。だが、大規模開発に伴う発掘調査は、年々増加しており、発掘後の整理報告の期間も山積みにされているのが現状である。今回の県営ほ場整備事業にかかる発掘調査では、遺跡群別に順次報告することとした。下田遺跡、七色塚遺跡では、主とした遺物を取り上げたが、表面採集やトレンチより出土したものも多い。したがって、各遺跡より出土したすべての遺物を報告することは、紙面の制約から不可能であった。これらについては、後日継続する県営ほ場整備事業報告書の中に、資料編として追記する予定で、復原作業が完了している。

これらの諸作業に際しては、調査補助員である矢内　勲氏の手をわずらわしたが、特に復原と言う細かい作業を笠本源一、大野洋子氏をはじめ地元の方々の手をわずらわした。首都圏等と異なり、大学、研究機関より離れた位置にある本庄市では、上記の方々に多大の御協力をいただき、寒暑の中、一つの事業を完了することが多い。文末に記して感謝の意を表する次第である。

昭和62年１月31日

K　M　記

写　真　図　版



1.　調査風景（重機による表土剝ぎ）

2.　調査風景（下田遺跡）

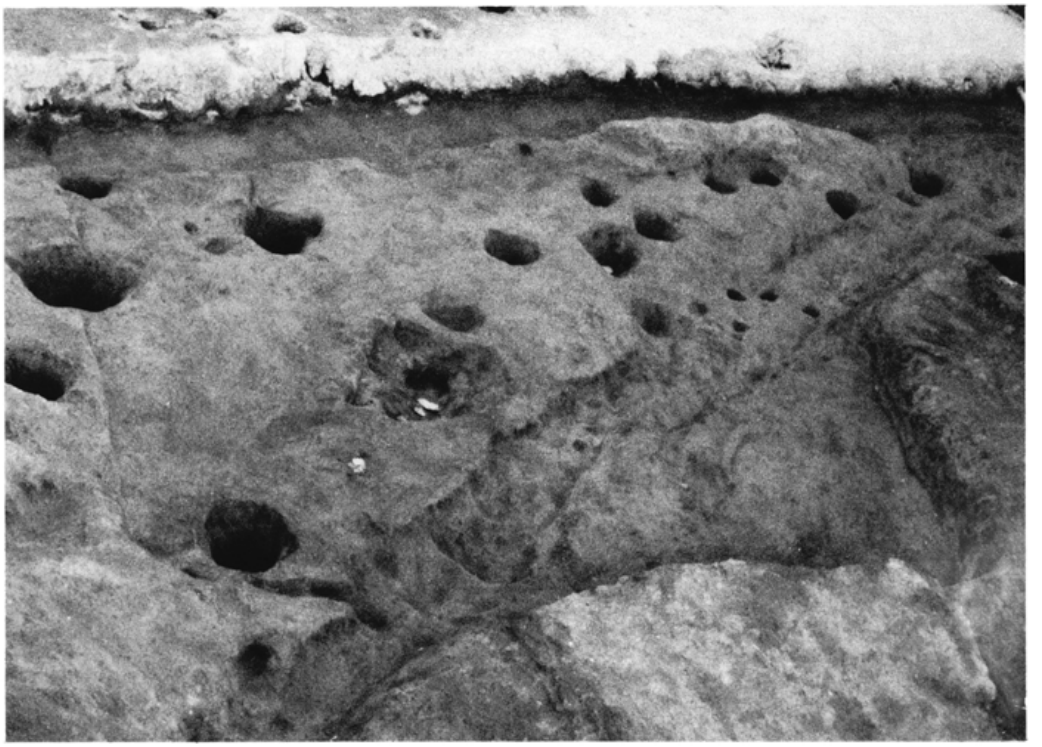
1.　調査風景（下田遺跡）

2.　調査風景（元富遺跡）

1.　下田遺跡第74号住居址

2.　下田遺跡第74号住居址カマド

1.　下田遺跡第78、79号住居址



1．　下田遺跡第81号住居址

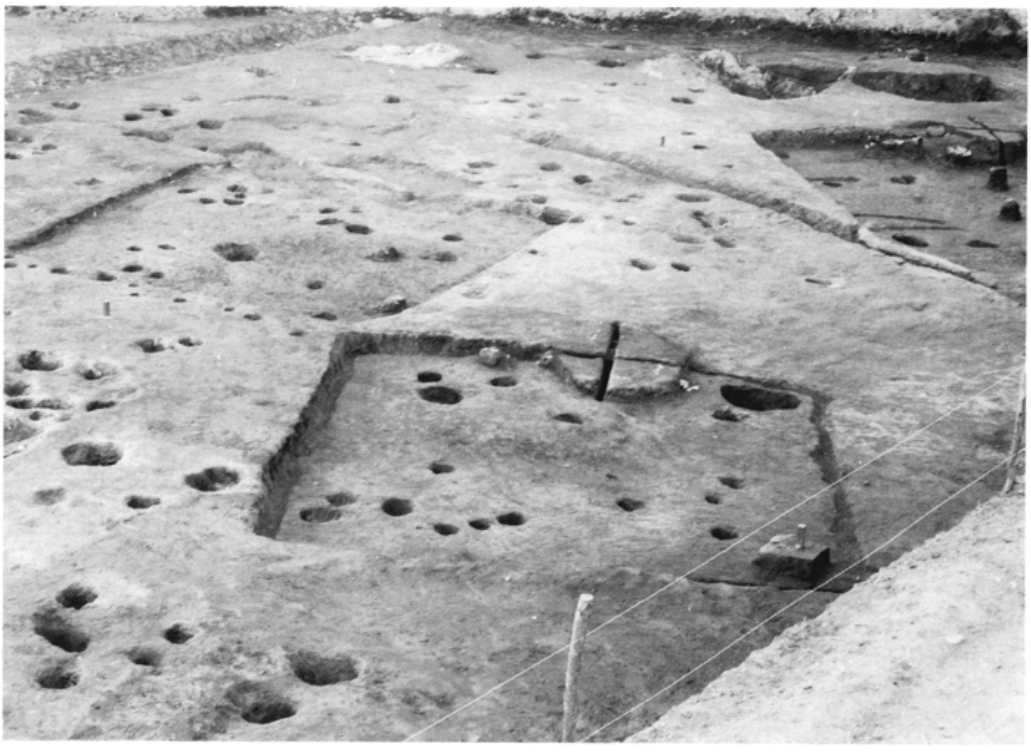
2．　下田遺跡第82号住居址

1.　下田遺跡第86、87号住居址

2.　下田遺跡第86号住居址カマド

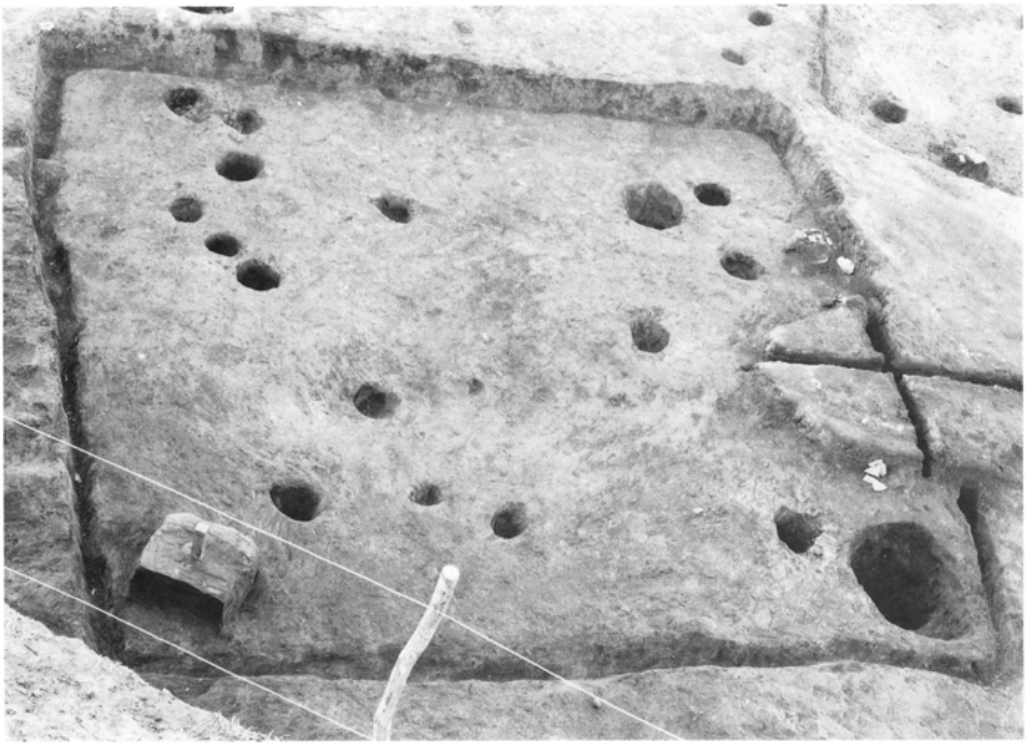
1.　下田遺跡第93号住居址と周辺のピット群

2.　下田遺跡ピット１遺物出土状態



1．下田遺跡第108、110、122号住居址

2．下田遺跡第108号住居址

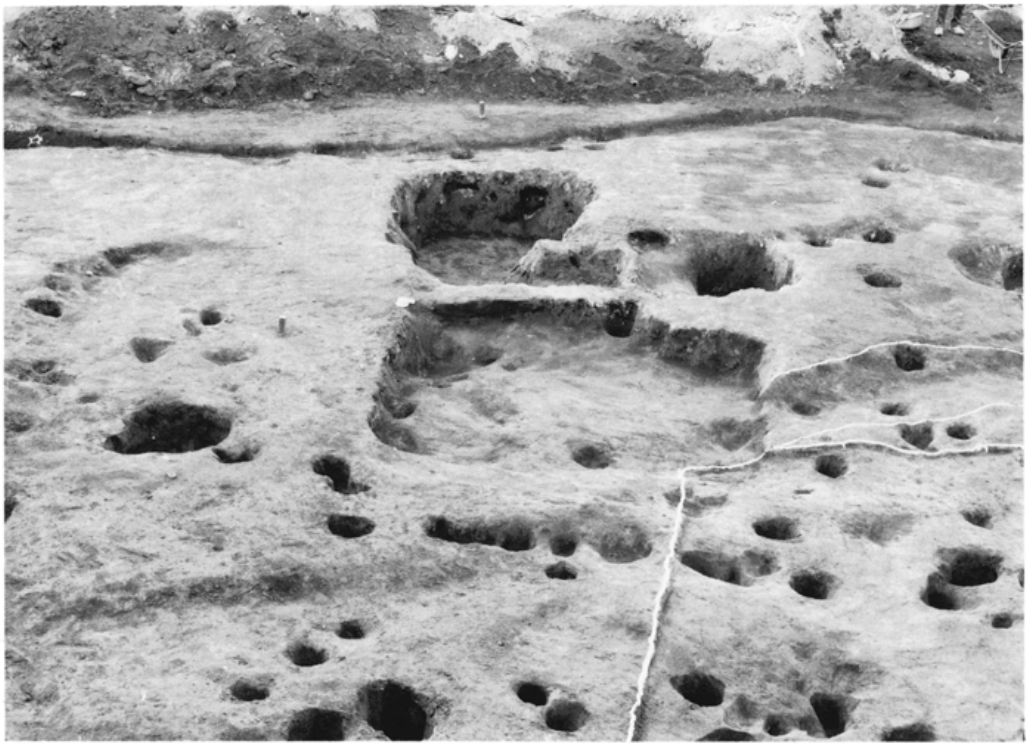


1.　下田遺跡第110号住居址

2.　下田遺跡第110号住居カマド

1.　下田遺跡第122、123号住居址

2.　下田遺跡第122号住居址カマド



1.　下田遺跡土壙

2.　下田遺跡井戸、溝

1.　下田遺跡土壙

2.　下田遺跡土壙

1.　下田遺跡第130、131号（手前）住居址

2.　下田遺跡第130、131、135号住居址群

1.　下田遺跡第132号住居址

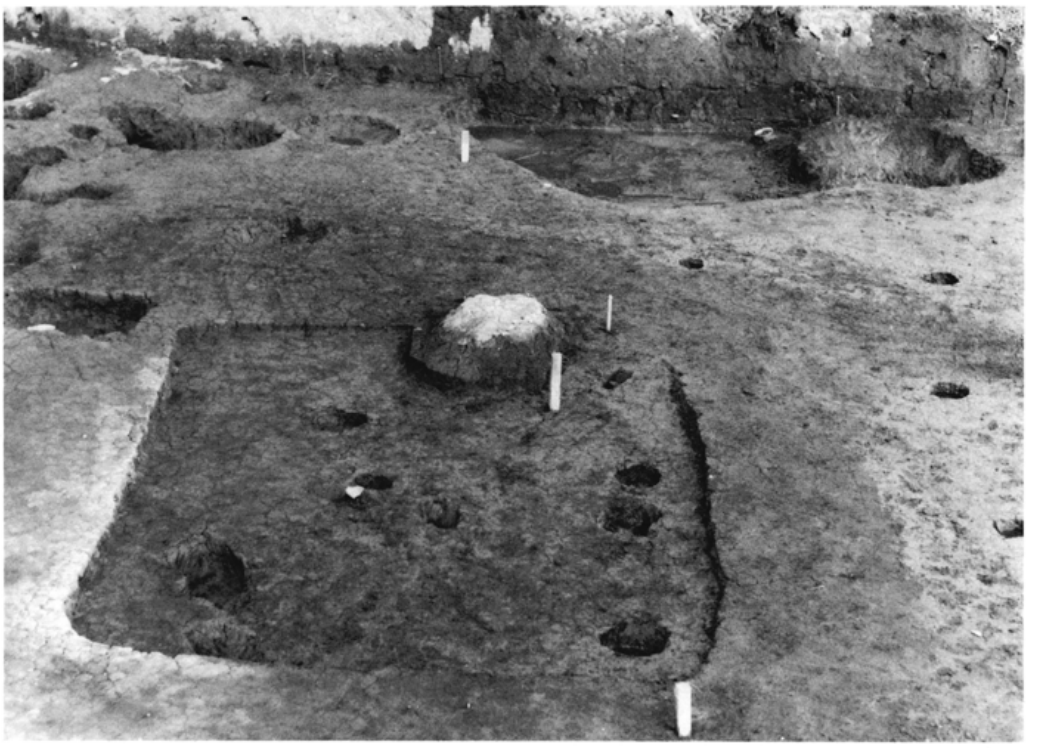
2.　下田遺跡第132号住居址内土器出土状態

1.　下田遺跡第133号住居址

2.　下田遺跡第136号住居址

1．　下田遺跡第133号住居址カマド

2．　下田遺跡第133、135号住居址



1.　下田遺跡第135号住居址

2.　下田遺跡第135号住居址カマド

1.　下田遺跡第134号住居址

2.　下田遺跡第134号住居址土器出土状態

1．　下田遺跡144号住居址

2．　下田遺跡第144号住居址

1.　下田遺跡第162号住居址

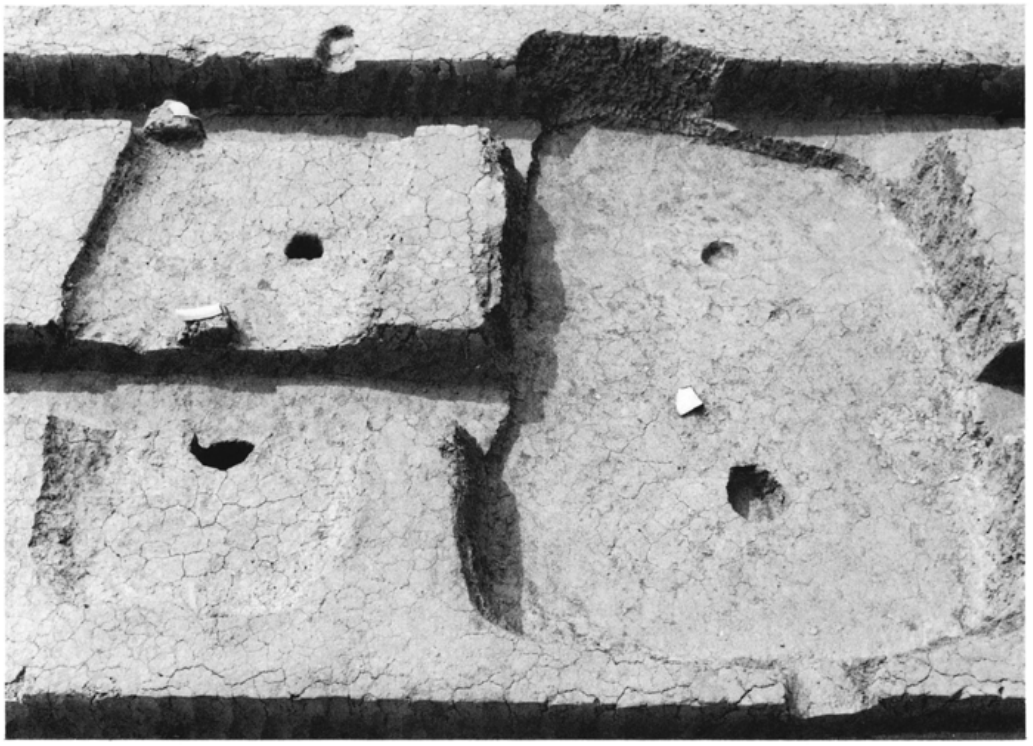
2.　下田遺跡第162号住居址カマド

1.　下田遺跡第163号住居址

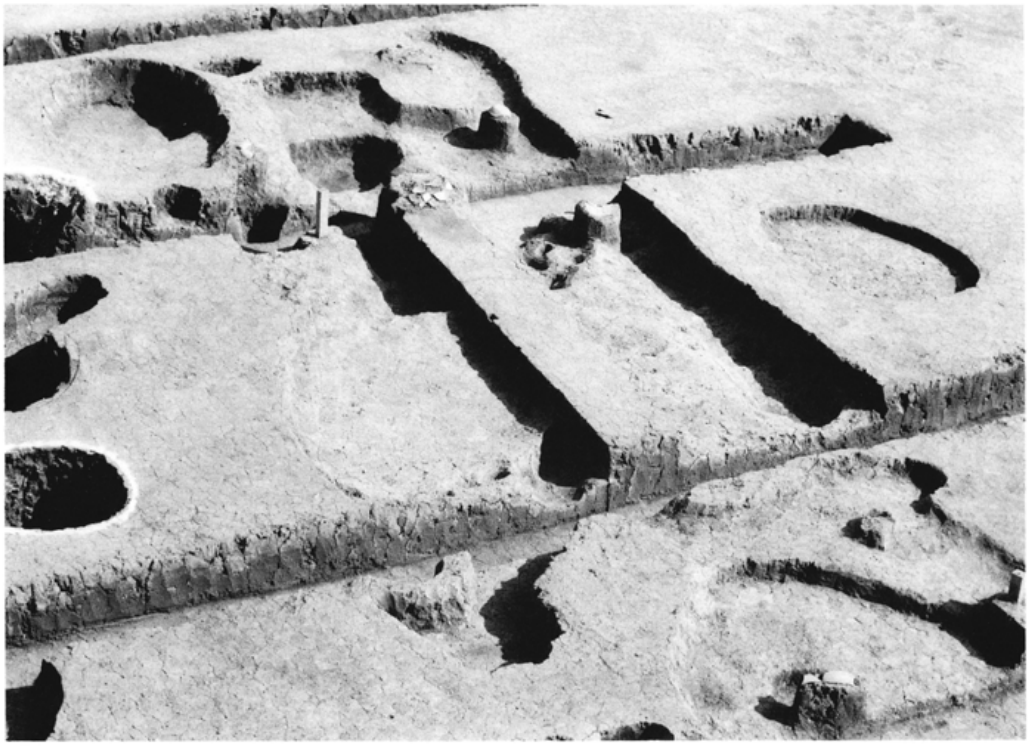
2.　下田遺跡第163号住居址土器出土状態

1．　下田遺跡第164号住居址

2．　下田遺跡第164号住居址土器出土状態



1．　下田遺跡第166、189号土壙

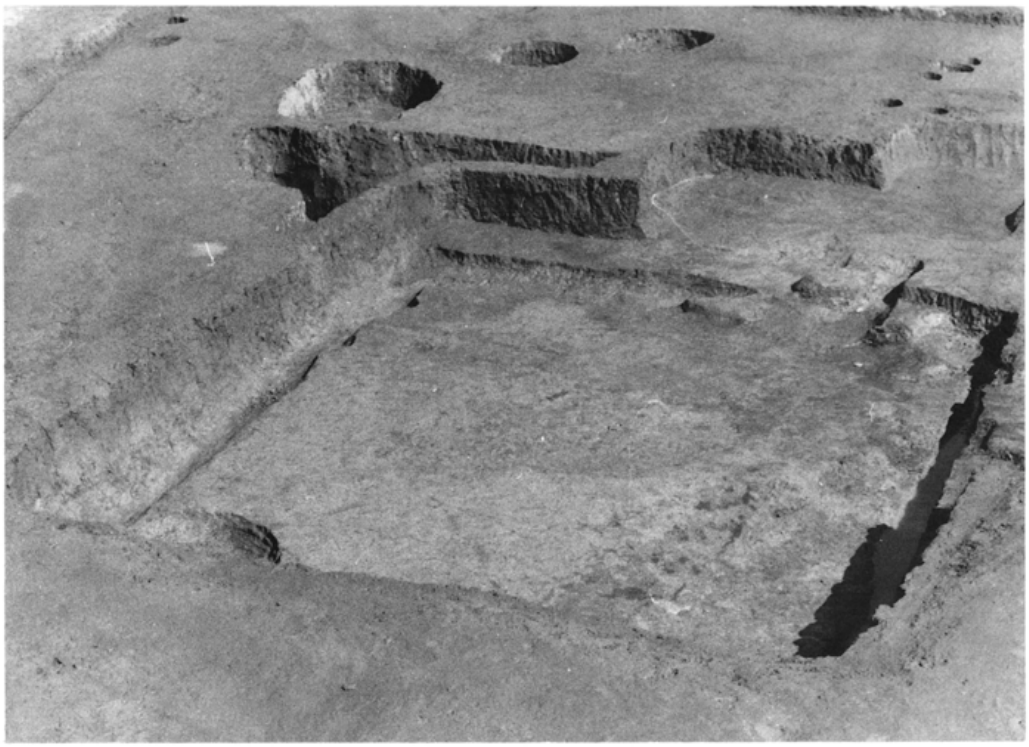


2．　下田遺跡第165号遺構群

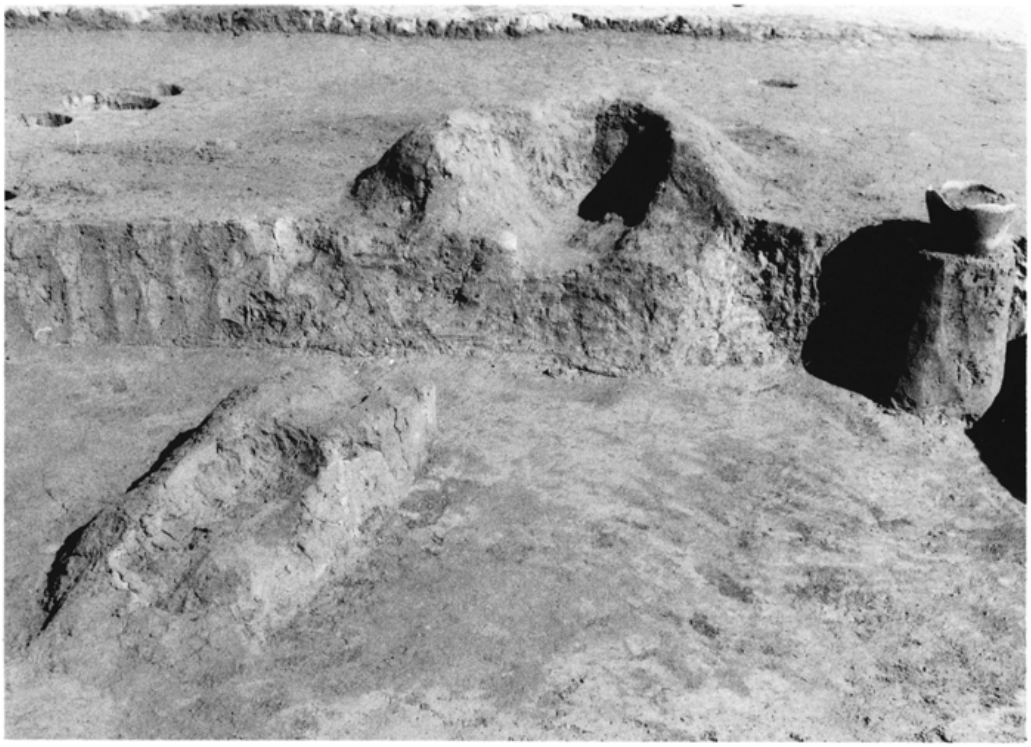
1.　下田遺跡第170号住居址

2.　下田遺跡第170号住居址土器出土状態

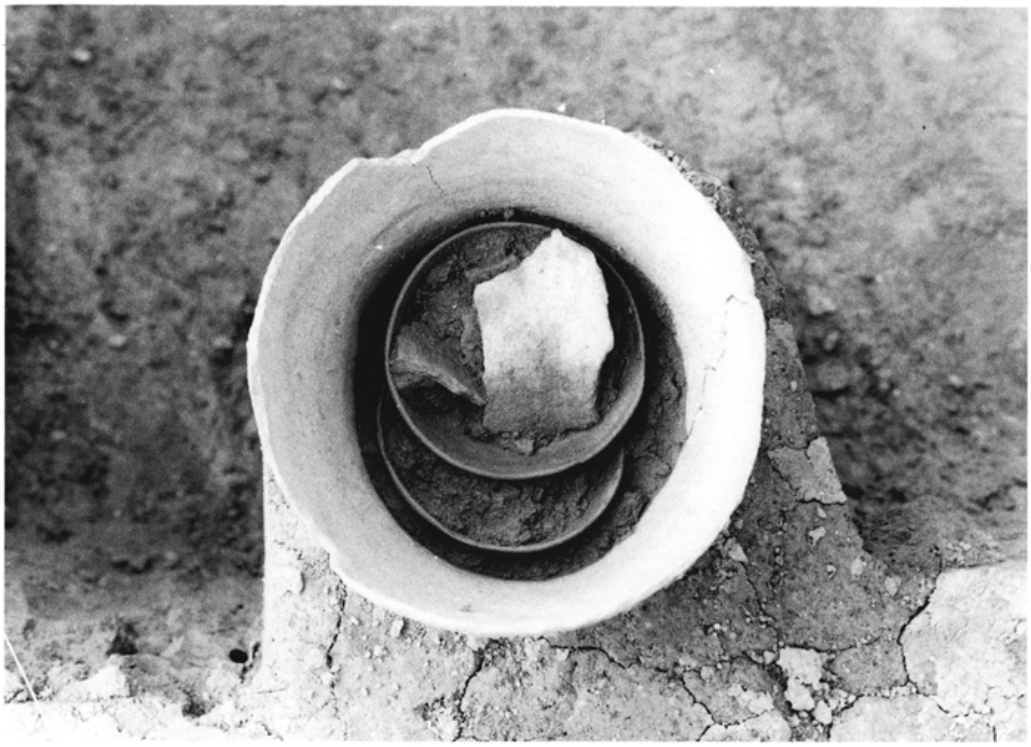
1.　下田遺跡第168、169、179号住居址



2.　下田遺跡第179号住居址



1.　下田遺跡第168、169号住居址カマド



2.　下田遺跡第169号住居址出土甕内部

1.　下田遺跡掘立柱建物１、２

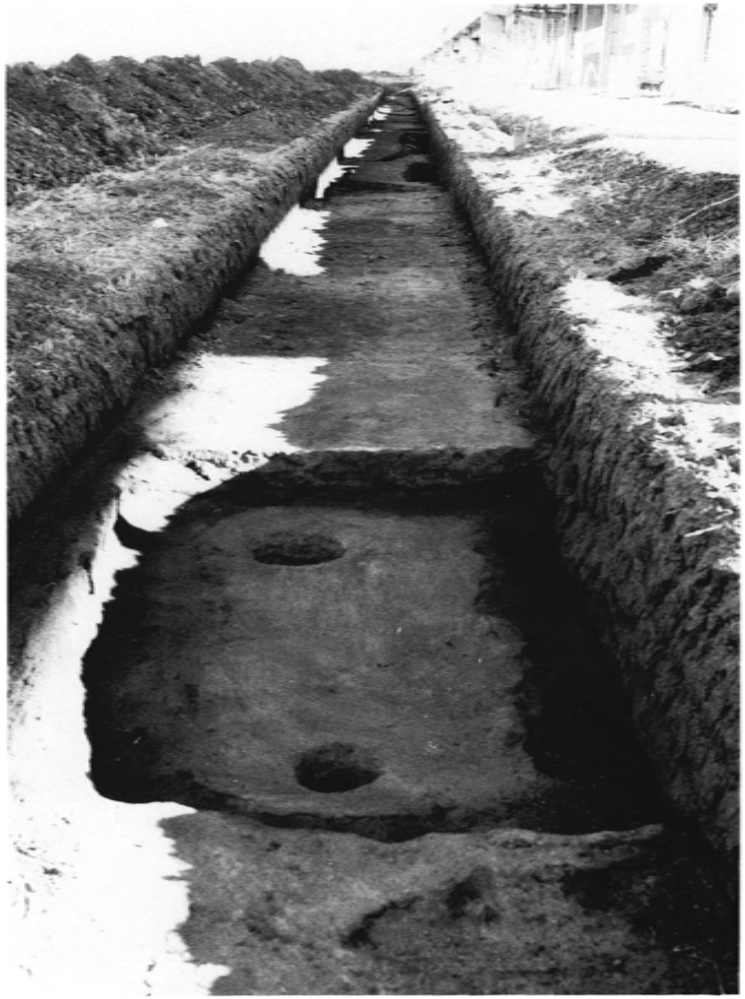
2.　下田遺跡掘立柱建物３、４

2. 下田遺跡第163、164、170号住居址全景

1. 下田遺跡溝172、173全景

1.　下田遺跡溝172、173北東辺断面

2.　下田遺跡溝172、173断面

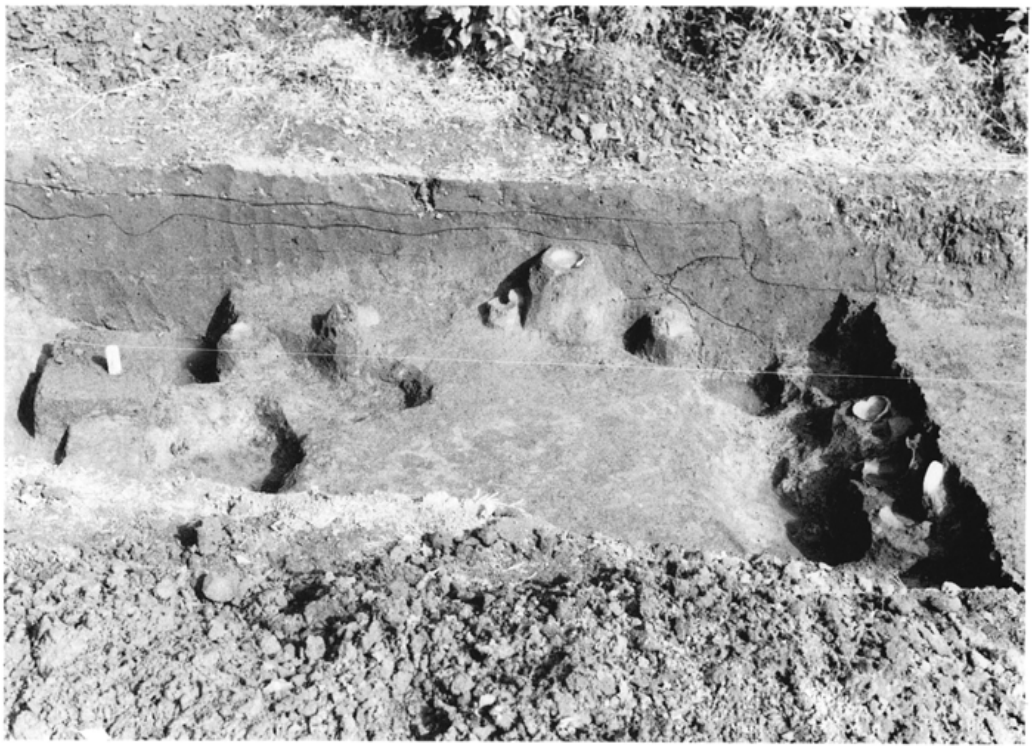


2. 観音塚遺跡（第１次調査住居址）

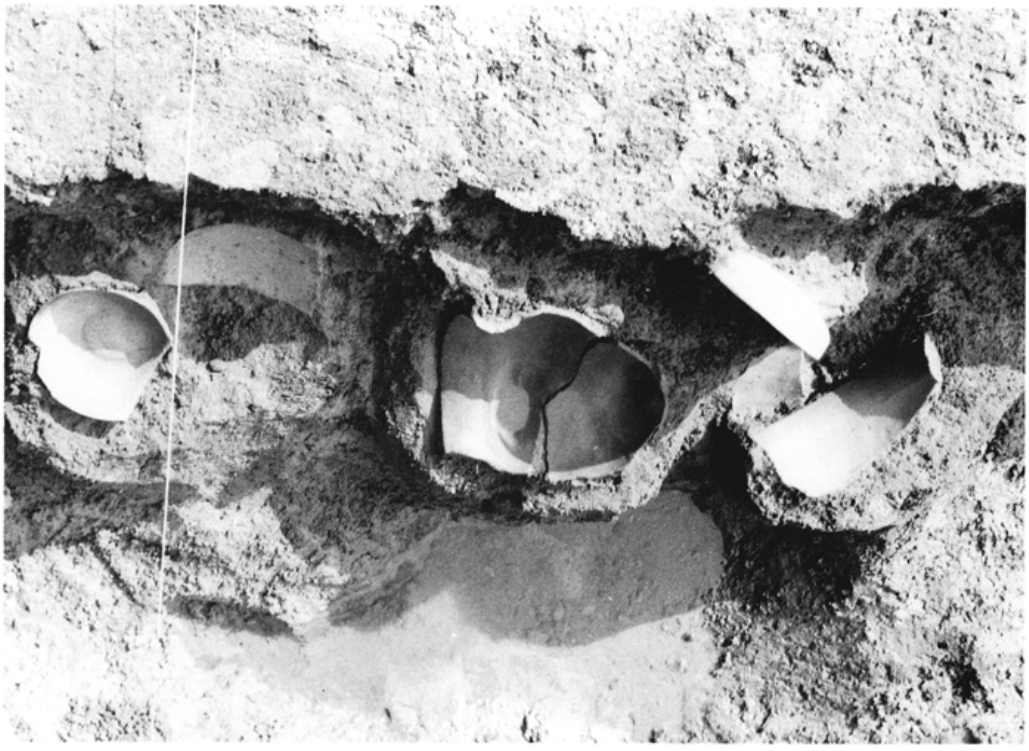
1. 観音塚遺跡（第１次調査全景）

1.　観音塚遺跡（第２次調査）

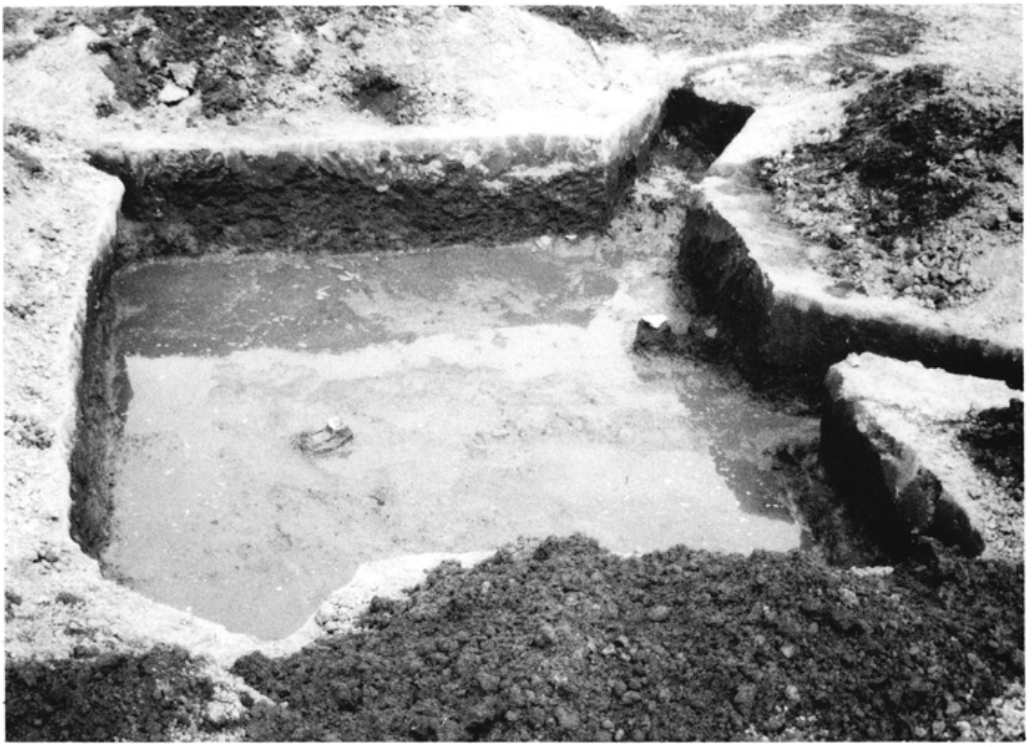
2.　観音塚遺跡第15号住居址



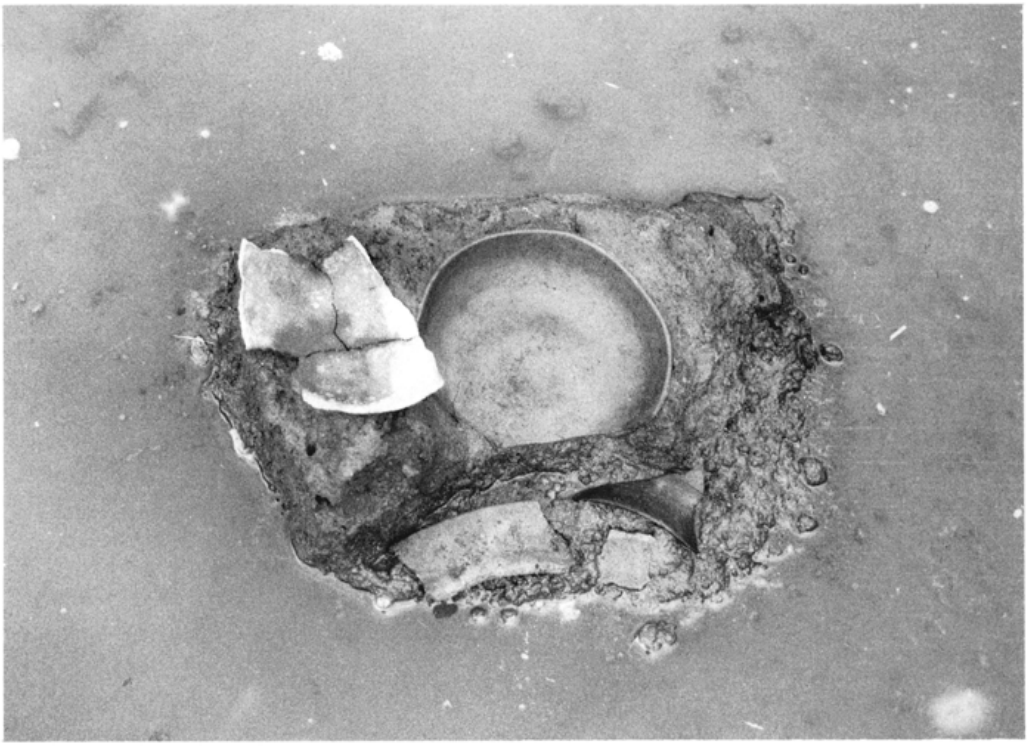
1.　観音塚遺跡第17号住居址



2.　観音塚遺跡第17号住居址土器出土状態



1.　元富遺跡第１号住居址



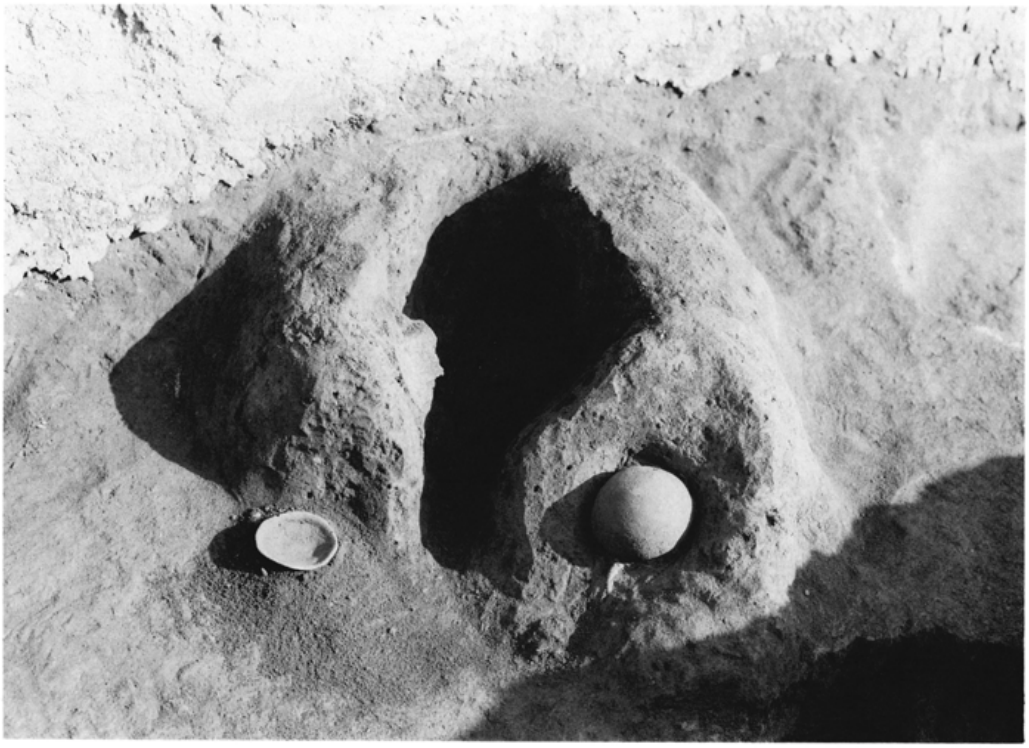
2.　元富遺跡第１号住居址土器出土状態

1.　元富遺跡第２号住居址

2.　元富遺跡第２号住居址土壙内土器出土状態

1.　七色塚遺跡第１～３号住居址

2.　七色塚遺跡

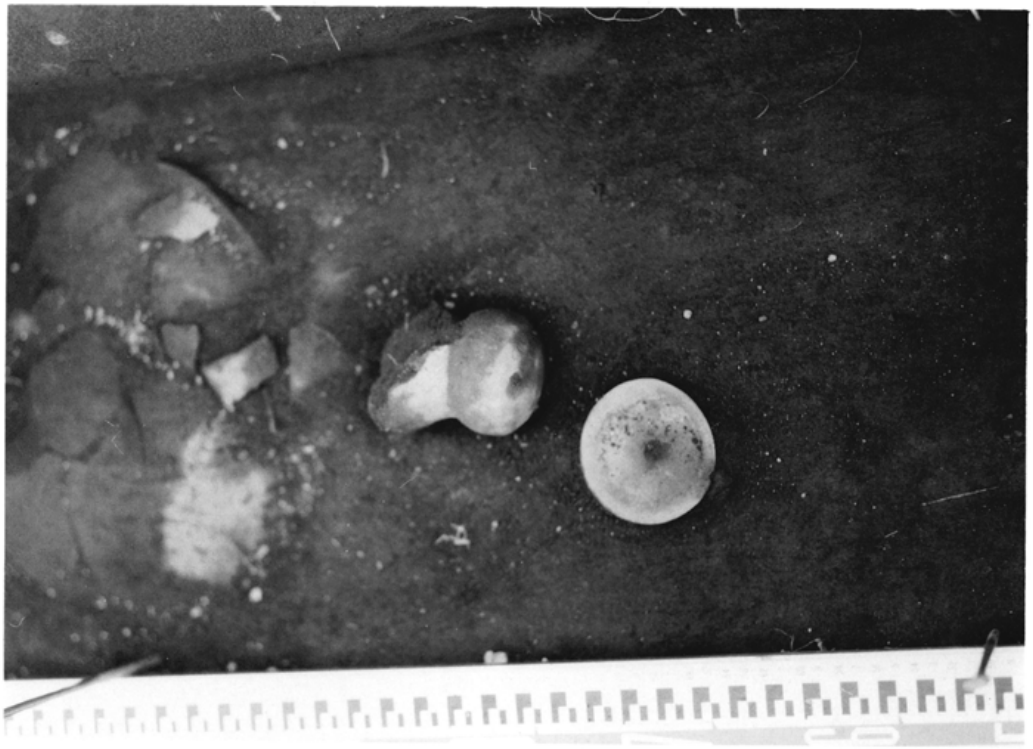


1.　七色塚遺跡第１号住居址カマド

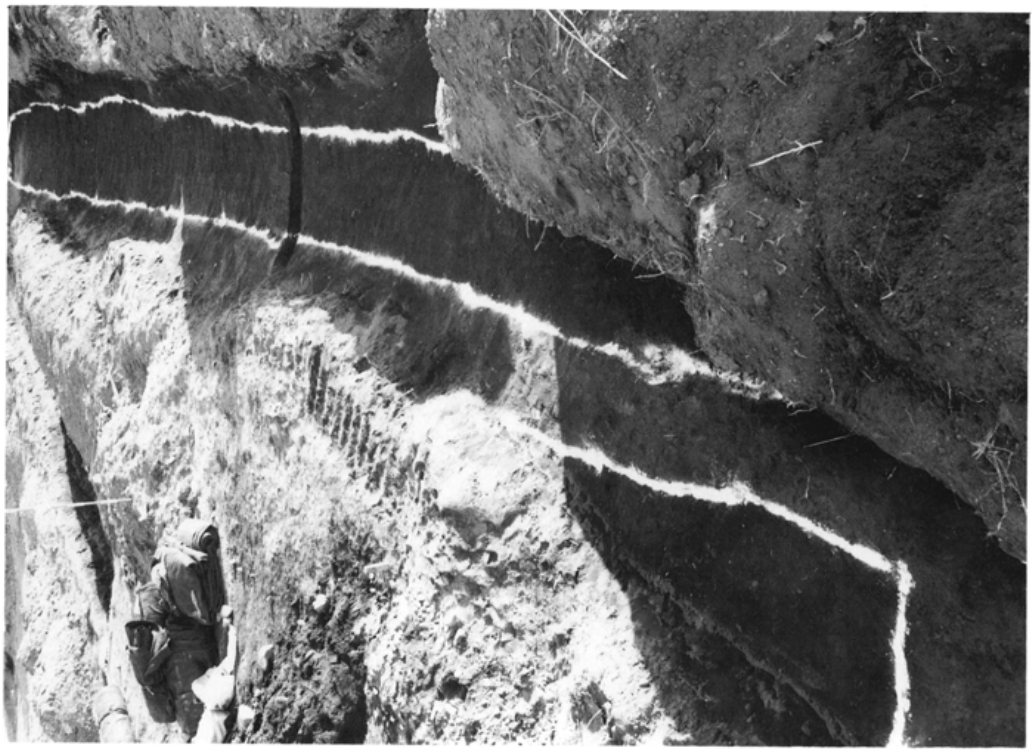
2.　七色塚遺跡第２号住居址カマド

1.　七色塚遺跡第４号住居址カマド

2.　七色塚遺跡第４、５号住居址カマド

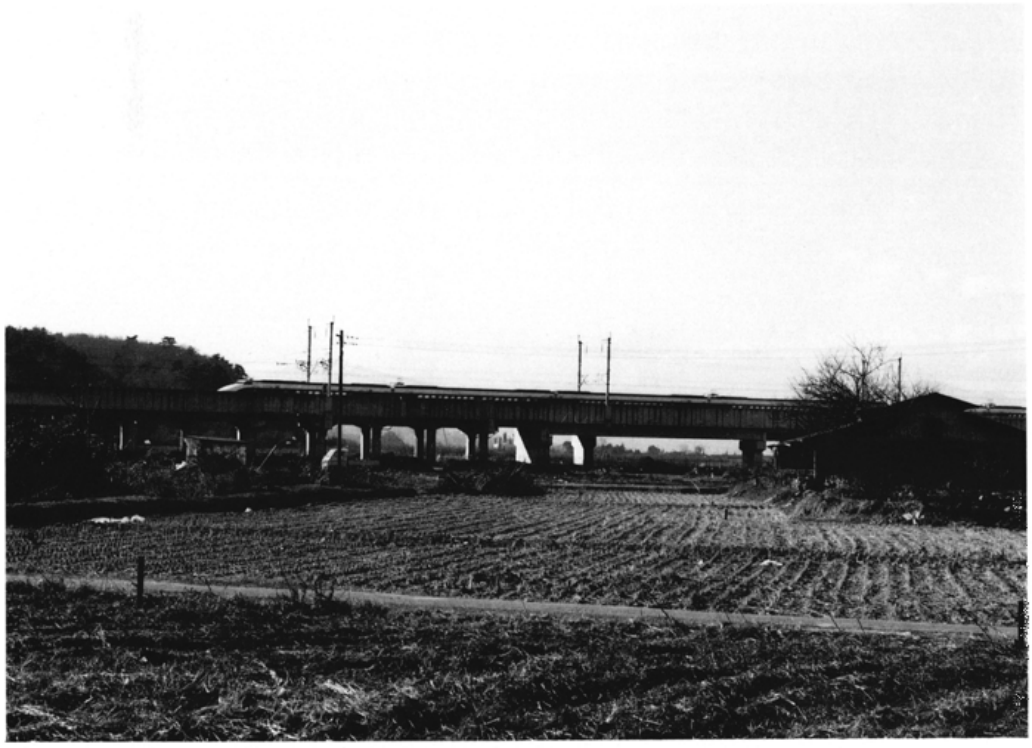


1.　七色塚Loc 122下住居址



2.　七色塚遺跡古道

1.　蛭川河川跡（窪田堀）現況



2.　蛭川河川跡（下田遺跡方面を望む）

甕類（1、下田122住　2、下田123住　3、4、七色塚2住　5、6、七色塚4住　7、七色塚12住　8、七色塚15住

1

2

3

4

5

6

7

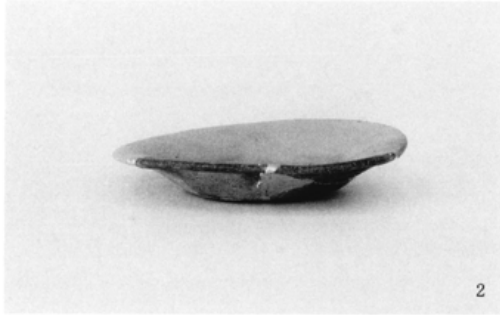
8

9

10

小甕・坩・甑類（1、下田122住　2、下田163住　3、七色塚1住　4、下田110住　5、6、下田122住　8～10、七色塚2住）

1


2

3

4

5

6

7

8

9

10

坏類（下田遺跡、1、74住　2、3、78住　4、5、82住　6、7、86住　8～10、87住）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

坏類（下田遺跡、1、2、122住　3、Pit 2　4、SK72　5、6、トレンチ5　7～10、132住）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

坏類（下田遺跡132住）

坏類（下田遺跡、1、2、133　136住　3、135住　4、144住　5、162住　6、164住　7、169住　8、170住　9、185住　10、SK165）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

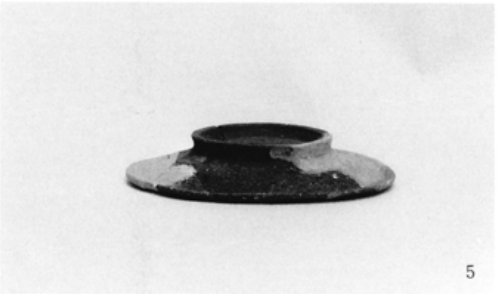
坏類（1、2、元富1住　2～10、元富2住）

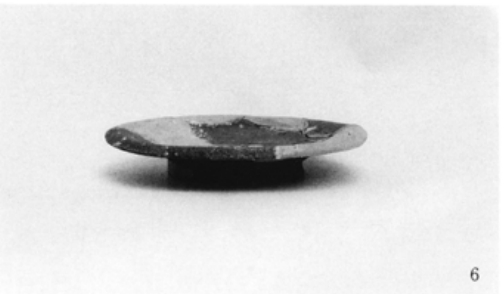
1

2

3

4


5


6

7

8

9

10

坏類（1～6、元富2住　7、観音塚2住　8、9、観音塚15住　10、観音塚17住）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

坏類（七色塚遺跡、1、1住　2、3、2住　4、5、4住　6、7、5住　8～10、6住）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

高坏・五領式土器類（1、下田87住　2、下田110住　3、下田122住　4、七色塚2住　5～8、下田134住、五領式、9、10四方田8住、参考）

東富田遺跡群発掘調査報告書

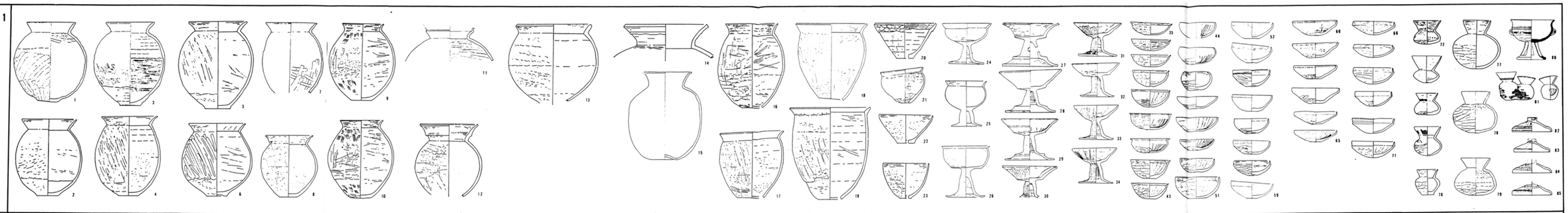
昭和62年３月25日　印刷
昭和62年３月31日　発行

発　行　本庄市教育委員会
埼玉県本庄市銀座1―1―1

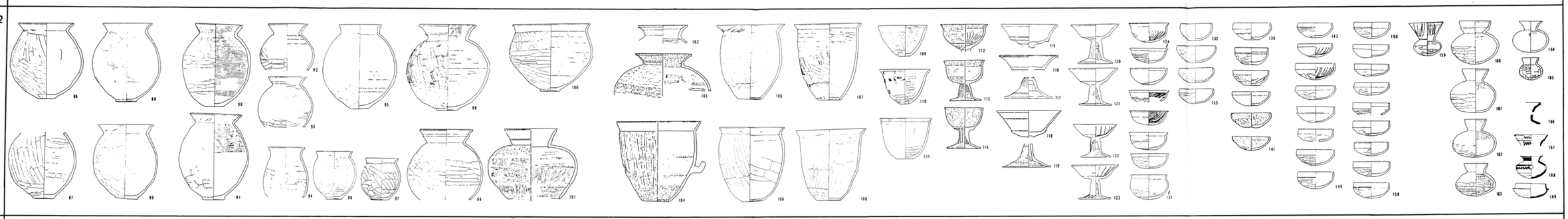
印　刷　朝日印刷工業株式会社
群馬県前橋市元総社町67

付図１　児玉地方における鬼高式土器編年試案表（１）

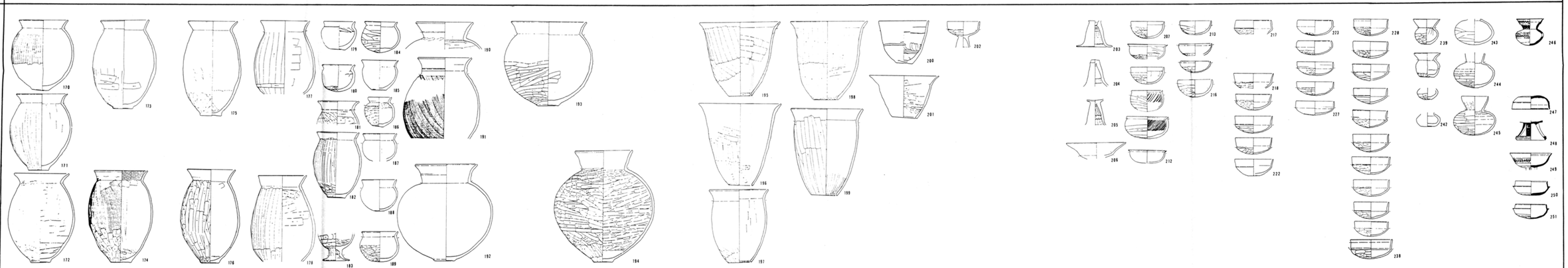
鬼高Ⅰ古1



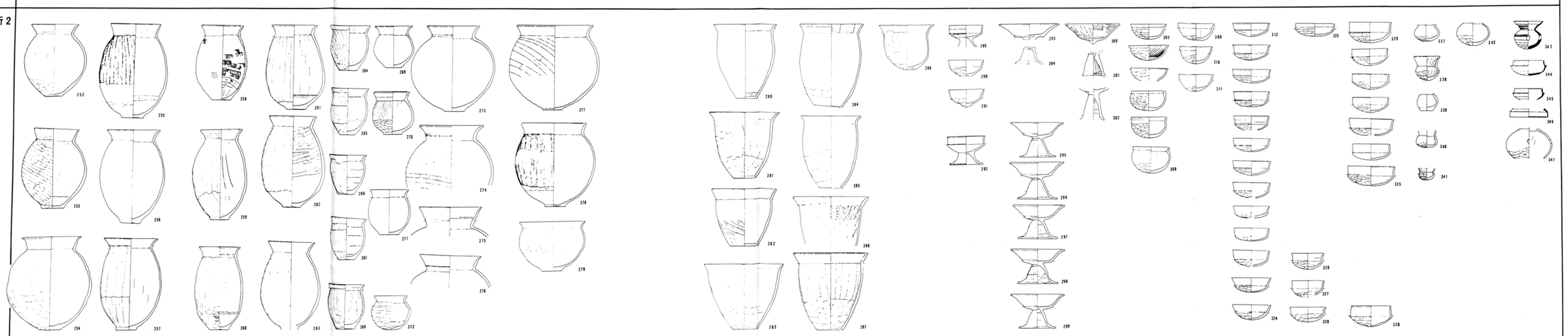
鬼高Ⅰ古2



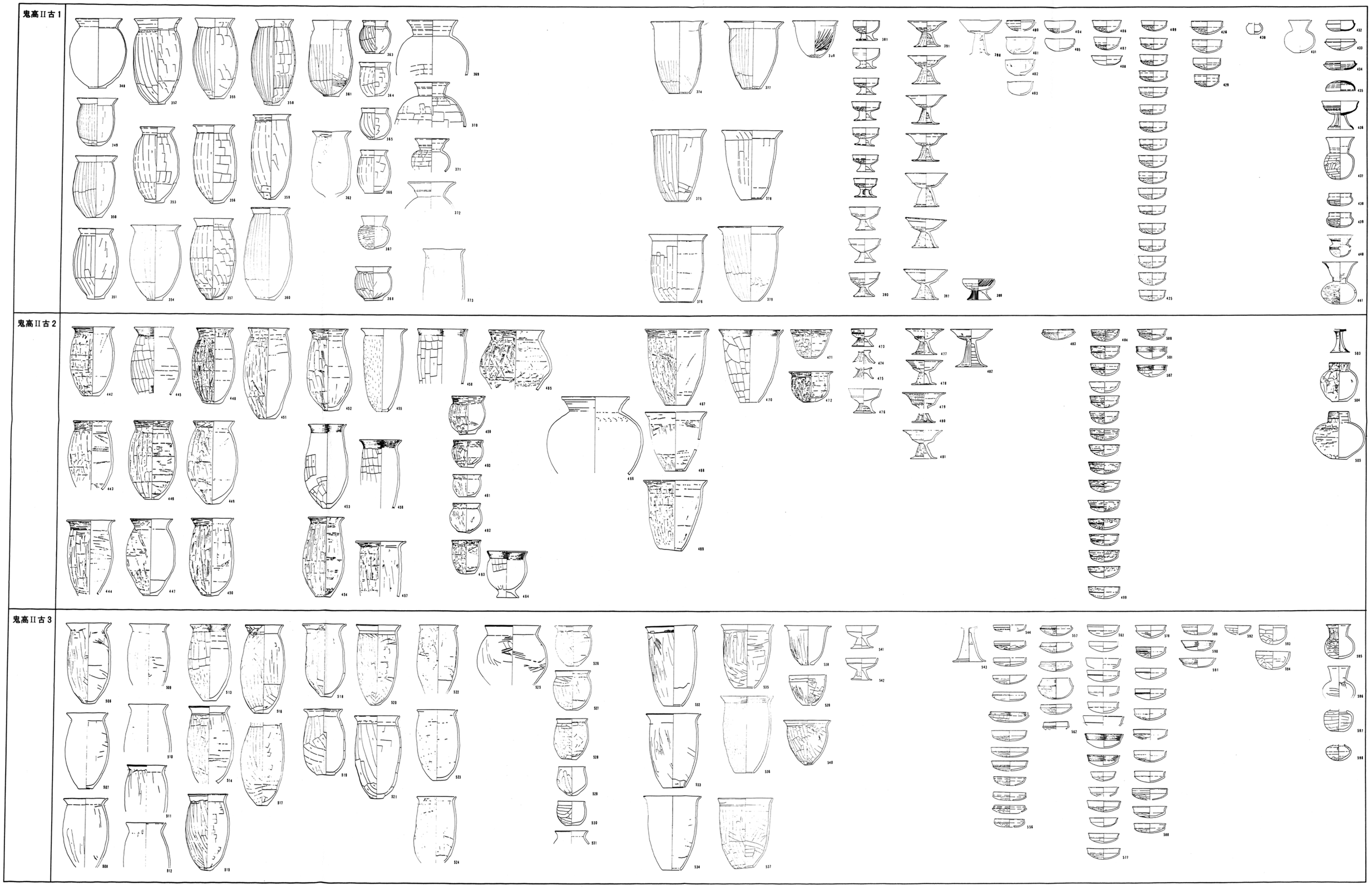
鬼高Ⅰ新1



鬼高Ⅰ新2

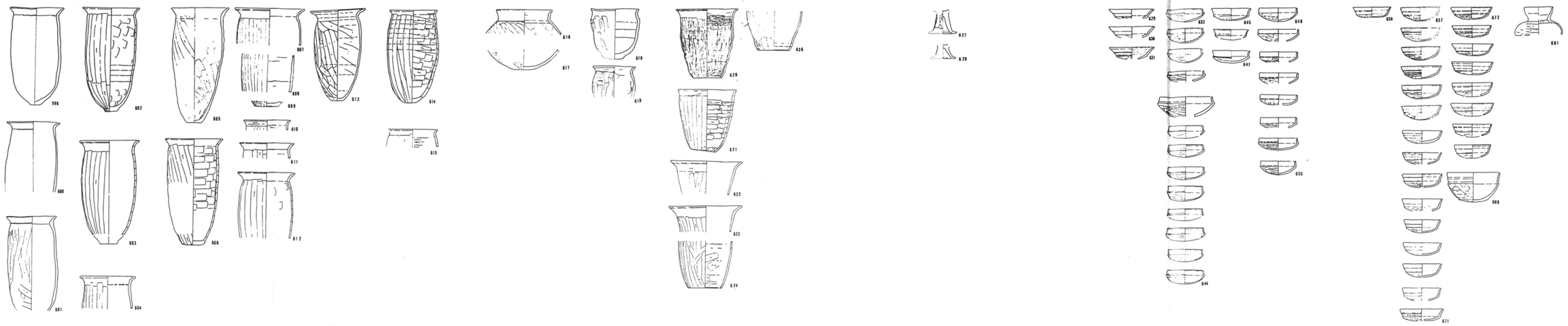


付図２　児玉地方における鬼高式土器編年試案表（２）

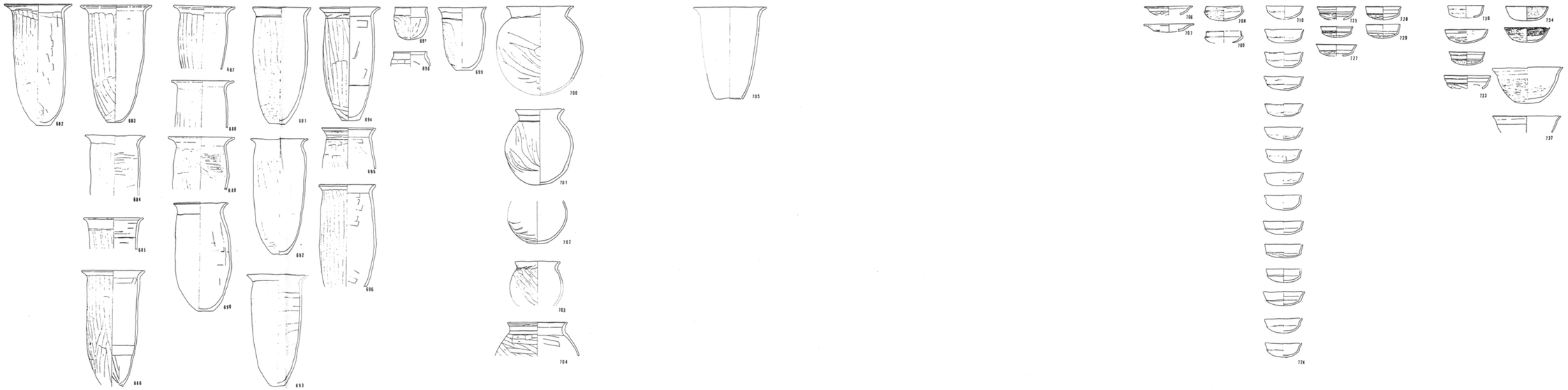
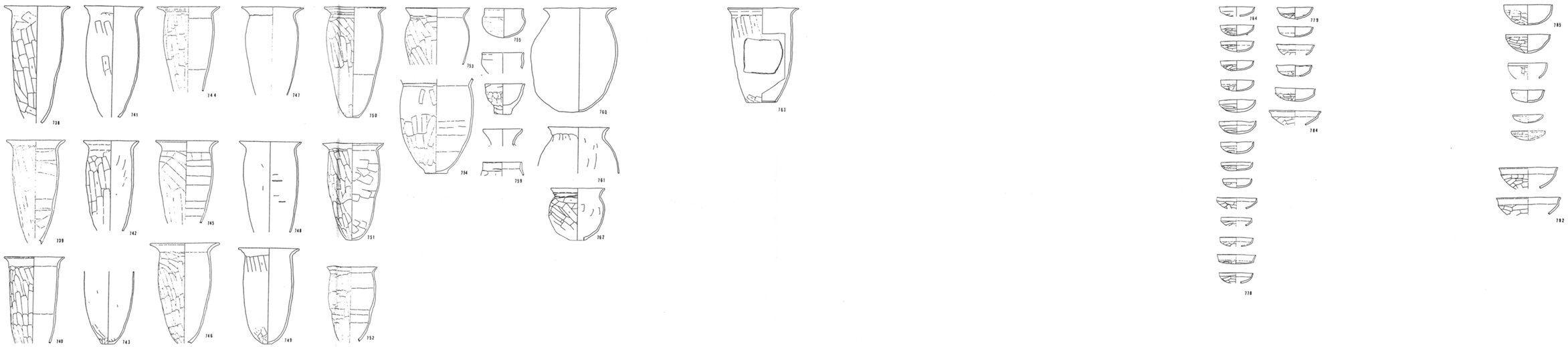


付図３　児玉地方における鬼高式土器編年試案表（３）

鬼高Ⅱ新１



鬼高Ⅱ新２



鬼高Ⅱ新３